明治三十八年七月五日発行
毎月一回五日発行

明治三十三年十二月二十五日
第三種郵便物認可



第五巻

女學世界

第九號



女學世界第五巻第九號目次

雜錄

科學

小說

口繪

寫眞版

寫眞畫報 第八拾貳編 第貳拾八卷 臨時增刊

日本海大海戰

●口繪＝空前の大海戰 中村不折君畫

●附錄＝日本海戰鬪地圖

七月拾五日發行

全一册洋裝大判
寫眞口繪五拾頁
正價金貳拾錢
郵税貳錢

本館曩に海軍戰捷紀念帖を出し、幸ひに江湖の大歡迎を得たり、時恰も波艦隊東航の途中、日本海に入らんとして未だ入らず、出沒變幻、頻りに我が虛を狙ふ、而も一たび砲火を交へば帝國艦隊の勝算歷々たるを以て、本館は遠からず、第二戰捷紀念帖發刊の光榮あるを期待せり、果然！、五月廿七八日の大海戰に於て、我は空前の大勝利を得たり、世界開闢以來、未だ曾て有らざるの大光榮を得たり、露國の海上權は玆に亡び、帝國の海上權は無限に發展す、豈に一大紀念帖無きを得んや、即ち本館は、其戰捷の報來ると共に有ゆる手段を盡して其業に着手せり、而して猶ほ發刊の期聊か遲れしは、之れ全く、此空前の戰捷紀念帖を作るに、無比の好材料を以てせんと苦心せし爲なり、即ち本編收むる所は、**日本海大海戰の寫眞數十葉**、他に捕獲軍艦「アリョール」「ニコライ一世」の現狀等を始めとし、猶ほ添ゆるに當世諸名高佾の美詩を以てし、珍中の珍、奇中の奇、他に類無きは、本館のひそかに誇る所なり、江湖の諸子、願くは本編を手にして、其眞價を知り玉はん事を。

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

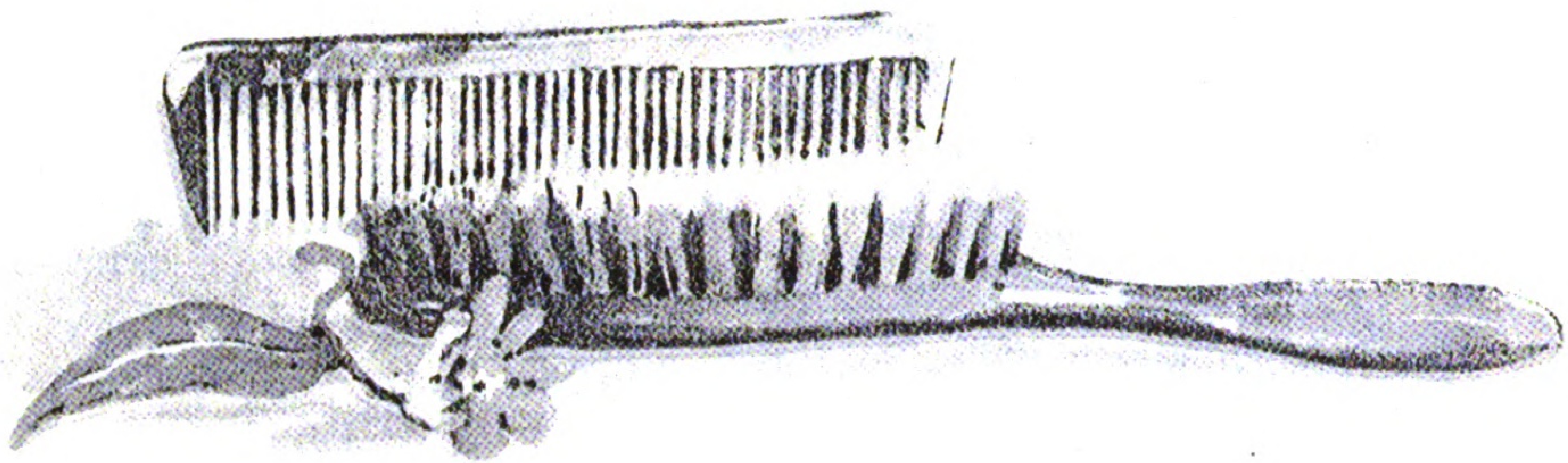
夏の朝

尾竹國觀筆



櫛 毛刷

三宅克己筆

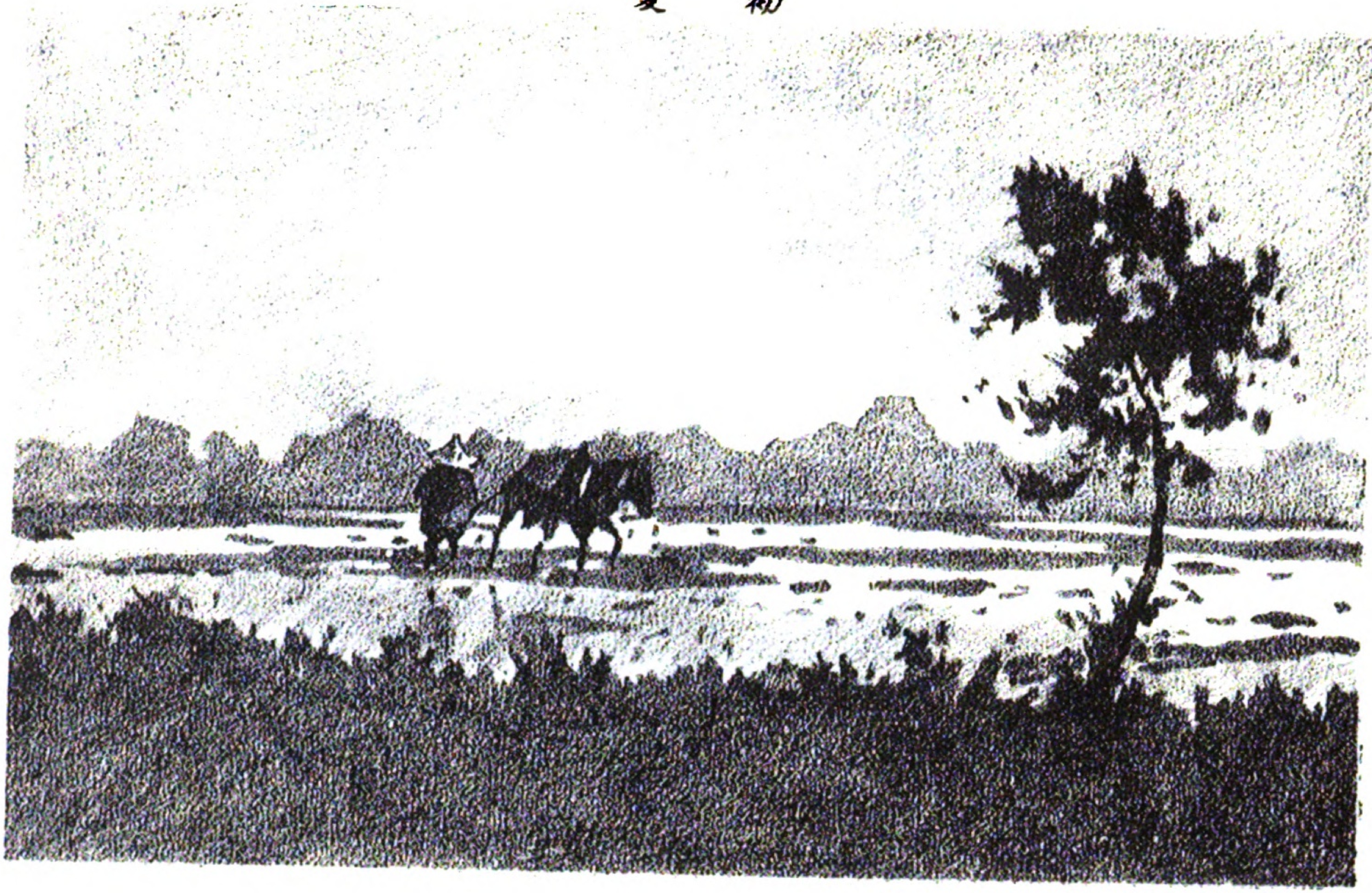


犬

三宅克己筆



初夏



三宅克己筆

雁來紅

跡見花蹊女史筆

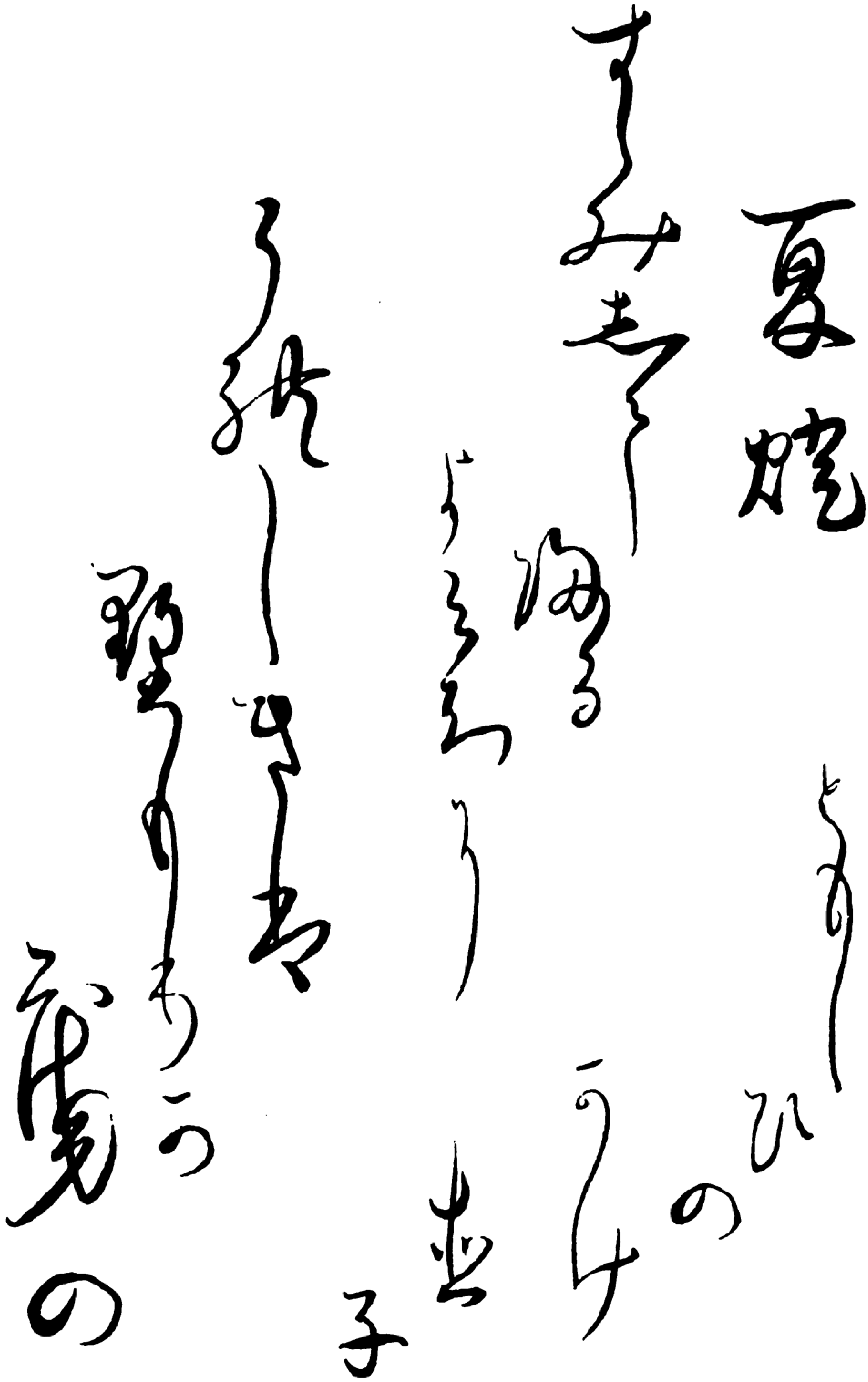


盂蘭盆

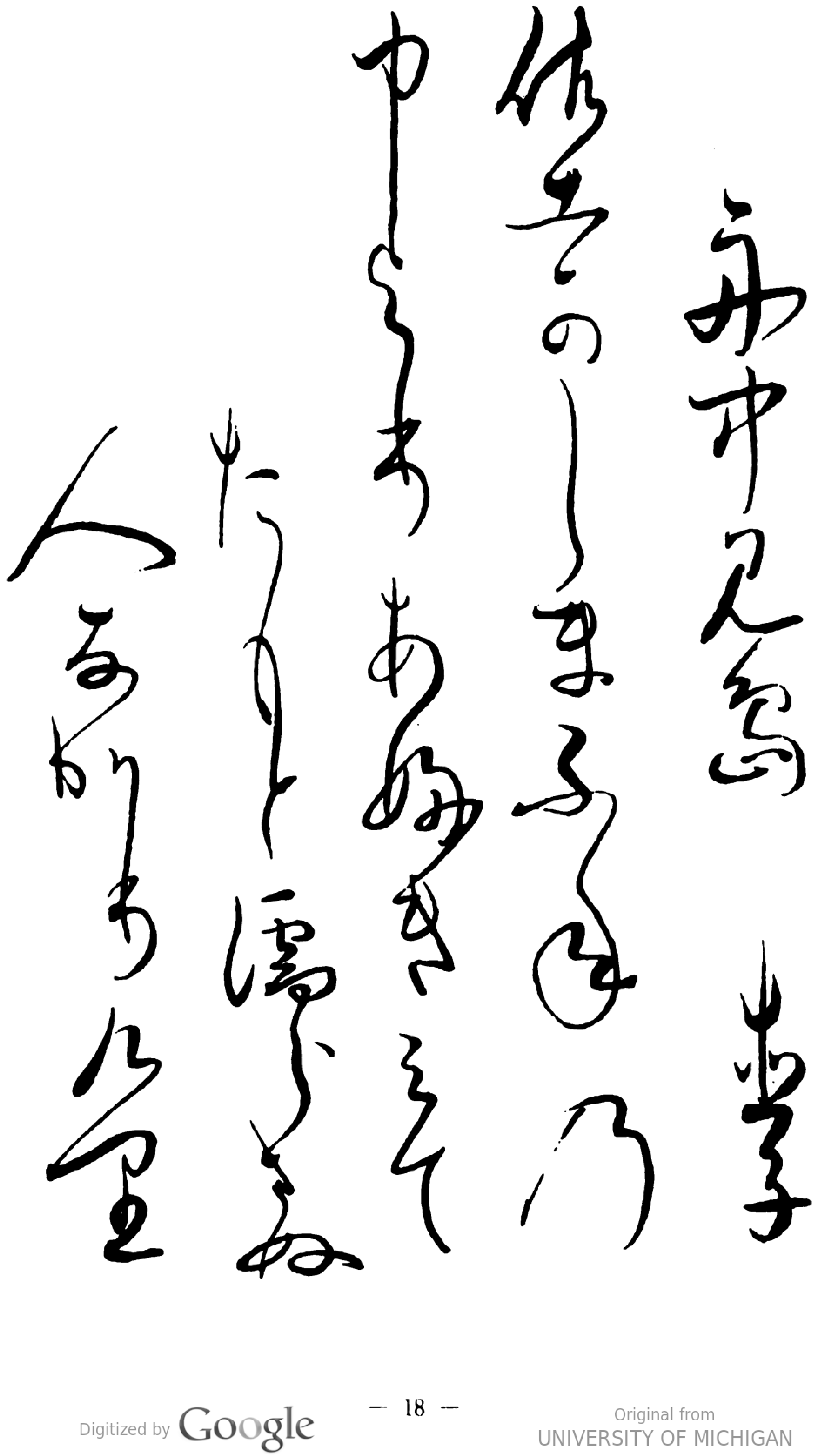
跡見花蹊女史筆



小川直子刀自筆



小川直子刀自筆




美術造花材料
斬新夏期用材料
舶來薄絹シホン
シホン見本帖及シホン製作品
カタログ(コロタイプ)御入用な
れば郵券五錢御送附可被下候
造花材料品各種
造花用繪具各種
造花用器械各種
摘み細工原料各種
刺繡用金糸、平金、絹糸各種
根掛材料、和洋リボン各種
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話(特)浪花一六四三番

(印の一)

(甲の二)

最新最良之音樂教科書

東京音樂學校諸師アー、ユンケル先生校訂
開成館音樂課編纂

初等ヴァイオリン教科書

六月廿日發行

美本全壹册
定價六拾錢
郵税金六錢

ヴァイオリンは。其の學習の初期に於て。必須なる順序を履修するにあらざるよりは。上達を望むべからず。本書は是等初學者の指導を目的として編纂し。學習上必要なる教材を、正當の順序によりて排列し。挿圖豐富。説明懇到。練習曲は最も趣味深きもののみを蒐集せり。殊に本書は。斯道の泰斗ユンケル先生の嚴密なる校訂を經たれば。教科書として最も信頼するに足る。

天谷秀
多梅稚 共著

初等オルガン教科書

美本全壹册
定價五十錢
郵税金六錢

開成館
音樂課 編纂

教科適用 進行曲粹

美本全壹册
定價四拾五錢
郵税金六錢

兩書共 文部省檢定濟

(既刊)

發行元 東京大阪 市市 小心 石齋 川橋 區通 小北 日久 向寶 水寺 道町 町角 開成館

賣捌所 全國各書店及樂器店

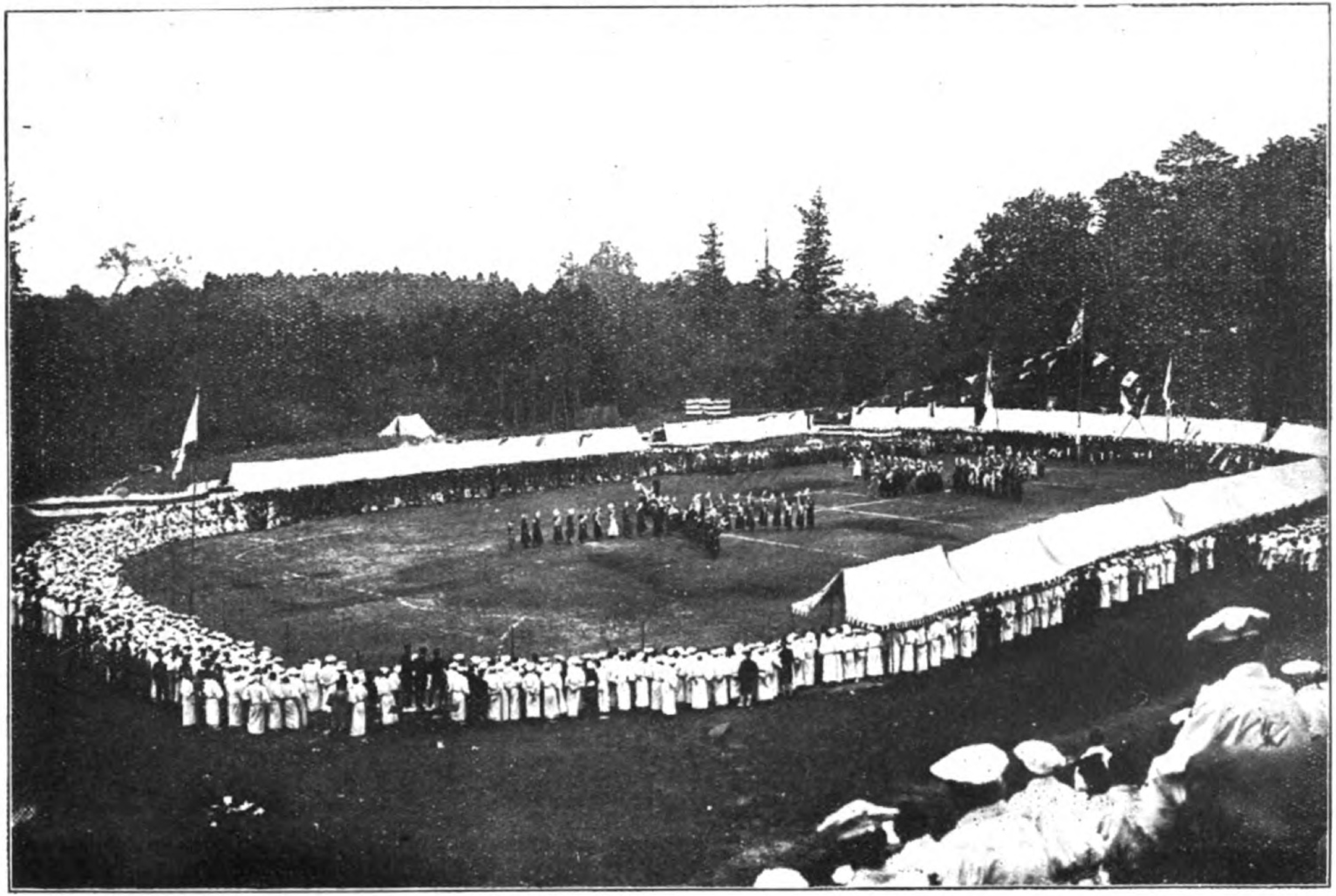
(甲の三)

閨秀歌人



竹柏會婦人部小集

傷病兵士慰籍運動會



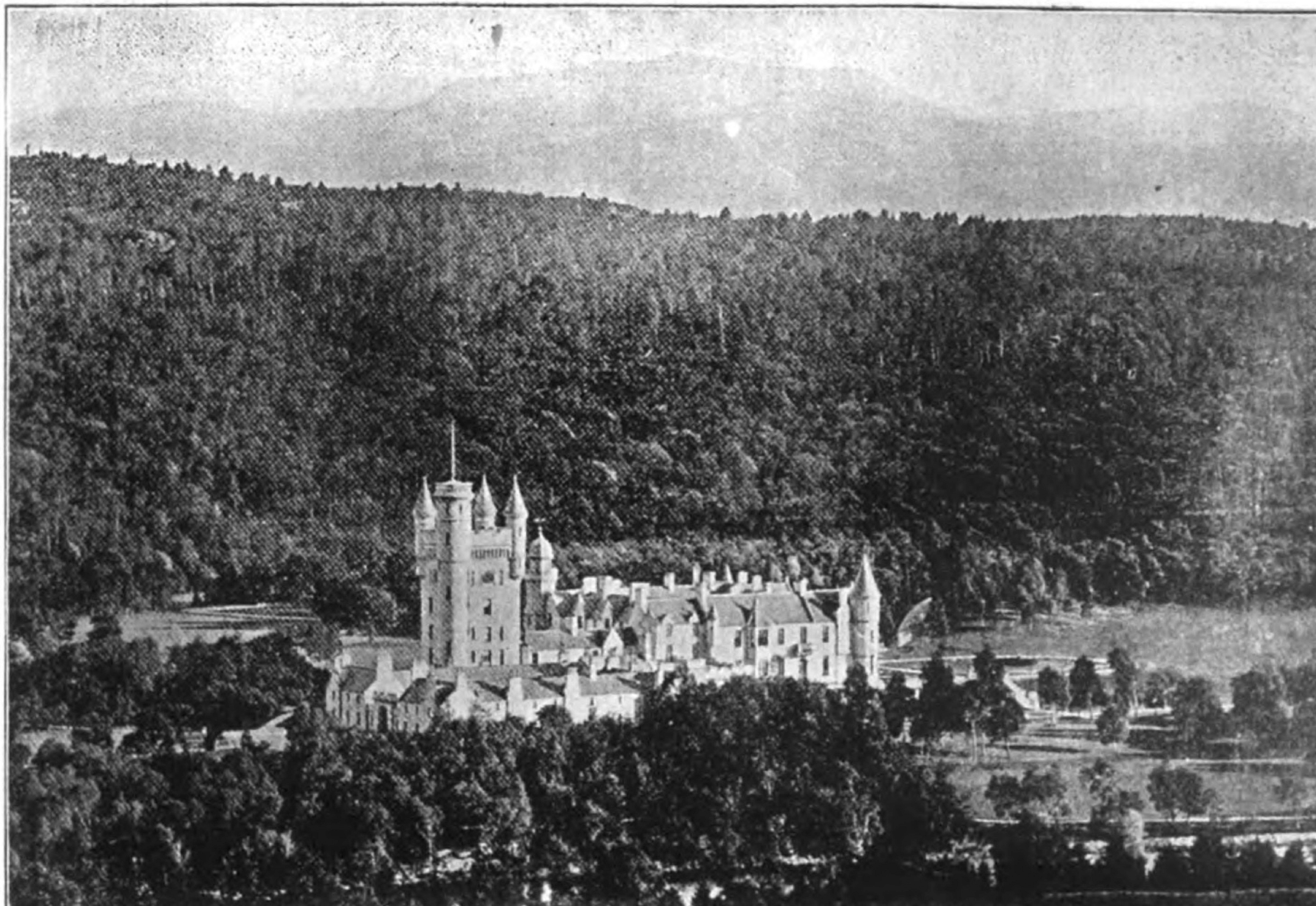
女子高等師範學校附屬高等女學校に於て

女子修學旅行



（記事参照）

英國バルモーラルの離宮



東京府第一高等女學校卒業生



淺草七軒町所在

旭いちご酒

中元の御進物は此品に限る



名譽ある讃辭を寄せられし大家

杏雲堂病院長 醫學博士 佐々木政吉先生
樂山堂病院長 醫學博士 宇野朗先生
井上眼科醫院長 醫學博士 井上通泰先生
東京顯微鏡院長 醫學博士 遠山椿吉先生
東京耳鼻咽喉醫院長 醫學博士 金杉英五郎先生
次長ドクトル 佐藤敏夫先生

胃腸病院長醫學博士長與稱吉先生曰

旭いちご酒は清澄の液にして氣味頗る良好、加ふるに多量の越幾斯分と少許の酒精分とを含有するが故に胃腸患者には其消化力を補弱するの効あると同時に健全なる人にも滋養飲料として寔に適當なるものと認めたり

發賣元 東京市日本橋區人形町通蠣殼町 特電話浪花六百二十番 三宅島物産株式會社

(いろは順)
大販賣 日本橋區本町四丁目 龜田延次郎
大販賣 日本橋區本町三丁目 鈴木恒吉
大販賣 日本橋區通一丁目 國分勘兵衛
關西一手 神戸市元町三丁目 安倍弟二

(No.1)

肺病

千葉縣安房郡北條町　川名助次郎

私義多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵劵二錢封入して御照會あれ

生殖器健全法

全壹冊

本書は男女生殖器を强健にし人生無上の快樂を得せしむる方法を詳記せし珍書今回十萬部を限り無代進呈望の人は郵劵封入又は往復葉書にて大阪高麗橋長命堂宛申込あれ

●**新撰女子作法書**　中島義弌君著（全壹册洋裝）　正價廿五錢　郵稅六錢

●**新撰小學女禮式**　中島義弌君著（全壹册上製洋裝）　正價廿五錢　郵稅六錢

●**日本女禮式大全**　坪谷水哉君著（蒔繪函入和裝特製正價壹圓——小包送料四百匁）　正價七十五錢　郵稅十六錢

●**女子普通禮式**　下田歌子女史著（全壹册洋裝）　正價卅五錢　郵稅八錢

發兌元　東京本町　博文館

(乙の二)

最新刊

寫實小說

兄と弟

◉渡邊千冬先生序
倉田櫻芳君譯（西洋名畫數葉挿入）

裝釘　總クロース金文字入色箔數度押最美本

定價六拾錢　郵稅八錢

想ひも寄らぬ邊に大秘密の伏在せるを許發せるは之れ▲大秘密に伴ふ大煩悶を描寫せるは之れ▲財產爭ひ妻爭ひに關する兄弟間の嫉妬心を說明せるは之れ▲原著は社會の墮落就中女性の虛僞に對する煩悶の爲めに狂死せし佛蘭西寫實小說派の名手モーパッサンの傑作にして作中人物個々心理の解剖最も精緻巧妙を極め眞に肉飛び骨裂くるの槪あり▲蓋し讀書家の逸す可らざる好讀物にして▲現時歐洲文壇に大勢力を占めつゝある寫實小說の眞意義と眞價値とを會得せんと欲するの士は必ず一本を座右に備ふるを要す

發兌元　東京本郷彌生町三　金色社

(乙の三)

(乙の四)

數學世界主筆竹貫登代多君補
少年世界記者竹貫直人君著

實用新式速算法

全一册

洋装クロース中判
紙數約三百頁
七月上旬發行

新式速算法は**學校**にて教授されざる**教科書**にも、説明しあらざる**速算秘術**也、日本未だ曾て此種の出版無し本書を以て**嚆矢**とす編纂の目的は一は以て學生諸君が**補修用**に供すべく、一は**銀行會社商店**等、日常取引の頻繁なる諸子の**好參考書**たらしめんとせり故に上巻に於ては**加減乘除**より筆を起し具體的に之を講述したれば**初學者**と雖も直に修得するを得べく、下巻に於ては**實用算術**を主とし廣く**農工商**各科に亘りて抽象的に詳述し猶は補ふに諸種の**必用算表**を以てし附録としては**珠算速算法**をも添えたれば學者の至便此上なかるべし、世の**數學篤志家**須らく一本を机邊に備へて永く**寶典**となせや。

竹貫直人君著
數學遊戯
正價貳拾三錢
郵税四錢

竹貫登代多君著
新撰算術問答
正價貳拾錢
郵税四錢

竹貫登代多君編
新代數問答
正價貳拾錢
郵税四錢

竹貫登代多君編
新撰幾何問答
正價貳拾錢
郵税四錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

治庖會第四教場主幹　龜井まき子女史著

實用 家庭料理法

◎口繪極彩色貴婦人料理實習の圖　寺崎廣業筆

全一册洋裝
菊判美本
正價參拾五錢
郵稅八錢

（乙の六）

これまで料理書の種類はいろ〳〵澤山に出版ておりますが何れも初心の方には分り兼るのが多いやうです、それと申すも悉皆料理人の爲の參考にする目的で編制ましたもの許りですから、それ故にいくら料理書を閲ましても甚麼も實地に行ことが出來ませぬその上この料理書の編輯と申ますと古でも今でも其著者が多くは庖刀の持ち方さへ知らぬものが何れも糊と鋏を持ちて、古い書より截り張細工をして編輯たのが多いからその不完全なのは當然であります、仍で料理のお稽古を爲さるゝ諸孃の爲めに本書を編輯しられたので、その目的と申しまするは先づ庖刀の持方や胡蘿蔔、牛蒡の切樣を御存知なきお方にもお分りになりますやうに龜井刀自が諸教場に諸孃にお稽古ありし實習をそのまゝ筆記致されたのであるから、其事項には寸毫の遺憾なく細微に親切に、實用となるべく又た調理易き料理品のみを撰ばれ示されたのであり升、諸孃がいかに御便益となるかを御諒知下さい、内容の綱目左の如し。

(一)料理の準備
(二)臺所の經濟
(三)調理場の構造
(四)器具取扱法
(五)魚鳥野菜の切方
(六)飲食物の撰擇法
(七)材料購入に際する鑑別法
(八)主婦の注意
(九)鹽梅加減の說明
(十)料理の配合
(十一)煮出汁の製法
(十二)汁物の調理法
(十三)煮物類の調理法
(十四)燒物の調理法
(十五)浸し物の調理法
(十六)和へ物の調理法
(十七)酢の物調理法
(十八)刺身の作方
(十九)蒸し物の調理法
(二十)油揚物の調理法
(廿一)寄せ物の調理法
(廿二)きんとん類の調理法

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

従五位　呑象　高島嘉右衛門
柳田幾作先生合著

通俗詳解　**周易活断**

全壹冊

◎菊大判洋裝金字入　◎正價金三圓
◎紙數一千頁
◎三千部限り
◎特別貳圓卒錢　◎小包料廿錢

此編は高島先生が十數年來研鑽の餘編纂せられたるものにして、兩先生が一世一代の著述と謂べく、其編次は易上下經より十翼に至るまで、通俗的に高尚の易理を叙述し、何人と雖も占筮上に應用することを得せしむ、若し其疑義に惑ふものは之を著者に問ふべし、先生は何人を論ぜず親切之に應答するものなり、◎因に云ふ高島先生の學、多く故眞勢中洲氏に出づ、中洲氏の周易釋故並に解故等、今其書に乏し、此編其粋を拔くもの少からざるを以て、之を讀むときは、亦中洲氏の遺書を讀むに異ならざるべし、

津田南濤君著　改訂增補八版

改訂　**農家要務案内**　附蠶桑詳説

全壹冊　洋裝頗美本　正價五十錢　郵稅金六錢

古諺に曰く農は國家の大本なりと實に吾人が衣食住は主として之を農に俟つものなり著者此に見るあり學理に徵して實地に試み研鑽の結果之を世に公にす其收むる所開墾肥料種子等より諸種の穀菜樹木等の栽培に至るまで凡て廿三章別編として蠶桑を詳說す加ふるに文章平易殊に假名付にしたれば如何なる者にても容易に了解することを得べく又實地に應用することを得べし發行以來非常の好評を博し改訂增補八版を發行す

醫學士　丸山秀雄先生
東京板橋病院長　守川南洋先生
日本藥學協會講師　鴨田修治先生
著

通俗衛生顧問
一名　諸藥獨劑術

全壹冊
上製　金文字入　金壹圓卅錢　郵稅金八錢
並製　金九十五錢　郵稅金六錢

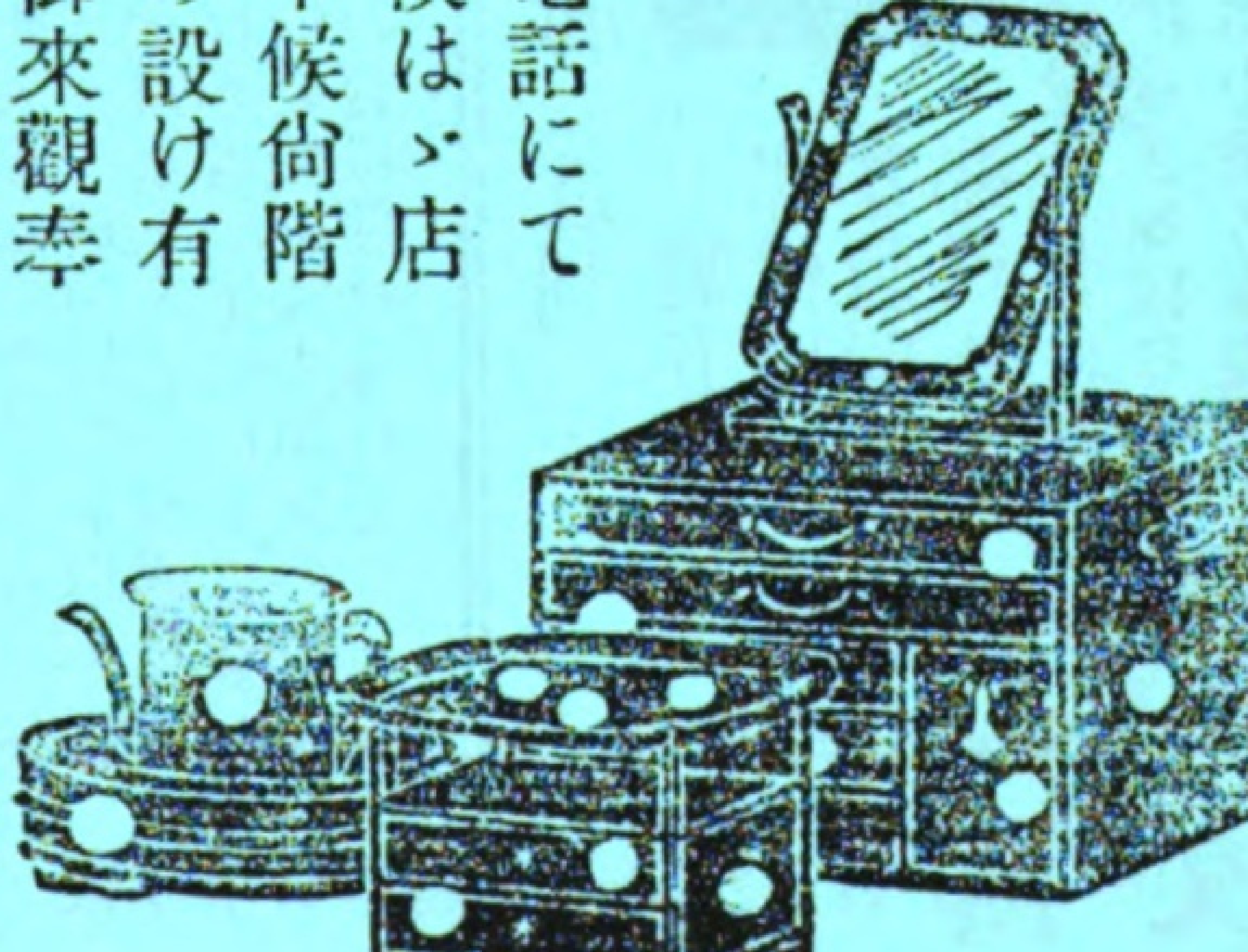
著者研究の結果諸疾病の起因症狀を說き以て病を其起らざる前に防ぎ或は諸病の發すべき起因を剿滅し或は既に發したる病を治療する方法を病名に依て說明を加へ又各其藥劑調合仕方を詳記す

發行所　東京神田區表神保町（電話本局一七五三）　修學堂書店

（乙の八）

各種美術漆器類

御婚禮道具蒔繪美術品各種重箱膳椀家具一式其他各種共特別に注意調進可仕候
御用の節は電話にて御申越被下候はゞ店員相伺せ可申候尚階上に陳列場の設け有之候間時々御來觀奉希上候



柏

東京市日本橋區通壹丁目
黒江屋漆器店
電話本局八百拾四番

東京府第二高等女學校卒業生



小石川區竹早町所在

東京女學館卒業生



夏季休暇の好伴侶

一條成美先生畫

水彩畫練習ハガキ

第壹輯

練習用精巧
石版刷六枚
彩色用
金屬版刷六枚
附錄交換用
往復葉書一折
十四枚一組
定價金五十錢
郵稅金貳錢

繪はがきは須らく自己の揮毫物たらざるべからざる也『水彩畫練習はがき』は一種の完全なる**水彩畫手本**にして何人と雖も容易に其門に入る事を得せしむるのみならず附錄往復はがき中其金屬版刷の往信用に彩色を施こして送附せらるれば一條成美先生親しく其彩色に就て批評し且返信用には**先生**に更に**水彩畫を揮毫**し所謂**肉筆繪はがき**にて一々發信人に**返信**すべき**斬新**なる趣向なり

新曲出づ

獨唱廣瀨中佐

新曲出づ

大阪府師範學校敎諭　蜂谷鍵吉先生作歌
同兼大阪府女子師範學校敎諭　目賀田萬世吉先生作曲

▲此廣告切拔注文一割引▼

菊判二倍形
美本全一冊
定價廿五錢
送本料六錢

悲壯の詞、これを整ふるに斬新の體を以てし、變幻の曲、これを律するに清婉の調を以てす、世中佐の偉功を謠へる者甚だ多し、されどもこの歌曲の如く優りたるものを見ず、既に幾多の音樂會に奏せられて好評嘖々人心を皷舞したる事多大なり、今やわが聯合艦隊は大擧遠來の敵艦を一戰に殲す豈中佐の英靈これを冥助するなきを得んや、音樂に心ある士女、乞ふこの歌曲を奏して我海軍の大捷を賀し併せて中佐の英靈を慰められよ。

(丙の一)

發行所　東京市神田區錦町一丁目　大阪市南區鹽町三丁目　修文館

文藝倶樂部定期增刊　第拾壹卷第拾號　七月十五日發行



洋裝美本
紙數三百二十頁
正價廿五錢
郵稅貳錢五厘

偏く日本全國花柳界の風俗を網羅して社會半面の眞相を窺はんとする、是れ本誌を増刊するの目的なり。彼の坊間に散在する花柳細見記、狹斜案内記と全く其の撰を異にし、他日日本社會史を編纂せんとするものゝ先驅たらんとする、是れ本誌を増刊するの期待なり。左記の諸項目に渉りて花柳界の眞相を詳述したれば、一日一刻も活動して止まざる社會の形勢に留意するものは、來る十五日發刊の日を待つて、賣切れざる内購讀の榮を賜へ！

揭載の要目

花柳の歷史△花柳の位置△規約及作法△言語及び流行唄△妓夫、箱丁、女將、女中、仲居等の身の上△藝娼妓の狀態と客の種類△雛妓と其の養成法△遊船宿、待合、貸席の今昔△花柳に關する傳說及び逸話△花柳界の迷信

倘夫れ全篇を裝飾する一班を語らんか、曰く、現代美人畫家の泰斗富岡永洗氏に乞ふて、艶無双なる清浴後の美人を題とし特に大版口繪四頁大にして實に我國雜誌界唯一の精彩驚くべき木版口繪を卷頭に挿入す。武內桂舟氏筆の表紙と相俟つて如何に光彩を放つべきか。尙ほ寫眞版口繪の數を例號より增加するのみか卷中を飾るに紅紫妍を競ひ麗を爭ふ全國に亘る美人の寫眞版約百姿を以てす。其の如何に趣味深く、其の如何に美觀に富むか!! 讀者願はくば刮目して待て!!!

（丙の三）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

京都淑女學校卒業生



文學美術月刊雜誌

ハガキ文學

第二卷

七月一日發行　第十號　一冊八錢　郵税一錢

東京日本葉書會　小石川

（丁の二）

大本營陸軍部御許可

神戸 關西寫眞製版印刷會社製

日露戰役紀念寫眞帖

THE RUSSO-JAPANESE WAR ALBUM

洋裝總クロース
縱六寸五分
横九寸
口繪金文字入
寫眞百餘枚
堅牢頗美本

紀念寫眞帖 第壹輯

第二軍の出征、鹽大澳上陸に初まり、金州南山の激戰、ダルニーの占領、得利寺の奇捷、蓋州の占領に至る迄の寫眞百餘枚

正價壹圓貳拾錢
小包料拾五錢

大本營海軍部御許可 旅順要塞戰紀念帖

攻圍八ヶ月、兩軍の死傷十萬世界最新の戰術を應用し能く防ぎ能く攻め覆載間の視線を盡く此所に集め龍驤虎踞千古の壯觀を極む、而も防守軍は力屈して開城降を請ひ我帝國攻圍軍の名譽を全世界に宣揚せしめたり此帖は神戸光村氏が海軍部の囑托を受け數人の寫眞技師をして陸海方面の諸戰況を撮影せしめたる壯烈の紀念帖たり。

正價壹圓貳拾錢
小包料拾五錢

紀念寫眞帖 第貳輯

箭樓子第二軍司令部門前●太平嶺の鐵條網●同敵の鹿柴●大石橋の激戰●同激戰中第五師團司令部に敵彈雨下●大石橋停車塲●同兵站病院●海城の内外の諸景●海城々外敵の塹壕狼穽鐵條網等●王公山々麓の砲壘●海城々外沙河の渡渉點●東清鐵道分捕貨車の運搬●鞍山川に敵の燒棄せる鐵橋上の消防●鞍山站附近の急追撃●首山堡攻撃中外國武官の觀戰●同山麓の我軍躍動●同山下の新戰塲●遼陽攻撃用分捕重砲運搬●同重砲の間接砲撃●遼陽發火の遠望●遼陽戰後の慘狀等珍貴紀念寫眞百餘枚

△正價壹圓貳拾錢　小包料拾五錢　新刊發賣

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の二）

海軍大將 東郷平八郎君題辭
海軍少將 河原要一君序文

海軍解說

杉本文太郎君著（新刊發賣）

全一册

洋装大判
紙數二百餘頁
正價參拾錢
郵稅六錢

海軍に關する圖書の出版少なからずと雖も、精確にして叙述の宜しきを得しものに至りては夫れ將た何かある、況んや日進月歩の今日昨是今非の變化甚だしきに於てをや。本書收むる處、海軍編制、海軍々人の階級、及職務、服役、進級、服裝、其他軍艦職員の勤務一般操練、海軍檢閱、公室及私室、海軍禮砲、海軍旗旒を始め、艦種の特質、海軍砲、攻擊及防禦、水雷、戰闘準備海軍の任務等に渉りて細大漏さず就中海岸の防禦並に海岸要塞の攻守等を掲ぐるを見ては如何に他と其趣を異にするかを知らん殊に著者海陸軍の編纂事業に從ふこと殆んど十年其道に明かなるを以ても倚之を一々當路者に訂せり、苟も海軍に志ある者は勿論海國民たる者豈一本を座右に備へざるを得んや。

滿洲軍總參謀長兒玉大將題辭
陸軍步兵大尉佐藤信亮君校閲

戰闘圖解

杉本文太郎君著（新刊發賣）

全一册

洋装大判
紙數約二百頁
正價參拾錢
郵稅六錢

軍隊は如何にして編制せられ各兵種の性能は如何にして發揮せられ充員召集は如何行軍は如何宿營は如何又戰闘は如何にして開始せられ攻擊は如何にして擧行せられ追擊は如何防禦は如何戰場に於ける死傷者の處置、戰闘後の處置其他行李、輜重を初め兵器及び彈藥の補充、被服裝具の補充、人馬の補充等本書は戰闘全般に關する幾多の動作を圖解して些の遺憾あらしめず就中旅順の如き浦鹽の如き大要塞の組織並に攻擊法を說明網羅するに至りては先人未だ這般の著なし軍國民たる者豈に一本購はざるべけんや

（丁の三）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（丁の四）

登録商標

良薬にして口に甘し

登録商標 淺田宗伯先生直傳

淺田飴（あさだあめ）

たんせき・一切（いっさい）

肺病（はいびやう）の持薬（ぢやく）

ひき・かぜ

よ・わき・人

老人（としより）の滋養薬（じやうやく）

登録商標



十二日分 金五拾錢

一週間分 金参拾錢

四日強 金貳拾錢

三日分 金拾錢

日本全國到る處の薬店に販賣す

本家

東京市神田區鍛冶町（電話本局壹壹二一番）

大阪北久寳寺町堺筋（電話東三九五八番）

堀内伊太郎



女學世界

第五巻第九號

（七月五日發行）

精神の糧

凡ての肉慾を制し得るものは眞の人物なり。一善起れば一害生ず、人生の事一日も氣を安んずる時なし、故に天命を知りてよく是れに仕ふるをよしとす。

人々有字の書を讀むことを知りて無字の書を讀む事を知らず、有弦の音樂のみを聴きて無弦の音樂を聴く事を知らず。

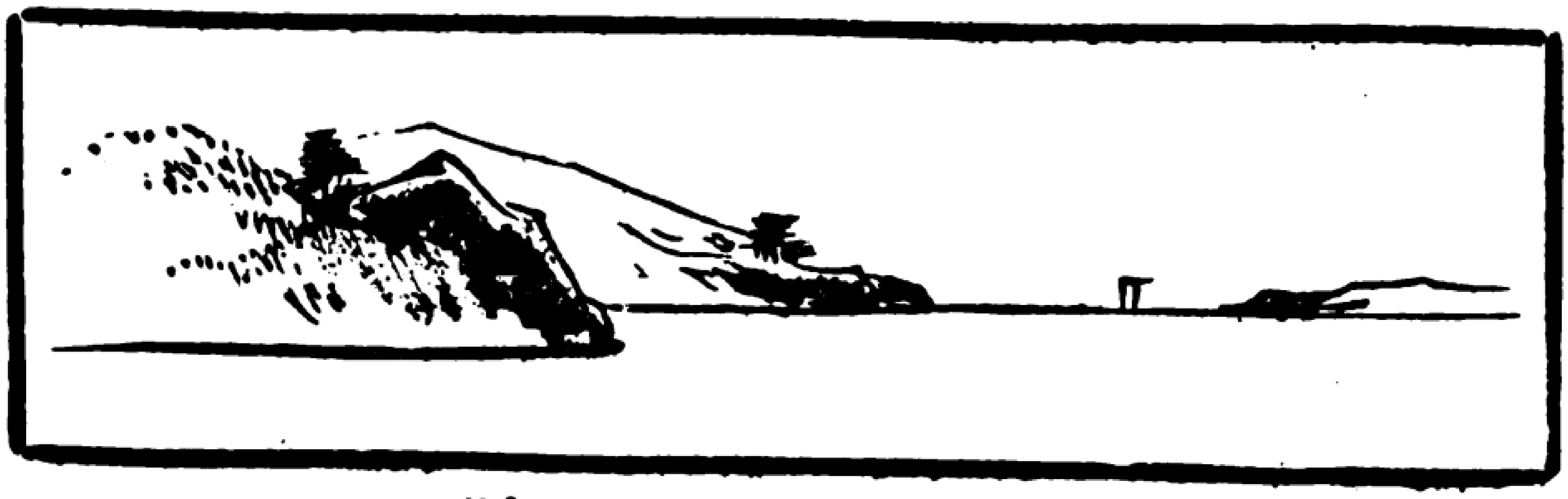
人はよく他人の過失を見る、されど己れの過失を見るもの少し、人はよく他人を教ゆる事を好む、されど己れを教ゆる事を好むものなし。

人は肉體の食物を採る事を知りて精神の食物を採る事を知らず、人間として精神上の食物を採ることを知らざるものは愚人なり、精神の食物とは何ぞ、即ち安心立命を得る事なり、立身處世の道を知る事なり、是を得、之を知りて我が心中に止め貯ふるは即ち智者なり。

自己の怒を制し得る人は即ち大人の働きなり。

人は饑寒貧苦の憂たるを知りて富貴榮達の更らに之より大なる憂ひあるを知るもの尠し、

人を責めず、人の陰私を發かず、人の舊惡を思はず、この三者を心に體せば、その人は害に遠かるべし。



時論

女子の高等教育に就て

日本女子大學校長　成瀨仁藏

此頃の日本新聞に、ドクトル、スミスと云ふ人の說を揭げて、女子に高等教育を授けるを批難したのを見ましたが（四月十五日より同二十日まで連載「女子高等教育亡國論」）あれは誠に無理な議論とおもはれる。

一體、教育と女子の健康とに就いては、ボストンの醫學博士クラド氏の說が有る、即ち婦女子に高等なる智育を與ふる事は、馨ばしからぬ生理的影響を及ぼして、或は子孫の體質を薄弱ならしめ、或は其數を減せしむるが如きもの、往々にして有りと云ふのが此人の說であるが、今日亞米利加合衆國の女子教育が、愈々益々盛大と成ッたに就てクラド博士の說の大部分が全く間違ひで有る事を立派に證據立る事となりました。

それは米國の、各女子大學で、大層體育に重きを置き出來得る限り身體の健康に氣を附けさせたから、遂には、高等教育を授かつた女子は、授からない女子よりは遙に其體格が宜く、又高等教育を受けた女子は、其入學前後と卒業後とを比較して卒業後の方が遙に健康を增加して居る事が、統計に依つて充分に示されたからである。

△女子の男化に就て

それから又スミス氏の説に高等教育を授けると、普通の女子は一般に、殆んど男子と選ばない様に成つて仕舞ふ、即ち「男化」すると云ふ議論であッたが、それは教育の施し方の如何に依る物であッて、どんな教育を爲ても、男化するを免れぬと云ふ事は無い筈である、例令ばコッテンシスト（家族制の寄宿舍）などを設けて女學生等が是まで馴れ來りし所の家庭的生活を、相變らず續けさせるなど、女子には女子らしい教育の仕方をすれば、決して差支の無い事かと思はれる、是等の點に就いて、米國の教育家は餘程深い注意を拂つて居る、それは高等教育を受けた女と、受けない女とを比較して、何れが能く女らしいかを調べて見ると、矢張女子大學（尙は女子大學の外に混合教育と稱されて、男子の大學に這入つて男子と共に學を授かる物が有る、是は特に米國に多い）の門を潜つて出た女子の方が、如何しても、より多く優美である。

△繁殖力の減退に就て

その次にスミス氏は、女子に高等教育を授けた結果として、人類の繁殖力を減ずるとあるが、それは成程御説の通りである、即ち最近三十年間に於て統計を取つた物が有つて、その統計表に依ると、高等の教育を受けた婦人に小供の少いのは、事實で有るが、左樣かと云つて直ちに之れを、高等教育を授かつたから健康を害ふた結果であるとのみ斷定は下せないのである。現今世界の各國中で、其人口の減退しつゝ有るのは、獨り佛蘭西で有つて、獨逸及び英國、米國などは、共に增加しつゝ有るが、是等英米諸國に於ても、大富豪とか、大學者とか、又は大政治家とかいふ側で、苟も大勢力を有する人達は、皆比較的に小供が少くて是れは殆んど一種

の定律と成つて居るかの觀が有る、けれども是れを直ちに健康の足らざるに歸せんとするは、大早計の至りと言はねばならぬ。現今の社會に於て、各貴族や勢力家などは割合に小供の少いのは、一つは兩親の思慮の深い爲めでも有らうか、即ち佛國などでは、三人有らば三人、五人有らば五人の子に、財産を等分に配與せねばならぬ故、小供が多ければ、隨つて其の分與金高が少くなるから、夫れでは貴族の體面を保つ事が難からうなどと云ふ心配から來るのも有らう。又英米の諸國では小供に充分の教育を授け、それ相應の財産を分ち與へねばならぬ故、其將來を思ふて小供のクオリチー（品質）に重きを置くからでもあらう、故に小供の數の少くなつたのは、必らずしも高等教育を授かつた結果（健康を害ふたから）で有るとは言はれない、兎に角之れは大に研究して見る價値の有る問題である。

よし又それが高等教育に原因するにした所が、此世界では、高等な物程繁殖力の弱いのは自然で有つて、鱈は一腹に九百萬の卵を生み、畠の雜草は、根こそぎに拔き取る事、百回二百回にして、尙ほ且つ生へて始末にこまる、然るに高等なる植物は、隨分と手數を加へても、枯れ樣、斷え樣とするので有る。又世の金滿家も二代は續くが、三代目には、川柳通り賣り家と唐樣で書くのが普通であつて、どれ程注意しても、大人物の子に大人物は、中々出來ないので有る。且つ又、此世界に、平凡な人間が十億居るのと、高尙な人間が五億居るのと、何れが果して此世界の爲めに、有益で有るかは、別に一つの大なる問題であると言はねばならぬ。

▲決して亡國にあらず

よしスミス氏の說に一歩を讓つて女子に高等な教育を施した結果、其繁殖力を減じたにした所が、それが決して亡國にはならない、斯の如きは寧ろ、一種の新陳代謝とも云ふべきもので有つて、しかく氣づかふ程の

事では無い更に一歩を讓つて、之れが爲め社會の人員を減じたにした所が、それを理由として、今日の高等女子教育を攻擊し、更に女子の高等教育は無用有害の物で有るなど、絕叫するのは甚だ亂暴な議論で、到底吾人の耳をかたむくる價値のない物と云はねばならぬ。

▲女子大學の目的

以上はスミス氏の說に就て一言したものであるが更らに廣く世間を見渡すと、近頃女子大學に對して種々の異論がある即ち女子大學は名有つて實なしと其云ふ所を聞けば、帝國大學の如き大學にも非ず、米英の女子大學に似たる大學にも非ず、然も日本の女子には、學科の程度のみ高過ぎて、徒らに方今の女子をして、男子らしく爲し、ハイカラに爲し、躰質を虛弱ならしめ、剩さへ婚期を失せしめると云ふので有るけれども、是等は最初から、一貫し來れる本校の主義及び、現狀を知らざる者と言はねばならぬ。

日本女子大學は創立の最初に於て、「日本の女子」に適合せる、高等な女子教育、即ち日本の歷史や日本の地理や其他に鑑みて、「將來の日本」に必要なる婦人を養生せんとするの目的で有つた。今日も亦元より其の方針である。然るに英、米、獨等に於ける女子大學は、大抵男子の大學と殆んど同じ學科目及び程度を有して居て其目的とする所は言ふまでも無く、男子と同じ樣なる働手を造るに有るのである。けれども本校は大に之と趣を異にしてゐるのである、即ち日本の女子に必要なる智識を授け、日本の家庭に必要なる技藝を敎へ、而して日本現今の社會を、漸次進步し發達し、向上せしむるに適當なる婦人を養成するを以つて、目的とする物であるから、英米諸國の、大學卒業の女子の如く、男子の職業を奪ふ恐れも無ければ、從つて男らしく成る樣の憂ひも無い筈である。

近頃米國の一雜誌（ペタゴジカル、セメナル、クラーク大學の總理スタンレー、ソール氏發行）に本校を批評して、日本の女子大學は、世界でユニーク（唯一の物）で有ると、云つて居りましたが、實際歐米各國の女子大學と比べては、大に類を異にして居る、本校は何所までも敎へる所は、日本の女子に必要な物で無くてはならぬから、他の男子の大學と學科の程度を同じうせんともせず、元より帝國大學とも異へば、英米の女子大學とも大に異つて居る次第である。

▲婚期の喪失に就て

それから本校は、早いのが十七歳で入學して、二十歳で卒業する都合であるから、二十歳にして女子が配遇者を要求するなら、そんなに晩婚と云ふ可き際の物では無く、寧ろ早婚の嫌いが有りはせんかと思はれる位、蓋し多望なる將來の日本國の爲めには、隨分と精神も身體も、しつかりした婦人でなくてはなるまいと思ふ故自畫自讃の樣であるが、本校を卒業した位の所で、年齡までが、恰も善く、結婚時期の成熟した所かと思はれるのである。

▲お轉婆に就て

又女子大學の生徒は、ハイカラになり、お轉婆に成つて、卒業後に社會へ出ても、實地には少しも役に立たぬなどの批難がある。これに對して一寸云つて置きたい事が有る。元來高等女學校位で、學問を廢止して了ふから、其思想が生半弱で、智識も、德操も、眞の敎へは充分に呑み込まずして、或は西洋がつて得意で居り、或は何の會何の義捐と、外の事ばかりに奔走して、家庭の事が治まらないのである即ち學問が半熟なる結果で

あつて間違ひや行違ひの有り易い順序になるのである、今、本校生徒の經驗に依つて見れば、學問に於ても、將た年齢に於ても、彼等よりは、いくらか進んで居るだけ、それだけ浮世の風潮にも容易に誘はれず見識も相當に出來て居れば、分別も稍や充分に有つて、そんな行違ひや間違ひは少いのではあるまいか。凡そ世の中に教育を高めたから、生意氣に成り、お轉婆に成ると云ふ理窟は、決して有る物ではない、眞に充分に教育されないから、譯が分らず、生意氣を働いて居るので、タトエバ彼の官署などでも、人民に對して、兎角威張りたがるのは多く下役である、生中に少しばかり有る物は、反つて無いより惡い事例は澤山有るけれども、充分に有つたら教育は至極結構な物に相違無いのである。

又スミスの論文に、米國の女子の墮落したのは、其原因高等教育に有りと、云つて有るけれども、私共から見れば甚だ無鐵砲な言ひ方である。若しも米國に女子の高等教育が皆無で有つたならば、それこそ今頃は如何程米國の婦女子が墮落して居るか、恐らくは比較にならない事かと思はれる、早い話が、米國婦女子の高等教育が米國の婦人を甚だしく墮落せしめつゝ有りと云ひ〳〵、米國人は米國から、女子の高等教育を排棄する事が出來ないのではないか、それは何故で有るかは多言を要しない。凡そ一利あれば必ず一害が伴ふ、しかし害よりも利の方が多かつたら、それで滿足せねばならぬ、若し夫れ、不利益なる點、缺けたる點、弱き點有らば、其教育の方針若しくは其教育の手段を改良するまでの事である。

私が二十年來經驗し得たる所に依つて考へると是等の點は、追々善く成つて行くかと思はれるから、少しも心配するには及ばない。

世間ではまだ〳〵私共の學校を兎や角と云ふ者が有る樣だが、開校以來の四ヶ年間に、一般社會が女子に對する態度や、行動を少からず善良なる方面に向はしむるを得たかと思ひます。女學生等が或る種類の人達

から、或は道で行會つた時、故無く揶揄半分に罵詈し、或は汽車中に同席した時、亂暴にも愚弄し嘲笑しつゝあつた事などは是迄折り〳〵目撃する處で有つたが其時此方は必ず、深く謹んで正しくして居ましたから、今日は甚くそれらの惡風が減少して、最早往日の態を見る事がなくなつたのである。

△女子大學の校風

女子大學校で最初から特に注意したのは『校風』である、一種の善き氣風を、校內の生徒等が自ら造つて行く樣に致させましたが、本年の新入學生の如きは、四百餘名の多數なるに關はらず、昨年に比較して餘程な短時日に、早くも本校通有の氣風に感化する事が出來ました。

現今生徒の數は、總計千三百十九人で、內九百人が附屬高等女學校の生徒で、他は悉く大學部の本科生や研究科生で、都合九棟の寄宿舍には、八百名近くの生徒が居て、例の家族制度（三十人若しくは二十七八人を一家族とす）にして、各自に其責任を持たせて、各寮毎に又其寮の寮風を造らせる樣にして居ますが、各生徒等が自動的に、各自物事を改善して行くから、之を一々、教師の監督や、規則の手位で支へやうとするよりは遙に好結果を奏して居ります。

生徒等が目出度卒業して、一旦本校を放れた後と雖も、尙ほ寮にのみは相變らず、親しく往來して居る者も少く有りません。即ち寮を以て彼等の第二の家庭として居るのである。同時に通學生と雖も長幼相擁護し、親善する樣にして居るのである。

牛舍に乳牛有れば、畠に野菜有り、更に銀行部等有り、皆各生徒等が自動的に營み居る所で、宛然一個の小社會を形造れる姿である。

即ち之が就中歐米の女子大學と異る所なのである。即ち本校は、智識のみを授くるの學校では無く、智識以外に或る貴い物をも敎へて居る心算である、尙ほ年月を經るに從つて、追々世間の攻擊や、各種の悲む可き弊害等をも、全く除き得るかと信じて居ます。

（をはり）

今後の社會と女子教育

農學博士　横井時敬

時代の風潮は駸々として、進步し發達し來り、未だ全く歐米の文明を咀嚼するに至らず、僅に物質的にのみ傾き、皮膚にのみ過ぎたるの今日、早くも舊時代の文物影をだに止めざらんとして、辛く思想の上に餘命を保てりとや云はん、吾人は今後日本の社會が、如何樣に變化發展し行くべきかは、豫言し得べき限りに非ずと雖も、其變遷の跡を追ひては、其影響する所を研究して、其結果の如何と、其成行の模樣とに對し、豫め配慮し戒心せんとするもの、必ずしも徒勞に非ざる可きを信ぜんとす。

つら〳〵世界各國の歷史を案ずるに、今日の日本文明の如く、進步の猛烈なるは、古今東西に未だ曾て有らざる所なり、而して其の餘りに急激なるの結果として、都會と地方とは、各自蒙れる影響に於て大差を生ずるに至れり。五十年前の俗に所謂『千俵與米』なる物は、今日の約三百石年收に相當し、一石十圓に見積らば、約三千圓の收入有りし者は、地方に在りては云ふまでも無く大農にして、下婢及び下男の若干を使役し、其子女は、元より今日の如く然く華麗なる衣服は着用せざりしと雖も、自ら高からざりし當時社會の程度に適應して、平和且つ安樂なる生計を爲し、少くとも年千圓若しくは千五百圓以上の收入有る農家の子女は、多くは家計の何物たるを知らざるは勿論、僅に婦人に必要なる手藝と、簡單なる禮式の二三を教授さるるのみにして、厨裡に於ける食物料理法の如きは、遂に得て窺ひ知らざる所なりき。然るに今日に至りては、交通の便、愈々益々開展すると共に、僻遠なる地方と雖も、各種の交際亦從つて頻繁と成り、次いで之が費用の激增と成り、往昔

の年收一千餘圓を以てして、裕に餘り有り且つ幾分の貯蓄を爲し得しものか、曾て見ざりし聞かざりし費目の下に、其大部分を支出して、或は辛く表面を保ち、或は不足を來して困難する者、比々皆然らざるは無し、之我が日本國全體の世帶に比して好個の例證たるべし、德川の流れ淸ふして三百年の長夢始めて覺めたるや、急かに歐米各國と交通し貿易して、國富の程度に於ては、大差有りしにも關はらず、對等の國際を保たざる可からざるが故に、三十萬噸に近き海軍を設け、十五個師團の陸軍を備へざる可からざりき、其他各種の細說に亘りては、實に一一數ふ可からざるなり、蓋し是れ見識と財產との相伴はざる物にして。吾人が今日一個の紳士として、少許の收入を以てして斯の如く中等社會一通りの衣食住を爲せりと雖も、歐米に於て吾人と同等の地位有る紳士と交際せしめんか、吾人が今日の收入を或は三倍或は五倍したりとも、到底持續し能はざるや明かなるも亦同じ。更に近時桂伯夫人が三千圓のブローチを買ひ求めたりとて、世間は其贅澤に驚く物の如しと雖も、靜に顧慮して歐米に於ける一等國の內閣總理大臣たる伯爵の夫人としては、寧ろ甚だ質素にして反つて安價に過ぐるもの有らざらんや。

及埃國が其農業時代に於て、富力、文明、生活の程度に大差有る歐洲各國と、交際せしに依り、過大の費用に堪えず、遂に己を保ち得ずして、其國家を滅亡せしむるの止む無き悲運に陷りたりぬ。今日地方の農家が（必ずしも農家に限らず）交通の便に依りて、或は其子女を遊學せしめ、或は親ら郡會　縣會　國會の議員と成る等直接に都會と頻繁なる交際を爲すもの、皆其費用の多大なるに苦み、事に當りて最も保守的なる農家は今日成功し、之に反して或は議員の選擧に或は鑛山投機に、多く活動せし者は多く破產したりき。

田舍に育ちし少女が、一度都會に出て都會の風俗を習ふや、再び田舍に歸る事有るも、見る物、聞く物、皆優美ならず、高尙ならず、幼稚にして愚昧なるを感ずるが故に、愈々都會を慕ふの念を起し、益々田舍を厭ふ

に至る。既に出京の結果趣味嗜好の程度を異にすれば、嫁すべき先は畢竟非ずして、遂に再び都會に出づる者、近來往々にして有るを聞く、而して再び都會に來り、又は始めより之を知りて歸省せざりし女學生共は、都會に於て如何なる生活を營めるか、彼等は其希望せるが如く、財産有り學力有る男子を良人として持たん事の、今日に在りては甚だ難事なるのみならず、今後は日本も歐米の其の如く、中等社會に於ては靑年男女の結婚して美しく豐なる家庭を造らん事は、社交の頻繁に伴ふ費用の增加と、一般生活程度の進步とに依りて漸次困難ならんとするの傾向有り。

之を佛國の例に見るに、巴里に於ける醜業婦は田舍娘の失敗して墮落したる物少からず。是れ田舍娘の見聞狹きが上正直にして、誘ふに易く、惑はすに早く、剩へ誘惑の機關が能く都會に完備して、之を專業の如くする惡漢さへ有ればなりき。

其父兄は始めより贊成せざりしを、强ひて願ふて僅に許されて、長き年月が間心も空にあこがれたる花の都に來て見れば、觀る物總て色鮮かに、聞く物悉く壯美しう、或時並び坐せる男の息の馨れりと密に思ひ染め或時共に語れる男の情の蜜より甘きを自ら心に許し、初め淺薄なる一時的の虛榮心に馳られて都會に來りし者も、田舍を厭ふて再び上京せし者も、既に業に父兄よりの送金は澁滯勝ちにして――前述の如く生活程度の都會に比して甚だ低き田舍より、毎月二十圓前後の送金は少からざる苦痛なるのみならず、其女子が勉學の結果甚だ良好若くは鮮明ならざるが故に……苦言訓戒又屢々到るが故に、故鄕の消息は兎角馨ばしからずなり。始めは美衣や美食や虛榮心の慾望を遂げんが爲め、後には止む無くパンの爲め、皆遠き慮りを欠きたれば、遂に惡漢の術中に陷り其食物と成りて悲む可き境遇に墮落するに到る。

是れ實に巴里に於ける事實なり、蓋し日本に有りては未だ全く杞憂たるに止まる可しと雖も、方今非常なる

盛況を以て女學の勃興せんとするに際し、早くも一方に墮落の聲の聞えそめて、偉大なる戰捷に、意氣擧り國威擧れる大日本帝國々民が、振古未曾有の名譽に伴ふ可き品性を保たざる可からざるの秋に當り、徒に社會の人心を驚かすもの有れば、今後時代潮流の如何に依りては、杞憂必すしも杞憂ならざるやの觀有ればなり。社會主義者は能く社會の下層に悲むべき事實を發見して、善く之に同情を表示す。されど吾人は今後の中流社會に於て、其よりも尙ほ傷む可き物を見る、其よりも一層濃密なる憐愍を加へざる可からざる物有るを認む。嫁入道具の内に一脚の机が有りしとて、良人と姑舅に事ふるの外に、尙ほ斯の如き物を要するの理無しとして、其緣談の破棄されたる物有りしとは曾て聞けり、元より此は單に一個の話柄に過ぎずと雖も、女學生上りを妻に貰ひ、費用多しと云はれ、事に當りて間に合はずと笑はるるが如きは、屢々耳にする所なるにも關はらず。日本全國の少女等は、悉く海老茶袴を穿き、前髪に結ひ、リボンを簪し、踵高の靴に透し編みの手袋着けずば幸無げなる今日の風潮は、滔々として今後如何なる結果を齎す可きかを想ふ毎に、異に驚き且つ悲まざる可からざる物有るを覺ゆ。

元より今日は過度の時代なり、混沌として亂れたる社會なり、多少の病的現象は到底免る可からざる所とは云へ、今後中流以上の夫婦生活――即ち家庭を保つ事の――益々困難と成り行く可きは殆んど、疑ふ可からざる物の如し。斯くて女學生上りの婦人は、生中有る學問が反つて仇と成りて、兎角妻たるに緣遠く（妻と成りても亦母たるに緣遠し）不愉快なる月日の下に、獨立自活するに至るべし。社會の生活程度が進歩するに從ひて、容貌美ならざる女、財産無き女等は多く競爭に遲れて良人を得がたく、男子も亦社交に多大の費用を要するが故に、或る程度までの收入無くば、妻を持ち家を保つ事能はざるに至りて、愈々獨身者の數は多からんとす。パウルゼンの社會倫理學は、獨身生涯を不可とする物の如しと雖も、見解の如何に依りては、是又必すし

も絶對的に不可を云はずとするも、眞の獨身生涯に至りては、甚だ意志の鞏固なる者に非ざれば不可能なるを如何せん。獨逸に有りては大學敎授の如き立派なる紳士にして、獨身なれども子――眞實の――を有する者、及び婦人にして結婚を肯せざる者(所謂第三性とて女性に非ず男性にも非ず然も此者亦時として實子を有せり)等少からざるを見る、是實に悲む可きの事實にして、吾人は斯の如き社會の病的現象を寫すに當りてさへも轉た不快の感無き能はず。

前に巴里に於ける婦人の墮落を寫して杞憂を述べたり、爰には獨逸に於ける獨身生活の弊害を記して、日本の社會も亦斯の如きの現象を示さゞらん事を希望するもの實に吾人の老婆心なり。而して斯の如きは二種二樣の墮落なりとす、其原因に至りては一にして足らざるべしと雖も、就中最も著大なるものは、現時社會の敎育上に於ける、方法手段の欠點有るに原因せざる可からず、如何にして之を改良し、如何にして之を未前に防ぎ、有爲なる幾多の青年子女をして病的生涯を送らざらしめ、且つ社會をして健全ならしめ得べきか、是れ好個の問題ならずや。(以上は横井博士の殊に本誌の爲めに語られたる談話を記者の筆記したるものなれば文の責は記者にあり)

時局婦人觀

(東洋婦人會に於て)　尾崎東京市長

予は開戰以來市中の電車内にて深く感じたる事有り。或は其子を送りて、或は其良人に別れん爲めに地方より來りし婦人と乘合せたる事少からざるが是等の婦人は、少年時代に於て芝居で見し正行の母に似たるものあり、其言語其狀態こそ異れ他は悉く同じきなり、寧ろ事が眞實なるだけ役者のよりは眞情流露して。彼等の涙

乍らに語り居るを傍より聞いて貰ひ泣せし事屢々なりき、蓋し今日の戰爭は、戰地にては男子が戰ひ居れど、實は內地にて婦人が苦戰せるものなればなり。此母有り此妻有りて始めて心安く名譽の戰死を遂げ得るものなり。

されど半面に美點有れば半面に欠點の免れ難きを常とす、いざ是より他の言ひ難がる、婦人に對する小言を並べん、由來東洋婦人は逆境に在る時の友としては、申分無き慰籍者內助者なれども、樂みを共にするには足らざるなり。愛子戰死すれども他に淚を見せず、家計苦難を極むれども些の不平をも訴へざる如き、實に美德なりと雖も、一家豐富なるの時歡樂を共にする能はず、將來の男子は野外に遊ぶ事多かるべし、或は舟、或は馬、或は登山、或は旅行、又は夏期の休暇に支那朝鮮に逍遙を試むるなどは益々繁かる可きに、女子は其度每に必らず留守居に殘るが常にて、平生の氣質習慣等は、斯る時に男子と樂みを共にし得ざらしむ、人間元より苦み少からずと雖も、生涯の大部分を占めざる可からざる快樂に於て、男女別々となるは面白からず。故に今後は屋外の樂みをも共にし得る樣躰育を重せざる可からず。

武裝して平和を保てる時代は尙ほ永く續くべし、斯る時代に於ては、事あれば直ぐに起上る覺悟なかるべからず、然るに日本の婦人は步き難き衣服にして坐せり、一寸庭に下りるにも五分七分の時間を要す、甚だ腿刧な服裝に非ずや。變に應じて直ぐに立ち得る狀態に在るが適當な生活と云ふべし、故に此衣服の改良は先づ婦人の力に依らざる可からず、男子は躊躇無く贊成すれど、婦人よりは兎角苦情の出易き物なり、そは洋風支那風何れにても善し、いざ鎌倉と云ふ時即刻立ち得る樣にせざる可からず。

孟子に大人は心を勞し小人は身を勞すと有るが元と成りて、東洋の社會は人の最も貴ぶ可き、身を使ふ事、即ち勞働を賤めり、西洋にては樂みを勞働の內より取れり、それが當然なり、生產は勞働より來る、貴賤共分に應じて身を使ふが善きなり、然るに日本も、支那も、印度も巳は動ずして婢僕を使ふは誤りなり、此點に於

ても婦人が先んじて改むるを好とす。身を使ふ事少き者は神經質に成り易し、少し學問でもせし者は必ず身を使はぬ習慣になり、物を生產する事無くして盛んに消費す、無智者は生產者にして智者が消費者たるは健全なる社會に非ず、斯の如き日本は不幸なるもの也。

日本は久しく國を爲せども、其富反つて歐米の諸國に下るは原因此所に有り。獨り日本のみならず、東洋全躰が然るなり。

印度の某貴族會て英國に遊ぶ、乃ち歡迎して一日玉投げの遊びを見せたるに、二人の老紳士が汗を流しつゝ玉を投げ合ひ居るを見て、傍の者に問ふて曰く老人は何者なりやと答て曰く某侯爵と某銀行の富豪なりと、印度の貴族怪みて曰く、なぜ他にやらせて自らは見物せぬと、勞働を賤しとする腦には理解が出來ざるも尤もなり。魚を捕りに行けば漁夫を雇ひ、鳥を打ちに行けば獵夫を雇ふ、此惡癖は根底より改めざる可からず、内に勢力有りて保守的なる婦人は尙は更、親ら身を動かすの習慣を養ふべし。

多くの改革の後戾する事多くは婦人の爲なり、後戾の大勢力者陣頭に立たば何の改革か成らざる事あらん。

右は尾崎氏が過般黒田侯爵邸内に於て開かれたる東洋婦人會に於て演べられたる説の大要を筆記したるものにて筆責は記者にあり



人事暦

七月

日曜日（二日、九日、十六日、廿三日、三十日

▲一日――山城建勳祭。▲二日――はんげ生。▲三日――新月（舊暦六月一日みずのとう）。▲七日――七夕、昔は此日牽牛織女の二星を祭ると稱し、供物を献げ詩歌を連ね杯して家庭樂事の一とす▲九日――淺草觀音の四萬六千日、参詣人群集す。▲十一日――此日より官衙學校等暑中休暇始まる。▲十二日――草市立つ、精靈祭の供物、飾物などを賣る。▲十三日――盆祭、此日より十六日までを盆と稱へ、家々魂棚を設け供物をさゝげて先祖の精靈を祀り、墓詣です、國により盆踊あり河々にては河施餓鬼あり、又た中元の祝儀とて親戚知己の間に進物の贈答あり。▲十六日――閻魔の賽日、雇人一年兩度の藪入、商家の小僧、下婢等諸所に遊樂す。▲十七日――滿月。▲二十日――午後七時廿分土用入、土用中書籍、衣服又は什物の虫干をなす、庚申。▲廿四日――甲子。

季節――八日「小暑」廿三日「大暑」、梅雨漸く霽れて炎威將に熾ならんとす、身體に食品に最も衛生を要するの時期なり。

農事――挿苗を終り青稻に水を與へ、除草等に忙はし、土用一郎二郎三郎は農家の厄日、播種に閑なり、麥類の扱落し、夏蠶の飼育等は重なる仕事。

遊覽――都門納涼の地は角筈十二社、目黒、王子、芝浦海水浴、大森海濱、なほ全國に於ける重なる夏時遊樂地を擧ぐれば相州逗子、大磯、埼玉大宮、松島、嚴島、二見浦、攝津布引瀧、駿州白糸瀧、興津海水浴、岡山沙美海濱院。

食品――鯨の味噌汁、水飩、冬瓜の葛煮、松魚の沖膾、胡瓜揉み、きはだ鮪の刺身、茄子の鴫燒、鰻の蒲燒、枝豆、梨子、玉蜀黍、芭蕉實。



社交

團琢磨氏夫人

中村鈴子

花は櫻木、人は武士、其櫻花は方に咲き匂ひ、其兵士は方に召集せられ、花下に逍遙して居る、四月十三日の午前、記者は瀟々たる春雨を冒して、赤阪丹後町の急勾配を上り切り團氏の冠木門を潜りましたが、カーキー色の兵服着けたる宿泊將校と従卒が御玄關前で鐙踏張り、逸物の馬を乗り鎮めて居りました。乃で記者は、丸く刈込まれた扇骨木の間から御中の口に進み老實げな御家僕に取次を請ひ、廊下を越えて和洋折衷の應接間へ導かれたので、正面の壁に探幽筆觀世音の一軸を掛け、咲き誇れる八重椿と白木蓮を大花瓶に挿まれ、右側には戸帳を垂れし洋書棚二個を据ゑ、長椅子には美しい狐皮を敷き列べてあり、ストーブの上に置かれた江ノ島の盆景は精巧を極めて先づ人目を引き左手の切組硝子窓から眺め得らるゝ御庭の一部には、參差枝を交えて赤松自由に枝を伸べて、丁度須磨海邊のやうな趣を備へ、赤坂兵營の赤煉瓦壁を繞れる嫩葉の森に櫻花の點綴せる樣など、却々に見飽かぬ眺めで御座います。程なく扉を開いて出で迎はれし夫人は鶯茶縮緬の袘ある焦茶大島紬の小袖に、消炭色山繭縮緬の三つ紋の羽織を召し、鼠色に白の格子絞りある襦袢の御襟は優形の御襟元に配合好く、質素な束髪に月形の小さいヘアピンを挿され色白で明眸皓歯に愛の籠つた極上品な御物腰、御話上手の上に溫情を以て對

手を酔はしめられるので、何時までも御側を離れ難い心地が致すので御坐います。

▲夫人の生立

私は御承知の通り、本當に教育の無い者で御坐いますから、貴女方に御交際を願つて種々の事を伺ひ、又子供達にも伺はせたいと始終望んで居ります位で、如何致して纏つた御話の出來る筈は御坐いません。私は男子三人の後に生れた女でもあり、女子教育の極振はなかつた時でしたので、學校もホンの小學校だけ位で今考へますと、殘念な事を致したと存じます。上の兄(堅太郎氏)は舊主(黑田侯爵)の御伴をして洋行致しましたが、舊主の父君樣は非常に西洋好きで、早くから御住居も全然西洋室になされた位の御方ですから、西洋の學問、工藝を研究させる爲めに、それぞれ專門の人を御遣はしになり、歸朝した者から一々御聽取りになるのを何よりの樂みとなされたのです、兄なども其御蔭で參つたので御坐います。私も兄から西洋の話を聞いて羨ましく爲り、其頃麹町に御坐いました同人社分校の女塾へ通はして貰ひましたが、それも僅かの間でして、不幸にして其塾も閉校致したのです。ハイ教師は長谷川文子さん(今の西川鐵次郎氏夫人)なので、裁縫は徳川樣の御服の間を勤めた方が教師で御座いました。母が女の子は十六にもなつて自分の始末が出來ない樣ではならないと申して、裁縫を主に習はせましたから、學問は同人社時代限り何も致す事が出來ませんので、實に御耻かしいので御座います。

▲結婚當時

十九歳で此家へ縁付きましたが、住居は大學の官舍で、御交際致す方は西洋婦人が多う御座いましたが、御互に言葉は解りませんでも、西洋婦人は如才ないので、心易く御交際を仕向けられますから、お正月などには話も出來ないのに羽子の突合を致しました。私は其頃熟々感じた事がありまして、洋學の端緒でも習ひたくて耐らなく爲り、丁度二人の甥が書生に參つて居りましたので、これに頼みましたところ、如何して私共の勉强が忙しくて其暇がありませんと斷りまし

たから、主人に相談しましたところ、今から始めたとて却々容易に出來るものでも無し、且拙者も家の持ち立で何も分らぬ際だから、汝が十分家を治めて呉れねばならぬと申すので、トウ／＼望が叶ひませんでした。其頃は下女も一人だけで、二人の書生の世話を致す上に實家からも仕立物など頼まれ、隨分世話しく生活しました。主人では其頃主に天文臺へばかり勤めて居りましたが、後に自分の望みで工部省へ轉任しました時、俸給も前より減じまして、其上書生一人殖え、却々會計が難かしう御座いました。それですから唯今斯樣な有り難い身分になりましても、昔の事は少しも忘れぬやうに心掛けて居りますし、主人も極有りの儘の人ですから、若い方に向つては君達の參考の爲めだ他には話すなと申して經驗談を致す事が御座います。



▲御子達の壯健

私は身體が弱い方で御座いますから、子供は皆牛乳で育てました。三池に居る頃は、牛乳の配達が後れたりなど致すので、煉乳を用ゐましたが、主人も私も子供の衛生には隨分注意致すので、幸に私より皆體格が宜しう御座います。女の子が四人、男子が二人で末の男子は昨年九年目に出生致しました。私も年を取つてからの子供で、何ですか耻かしく、妊娠中病氣だと申して御客に餘り逢はぬ位でしたが、或方が『奥さん婦人は子供が成長して了ふと餘に老けるものですから、小さい御子を是から育てなさるのは、復び若返つた樣なもので實に御目出たいので

すよ』と仰しやいましたから、それも左樣か知らぬと理窟を附けて居ります。それに男の子ですから、充分大事に育てやうと存じ、看護の心得ある婦人を附けて置きます。

▲令孃の結婚前

娘は皆華族女學校で御世話になつて居りますが、長女は一昨年三池の方へ緣付けました。これもあと一年で卒業致す處を惜しいと存じて、唯だ約束だけの積りの處、先方から結婚を急いで參つたので、當人も卒業を待つて吳れない方なら御斷りしたい』なんて申しましたが、主人では『否一旦約束した以上は最早先方の者に違ひないから此方の自由ばかり徹せない』と申して、遂に遣はす事に定めました。尤も結婚期日までには間もあつたのですが、私は娘に『汝は少しも長く學校へ通ひたいでせうが、學校から直に嫁入しては、家事の取締から良人の世話、又は客の待遇、下婢の使方など實際に就て案外に骨が折れませう、却々學校で學んだ丈では難かしい事であらうから、今から學校を退き、料理や裁縫の稽古を半年もみつしりとする傍、家事經濟を實習したなら、縱令自分で手を下ろさずとも召使に侮られないだけの素養が出來るだらうと、私は思ひますが、汝は何と思ひます』と申し聞かせました處、娘も『母樣の仰しやるのは御尤もです』と同意致しました。ソコで學校を退かせ、教育會へ料理の稽古に通はせ、裁縫の方は宅に仕立屋仕込で可なり出來る女が居りましたので之に面倒を見て貰ひました。ハイ料理の御稽古は學校にも御坐いますけれども、多勢の中ですから始めから終りまで自分で仕上げる都合に參らぬさうです。それで少しの間敎育會へ參りましたが、其御陰で唯今大層重寶致すと申して喜んで居ります。それで私は結婚前の娘に主婦の練習をさせたいばかりに、葉山の別莊へ私が參り切りに致し、娘に家を任せて見ましたが、主人で土曜日毎に葉山へ參つて『汝が側で餘り世話を燒き過ぎるから子供が何も出來ない樣になるのだ、彼一人で居れば料理も巧く遣るし、家の整理から拙者の出入の世話まで却々行屆いた

ものだ、而して女中共に對しても汝のやうに八釜しい小言も云はず、上手に働かせて居るし、却て汝の居ない方が宜い位だ、如何しても當時の教育を受けた者は違つた處がある。唯一つ困る事は、拙者が用事があつて歸りが十二時にならうが、一時にならうが、ちやんと起きて待つて居て呉れるので、氣の毒で耐らぬ』と申して笑ひましたので御坐います。それで娘は彼樣して僅かの間でも家事を習つたのが、緣付いて以來餘程助けになりますと申しました。イエ注意が深いなど申す次第では御坐いませんが、唯今の處では、女の子も嫁入先の家風によつて、昔風も少しは必要でせうし、却々心配な事で御坐いますネ。尤も當人の性質に依り學校で受けた教育を押通すとが出來れば宜しう御坐いますが、宅の娘なぞ才の利かぬ方ですから、私も種々と心配致したので御坐います。



▲嫁せられし令孃の趣味

昨年も夫婦で出京致しましたが、年に一度は必ず參る都合に定めて御坐います。地方に住みますと、チョット都會人の思ひも付かぬ事があると見えまして、昨年歸國の節、御近所への土產に模型地圖と小さい軍旗の附いた玩具を澤山買ひましたので、主人が『今から幼稚園を始めるのか』と戲言を申したのですが、實際見聞の狹い地方の子供衆に何か問はれたり教えたり致すのが樂みださうで、斯樣な土產も教育の一端と存じ

て思ひ付いたと申して居りました。

▲ピアノの御稽古

音樂も何か少しは知らなければ、耻かしい塲合がありませうと存じまして、娘に琴を仕込まうと致しましたが、嫌ひなので出來ませんから、私が八釜しく言つて復習はせて居りますと、主人では西洋で聽き慣れた故か、ピアノが少し解るものですから、嫌ひの琴を如何程仕込んだつて無益だ、ピアノの方が宜からうと申したので『父樣ピアノを習へば、ピアノを買つて下さいますか』と娘に言はれて據ろ無く承知致し、それから前華族女學校敎師松野クラ、夫人に願つた處、種々御親切に話されて、御孃さんピアノの月謝は五圓ですと仰しやつた相で、娘が『母樣私は何だか月謝の事が伺い難いと思つて居ましたが、ナアに少しも心配はありません、先生がちやんと仰しやつて下さいました』と申しましたが、私は萬事斯う云ふ淡泊な風が宜しいと存じます。

▲女子敎育の複雜

まだ、當時の處では、女の子に、御茶の喫み方位は心得させて置かなければなりません、禮式とか活花とか、端緒だけでも隨分致すことが多いので可愛相のやうで御坐いますネ。娘なども御茶に花に盆景の稽古を致させますが、先生の御出での日には、私も用事を繰り合せて、成るべく側で一緒に致すやうにしますので……左樣致しませぬと雙方の勵みにならぬと存じます。盆景はチヨイと便利なもので、致し掛けて人樣が御出でゝも不都合が無いのです。

▲料　理

私も娘と一緒に料理の稽古に少しばかり參りましたが、主に日本料理の方を習ひました。西洋料理は名が難かしくつて手帳へ書き付けるのにも困りますし、ソウ〳〵うるさく御尋ね申すのも間が惡う御坐いますから、餘り習ひませんでした。日本料理も私はモ少し御總菜物に就て硏究致したいと存じます。稽古に參つても實際に當ると矢張り種々に自分で工風しなければならぬ塲合が多う御坐いますネ。ハイ主人は米國から

歸つて參つてから、肉食の爲めに腸胃を損じたやうなので、近頃は日本食を主に致します、主人は社から歸りに御友達を御連れ申して來るのが大好きですし、御客樣にも不加減ながら手前料理を差上げますので大抵毎日用意を致して置かねばなりませぬ。如何か致すと出勤前の御客樣と十時過ぎまで御話して居つて『サア茶漬を食べるよ』と申すことがありますが、それから騷ぎ出しては、間に合ひませんから、始終油斷なく用意して置きます。私など毎日目立つ事も致さずに暮して、御耻かしいとは存じますが、本當に氣配りやら子供の世話やらにばかりかまけて意氣地は無いので御座います。宅の方は近頃料理を致す男が一人參つたので大きに樂になりましたが、葉山で客來の時は是非私が手を下さなければなりません。それに汝が御客樣の側を退いてはならぬと良人は申すのですけれど、私は『何卒少し御免なすつて下さい私が臺所に居なければ、差し上げる御膳に不都合が出來ますから、其間だけ良人が御取持して居て下さい』と申しことで御座います。



▲坊ちやん御孃さんの稱呼

男の子は尚更贅澤にしてはならぬ、獨立心を養はなければならぬと、嚴重に主人が申ますので、下女達にも坊ちやんとか御孃さんとか呼ばせずに、名前を呼ばせることに定めてあります、御入來の方々が坊ちやん御孃さんと仰しやつて下さると、何卒それだけは御免

變りますと申上げて置きますので、此頃は漸く名前を呼んで下さるやうになりました。

▲御召使

若い女が六人で御客の御通ひやら子供の世話やら、縫物、靴襪の繕ひなどの雜用を致すので、外に御飯焚が一人と、子守の婆やが居ります。私の母が『他の事は節儉しても、小さい子の守だけは少し年を取つた者を置くが宜い、大きな子供に老人を附けると因循に傾いて惡いに違ひないが、幼い子の怪我なぞは若い守に多いやうだから……』と申しましたので、子守は經驗のある老人を使ひます。唯今居る五十六歳の守婆は、十三年ばかりも勤めて居りますので、私が高い下駄を履いては危いからと申附けますが、却々壯健で善く働いて居ります。

▲旅行と散歩

私の身體には旅行が適當して居ると見えまして、葉山へ參る汽車の中から工合が善くなるのが判る位で御座います。一月と春の學校休暇と暑中休暇との三度は必ず彼地へ參りますが、子供達は海で遊んだり運動場でテンスなど致したりして樂みます。主人は御客様と葉山から箱根へ參つても、一晩泊り位で直ぐに歸つて參り、如何も彼様いふ處はゴタ〳〵して寐心地が惡い、イクラ穢くても我家が宜いと申して居ります。私なぞも偶には異つた土地へ參つて見たらと存じますが、小供を多勢連れて宿屋へ泊り込むのは實に厭ですから、矢張り氣樂に葉山で遊ぶ方が宜いと云ふ氣になつて可けません、郊外の散歩で御座いますか、それは皆大好きで、時々家内中揃つて王子とか龜井戸とかへ電車や汽車で出掛けるのを何よりの樂みと致しますが、主人は不時の用向でよく差支のある身體ですから、一緒に參り得ぬ事もあります。主人は極構はぬ方なので、月のよい夏の宵などは、浴衣に兵兒帶で、これから其處ら散歩しやうなど申し、私や子供を連れて歩き廻るとが御坐います。

▲晩餐の快樂

晩食には全家揃はなければ寂しいと、主人が申しま

すので、主人の歸りの遲い時には、子供達に牛乳でも遣はして空腹を耐えさせ、成るべく一緒に食卓に向ふやうに致させます。餘り多勢だものですから、人樣が入らつしつて『御客樣ですか』なぞと仰しやるとがありますす食後には子供を相手に種々な事して遊びますので、隨分賑かで御坐います。

▲能、演劇、小説

主人は何を致しても不器用で御坐いますが、謠だけは好きで凝ります故か、如何やら眞似事らぐゐ出來相だと皆さんが仰しやいます。私なぞも謠を聞きつけて居りますから、如何も芝居よりは能の方が面白う御坐いますので、能へは家内中必ず揃つて參る事に致してあります。芝居は子



供の小さいうちは見せませんが、緣付けました娘や次の娘位になれば、筋の善い狂言の折だけ見せますし、地方の礦山の方が御夫婦で御出京の時なぞ、奥さんの御取持に芝居の必要な場合がありますが、私が何か差支への際は娘に御伴致させます。ハイ主人でも團十郎の居つた頃は、春日の局だとか、勸進帳だとか、好い幕だけチヨツト見物して直ぐ歸つて參りました。小説も格別害のない物は大きい娘にだけ見せますのです。最早大抵分別も附きましたから、少し位見せても宜しからうと存じまして……。

▲來客の遊びは家の内

可なり御客の多い家で御坐いますのに、主人では外

で遊ぶのが嫌ひですから、大抵御客様と家で遊びます。それで少し御大層のやうですが、玉突臺も備へ付けて御坐いまして、これを成さる方もあり、此方の方では碁を御圍みなさる、又謡が始まると云ふ風で、随分面白う御坐います事、私共では皆不調法者ばかりですけれど、家中揃つて御客様と遊び、御互様に他所の遊びは致さぬ事に定めて置きます。

▲宿泊兵士

御覧の通り、軍人の御宿を致して居りますので、いとゞ手狭の家が倘更ゴタ〳〵致して居ります。此度は○○聯隊の補充兵で二十人程で御坐いますが、昨年の二月には御宿を仰せ付からなかつたものですから、子供等が大不平で、十四になる男子などは『何故我家が漏れたのか、役所へ行つて聞いて來い！』と申して腹を立てました。其次は十二の娘は、小さい時から男子と間違へられた程で、洋刀だの鐵砲だのばかり玩具に致して居ました位ですから、昨年の暮御宿を仰せ付かつた際は、本當に大喜びで御坐いました。昨年の暮から本年の春へ掛けて五十日程泊られたので、全然御懇意に爲り、出發の際には『拙者共家族の者とは已に覺悟して別れたが、今度は御宅を離れるのが辛いなぞと仰しやいました。中には實に氣の毒なのが御坐いまして、一人の兵士が『拙者の兄は既に戰死した上に拙者が召されたので、一人の母は逆上せて聾になつて了ひました』と雇婆に話したさうです。又日本橋區の植木屋で子供が四人もあるのが、出征したのですが、後の困難は想ひ遣られます。斯う云ふ次第ですから、私共では軍人をスゴ〳〵立たせてはならぬと存じ、御近所の方にも門へ集つて頂き萬歳を唱へて勢よく御立たせ申したのですが、後で聞けば其植木屋の妻女が子供を背負つて門の脇に佇んで居たとの事、嗚呼それと知つたら早くから宅へ呼び入れたものを實に氣の毒な事をしたと存じます。又一人の兵士の妻女が田舎から子供を連れて出て參つたのを一晩泊めましたが、子供を連れて人の家に泊るのは何樣に心苦しい事であらうと存じ、私は逢つて慰めて遣りましたが、自分も子供も

小奇麗にして居り、日清戰爭に出征の時は、未だ子供もありませんでしたが、今度は三人の子供を抱えて居りますと申した容子、實に其胸の裏が想ひ遣られましたので、是れから戰地からの消息は、御互に知らせ合ふ事にしませうと、其妻女と約束致したので御坐います。

斯く話さるゝ夫人の調子は情熱を增して終に左の通り仰しやいました、

若し貴女方が御聞込になつた軍人の遺族の事で、私などの力に適つたとが御坐いましたら、何卒御知らせ下さいまし、出來るだけは致したいと存じて居りますから。イエ最早御宿を致しますと、尙更御氣の毒なのが判りまして……。



夫人は豫て軍人遺族慰問會に熱心奔走せられ、鄰邸なる片山内匠頭夫人と共に親しく裏長屋などを尋ねらるゝと聞きましたが、滿洲の野に奮戰激鬪せらる兵士の之を聞かれなば、如何樣に嬉しく感ずる事でありませう!。

夫人よし子は舊福岡藩士金子清蔵氏の長女にして今の男爵金子堅太郎氏の妹なり元治元年六月を以て生れ十九歳にして今の三井礦山合名會社專務理事工學博士團琢磨氏に嫁す人と爲り恭謙淡泊才を衒はず富に驕らず子女の衞生に教育に精神を集注し善く家政を治め善く賓客を遇し眞人をして毫も内顧の憂なからしむるを以て家庭藹々として和氣に充さるゝは何人も羨望する所なり

夕立やあまの子袂かぶりゆく　友清禮子

家庭に於けるトルストイ伯

トルストイ伯のヤスナヤポルヤナに於ける家庭的生活は贅澤といふ事は少しも無く何不足ない氣樂なものであつた千八百九十六年には七人の兒女が皆揃つて居つて大抵は家に居つた何れも父トルストイ伯を愛慕する内にも第二番目の娘マリア、ルボヴナ孃は最も熱心なる伯の内弟子である。

家庭の女王たるトルストイ伯爵夫人は余が始めて面會し挨拶の濟むと同時に

「宿人から種々の事をお聞きになりませう中には私共にさへ感服の出來ない事も御座います。

伯爵夫人は交際家で、音樂好で、余の考を以てすれば貴族的生活を熱心に望んで居る假令ば食卓に就いた時でも伯は客と共に食し各自勝手に望むものを食するといふのを好み伯爵夫人も客は好むが必ず白手袋を穿めた給仕人が無ければならぬといふ風である、或日の會食後伯は贅澤といふ事に關して余に語りつゝありしが余は其餘りに辛抱強いのに一驚を喫せざるを得なかつた、伯は不圖

「お見受け申す處で君は隨分煙草を召上るやうだ、余も一時之を喫用したものだが之れは自分の爲に良くないと思考して止めた、余若し再び若返へる事が出來たなら誓つて好んだ通り之れを好み喫用するかも知れぬ」

と言はれた、又余がヤスナヤポルヤナの伯を訪ふ少し前の事であつたが莫斯古の一自轉車屋の主人が其家に來て店に在る自轉車の内でお氣に召したのを何れでも御乘用に撰み取りなさつて下さるやうにと、伯を招待したので、老伯も大層に喜んで、二番娘のマリアを連れて其店を訪ひ上等のヘムベアを一臺撰んで明日宅の方へ送り届けるやうにと吩附けて歸つた。然るに其夜伯が未だ寢床に横になつて眠らずに居る時に忽ち枕許に聲あつて

「レオ、ニコライヴツチ、汝は說教に於て贅澤は有害なりと說くに非ずや、小百姓の斯く艱苦しつゝあるに際して贅澤の生活を爲すは一の罪惡なりといへるに非ずや、然るに汝が明日受取らんとする自轉車は如何之れ贅澤に非ずや、斯く高價なる自轉車に乘りて汝が市中を乘廻すを見て世人は果して如何とか言ふべき小百姓は如何なる事をか言ふべき、汝は速に自轉車店の主人に對して之れを謝絶するを可なりとは信ぜずや。

と伯は翌朝使を自轉車店に送りて再考せるに如何にしても之れ受く可きものに非ざるを以て謝絶する旨を告げたり。

伯は純然たる道士に非ず常食は菜食にして伯は之れを以て滿足せるもテニス遊技場に於てはなかなかの滑稽を盡し夜に入れば將棋を弄ぶを樂む。一夜伯は伯を訪問せる一少年と音樂室に於て二三番の將棋を爲せる後余に對して日頃は左程注意もせざる詩に關して語り出したり。

伯は奏楽所の方形なる床にて人間の所感を言表はす手段に於ける障害に就て説明せり

「詩は斯様な風に行く

と語りつゝ曲りくれつて方形の床を斜懸けに行き又

「散文は斯うだ

と眞直に引返して坐に返つた。

「著作家が何か其所作を世に公にせんとする時には其文最も平易に、其最も明晰然も直截法を用ゐるを最良法とすべし、詩は往々にして斯道の大家と稱せらるゝ人人の作中にも其意の明亮を缺く事あり散文は之れに反して讀者は著者の世人に知らしめんとして力を入れたる特所を直に理會するを得るなりと

或日の午後余は伯と共に散策しつゝありし時伯は露西亞に於ける社會及經濟に關する意見を語れり此時露國は比較的平穏にして勿論戰爭などありしに非ず兎に角伯は厭世家の如き口調にて

「如何なる國なりとも人類の痛苦を冷笑し心靈上又は道德上の原動力たる國民多數の意嚮を無視して進歩し繁榮する例あるなし余は吾露國の爲めに悲み皇帝の爲めに悲み又自家の犯しつゝ過失を自覺せずして世に處する露國民の爲めに悲む、他日革新の生ずべきは疑ふ可らざる處にして、吾全能なる神は決して無辜の民を見殺にし給はず。と



翌日余は伯の所有地の外郭なる一村にまでマリア、ソルヴチブナと共に行きたり。千八百九十六年頃にはマリアは此村の爲め村醫者及其他一般の卑しき職務を厭はずに働きつゝあり。

此村は低き小舍の屋根のそろつた汚い街路で其間に村の貴族の二軒の煉瓦住居家屋がある丈けで之れが全中央露西亞の百姓家の模範であるとマリアは語つた

此汚れた、穢い、粗造なる家屋に關して記載すれば冗長に渉るの恐がある唯露西亞以外には今まで斯る田舍の陋巷を見た事が無いと言つて置けば澤山である、子供は糞土の堆積せる上に吊られた日蔭の籃の内に眠り豚及鷄は人の棲息せる部屋内をノサ／＼と横行して居る

他愛主義のトルストイ伯は斯る田舍家に起臥せる經驗もあるべく又衛

生的改良事業に就て出金する事をも爲し得可きに彼は之れを爲さず其費用を小百姓に撒散らし尚伯の家族をして彼等の内に立交りて生活せしめんとする事に盡力せり若し伯爵夫人適切なる内助が無かつたならば伯は必ず失策を遣つたかも知れないと云ふ。

余は此意見を以てマリアに余の所見に同意を表し得るや否やを質せしにマリアは乃父を飽迄も拜擧し父の言ふ處總て正しからざる無しと信じて之れに同意せずマリアは財産の分配を受くる事を自ら謝絶したり余は或日の午后マリアと共に秣草刈をした、共に草を刈つて居る小百姓の女の内には跛、盲、及慢性病者もあつた。總ての小百姓は伯爵夫人の爲め毎年或程度迄の仕事をするマリアも秣草刈時になると屢々中人足の百姓女の中に交りて彼等の爲めに五十錢を儲けて遣る其金はといふと勿論其實主なる母伯爵夫人の懐から持出しとなるのだ。

伯自身は老い衰ひて如此勞力に服するを得ざれどマリナは確に斯くして其教義を實踐しつゝある事の信念を持つて働いて居る。炎暑の時はマリアは朝六時に飛起き忙はしく朝飯を喫し草刈と共に黒パンを晝食として分ち夕も遲くまで家に歸らざる事が多い伯爵夫人はマリアの他愛説を喜ばぬ樣である然るに伯は不斷他の子供等よりはマリアを幾分可愛く思つて居るやうに見ゆる余の草刈の際實驗したる處に依ればマリナは極めて温和柔順なる性格の婦人である云云（ウナベンメイムスの寄書）

男女の交際

K　T　生

▲我が日本では昔から、支那倫理の影響を受けて、「男女七歳にして席を同じうせず」などゝ男女の禮を八釜しく言はれ、「女大學」や、「今川」の樣な、兎角むづかしい○○○○○○書籍が、德川時代に於て盛んに行はれた結果、今日と雖も男女の間は甚だ窮窟で兩性交際の道は容易に開けないのみか、十歳前後の頑是無い小供等に有つてさへ、女の兒と遊んでるのを其友達に發見されると、翌日の戰爭ごつこの時には「健ちやんは白粉臭くつて威勢が無いや」と直ぐに一本頂戴すると云ふ樣な始末である。

▲一體道德問題は根本から論ぜればなるまいが、然うかと言つて、元來人間社會に男女といふ兩性の區別無き物の如く、爾く異性平等に交際する方が當然で有るとは、中々斷定の出來る譯の物では無いと思ふ、けれども日本現今の風習の如く、男女兩性の間に、是れ程の非道い隔てを置かなくとも善いので有るから、もう少し（寧ろ大いに）兩性交際の道を開いて接近せしめたいと云ふ事は、獨り我等のみならず、識者の等しく希望する所である。

▲曾て華嚴の瀧に投身した青年の事に就いて、姉崎博士が論ぜられた中にも、日本現時の社會組織が不完全で有る事を說き、男女交際の道の開けざるを其一因に數へられたかと記臆して居るが、實際現

今の社會組織は不完全な點甚だ多く、就中男女の間を甚く隔てしめて、殆んど交際の機會を與へぬのは、不完全の最も著しい物で有る、實に之が爲めに來す弊害は少からざるのみか、我人共に不便不自由を感じ面白かるべき人生を乾燥ならしむるのは甚だ遺憾な次第で有る。故に余は是より如何して男女交際の道を開く可きか如何なる手段と、如何なる方法とに依つたら、危險無くして好果を得らる可きかを言つて見やうと思ふ。

▲去る四月中、丁酉倫理會の中島德藏氏等が發起と成つて、男女交際會の第一回を開かれた。其時多數の男女が集つた迄は善かつたが、どうも、女は女ばかりで一方へ寄つて了ひ、男も男ばかり他の一方に集つて話をして居るといふ有様で、折角双方一堂に集つて居ながら互に隔てが在て、別つ子で、會食の時にも、御夫婦差向ひに席を取つたら善からうと云ふので有つたが夫も殆んど實行されずに、各自勝手な席に著き、勝手な人（女は女男は男）と多少の談話を交へた後、散會した相であるが、最初の目的は愚、寧ろ滑稽に終りましたと、出席者たりし一婦人は話されたが、地位有り、學識有る、此方々の企でさへ、是ですもの夫れより以下の若い者や廿歳前後の學生なんどが、男女交際など丶云つて騒いで歩いた所が容易行はれ得べき物では無い。取り分け未婚で有り、青年でも有り學生で有るから、最も愼重の態度を取らなければ、直に間違が起りたがり、夏の日の牛乳よりも腐れ易くて危險で有る。



▲此頃の婦人雜誌の中には、恰も男女交際の機關なるかの如く此方の鼓吹に努める物も有る樣なれど、餘程氣を附けぬと飛でもない事になる。其でなくてさへ、風評の立ちたがる今時の女學生などが、單獨で、此交際を目的で出掛けやうものなら、夫こそ薄氷を踏むより危ない話で、寧ろ男女交際など云ふ事は、始めから禁じた方が善いので有る。

▲此所に恁云ふ話が有る、其大要を分り易くかい摘んで見れば、法律修業の志にて、さる辨護士の宅に書生せし男の、小説なんど文學書類をのみ愛讀しつゝ飲む程に醉ふ程に何時の間にか四

季の衣類三行李の大半を曲げて了ひ、圖書館へとは他の前ばかり、本郷牛込邊の下宿に同氣相求むる友を訪れて、文士の人物評新刊評、美術評の怪しきを迄吐き散らして、果ては物爭ひに別る〻事さへ有りしが、此男、主人の令孃がゴルキーの譯物を其妹と侍女とに讀み聞かせ居たりし室へ、何時に無き新しき脊廣着て入り來り、近頃面白き事の侍る、女學生の君達が中に異性交際と附けたる名は殺風景なれど、赤門、早稻田さては神田の法學生にまで聊かの、ゆかり求めて交はり給ふ方あり、男方は之を女友と名づけて、異性の友の七人も持てば、運動部の選手よりも巾が利くなり。就てはお孃樣が男女交際に關しての御意見有らば承はりたしと云ふ、令孃は、笑み玉ひ、妾には生憎さる物無し、さは云へ男女の交際は大贊成なり、されど尋常にては面白からず、妾が願ひは公侯伯さては其に相當する富家の姫達が月に一度は東道と成りて然るべき會塲に會し、當時の詩人、畫師、學者なんどの粹を招じ集めて、堂に餘る花の香、衣の香、善き煙や、甘き酒、樂の音、舞踏のぞめきに浮かれ興ずるは面白かるべし、特に善き集出せし詩人、傑作ある畫師、發明有る博士には、此宴の内にて女王と仰がるる姫の手づから、黄金白銀の花環かづけらる〻を、世に無上の譽とせんと、戯交りに説けば、男卓を叩いて、嬉がる

▲之は繪そらごとと書く小説家の手すさびなれば、元より僞りなるべしよしや半分の事實ありとしても、墮落女學生と墮落法學生との間の出來事なれば、一般に斯る厭ふ可く悲むべき病的分子を含有してゐるものとは思へない。

▲若し之が眞の事實としたなら、學業は云ふ迄も無く失敗に歸して、其一生を誤る事火を見るよりも明らかで有る、自身の失敗は自業自得とあきらめも出來ようが、如何に親泣かせ至極では有るまいか、こんなあぶなつかしい男女交際は、眞平御免を蒙らないと、後後の子や孫迄飛んだ迷惑をせればならぬ事になる。

▲然らば如何にして兩性交際の道を開くべきか、我等の考ふる所では最初の内は家庭と云ふ物を基礎として、或る朝は甲の家庭を訪問し或る夕は乙の家庭が親子四人に親族を加へて各々手を引連乙丙の家庭を訪問すると云ふ風にしたならば、監督者たる父兄も保護すべき幼弟妹も打ち交へた集會である故、至極安全で、青春の男女が向ひ合つて或はピアノ、オルガンも善からう、室内ピンポンも惡くは無からう、又は庭園へ出てテニスも善かろうし、綠蔭の長椅子でヴァ井オリンも面白からう、更に父兄の前で言ひ得る程度の議論ならば、愛の神聖を説くも惡くは有るまいし、半解の美論も、我儘な倫理觀も、又決して少しの障害も無いのである。

▲斯くの如く兩家族の男女が團隊的に入り交じりて、親しく語り合ひ、或は輕く歌ひなどするは、如何にも趣味多くして樂しかるべきぞ、又た如何に安全にして平和なるべきぞ。願はくは斯る邊より男女交際の道を開いて、徐々に歩を進めたら、流れに逆ふが如き事無くして、滿帆の順風、長閑に、速に、目的地に達し得べし。

現代 婦女雜觀

十八世紀の翁

男女交際と品性の破壊

▲交際の舞臺とやらんに乘出して容貌人を魅し、才辯流るゝが如く多くの男子を掌中に翻弄し、社交の花と持囃され、女神と崇めらるゝを以て、女子の天職此處にありと思意せるは、今の女學生輩の理想なるが如し、勿論十人十色而も多數の男子をそらさぬ底の技能を發揮せんには、一個の卓れたる女丈夫にあらざれば爲し難きところ、女流として慥に一代の譽れと見るも不可なかるべけれど、此に矛盾とも云ふべきは、その家庭に在るや舅姑を袖にして同棲を嫌ひ、唯に圓熟に奉仕する能はざるのみならず、甚しきは衝突を來して家庭に時ならぬ風波を惹起すヿ是れなり、舅姑は云ふ迄もなく良人の父母にして己が第二の親なり、我が邦古來の女子訓より云はゞ、生みの父母は假の親にして、舅姑こそ眞の親なりと誡めたるに非ずや、而して縱令舅姑如何に頑迷なるも、朝夕親しく奉養するに當て其性情も知悉せらるべく、これが操縱否な機嫌を取る如きは朝食前のヿならざる可からず、然るに僅かこの舅姑二人の機嫌すら取る能はざる無能者、否な誠意なくして、社會萬人の心を攬らんとは滑稽とや云はん、越權とや云はん、先づ女丈夫たる心掛よりは家庭の良婦たるべき修業ありたきものなり。

▲婦人としての風采擧動は何處までも優婉淑德ならざる可からず『所謂一抱へあれど柳は柳かな』ならざるべからず、然るに現時の女學生を見よ、如何にも怪げなる束髮を落々と亂し、袴しだらなく穿ち、衆人の前をも憚りなく横行濶歩し、喋々喃々その言語の亂雜野卑なる、心あるものをして嘔吐を催さしむ、斯く女子の謹愼を欠き又羞恥の態なきは、男子の粗暴なるよりも一層見るに勝へざるものあり。

▲『椋子も三年』色黒き女子も常によく注意して洗ひ磨かば、皮膚のきめ濃やかになりて、偶々化粧を施すに當りても白粉のよく落付きて見晴へあるものなり、然る

に今時の女子は毎朝一時間も要して歯を磨く癖はあれども、その洗面は恰も猫の手水を使ふと一般そゝつかしき云はん方なし然ば折角石鹸よ化粧水よと撰擇して高價のものを需むるに係らず、粉ふき柿の如く冬瓜の如く白粉の浮立ちて落着かぬも理なり、抑も臙脂、白粉を附くるは亦女らしき身だしなみ、確に婦人日課の一にして、その厚化粧、薄化粧は其人の形に由るとなれば能く注意して世の物笑ひとならざらんことを要す、素顔を良人に見せざるは夫人の愼みなることは、今も猶ほ古の如し。

▲近頃女學生の一部に腰以上を絹物にて作り下部を木綿にて作りある衣服が流行し來れりとて、口善惡なき京童は、品行も之に類して表面ばかりを繕ひ、頭はハイカラ束髪、胴は絹物、尻尾は木綿、その鳴く聲アラヨクッテヨと冷罵せり、乍併修飾は女子の天性なり吾人は寧ろこの新案仕立に賛成を表せんとするものなり、ゲーテーも云はずや、婦人の多くは如何なる不幸に在ても苟も本心に立歸るときは帽、衣裳、腕環、紐等の念、忽ちその小さき腦髓を埋め來ると、況して不幸ならざるに於てをや、その如何にせば容姿の他より劣らざるべきかと、注意を拂へる結果なれば吾はむしろ彼の女學生等を諒とす、

▲婦人の裝飾品として、時計、金縁眼鏡、指環ほどきざなるはなし、之に反して髪飾の櫛、笄、根掛、簪など高貴なる品を擇べるは、奥ゆかしく見へて嬉し。

▲日本人にして日本服を正格に着用し得ざるものは、今時の女學生及び女學生上りの婦人に多し、學校通ひや外出の折は細き帶を巻付け其上より袴を着するとなれば、それは先づ宜しとするも、家に在りても狹き帶をだらしなく纒ひ、苦見しくも大なる臀部を顯して無作法に居すまふが常なり、而して偶々客あれば周章して羽織を被りて當座を繕ふ、されば學校などにてたゞ活潑々々とて袂あるを厭ひ筒袖を歡迎しつゝあるに係らず、家にあればゾロリ〳〵と長羽織を着流し、宛然是れ半病人の如し、若し日本服より帶を奪はゞ日本服の美は一半以上消失したるものにして不調和不格好こ

れより甚だしきはなし、斯く日常不作法の着用を爲せるを以て偶々盛裝することあるも恰も借着せしが如くしまりなく見えて、その品位を損すること多し、思はざる可からず。

▲下谷山伏町の尋常小學校卒業生に將來の目的を尋ねたれば、男生は多く大工の職工たらんことを希望し、多數の女子は女髪結を、其他は小間使、看護婦たることを望みたりとて、痛く家庭敎育の及ぼす影響を歎せるものあり、下谷山伏町と云へば細民の住居せるが多し、さればその子弟としては至當なる所望と云ふべきなれ、何をか憂ふべき、少し學問でもすれば直樣身分も地位も忘却して、田五作の娘も八兵衛の妹も大學者、高等官の夫人たらんとの野心を起すが、現時女子の癖なるに、下谷學校の卒業者が質實なる希望に止まりしは、敎師其人物も思ひ遣られて床し。

▲町家の娘が百姓に嫁して鋤鍬取て野良仕事をなす能ざるが如く、農家の娘が商人に嫁して店頭客に對して折衝するも苦しき業なり、令孃育ちの姫樣が職人の姉御となり難きと同じく、職人の娘が奥樣となりては勤まらぬものぞかし、實に『釣合ぬは不縁のもと』町家は町家、百姓は百姓、夫れ〴〵似合しき縁組をなすが、双方の幸福なるべし、然るに今の學校敎育なるものは一切無秩序、車夫の娘も蝦夷茶式部に靴はき裝、華族の令孃と同じ級に何子さんと交際す、此に於て勞働者の娘も、町人、百姓、職人の女も、あねご、山の神、〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇〇、おかみさん、御寮人、おいへさん、御新造たる能はざらしむ、その結果や『婦人たるものは寧ろ地位を下すも德義を下すこと勿れ、馬丁の正妻は公侯の權妻よりも貴し』てふことは、女子修身箇條より取除かれて、公侯の權妻は馬丁の正妻よりも貴き現實となる。

▲現時女子の無秩序、無差別は流行の廂髪にても知らるべし、見よ十三四歳の少女より五十の老婦に至るまで女學生も、炊爨婦も、令孃も、奥樣も、お部屋樣も、權妻も、醜業婦も皆一樣に歡迎しつゝあるに非ずや、縱令リボンやピンの飾りにて多少老幼の區別ありと雖も、炊爨婦も令孃の如く、令孃もおさんの如く、女學

生も醜業婦の如く、醜業婦も女學生の如く又令孃の如く、嫁女も處女の如く、老婦も新婦の如く、新婦も處女の如く、老女の如し、母子なほ姉妹の如く、下婢令孃朋友の如し、而して曰く是れ經濟的重寶なる結髪なるが故なりと。

▲頭髪は婦人美の隨一なり又婦人の道德なり、されば若し誤て車より墮さるゝか、或は何かのはづみにて顚倒する場合あらんか最初に頭へ手を揚け、次に裙を顧みるが婦人の倣ひにて、何人も實見せし所ならん、實に頭髪の亂れてしだらなきは婦人の耻辱にして、鬆亂れ髪を良人に見せざるは、古來我が婦人のたしなみなりき、若き、老ひたる、丸顔、面長、それ〲似合しく髪を結びて一段の美は顯はるゝなり、如何に經濟なればとて、斯る天與の飾を放擲し去れるは感服し難き流行と云ふべし、廂髪の流行は取も直さず我婦人界の混沌たる表彰と知らずや。

▲日本婦人の歯は多く良好ならずして亂杭の如し、西洋婦人の如く皓歯珠を聯ぬる如きは絶てあるなし、剩へ粗製なる磨粉を使用して毎朝磨擦し去るを以て、中年の婦人にして早く既に完歯を有せるものは絶無と云ふも不可なからん、長與胃腸病院最近一箇年間の入院婦人患者は四百五十一人にして年齢別は次の如し 五年未滿五人、五年以上十五年未滿二十五人、十五年以上二十五年未滿百五人、二十五年以上四十年未滿百五十二人、四十年以上六十年未滿百三十一人、六十年以上三十四人 而して其病源は歯の不良より來れるもの多しと、されば歯牙の衛生上より吾人は古來我が風習なりし涅歯を研究するの價値あるを認むるものなり。

▲皓歯は西洋婦人の誇りとせる所、西洋美人の撮影に歯を露したるは敢て珍らしからず、之に反して我が婦人の口を開けたる何となくしまりなく見えて惡るし、古來口をつぐむを婦人のたしなみと爲したる故なるが如し、如何にも色黑き婦人が大なる口より不揃なる而も黄色なせる歯をむき出しては殺風景の極みなるが、小さき口の奥に黑水晶の如き歯が包まれてあらんには如何に愛らしかるべき、殊に鐵漿を含まば歯根締りて蟲歯などの患ひ鮮く、歯の衛生にも適すべければ、我が婦人は涅歯の禮を再興ありたきものなり。

▲涅齒と共に廢れたるは婦人の眉毛を剃ることなり、是れ亦文明國人に見ざる所にして自然廢絶に歸したるが如し、吾人は婦人美と云ふ上より一考を要請する次第なり、婦人眉毛の有無は男子鬚髯の有無と異る、男子にして髯を蓄ふるも可、又蓄へざるも不可なし、されば婦人の四十五十にして尙眉毛の存置しある、色既に退せて玉顏無數の大波小皺打寄するに當りて、毛蟲の如き蓬々たる眉毛の生寒げる、一段の愴相を呈して、老婦人の溫容をして爲に抹殺せらるゝの憾あり。

▲文身は我が國に在ては刑法の禁ずる處なれど、是れ亦人體修飾の一手段なり、我が文身師が一たび海外に遊ぶや、到る所歡迎せられ巨萬の富を得たりと云ふ、由來歐米の風習たる女子の皮膚を人に見らるゝを無上の恥辱とせるを以て、畫工すら裸體美人のモデルを得るに究せる現狀なるに係らず、我が文身師は有らゆる貴夫人の玉肌に遠慮なく彫技を揮ひき、文明國婦人に斯る嗜好あるはもと其好奇の餘りに出と雖も、啻に野蠻の遺風とのみ排し去るべきにあらず、文身尙ほ斯の如しとせば、涅齒剃眉敢て耻とするを要せんや。

▲女子は氏なくして玉の輿と云ふ、されど素と是れ稀有の事に屬す、如何に美人なりとて悉くさる幸あるにあらず、偶々歌妓などの上流士人に落籍せられて側室權妾たるの謂なり、されば嫁入仕度が五荷、七荷、十荷、二十荷と、その拵えの簞笥、長持の調度相應、財產あり、地位ある所へ緣付が普通と知るべし、然るに世には敎育を非常に珍重がり、敎育さへあらば裸百貫で嫁入口はぶらついて居るやうに思ふなり、想ふに是れまさかの時には女子相當の職業に有り付き得て、以て一廉の力となる強みありとの意なるが如しと雖も、是れ大なる僻事ぞかし、先頃三越吳服店裁縫部に婦人を採用せんと欲して、主任加藤某は女學校卒業の志望者を試驗せしが、一人として合格者なき爲め同氏は自ら講習を開きて女工を養成するに至れりと、女子に必要必須なる裁縫にして如上のごとしとせば、女學校仕入の內容知るべき也、學校裁縫とて世人は之を輕蔑し實用に適せぬものゝ通語となりつゝあるにあらずや。

▲今回田舍より出でゝ某女學校を卒業したる女流が、都下に於て地位ある紳士と結婚せんと希望し、某女學校長に其媒介を賴みたり、主張に曰く、自分が東京にて良緣を得たりと聞かば、鄕里の女子は續々出京して都下の學校に入るべく、換言せば自分が良緣を得ると否とは、鄕里の女子敎育發展に大なる關係を有せりと、女學校長が果して斡旋の勞を採りつゝあるや否やを知らずと雖も、學校營業に拔目なき現時の敎育家ならば、多數の女學生を吸收する方便として桂庵たらずとも限らず、爰には交際費とやらに多額の調度を要するとて家鄕の父兄に書を致し、本校は賢母良妻以上を養成す妾の爲に田地の二町や三町賣飛ばしても苦しかるまじと、云ひ遣りしと聞く、その賢母良妻を養成するは高等女學校以下のとなりと云ふ、嫁入道具としては、一葉の卒業證書は長持簞笥以上の價値ありとも信せざれは、敎育を賢母良妻位に措きて、より以上の敎育費を以て簞笥長持の調度に充てんには、小六ケ敷理窟を並べ立てゝ叫ぶまでもなく、相當の嫁入先きは容易に見付らるべく思はるゝなり、後の最高等敎育を受けんとする女子は考一考すべし、

▲女子の知惠の淺墓なるはさることながら、女學雜誌の懸題に二三回當撰すれば、直に文學は己が天才なりと許し、若し夫れ懸賞小說に及第して受賞の吹聽に與からんか、天晴れ自稱文學者となりすまし、紫式部何物ぞ、淸少納言何物ぞと、斯くて女流文學者は雨後の筍の如く叢生し、今や滔々北廓三千の美妓よりも多し、曩に日露の間端なく干戈相見ゆるに至り、兵士に召し出されし我が帝國男子は無慮一百萬、玆に絕大の勳業を建て我が男性は世界の感稱を博しつゝあるに際し、我が女流文學の畏くも　聖上の叡感に與りしは彼の『つはものにめし出されしわがせこはいつこの山に年むかふらむ』と詠進せし甲州の僻陬なる大須賀まつえ女ありしのみ、女流文學者何の顏色かある、されど常識なき彼等は洒々として『神の子よ星よ菫よわらはいま戀に死すべし淚しながら』てふ調子で、煩悶し怨恨し涕泣し、笑ひつゝあるなり、濟度し難きは憐むべき

斯る巣鴨的天才なる哉。

▲女學生の用語が亂雜卑野に流れつゝあるを見て教育家は曰く、是れ時好に投せんとする淫猥小說などが專ら女學生間に愛讀せらるゝ結果にして、言語の中に英語を交へ漢語を使ふは、畢竟小說家が女學生の用語を寫せしに非ずして、女學生が小說家の筆に左右せらるゝなりと、文學者は曰く、咄是れ今日の女學生を實寫せしに過ぎずと、乃ち女子教育家對小說家の水掛論なり、吾人はその何れが是なるを知らずと雖も、用語の生意氣亂雜なるは事實なり、『人生字を知るは憂患の始』とは、古の志士仁人泣血の音なり、吾人は女學生の字を知るは墮落の始りと謂はんと欲す、信念なく、修養なく、制裁なき物質的今日の女子教育が如何に女子を誤りつゝあるかを見よ。

▲日本女學校生徒杉本某女の情死が今更ら女子教育界の問題となり、日本女學校の職員は深く之を悲しめりと、何時もながら近眼先生には呆れざるを得ざるなり、近來の新聞を見ずや、學生の泥棒せし原因は比較的多く女學生にあり、又金看板付の泥棒の妾が女學校に籍を置けるものゝ中にありき何を讀んでも女學生の種ならざるはなし、噫。

▲男女學生の墮落は最早や區々たる道話、拘束にて止むべきにあらず、止むなくんば一案あり、以て聊か彼等の體面を保たしむべきか、聞く西洋に一種の兩性社交機關あり、巍然たる大厦屋、紳士は東門より入り淑女は西口より入る、進み〱て內部に至れば、幾十房の備へありて、而も皆暗黑ならざるはなし、乃ち事了りて門を出で口邊一拭すれば、又もとの如く紳士なり淑女なり、而して房中暗黑なるの故に双方共にその相手の誰なりしかを知らずして過ぐると云ふ、是れなるかな、外用貴女の友販賣者をして此設備をなさしむるを要す、然れども現時の下宿屋或は待合既に其の意を了せりと云はゞ、吾人は遼東の豕なりしを慚愧せんのみ。

割烹と蝦夷茶式部料理

今や割烹は女學校の一課として殆んど課せられざるなき勢なり、此に於て世に蝦夷茶式部料理なるもの出來たり、さて飯事遊びは少女のとなり、妙齢とはいへ最早や人の妻たり母たらんとするものが、好事にも臺所の秩序を破壞して此の飯事遊をなすとはさても世は太平無事の氣樂さよ、端なく歌舞伎に於ける櫻丸の新婦のさまが憶起せられて滑稽なる、請待せらるゝ賓客の迷惑さよりも炊爨婦の迷惑を思ひ遣らるゝぞかし、

▲實驗牛乳料理なるものを見る、書くものは臆面なく能くも書きたり、見るものも能く讀みたるや否や、天麩羅の温飩粉を牛乳にて溶く、味噌汁の味噌を牛乳にて仕立つ、煮骨董の豆腐を牛乳にて煮かへす、あんかけの葛粉を牛乳にて溶く、椀盛に湯せんした牛乳を掛ける、素麵の掛汁に牛乳を加へたるものが乳麵、蕃蕷に牛乳を摺り混せたるものが新とろろ、牛乳にて大根を煮る是れ牛乳の大根料理、牛乳にて蓮を煮る、筍を煮る、牛蒡、蕗、章魚、蝦夷を煮る、斯くて百幾十種の牛乳料理なるもの實驗せられたりと、恰も鰹節の煮出しにて大根、蓮、牛蒡を煮て、是れ鰹節の大根料理、鰹節の蓮料理、鰹節の牛蒡料理と云ふが如し、而も後者はなほ鰹節の爲に美味を添へ得たるは一舌よく之を辨じ得らるゝも、前者は牛乳を加へたる風味の那邊に存せるかは、世のハイカラ煮流も疑問なるが如し、されば喰合の害なき限りは物として共に煮られざるはなかるべく、豈啻に百種二百種のみならんや、幾千通りの牛乳料理は實驗するまでもなく献立らるべし。

▲同じく一枚の鯛、以て鹽燒とせば鹽燒の風味あり、潮煮となさば潮煮の風味あり、味噌漬、刺身、吸物、膾、旨煮、となさば、又味噌漬其の他種々異れる捨て難き風味あり、之を鯛料理とこそ云ふべけれ、鰹節の煮出にて味を付ければとて鰹節料理と云はざるが如く、牛乳を加へて煮たればとて牛乳料理とは云ふべからざるなり。

▲東京料理は沒趣味なり、醬油と味醂……砂糖………密との味なり、野田の醬油と流山の味醂との味なり、鰻のかばやきも流山の味醂を遣ふが故に稱美せられ、

鮪の刺身も野田醤油なればこそ持て囃さるゝぞかし、見よ福神漬は東京の名物ならずや、富貴豆、佃煮は東京の名物ならずや。

▲昔三好氏滅亡してその料理番なりし坪内某が、織田信長に仕を求むるや、最初特に第一等の食膳を進めたりき、然るに信長一喫箸を投じ水臭く喰ふに勝へずとして直に退けしめたり、依て坪内氏は更に第三等の調理を進めたれば、信長毎品陀食して措かず、即日知行を與へて召抱へたり、時に坪内氏は退て獨語して曰く、第一等の調理、君には以て淡泊無味とせられ、反て第三等の品を以て口に適ふとせらる、思ふに三好氏は五世幕府に仕へて天下の和羹を助く、故に特に第一等の風味を要したりしものか、人として飲食せざるはなし而もその能く味を知れるは鮮しと、抑も料理は其味を知るが第一肝要なり、濃淡甘辛の鹽梅は之に依て調和せらるゝものなれば、それ〳〵原料特殊の味をも辨へずして料理するとは沙汰の限りなり。

▲珍味を嬉しがるは偶々のとなればなり、日常副食物として食膳に上るは、その原料限りあるが故に各〳〵その天然の風味を遺憾なく發揮して厭かしめざるは庖厨の能事と知るべし、されば割烹法は學校にて授くべきものに非ずして、時々自ら臺所に出でゝ實習すべきものなり、料理の教場は自家の庖厨なり、献立の如きは一冊の案内記あらば澤山ぞかし、而してその稽古の順序は先づ一年三百六十五日毎日三度の食膳に一度も廢すべからざる飯の炊方より試むるを要す、玆にその炊事の秘訣を傳授し置くべし、『およしの飯の炊きやうは、始めチョロ〳〵中かパンパ、ヂャ〳〵時に下ひいて赤子が泣くとも蓋取るナ』以て能く〳〵味ふべき事なり。

▲さて來客の時は専門の料理人を雇ひて托するがよし、不束なる手の中を見られて笑を後日に殘すは愚の極ならずや、折角招待したる賓客へ粗末なる膳羞を供して、隔意なき待遇と心得違へて濟し居るも無禮なれば、又二三習ひ覺えたる如何敷料理を出して得意がるも陋し、尤も日常往來して偶々時凌ぎに家内と等しく

有合のものを供するは、此限りにあらず、殊に斯る隔てなき誠意は、饗應するものより饗應せらるゝものが一段と嬉しきものなり。

女子の体育と衛生

教育界の先進寺田勇吉氏はいへり日本の女子は体育の必要を無視せり、不健全の表徵たる顔の青白きを自慢し以て美人と思意せる如き、是れ亡國的傾向にあらずや、日本人の体格が年々惡しくなれるは統計の示す所にして、即ち徵兵檢査に當れる壯丁の身長が年々二寸宛低くなれり、是れ女子の不健全なるが大原因ならん、之に反して西洋婦人の体格は實に立派なるものなり、而して其力あるとは驚く計りにて。伯林留學の當時下宿屋主婦に握手せられたる痛みは、今に至るも尚ほ忘る、能はざる程なりしと。

▲体育の必要なるは敢て女子に限らんや、男女とも徑庭あるべからず、然るに氏が特に擧げて女子にその弊を嫁せるは寃にして寧ろ婦人を侮辱したるの言議なり、徵兵壯丁の身長低くなりたりと云へるは、軍備擴張が大なる原因にして、即ち多數の壯丁を更に多く要するに至れるを以て、勢ひ身長の低きをも併せ徵するに至りたればなり、体育の必要はより多く男子に於て認めざるべからず、論より證據夫子自らは何如、如何に獨逸婦人が頑丈なればとて、堂々たる靑年學生たりし氏にして握手の痛みに堪へざりしとは沙汰の限りならずや、吾人は却て氏が羸弱なりしに呆れざるを得ざるなり、試に思へ斯る男子を配とし以て生殖したる兒女の体格良好ならざるとて、直に婦人を咎むるに至ては日本婦人たるものゝ迷惑それ幾許ぞや。

▲美人の標準は女子自らが標示するものなるや、將た男子が評定するものやは暫く措て問はざるも、古來己を愛するものゝ爲に裝ふは女性の倣にして、楚王細腰を愛せば宮中餓死多しと云へるに非ずや、若し男子が靑白きを愛し、孱弱なるを愛し、嬋媚なる容姿を好む間は、女子は到底五大力然たる婦女たる能はざるは無理ならぬぞかし、是れ單に我か邦のみにあらず、西洋

に在ても亦然り、例せば畫家彫刻家の必要欠くべからざるは標本なり、米國の現情を聞くに男子は兎も角、婦人は其膚を人に見らるゝを大なる耻辱とせる慣習なるを以て、貧苦に迫れる社會の外これに應ずるものなし、然るに貧者は烈しく勞働するを以て骨格逞しく四肢肥りたるを以て、艶麗の趣致なくモデルには不適當として之を却け、成るべく中流社會より俄に零落せしものなどを採りて採用しつゝあり、此等は以前の境遇に伴ひて多少体格の纖麗優美に發達したるものあるが故なりと、以て一般の趨勢を卜すべからずや。

▲西洋婦人の細腰と、支那婦人の纏足と、日本婦人の廣帶とは、世界婦人界の三弊とす、而して西洋婦人の運動主義なる力めて屋外に逍遙し、支那婦人の引込主義なる常に室内に蟄居し、日本婦人は時に野外に散策し時に室内に團欒す、即ち西洋婦人と支那婦人との中庸を得たり、而も細腰と纏足とは共に不具たるを免れずと雖も、廣帶の害たる斯く甚しからずして比較的圓滿なる發達は日本婦人に於て之を見る、我が姉妹たるもの意を強ふして可なり。

▲西洋及び支那男子の軀幹長大なるは同一にして、我が日本人の倭少なるは現實の如し、是れ人種的關係に由れるか、風土氣候將た食物住居に因するや、昨今俄に此處に至れるにあらず、年所を經ること既に久し、獨りその婦人を罪すべからざるや明かなり。

▲日本家屋の隙間漏る風は吾人を感冒せしめずして却て皮膚の健康を促進しつゝあるなり、裸体なる蠻族は除外として、世界中恐らくば皮膚の健康なる我が日本人の右に出づる人種はあらざるべし、四國環海鹽分に富める空氣は、四六時中吾人の皮膚を摩擦し擦過して、自然的に健膚法を實行しつゝあるなり。

▲我軍隊の烈寒に堪ふるは、二月中の黒溝台戰及び清河城戰に於て遺憾なく實驗せられたり、此二回の戰闘中は吹雪甚しく寒威凜烈を極めたるに拘らず、黒溝台戰に於ける凍傷者百餘名其内入院者六七名何れも一二週間にして全癒したり、又清河城戰に在ては僅々貳十餘名、而も皆輕傷にして一人の入院者なかりき、然る

に之に反し敵軍には當方面の戰鬪に於て三千以上の凍傷者を出したるもの〻如く、現に淸河城附近に遺棄しありし敵屍中其過半は凍傷し居たるを認知し、又俘虜の中多數の凍傷者を發見したりしと云ふ、露人は常に寒氣に誇れるの民なり、而もその能く寒氣に耐ふる所以は、皮膚の健康なるに非ずしてその氣候酷寒なる以て偶々防寒法の周到せるものありしを知る、之と同時に我が軍の健康が單に被服の完備せるのみに非らざるを知るべきなり。

▲改良か改惡か吾人の知る所にあらざるも、似而非なる朝鮮婦人服、即ち筒袖服が多くの學校女生徒服に採用せられて、爲に長袖能く舞ふなる美趣に富める日本服は弊履の如く捨てられんとす、是れ決して喜ぶべき趨勢にあらざるべし、女子體育てふとは如何に設趣味なるよ、單にその動作の活潑ならんことをのみ願ひて、女子より美觀を殺ぎ、剰へ自然的衛生を塗絶して、不自然なる人意的手段を假りて之を償はんとす、其愚や及ぶべからず。

▲女子の日本服たる、袖の大なる、八ツ口の開きたる、裳裾サラ〱時に脛の露れ易き、爲に世の近眼ハイカラ者は、以て不便とし、不體裁とし、不恰好、不完全、不衛生、不活潑として之を却け、肉袒、襟卷、筒袖、股引、靴足袋を與ふ、而も海水浴式は冷水摩擦を以て僅に皮膚の健康を維持せんとす、何ぞ知らん、日本服の良好なるは啻に女子としての美觀を存せしむるのみならずして、又四六時中間斷なく自然的健膚法を實行しつ〻あるものなるを。

▲醫は自然の臣僕なりと、謂ふ意は病を療するは醫師にあらず又藥餌にもあらず、良醫は適症に適藥を投じて、自然の活動を促進するに外ならず、今回我が軍事衛生の結果が立證して餘りあるなり、從軍米國醫官ルイシーマ氏は書を倫敦モーニングポストに寄せて曰く、日本軍醫の熟練は外國從軍者の一齊に嘆賞する所なり、日本の野戰軍にありては、軍醫の手術を施すとは極めて稀有のことにして、負傷者あれば直に綳帶を施し、其後器械材料等完備して充分なる治療を施し得

る病院に達するまで、決して其繃帶を去らしめざるなり、而して病院に於ても亦概ね手術を施すことなく、唯消毒劑を以て防腐の處置をなすのみにて、その全癒を俟つを常とす、余の知れる米國軍醫界の大家が自然をして治療せしめよ、而して自然は治療する也との箴言を後進に授けたるが、日本の軍醫は此主義を實行しつつあるなりと、以て能ひ得る限り自然的援助に依賴するの功果や、何如に良好なるかを知るべし。

▲近年女子の健康を害ふ多くの原因は、食物の亂雜なるより來れる也、珍らしげに西洋料理〱と稱へて、胃腸の慣れざる濃膩なる肉食を頻に貪るの風生じ、而も爲にその胃腸の調和に異狀を來すや、忽ち雞卵、牛乳、肉汁等の流動食物を矢鱈に攝取せしめて得たりとなす、硬軟齋脆その量を得ざるに、剰へ多量の糖分を用ゐ啻に健全ならざる齒牙をして益これを害ふ、而して顧みれば自然的健康の復舊を謀らずして、單に醫藥に依賴して姑息の治療を爲す、隨て治すれば隨て發る醫院通ひを以て見えとし、名ある醫師の出入するを以て誇りとす、此弊中流以上の家庭に於て殊に夥し。

▲女子の不健康の原因は茲に止まらずして、又生殖器より來れるもの鮮なからず、婦人は賣藥の最良花客にして、聞く殊に生殖器病に關る賣藥の成功せざるはなしと、中將湯の盛况を見よ、貴女の友、噫、貴女の友てふ外用劑の盛况を見よ、青春萠ゆるが如き處女に與ふるに卑猥極る軟文學を以てす、墮落せしめずんば、不自然なる情慾の遂行となる、二六時中物質的敎育に奔命し制裁なく修養なき女學生が、多少の子宮病患者ならざるなき故あるなり。

▲我が中流以上婦人の不健康羸弱なる原因に就て最後に鐵案を下さんか、曰く荒淫是れなり、彼等が常に半病人の如きは房事過度の爲に普通の飲食物すら消化するの胃腸を有せず、軟弱なる子女を蠶の如く蛇の如く放產にして、乳あるも乳せず、舉げて牛の子となしつつあるなり、古來邦人の耻辱としたりし年兒を年々歲々歲分娩して靦然たるに至ては吾人之を何とか云はん。

海水浴の効能

ドクトル　緒方正淸君

追々海水浴に恰好な時期となつて來ましたから私は醫師の立場から見て一寸御參考までお話致しませう。一体この海水浴といふものは我邦でも随分古くから行はれて居たもので、唯昔は別段これを醫學上から割出した治療の目的に使はない、ホンの一種の温浴、即ち淡水温浴に對する別種の潮風呂として用ひたのであつたが、次第に海水の人間に對する効能のあることを知り出して來てからは、各所にこれを設くることゝなり、遂に今日のやうな流行を來しました、流行品に餘り碌なものゝあつた例はありませんが、海水浴の流行などは中々結構で、それを始めたのはわが邦衞生學の鼻祖ともいふべき故長與東齋翁ですから我々は宜しくこの翁に向つて厚くお禮を申さなければなりません。

人間が海水浴をすると何故効能があるか、これはよく患者から質問せらるゝことで、私は常にかやうな質問に會た時は次の如くに答へる、即ち海水は絶ず波動があつて、靜かに動かず止つて居るといふことがないから、恰も機械力同様の作用を以て身體に刺戟を與へる、それが爲に血液の循環を盛にする、それは海濱の空氣は誠に清淨で、市街の汚れた空氣などゝは迚も比較にならない、この清淨な空氣が充滿て居る海濱に、日常の業務を擲つて安逸に一日なり二日なり、保養するのは恰度永の冬の日を薄暗がりの小屋の中に繋がれて居た羊が、夏草の青々として滴るゝやうな廣い涼しい牧場に放たれたやうなもので、前數日又は數十日の苦しい務をこの二日三日で取返すことゝなるのです、それにこの海水浴は或病人を除くの外大概の人間に餘り差支のないもので、それがまた一般普通に能く行はれ易い理由ともなつたのでせう、入浴の時期はわが邦にありましては大概七八九の三ヶ月を最も適當なものとせられておりまするが、もし浴場の設備さへ整頓して居る場所で、殊に多血質の人であれば、六月より以前でも、亦九月より以後でも、決して差支へはありません。

然し並に鳥渡御注意致したいのは、過度の入浴は各種の害を生ずることで、浴後の頭痛内臓の充血、又身體に惡寒を生じて、一種の不快を感ずるのは凡て過度の入浴の爲めであります、それにまた入浴前には決して酒燒酎と言たやうな興奮劑を用ひてはならない、興奮劑を用ひて入浴すると、一時は精神の爽快を覺ゆるけれども、體温を放散することが多いから、浴後に非常な衰弱を覺えます。

又入浴の日數は人に依て一定はしないが、普通三四週間を以て最も適當なものとせられてある、始めて入浴するものは最初攝氏十九度位の温度から、段々下つて行て十七度位の温度のところで、先づ一日に一回、三分間から五分間、最も熟練したものでも長くて十分以上の入浴は如何なる場合にも利がなくて害があります。

一日の中入浴に適した時刻は强壯のもので午前七時前後、午後六七時前後、即ち太陽の將に登らんとするときと、太陽の沒せんとするときで、もし貧血のものだと、海水が暖かになつた午後三四時頃が最も適當であります。

婦人の入浴者で注意すべきことは月經のあるときです、この時期には何うしても入浴をしては不可ない、それに男女に限らず神經系統の餘り銳敏なものは一般に入浴を禁ずるのが例であります、食後直に入浴すること、これは極めて惡いことであつて、今迄にも隨分注意がしてあるにも拘らず、能く到る處に行はれて居るのは歎かはしい次第である、尠くも一時間を經なければ決して入浴は出來ないものである。

これまでの習慣によると餘り重い病人が海水浴をするといふことは耳にしませぬが、病氣次第で病人の入浴は必ずしも不可とは言はれない、肺結核患者などは大抵差支へはないものとしてある、然し餘り熱度の高いものや、身體の疲勞の甚しいもの、又は海水の波動の餘り激しいところなどでは入浴をせない方がよろしい、斯樣な時强て入浴すると、肺に充血を來して不意に喀血を起すやうな事になる。それよりも海水を手拭に浸して身體を拭淨するか、又は潮風呂として入浴する方が勝れる仕方である。

腦病患者これも一向差支はない、この患者は特に風景絕美の濱邊を選ぶと、一方風致上から神經を緩和にする間接の効能があつて至極宜しい。

腺病質の小兒、この患者に海水浴は缺くべからざるものであつて、何うしても入浴せしめなければならない、この病氣は打捨ておくと成長の後大概は結核症の諸病を煩つて夭折する、たとへ死なゝい迄も病毒を子孫に遺傳して飛でもない災害を生ずる素となるから、充分注意して小兒時代に全快さして置ればならぬ、それには海水浴が一等である、又腎臟並びに膀胱患者は病中よりも却て病後の回復期が入浴に適するので、その時期を見る必要があります、心臟病患者は非常な注意をせないと能く遊泳中不意に心臟麻痺で溺死する恐れがある、海水浴は差支へないが成るべく遊泳をせないようにして、淺瀨でボチャ〳〵やるのに限るのです。

皮膚病は病症に依て入浴して可いものと、惡いものとがあるから、必ず醫師に聞糺さなければならぬ、姙婦も亦さうです、婦人科專門の醫師に就て充分の差圖を受けるがよい。

以上の注意を充分に心得て置て偖この夏期に海水浴を行はれたならば、秋冬の候に於て善良の結果を收め得らるでせう、即ち皮膚が强健になるから、冬期火燵に入る樣な惰け心も出ず、隨て感冒に罹る恐れがないから、咳嗽の爲に呼吸器病を患ふることもない、胃は無暗に强くなつて、消化の困難を訴へることがないばかりか、精神は爽快に、頭腦は透明になるに連れて、記臆力は增進する、殊に青年の男女は兎角頭痛を覺え易いものであるが、これもまた海水浴のために全治して跡を斷つことになりませう。

肺結核の豫防

北里醫學博士

誰でも知つて居る通、病氣の中で一番多くの人を一度に惱まし、一度に斃すものは傳染病である、他の病氣であると、少しづゝ徐々に起つて來るので、國家衛生上から考へると、一時に甚だしく猖獗するに及ばないが、傳染病と云ふと急に十分なる豫防法を講じなければ、恐るべき惨害を生ずるのである、殊に未だ公衆衛生の十分に整ふて居ない國では、傳染病は一層恐るべきものである、故に衛生に志ある人は十分傳染病の豫防及撲滅の方法に注意しなければならぬ。

今政府に定めてある傳染病は、虎列剌、赤痢、腸窒扶斯、實扶垤里亞、天然痘、「ペスト」、猩紅熱、發疹窒扶斯の八種であるが、其他にも傳染病は學術の研究の進むに從つて殖えてくる、醫學の進まなかつた時代には、傳染病と云へば何も彼も同じやうに思つて居たのであるが醫學が進んで其病原を研究して見ると、皆それぞれ違ふので、虎列剌の原因は虎列剌を起し、赤痢の原因は赤痢を起すと云ふことが分つて來た、既に其原因が違つて居るのであるから、其豫防法も、撲滅法も亦違はればならぬといふことも分つて來て、一國全體の者が擧つて醫士と相應して豫防法、撲滅法を講じたならば其目的を達し得る事が出來る。

是迄大層むづかしく考へ居た傳染病の豫防法も、人の恐れて居た程手數をかけないでも出來るやうになつたがさて其豫防法の第一の手段はと云ふに、夫は傳染病毒の本體が人の身體にはいるを防ぐのである、たとへば天然痘の流行する時分に、如何に食物に就て注意しても豫防することは出來ぬ、何故ならば、天然痘は口から飲食物と共に人の身體にはいるものでなくて、呼吸器の方からはいるものであるから飲食物に注意しても之を防ぐことは出來ぬ、之に反して虎列剌、赤痢、腸窒扶斯などは、決して他の所からははいらぬ、故に虎列剌や赤痢の病毒の塵埃に混つて居るものを、呼吸器から肺の中へ吸ひ込んでも、傳染するものでない、又身體に傷があつても、其傷から虎列剌や赤痢の病毒はいることもない、虎列剌、赤痢、腸窒扶斯などは、水や飲食に混つて胃の中にはいつて來て、胃の弱い人であると、其黴菌が胃の中でも弱らないで腸にはいるのである、故に虎列剌、赤痢、腸窒扶斯を豫防するには、如何に空氣を淸潔にしてもだめである、是等の空氣の豫防には上水及下水の改良又は食物の注意などが必要である、こんな風に病氣によつて身體にはいる道が違つて居るのである。

醫學上では傳染病の身體にはいる道を三通に分けて居る、第一は消化器、即 口から胃を通つて腸にはいる病氣、第二は呼吸器、即 氣管及肺にはいる病氣、第三身體の何れの部分を問はず、傷のあるところからはいる病氣である、消化器からはいる病氣は、前に擧げた虎列剌、

腸窒扶斯、赤痢の三つが主なるもので、呼吸器からはいるのは、天然痘、實扶垤里亞、肺結核など又、傷からはいるのは破傷風、「ペスト」である、然し「ペスト」は呼吸器からもはいつて、肺「ペスト」を起すことがある。

今日では傳染病の病毒がわかり、且つ人體へは、どこから這入ると云ふこともわかつて居るから、十分に豫防することが出來る、如何なる傳染病でも注意してさへ居れば、豫防の出來ぬものはない、既に其豫防法が研究せられてあれば、「ペスト」、虎列剌が流行して來ても少しも恐るゝことはない、けれども、若し不養生をして病毒のはいるやうにして置けば、直に傳染病に犯されるのである、故に今日吾々は衞生と云ふことを研究しなければならぬ必要が益加はるのである。

凡ての傳染病に就て一々說明することは、到底一時には行かぬから、茲には肺病に就て述べて置かうと思ふ。

俗に一般に肺病と唱へて居るのは、醫士の方で云へば肺結核、即肺癆である、以前は肺病は遺傳病であると思つて居たので、誰某の家は肺病の血統があるなどゝ云つて、其血統には必肺病が起るものと考へて、癩病と同じやうに、肺病の系統といへば避けて結婚もしなかつたものであるが、追々醫學の進んで來るに從つて、肺病(肺病と云つては穩かならねど俗稱に從ふべし)は、決して遺傳染でなくて、一種の傳染病であることが分つて來た、さて醫學上では傳染病は急性と慢性とに區別するので、虎列剌、「ペスト」、赤痢などは急性に起る方、即ち急性傳染病、肺病、癩病などは身体にはいつてから、至極徐々に身体をあらす方、即ち慢性傳染病である。

肺病は何故傳染病であるかと云ふに、夫は肺病を起す一種の細菌があつて、五百倍以上の顯微鏡で見ると、此細菌が肺病患者の痰の中に在ると云ふことがわかる、其細菌のみを取出して、他の動物に植へて見ると、其動物が人間と同じやうに肺病を起す、此事實を獨逸の有名なるコッホ氏が發見してからこのかた、今日に至る迄醫學社會誰あつて之を疑ふものはない、そこで始めて肺病が慢性傳染病であると云ふことを確め得たのである、勿論肺病は傳染病であるまいかと云ふことは、既に耶蘇紀元前に有名なるヒポクラテスと云ふ人も說いて居るのである。

さて肺病はどうして人にうつるかと云ふに、呼吸器からはいつて來るのである、即ち肺病人の吐く痰の中から、結核菌が幾千萬幾億と云ふ程はいつて居て、其痰が少し乾いて塵埃と共に飛ぶと、自然人が之を吸入して肺病に感染する、まづ之が第一の傳染の原因である、虎列剌の病毒などは乾けば直ぐに死ぬるが、結核菌は塵埃と共に飛ぶやうになつても、中中死なないから誠に危險である

結核は啻に肺ばかり犯るものでない、腸及其他の場所にも宿つて夫々病氣を起させる、日本では少ないか、歐米諸國には狼瘡と名け

て皮膚に出來る結核がある、斯の如く、肺ならば肺結核、腸ならば腸結核、皮膚ならば狼瘡と稱へて居るが、其原因はつまり同一の結核菌である。

此恐るべき結核病の爲に死ぬる人數がどの位あるかと云ふに、歐米諸國の統計で見ると、丁度全世界で死る人の七分の一は皆結核病である、即ち七萬人の死者の中一萬人は結核病で其餘があらゆる病氣である。

結核に甚しい損害を世間に與へる病氣であるが、其至極慢性であるのと、一方にはまた遺傳病だと云ふ者を以て居る人があるとの爲に、其の豫防撲滅あまり重きを措かない、從つて病毒は遠慮なくづん〳〵蔓延するのである、今日で見ると、國民殊に其若い人の發達な妨げて居る者は、各種の病氣中、肺病程甚しいものはない、唯今でには米人でも肺病の殖えて來たのに氣がついて居る位である、他國でも以前は當時程ではなかつたのが、交通が盛んになるに從つて追々增加したのである。

日本でも能く調べて見れば、死亡數の七分の一位は肺病が占めて居るであらうと思はれる、其證據には顔色がわるいとか、或は肥らないとか云ふ少年を診察して見ると、多く結核に罹つて居る、國民の元氣を減らす病氣の中で肺病程怖いものはない、故に衛生に志ある者は、共に力を協せて此病氣と戰はなければならぬ、此病氣を豫防することが出來れば、後來國民の體力を發達させて、國の鴻益となるのであるから衛生上で最も大きな仕事である、打やつて置けば國民は益々肺病の爲に疲弊してしまう、之は日本だけではない、全世界一汎である。

歐羅巴では先年萬國結核豫防會と云ふものを起して、獨逸の伯林、以太利、倫敦と云ふ風に殆ど毎年のやうに順次に其會を開いて撲滅の方法を講じて居て、日本も其仲間入りをして居る、何れにしても結核の豫防は醫士の手だけでは出來ぬ、肺病を十分に豫防し、完全に撲滅せんとするには、政府の當局者が賢明であること、醫士が熟練であること、人民が敎育のあることゝ、三拍子揃はなければならぬ、是は歐羅巴の學者たちの皆云つて居ることである、如何に醫士ばかりがやきもき心配しても無駄である、肺病の恐るべきことは醫士が幾十年前から云つて居るのであるが、政府でも一向氣にもとめず、人民も耳を傾けないから、今日のやうに蔓延するに至つたのである、揃つて撲滅に從事すれば決して難いことではない。

然らばどう云う方法で豫防撲滅を企てるかと云ふに、此の病氣は上等の階級の人にもあるが矢張貧民の部落に多い、ところで金持の人ならるば、醫士の云ふ通に攝生法も出來やうが、貧民ではたとひ肺病に罹つても、資力が及ばぬから攝生が出來ぬ、故に是等は十分に保護して療養所を設けて療養をしてやるとか、或は肺病患者を一所に集めてそこで養つて行くとか、何とか方法を立てなければならぬ、歐羅巴で

は慈善家が大金を擲つて慈善病院と云ふやうなものを立て丶、肺病患者を收容して治療をすると云ふことが盛んになつて居る。

世間一般が肺病は癒らぬ病氣ときめて居るやうであるが、それは誤りで、適當の療治さへすれば屹度癒る、然し夫にも時期があつて、極く初めに治療を加へなければならぬ、これは肺病には限らず他の病氣でも皆同じであるが、殊に此病氣は極く初めに見付出して、熟練な醫士の手に掛ければ、屹度癒るといふことは歐羅巴の學者の輿論であつて、現に治療して癒つた人が澤山あるけれども多く手後れになつて、夫が爲に癒るべき病氣も癒らなくなるのである、彼樣に手後れになると云ふことは、貧民に最も多い、肺病は醫師が見て漸く夫と判斷の出來る位の時分には病人には感ずるものでない、唯咳嗽が少し出るとか、熱が少し昇るとか云ふ位のもので、毎日の生活に追はれて居る人は、業を休むわけには行かないから、必ず推して働く、さうすると知らず識らずの間に、漸く病氣が亘つて來て、終には如何なる名醫が治療しても手に合はぬやうになる、貧民の肺病の手後にさせるのは、いつでも之が爲で有る、一人の病氣を手後れにさせると、其病人から出す病毒の爲に、何十人何百人と云ふ他の患者をこしらへるわけになる、故に今日肺病に罹つた貧民を治療するには、どうしても慈善的の病院治療所を造つて其所に集めるより外はない、之は勿論政府でも保護し、一般の慈善家が寄り集つて企てなければならぬ、肺病を治療するには、最初期に滋養療法、即ち身體の榮養を善くして、適當の藥を飲ませるやうにすればよいのである。

以上述べたる如く、肺病は左程怖がるには及ばぬが、然し健康な人が肺病患者に接するには、一定の注意をすることが必要である、其中最も必要であるのは、痰に就ての注意である、故に若し一家の中に肺病人が出來たならば、能く利害を云ひ聞かせて、自分一人の不幸ではない他の人も不幸に陷るわけになると云ふことを會得させ、痰を定めた痰壺の他へは吐き出させないやうにするのである、少し理解力のある患者なれば、夫が分らぬ筈はない、そこで痰壺の中へ吐いた痰は、一定の方法で消毒すれば、其中に含まれて居る黴菌は皆死んでしまう、其消毒の方法は難しいことではない、痰壺に痰が中分ばかりも溜れば、其中に洗濯曹達を一掴ばかり入れて、其上へ能く煮立つた熱湯を一杯についで置きさへすれば其湯の冷める時分には結核菌は死んでしまうのである、若し痰が手に付いたならば、直ぐに石炭酸水で洗はなければならぬ、又患者の口を拭く手拭などは別にして置くのである。

健康な人はあまり肺病人の傍へ近寄つてはならぬ、醫師看護婦などは仕方がないが、其他の人は求めてそばによるに及ばない、夫は何故かと云ふに、單り痰の中だけではない、嚏をした時に散る病人の唾の中にも、矢張病毒が混つて居るからである、實驗によると、嚏をしても其飛沫が三尺以上も飛んで行くことはないから、肺病人と向ひ合ふときには三尺以上離れて居るがよい、然し看病をする人はさうは行かぬが、成るべくは看護婦を雇つて夫に任せて置いて、健康なる素人はあまり近寄らぬがよい、之は大層不人情のやうではあるが、傳染病を豫防するには夫位なことは忍はなければならぬ、「ペスト」の流行の時などは、一家交通遮斷さへも行はなければならぬのであるから、是

位の事は據ないとして、一人でも病氣に感染しないやうにせねばならぬ。夜具、蒲團、着物、又は手拭など、兎に角病人の身體に直接に觸れて病毒のありさうな物は、必ず一旦沸騰湯の中へつけて洗濯して消毒した後でなければ、他の健康な人が用ふることか出來ぬ、肺病人の肌着などは必ず二三日置に沸騰湯につけて洗濯して、取換へるやうにしなければならぬ、鼻拭なども始終清潔にして置くが必要である。

日常一家内の事はあまり人の注意しないものであるが、其注意は誠に必要である、たとへば市中から買つて來た小楊子や箸なども直に其まま使ふことになつて居る、歐羅巴杯では小楊子は機械でつくるから、手垢のついて居るやうなことはないが、日本のは一本一本削るので、其削り手には結核患者もあれば、黴毒患者もあらうから、其病毒が小楊子にも着いて居て、夫を口の中へ入れゝば、自然に傳染するのである、彼樣なところから傳染をして、自分の系統に結核はない、又結核の人と交通したことはない、と訝かるやうな者が多くある、唯茲に小楊子を例に引いたのであるが、其他にも傳染の媒介となるものは澤山ある、故に小楊子や箸のやうな物は、必ず一度少さい鍋に入れて湯を沸騰させて、半時も煮た上で乾かして使へば最早病毒は死んでしまつて居るのである、彼樣なことは少し面倒のやうだが、之が爲に恐るべき傳染病の豫防が出來るのであるから、十分實行を望まなければならぬ。

それから乳母を雇ふことであるが、是までも乳母の乳汁の檢査などは隨分やつて居るが、其肺病の有害などを嚴密に檢査して雇ふと云ふやうなことは少ない、乳母に限らず下女下男などを雇ふにも、肺病並に黴毒、癩病などの有無は十分に檢査することが必要である、少しでも顔色がわるいとか、其他に怪しい點があれば其雇人を見合すがよい、左もなければ醫師に見てもらつて大丈夫ときまつた上で雇ふのがよい雇人から肺病其他の傳染病が一家に生じた不幸な例がいくらもある。

凡ての飮食物も一度熱を通して飮食することは甚だ必要である、牛の結核菌と人の結核菌とは違ふから、牛の結核は人に傳染らぬと云ふやうな說もあるが、尙少し研究してからでなければ、まだ牛乳を煮立てゝ飮むに及ばぬとまでは云へぬ、矢張煮て消毒しなければならぬ、それから茶の事であるが、之も機械で製造するところばかりになればよいが、中には手を用ひて製造する所もある、之も小楊枝の話と一つで、若し肺病の人が之を焙じる時分に、溫度さへ高ければ大丈夫であるが、冷めた後も矢張肺病人が咳をしながらいぢるやうな事があれば、茶の中へ結核菌がはいりこんでいる、ところが茶を入れるに少しよい茶であると、わざ〳〵煮立つた湯をさまして用ふるのであるから、結核菌は死なゝいで體内に入り込むことになる、故に衛生上から云へば、番茶を火の上で焙じて飮むと云ふは最も適當なことである。

彼樣な日常の凡ての些細な事に注意がとゞけば、知らず識らずの中に肺病の豫防が出來る、余は手紙の開封にも注意をして居る、卽ち手紙の封の所を開けないで、下たの糊附の所を破つて手紙を引出す、それは若し其手紙の差出人が肺病若くは其他傳染病患者であつて、其

人が唾にて濕して封をすれば、其部分に病毒が附着して居る恐れがあるからである。

伯林の警察令では、麵麭とか菓子とか云ふ沸騰をさせるとも熱することも出來ない食物で、市中から買はなければならないものは、之を賣る商人が手で取扱ふと云ふことを禁じてある、何れも箸などにて挾み、且つ之を店頭に置くにも必ず硝子の覆物をして置かせる、客に賣るときにも手摑にしないで箸か「ホーク」などで袋に入れさせる、若し之にそむけば違警罪に處せられるとのことである、之も主に肺病及其他の傳染病を豫防する爲で、若し其商人に結核などがあつて、手に病毒がついて居て、夫が菓子につけば、之を食べた小兒が腸の結核に罹ると云ふ恐れがあるからである、日本の警察ではまだ夫程やかましくはないが、各自に注意することが必要である、麵包などは金網の上で炙つて用ふれば、肺病の病毒などは死んでしまふのである。

癩病も亦其原因と傳染する模樣とが、肺病に能く似て居る、歐羅巴では癩病は非常に嫌はれるのであつて、之に罹れば屹度一ところに集めてしまつて、他の健康人と交通させぬと云ふ制度を採つてから以來、歐羅巴には癩病と云ふものは殆ど跡を絶つて唯諾威の海岸などに多少殘つて居るだけになつた。ところが東洋と交通が盛んになつてから、再び癩病がはいりこむと云つて、歐羅巴人は非常に恐れを懷いて其豫防に注意をして居る、然るに日本國では癩病の系統の家が幾百萬軒もあつて、現に癩病に罹つて居る者が四萬人以上あるとのことであるが、本當に調べれば、全國中には現在の患者が十萬人以上もあらう。

文明國人が非常に恐れて其豫防法に注意して居る癩病患者を、日本ではどうして居るかと云ふに、街を勝手にあるかせて置くのみならず、銘々の職業を以て、食物も賣れば吾々が日用の器物なども賣る、東京市中でこそ稀であるが、地方に行けば到る所に癩病者がある歐羅巴人が我國へ來て衞生上最も不快を感ずるのが此癩病である、故に外國から來た醫師等は一番先きに此節は少しは癩病の取締がついたかと聞くのが、實に耻かしい次第である、歐洲と違つて日本の癩病患者は非常に多數であるから、其始末がむつかしいが、何とか方法を立てなければならないのである。

癩病に罹つて居るものは、最も澤山に其鼻液の中に病毒がはいつて居る、故に健康人の之に感ずるは、どうかした機會に、其鼻液が手につくとか、或は食物と共に口へはへるとかの爲であるのが最も多い、又癩病患者の手足に潰瘍のある者の穿いた手袋、足袋、履物などにも病毒がついて居るから甚た危險である。

急性傳染病に就ては政府も大さはぎをして、吝まず金を出して、其撲滅に盡力し、「ペスト」の如きは手ぎはよく防ぎ得たのであるが、此慢性傳染病は甚しく國民の元氣を消耗する恐るべきものであるにも拘らず、政府でも急に撲滅策を講じないから、吾々が十分に之を奬勵しなければならぬ。

家庭



新世帶を持つ人への注意

松山俊

「如何にして新世帶を持つべきか」とは、新に世帶を持たんとする年若き男女の胸中に蟠つて居る問題であつて、また必ず考へねばならぬ事柄です、

▲新婚後の種別　之を述ぶるに當り、先づ夫と呼ばれ、妻と稱へられ、世に立つ者の種類を畧述せねばなりませぬ。尤も等しく家庭或は世帶と申しても、また新郎新婦と云ひても、其關係する處が異つて居つて、隨分複雜ですが、普通一般よりすれば、大要左の如く分類せられます。

新夫婦
- 父母と同棲（親がゝり即ち部屋住ひ／直に一家を主裁する者）
- 父母と別居（財產を分配せらるゝ者／全く分與せられざる者）
- 新規の世帶（多少の財產を有する者／全く財產あらざるもの）

右の中どれが最も困難であるか、又た孰れが容易であるかは、申さなくとも判つて居りませうが、記事の順序上まづ

甲、困難なるもの　無財產の新規世帶は第一にして、次は財產を分與されて父母と別居する者

乙、さまで困難ならぬもの　有財產の新規世帶、第二は財產を分與されて父母と別居する者、其次は直に一家の主裁者たる者

丙、部屋住ひにして何の心配もなき者

右の中孰れか最も愉快であるかと云ふに矢張前表と同

様甲乙丙の順序であります。困難で居ながら愉快だと
は少し衝突して居る様でありますが、實は困難なる丈
それ丈愉快が多いのです。是より少しく此順序により
て組織或は構成方法を述べませう。但し『父母と同棲』
の二項丈は除きます。

▲●●●●●●無財産者の新世帯　茲に無財産と云ふは、所謂
親讓りの財産は全くなく又た全く單獨で經營する者の
謂ひで、畢竟自分の腕一本でやつて行く者を指すので
す。此種の者は概して結婚の後るゝのは自然の勢であ
ります、何となれば先づ自箇の職業を得、處世の法も
略ぼ確立し、新世帯の計畫も出來た後でなければなら
んからです。扨是等の準備も豫算も略出來たとして、
愈々之を實現する場合になると、隨分費用が掛ります、
(之れも其人の職業、位置、身分等によりて差違があ
りますが、今は中位の程度を標準として申ます)

さて直接に要する費用の大綱目を擧げますと、左の
如くです。

一、結婚費――イ準備費、ロ儀式費、ハ諸禮費
二、家屋費――イ敷金及び家賃、ロ家具諸式費
三、新婚旅行費(之は一家或は夫婦の都合による)
四、生活準備費

是等の費金は都會と地方によりまして大に異なるもの
であります、そして地方は殊に標準を立てにくひ、夫
で今は單に都會併も東京に於ての豫算の大要を記るし
ます。

▲●●結婚費　結婚は容貌や才識が主でない、衣服や
道具では無論ない、要するにハートとハートの結合で
ありますから、徒らに見榮を飾つて多額の金を結婚費
に用ゆるの要はない、が何しろ人生の大禮であるから、
そうあつさりとも出來ぬ。さて其準備費即ち嫁入や嫁
娶の仕度は、全く標準がないと云ふてもよい位で一萬
圓でも二萬圓でも出來るし、十圓でも二十圓でも方法
によりては出來ないとはありません、若し普通一と通
り――と云ふても餘計な物なく必要な品――を整へるに
は女の方では三百圓、男では百圓もあつたら、どうや
ら間に合ひさまで見苦しくなく出來ませう。尤も多く

費用のかゝるものは衣服です。若し新教育を受けた者で、此の如き問題に重きを置かぬ人であるか、又は在來のもので間に合せるならば至つて簡單に出來ませう。兎に角に其等の準備費用は當事者の力に任せるより外ありませぬ。

次は儀式費ですが、これも、在來の習慣と、西洋式或は神教又は佛道式など樣々で、又たそのやり方で異りますが、略式にして最も切つめた所は左の如くでよからうとは媒介に經驗ある人の話です。

甲、塲處を定め親戚知己を會し、所謂何々流の本式でなくとも、相當な饗應もする塲合には約五十圓より七十圓

乙、自家或は費用を要せぬ場所で、必ず列席しなければならぬ人のみを招き、鳥渡した饗應もある場合には約二十圓より三十圓

丙、極々の略式で質素中の質素にすると、五圓もあれば出來ます。方法によつては費用は殆ど掛けずにも出來る。要するに結婚式は神聖でさへあれば、其他は餘り重きを措くを要しません（當事者の身分、職業にも依りますが）



さて次の諸雜費と云ふのは結婚後の親類廻り、媒介

者へ禮、世話人への贈物などであつてこれも中々費用のかゝるものです。考へて見れば無用の慣習ではありますが。若し舊慣を守るとすれば少くとも二十圓位は要りませう、されど之を打破する心掛を以てやれば、左樣はかゝりませぬ。度々申ます、結婚の披露狀を出すとは小さい樣で中々面倒です、ざつと五圓は要りませう。

▲家屋費　これも一定しませんが、假に八圓位の家賃を拂ひ、夫婦暮しをするとすれば、左の



如くで間に合ふ。

家屋費　三十圓（敷金十六圓、一ヶ月分の家賃八圓及び諸雜費六圓）

家具費　十五圓（俗に四十九品あれば家は持てると申しますが、これは夫を標準とした必要缺くべからざる品のみ）

飲食物準備費　十圓（切つめたのです）公の義務及び附合等　五圓

合計　六十圓

其外生活費の準備、物品の買入とか、何のかの

と隨分費用を要するものですから、小百圓ないと骨が折れます。斯く申ても人によりては夫以下でも出來なくはありません。序でに申したいのは、今後の一家經營は斯樣にと云ふ末の見込の立ぬ中は、決して新世帶を持つものではありません、妻君が働いて一家の補ひにするなどの事は、到底駄目です、よしんば出來ても長くは續きません、其理由は申さなくとも、判りませう。それから女中は最初の中は成るべく雇ぬ方が宜しい。これ會計



上や、用務の如何のみではありません、それはどうと申さなくとも、御合點のことゝ存じます。若しどうしても雇はねばならぬならば、四十歲以上の世帶慣れた者か、田舍出の少女を雇ふがよく桂庵などより來た渡り者などは絕對的いけません、一家の平和を破る元ですから。さてまた

▲官邊の手續●●●●●は早速に着手せねばなりません。現今の屆出手續は中々面倒で、代書に書せても、戸籍役場のお係殿は中々に受附けてくれませ

ん、そして随分暇がとれますのでつい明日々々と云ふて延々になつて終ふ。それに萬一屆書に一字の間違でもあると區裁判所の手續を經なければならぬ面倒があるからどうも延引になり易い、けれども到底之をなさねばならぬ、然らずんば、正式の夫婦とは認められないのであります故、早速に取運ばぬととんだ迷惑を來すことがあるのは、世の疾に知つて居る所でありませう。若し之を容易になさんとするには一應屆書の書式を見、それに必要なる條件を仔細に取調べ、而して後經驗のある者に托して書いて貰ふことです。

▲隣保及び諸賣店●●●●●　一と通りの事物が濟んで、愈々夫婦差し向ひに食卓に就く樣になりますと、一家經營上心得なければならぬ事が澤山あるが、近鄰の交際といふことも其一つであります。若夫婦は兎角是等の問題に冷淡であります。無事平穩の日は却てよろしいが、何時どんな變災がないとも限らぬ、地方ならば親戚も知己も近いが、都會はそうはいけぬ、そこで平生どうしても隣保と一と通の附合をして置く要があります。併しあまり往復するのもよくはないが、四季折々の挨拶などは欠かしてなりません。それから米屋は何處で魚屋、八百屋、味噌醬油屋は何處がよいなどのとは是非一度は取調べねばならぬ、そして一旦こゝに定めたならばあまり變へぬ方がよろしい、若し會計上の都合が出來るならば、一切現金拂にして通でとると云ふことを廢するがよい、是は筆頭第一に定めませんと中々實行の出來難いものです。其次に知つて置かねばならぬのは

▲醫師或は病院●●●●●　の所在地、其專門等のことを取調べて置く必要がある、新婚早々病氣の準備などは嫌らしいことですが『人は病の器』と申樣に、いつ病氣になるかも知れません、それで常に之を注意し、夫婦相互に話し合ふて置かなくてはならぬ。つい此春のこと某々は新世帶を持ち一ケ月と立ぬ中に夫が内臟の病氣をした、すると新婦は早速醫師に往つたのはよいが、それが外科專門醫であつたから、其先の醫院に往つた、するとそれは齒科であつてようやく三度目に内科の醫師

を迎へたと云ふ滑稽な話がある。重患でなかつたからよいもの丶、萬一急性の重き病でもあつたならば、手おくれをやる處であつたのです。よく〱心得給へや。

▲出產の準備　一二の除外例はあるが結婚をすると、妻は妊娠するものと覺悟せねばならぬ、これは申迄もなく女の大役で、又た會計上にも少からぬ影響を來たすものであるから、餘裕のないのものはこれあることを豫期して月々この爲に準備して置かねばならぬ、それに月重なると半病人となるのであるから、人も雇はねばならぬ、併し是等は一個の問題として更に詳述する價値があるから何れ



其中に述ぶるとしませう、唯だ夫たるものは其心掛を以て準備して置くといふ事をゆめ忘れてはならぬと云ふに止めて置きます。

以上は無財產で新規世帶を持つものに就て略述しましたが、其他の夫婦も之を參考し斟酌すればよろしい、が唯た一つ二つ特別に注意せねばならぬ事を記そう。先づ

▲財產を分與されたもの、或は多少の財產を有して居るものは、萬止むを得ざる塲合の外は決して之に手をつける樣なことなく、之が利殖の方法を講じて萬一の塲合に備へねばならぬ、そして自分等は働いて其收入を以て一

家を支へる樣にし、多少の餘財も出來る樣にして行くとが大切であります。

▲●●●父母と別居　せる者に於ては、常に膝下に伺候し或は迎へて歡樂を共にし、父母をして安心する所あらしめねばならぬ。新舊思想の衝突もあらうが、其の邊は然るべく調和して行かねばならぬ、そこが新夫婦の手腕を要する所である、要するに大抵の事は一目を置くと云ふ氣合ひを忘れてはならぬ。まあこれ位にして更に新なる問題に立ちかへりませう。

さて新に一家を起しますと、一家實務上種々の不便が生じて來ますが、此際

▲●●●互に忍耐　し合ふと云ふことを忘れてはなりません。如何に充分の準備があつても、あれも必要だ、これもなくてはならんと、無暗に買ひ込むとは注意しなくてはならぬ。必要缺くべからざる物ならば格別さもなければ出來得る丈間に合はせ、不便を忍び合はねばなりませぬ。年若き夫婦は兎角是等のことに注意の足りないのは通弊です。金錢と云ふものは使用すべき時には充分使用せねばなりませんが、さもなければ考へなく使用するものではありません、茲が吝嗇と節儉との岐るゝ所であります。夫から夫は一家の財政に關した事は

▲●●●妻に全托　し自身は其補助者たる位置に立つとは亦た良き方法です。妻は互の物語りに依て案を立て、適宜に經營を講せねばなりません。さて茲に於て一つ新婦に忠告せねばならぬ一事があります。夫は外でない、家政經營の或點迄は夫を煩はさず、外に出でゝ働く夫をして考へなくともよい問題に迄頭を惱まさしめぬ樣取計はねばならぬ、茲が内助者の本分で所謂内顧の憂なからしむる良妻であります。併ながら夫の方では全托した以上は如何樣な事があつても、我は知らぬ與へる物は與へて置くからなどゝ云ふてはならぬ、必ず夫と察して時に問ひて相談せしむる樣にしなくてはなりません。妻は出來る丈、夫に内部の事は心配させぬ樣と心掛け、夫は亦た出來る丈妻を勞せしめぬ樣に、即ち「汝等互の勞を負へ」と云ふ言葉を實行しなくては

なりません。金錢問題に就ては猶申たい事もありますが、筆端多岐に亙るの恐がありますから、此邊で止めて置きます。

さて結婚式も濟み、家庭も稍整ひ、漸く眞の新世帶に入るのですが、此際第一に注意したいとがあります。それは

▲夫妻互の秘密なからしむる事。語を代ゆれば、互の胸中にある秘密を善かれ惡かれ、大となく小となく、凡べてを告げ合ふことです、此一事は外觀に於て容易な樣で實は困難な問題ですから是非この事なくては春霞の棚引いた山の樣に素人の撮つた寫眞の樣に、何となく物足らぬ感がありまして、到底圓滿なホームを見るとは出來ません、さもないとハイメンの神（婚姻の神）が折角骨折つて纏めた縁も、マムモンの神（幸福の神）に見離さるべき不幸を見るであらうと思ひます『一度結婚すると約婚時代に知らなかつた夫妻互の過失缺點は必ず發見せらるゝものである』とは既婚者の等しく云ふ所です。心せよ新郎新婦



▲夫愛婦敬　次に忘れてならないことは『夫は妻を愛すべきもの、妻は夫を敬すべきもの』と云ふ言で

す。男女同權だの、夫の義務だの、妻の權利だのと、辯護士方の居候みた樣な、角のある言葉は、新家庭と云ふ店には、仕入れの必要のない代物で、畢竟するに是等はすみれだの紫だのラブイズホーリーなどと如何にも解つた樣な言葉を吐いて得意がつて居るつめ襟や海老茶袴時代のことである、若し夫愛婦敬の道にして正しく眞面目に行はるゝならば、不言不語の間に卽ち自然的に、同權も權利も義務も招かずして參候し、平和と愉快の間に立働くものであります。

▲笑顏の力　の偉大なることは、妻たる者の忘れてはならぬ條件です、夫が社會の風波と戰ひ精神と身體を疲れしめて歸つて來ます時妻は嫣然たる笑顏を以て迎へなさい、必ずや夫の疲勞を慰し、元氣を恢復せしむるものであります、要するに夫の不機嫌なのや、そんぢよそこらに嫌な風聞の立つのは、一は此笑顏の輝きが薄いからです。心せよ新に妻となれる者。次に夫の歸宅を

▲玄關に出迎　へることです、是に就て或人は『左樣なことは無意義である、妻を奴隷視するのである』と怪氣焔を吐きますが私觀を以てすれば、此の如き人は、未だ夫婦の眞義を解せぬ者であります、病氣でもあるとか、子供を寢かしつけて居る時なら格別、さもなければ、夫の歸りが如何に遲くとも出迎ふ樣になさいませ『オー未だ起きて居つて呉れたか』と云ふ短き言葉の中に、文字で表はせぬ、一種の溫情が籠つて居つて、夫婦和合と云ふことに大なる關係を與へるものであります。

精神上の事に關してはなほありますが以上の事々にしてよく行はるゝならば新世帶の礎は砂の上に置かれたのではなく、堅き岩の上に据へられたので、所謂『四海波靜』なのであります。

述べ來りて未だ十の一を盡さず、されど山鳥の尾のいと長々しき蕪文、讀者を厭かしむるの心なさを知り、唯一語新夫婦の座右に呈し以て一と先づ筆を擱きませう曰く

『二人配合して伉儷をなすや蛇來りて三人となる』

と。余は今時更に之を説明せず、暫く宿題として新夫婦の氣附となし、以て他日の解釋に俟つとします。

家庭の規律

本多夫人談

私共は萬事不規律な物ですかち、何時から何時までには、何を仕て何を片附てと思ひましても、それは自分ばかりの事で、四邊が左樣都合善く出來て居ませんから、つい思ひも寄らぬ事件が出來てまゐりまして、實行が出來ません。

歐米の人々は、實に規則正しく、食事は勿論、散歩の時間小供を寢ませる時間キチンと仕馴らしてあるのですから、彼なのを拜見して、妾共の事を考へますと、何から何まで足らはぬ事ばかりで、實にお恥かしい次第です。

小供の世話や、衣服の洗濯や、お臺所の事なんかして居ますと、何時の間にか日が暮れ、眞實に自分で思つた半分の仕事も出來ません歐米の人々に比べたら實に其四分の一程な事も仕て居ますまいお恥かしい話です。コーッ夫人などは、誠に能くお働きでお子さんが三人もお有りなさるのに、下婢は唯だ一人で、臺所や其他の差圖に少しの落度も無くて、各種の慈善事業や其折り〳〵の會合などにも屹度御盡力下さるから、それは〳〵少しのお閑暇も無い位ですよ、能くまアあんなに出來た物と感服の外は有りません。

嘗てペルッさんが日本人の衣服は、動けない樣に出來て居ると言はれましたが實際左樣かと思はれます。

爐の釜が松風を音に立てゝ居る數寄盡しの室で、上品に座つて、散る花を小簾の外に眺めながら、琴をかなでたり、茶を汲んだり、心長閑に日を暮らすには日本の服は至極宜しい樣に出來て居るかと思ひます、即ち妾共には、どうやら此衣服は餘り上品に出來過てるかと思はれるのでございます。

それに又日本の家屋は、座つて居る樣に出來て居ますから、用事が有つても、座つて居ては、一寸立つに

おつくうな事が有りまして、大した用事でも無かつたら、ツイ失敬するとか、或は後廻しにするとか云ふ様な風になり易いので困りますが、それは腰懸けて居るのと座つて居るのとは、左程目立ちませんけれども、永い間には仕事の上に大きな違ひが有るかと思ひます。

それで何かの用事に立ち上つたにしても、此腰紐ですね、日本の婦人は皆腰紐で、體を縛つて居ますから、矢張歩行を始め其他にも少からぬ不便でございます、考へて見るとまことに奇妙な事を仕た物です、之に比べたら西洋服は、至極働き易い様に出來て居ますから、おつくうな



ど〻云ふ事は少からうかと思ひます。尤も西洋服でも彼コーセットなんかは善くないものと見へ時々歐米の方からこう言はれるのを聞きました『妾共は小供の時から用ゐてるから入れないと反て變な氣がしますから使つて居ますけれど、之は廢止にして其儘西洋服を着る様な事に成つたら、大層便利でせう』と

それから又日本服で仕事の時に邪魔に成る物は袂です、特に女のは長く出來て居ますから、無用の長物とは眞實に此事でせう、小供等はこ〻へ、お菓子とか繪本の如な物を入れる事も有りませうが、その小供も多くは懐へ入れて袂を使ふ事は少いの

です、それは遊戯時にぶら〳〵して邪魔になるからでせう私共は鼻紙一つも入れません。左様ですよ、之れだけの大さが有つたらせめて、手鞄の代り位には成りそうな物ですが、矢張女學生などが、學校への往き歸りにも手風呂敷包みを抱へて、大きな袂は何にも使はないのですから、全く無用物かと思ひます

で斯様な家庭上の種々な物事に就いて、追々に改良して行かなければならぬのが、隨分澤山に有りませう。殊更衛生と云ふ事には私共は一體に、餘り頓着しない風で有りまして、それが又大層善く無いのですから、青山にも「母の會」と云ふのを設けまして、毎月集つて居りますが、この十八日にはお向ひのチャペル夫人の宅へ集る事になつて居まして、チャペル夫人が家庭の事に就き、何か有益なお話を爲て下さいます筈でございます、チャペル夫人は婦女子や家庭などの事に就ては中々熱心に調べて居られます、日本へは古い事で日本語は充分に出來又料理も敎へて頂きます



妊婦の食養生

すみ子

婦人が姙娠したからとて、その間際から直ぐと飲食物を改めては却てよろしくないから平常の習慣は成可

く變交しないで置いて段々と適當な飲食物に移つる様にすればよい、大体からいふと妊婦には刺戟性の物、脂肪多い物、瓦斯を造るもの即ち放屁の材料となる物、尿量の分量を増すもの等を避け、而して滋養になつて消化の良い物を撰ぶといふに過ぎない、そしてあまり就寝前に飽食をしてはよろしくない。

でまづその適當な食物はといへば不斷の米飯であるが、これは胃の健康な方には至極よろしい、けれども胃弱者はお粥がよろしい。又餅、鮨、團子等の不消化物はよろしくない、又麪類はあまりよろしくないけれども温飩は障りがない。



肉類は概して新鮮なのを選び、脂肪の部分を取除けて軟らかな處を食べるがよろしい、例へば鳥類であらば牝鶏肉、鳩肉などはよろしい、獸肉では脂肪分の少い豚肉、牛肉など障りはない、又魚肉では、鯛、鰈、鱚など淡泊なものはよいけれども、鰮、鰻、鯉などは脂肪分多くてよろしくない、猶魚介類で禁すべきは、章魚、烏賊、鰕、蟹、其他鹽漬の魚類、干物、貝類は一切不消化なものであるから避けるのがよい、次に野菜は、芋、牛蒡、筍、蕪、大根、南瓜などはやゝもすれば瓦斯を造り易く、又瓜類西瓜は尿量を増すものであるから禁食する方がよい、尤も鶯菜、菠薐草、牡丹

韭のやうに纎維の少いものは食べてよい。但し海草類茸類は一般に不消化であるから極めて少量ならば害はないがまづ禁じた方がよろしい、昆布、羊栖菜、椎茸など尤も不消化である。

次には菓子及び菓物である、妊娠すると大變菓物を好く樣になるが、殊に昨今では梅、杏子、すもゝ、夏密柑、林檎、いちごなど姙婦の好んで食するものであるが、これは能く熟して新らしいもの、核と皮とを取り、適當に食べたらばまづ害はない。併し如何に好くものだからとて過食はよろしくない、菓子類も糖分の強くない蒸菓子、カステーラの樣なものはよろしい。

それから姙婦の禁ずべきは香料胡椒、芥子などの刺戟性食物である、又酒類は絶對的に禁ずべきもので、興奮劑の中でも珈琲茶はなるべく薄くして用ふるがよい。尤も平素多少飲酒の習癖あるものは少量の葡萄酒ビールを用ひて食慾を促がすのは敢て差支はない。

飲料として牛乳を用ふるは極めてよいが、若し牛乳嫌の人ならばコンデンスミルクでもよい、又鶏肉、牛肉から取つたソップを常に用ふる樣にすれば滋養を增して不斷食量の尠い人などには、効能が多い、若ソップが嫌なれば鶏卵を半熟にするもよい。

右は專ら姙婦、即ち產前の食物であるが、分娩後の食物も大抵右と變りはない、尤も出產當初の一兩日間は固い食物を避けねばならぬ、即ち、牛乳、ソップ、葛湯、重湯などよろしい。それから粥に味噌汁、新らしい刺身、鶏卵の半熟、パンなどよろしく、凡そ一週間も經過して異常がなければ軟らかい飯、饂飩、稚き鶏肉、などよろしい、斯くして凡そ三週間も經過したらば平常の食物に復してよろしい、但し產褥中はすべて食物に注意して新鮮佳良なるものを撰ぶと同時に、飽食してはならない、殊に夜分就寢前に食ふのは謹まねばならぬ。

以上は產婦に就ての學理上實驗上の說であるが、人は各々其體質によつて、又平素の習慣により、或は其人の嗜好によつて種々食物に好惡もあることなれば一概には言ふべからざるも、まづ大體普通の人の心得と

して間違のない處を記せば右の如くである。

氷水の話

YKK

夏季の嗜好品として最も多く我々の口に上るものは氷水である。一體純良なる氷は蒸餾水を以て製したのであるがこれはその味が淡泊なので人々が賞美しない、しかし天然水の氷は一般に多數の細菌を混有して居るが其細菌は水を氷結さす時も死滅せず、氷の溶解すると共に發育するそうであからる決して清潔純良のものとは云へない、善良の水を撰んで製した人造氷は天然氷から較べると比較的夾雜物が少ないので先づ安全である。それ故內務省の取締規則には飲食用に供する氷雪の溶解水は無色透明にして臭味なくまた夾雜物も極めて少なかるべしとある。



氷の害

氷は胃腸を害するのみならず歯牙及び腦を害するので、何れにしても人體にはよろしくない健康の人でも氷を喫ふと下痢を惹起し、少しく腦の惡いものは直ぐ刺戟されて暈眩を起すことがある、頭の底まで浸わたるなど云つて喜んで居るのは實に論外である、水の上

へ氷の小片を浮べて飲めば兎も角カチ割り霰などの樣にガリ〳〵と嚙んで喫ふのは甚だよろしくない、殊に小兒には氷は禁物である。

氷しるこ　氷水の中に色々の種物を加へて造つた氷あづき、氷しるこ、氷白玉の類は一種の水菓子として取扱はれてあるが此等は無論不消化物で腸胃を害することは普通の氷水よりも甚しい、人間の胃は消化力に限りがあるので氷にあづきや白玉などを加へたものを飮み下すと胃はまづ氷を溶解してそれから小豆なり白玉なりの消化に移るので時として此等の種物は不消化の儘胃中に殘つて前宵に食べたものが翌日まで停滯して大に身體を害することがある、殊に赤豆は盛夏の頃腐敗し易いものでその腐敗した赤豆を氷の中へ入れると冷却するので容易にその腐敗を見出すことが出來ず、一層危險であるから氷しるこ氷あづきなどは成るべく食はない方がよい。

氷菓子（アイスクリーム）　安物には往々腐敗した雞卵や變味した牛乳などを打込んで造つたものがあるが此等は外から見て良不良の分らないのみならず、舌へ載せて能く味つても十分冷却て居るので、その不良を味分けることが出來ないのである、街頭に賣つて居るものなどは論外である、兎に角良好なアイスクリームが入用の時には自宅で造るか、信用ある確實の店で求めるがよろしい。

水菓子　市中の駄菓子屋に賣つて居る寒天製の水菓子に、色をつけ瓢簞形の硝子壜に入れたものがある、此水菓子には、有害性の着色をしてその容器も極薄い硝子壜で何れから見るも危險なものであるが、その上小供が此水菓子を喰べるにガラス壜を口に入れ着色の麥藁を付けて吸ひ出して居るが、此麥藁はまた有害の着色を加へてあるので、毒の上に毒を塗り付けたものでいよ〳〵危險である、だから子供を持つた親々は銘々注意せねばならぬ、また其筋の役人の談では駄菓子屋などに賣て居る蜜柑水、桂皮水の類は製造後二三日を經ると腐敗に傾くものが多いそうであるから子供に與へぬ方が安全である。

ラムネ　ラムネは夏季の淸涼飲料として廣く用られて

居る、これは人身に無害の酸類（酒石酸、枸櫞酸、醋酸）などの少量を炭酸水に混和してこれに砂糖を加味し造つたものである、また炭酸水の代りに水を用ゐ、これに人工芳香質（レモン精、桂皮精、など）を加へて造つたものが所謂蜜柑水、レモン水、桂皮水、など稱し、市中に賣つて居るものである、さてラムネ其物は決して有害の物でないが、その製造法の粗忽、調製器容器の不潔原料の不良着色の如何等により人身を害することがある、

飲料水鑑定法　ラムネ、蜜柑水、其他清涼飲料水の不良を見分ける簡單の方法は、外面より其容器を透して見て若し混濁を呈するか、或は沈澱して居る時は變敗したものである、またラムネは炭酸瓦斯を發生せしむるため、硫酸硝酸の如き礦物性の酸類を使用するので、若し炭酸瓦斯の洗濯が不完全であると、ラムネの中に人身に有害な炭酸を含有してゐることがある、



泡起性ラムネ　炭酸瓦斯は日を經るに從ひ段々沸騰性を減じて泡が少なくなるので、狡猾な製造者は模倣的に泡を起さしむる爲にさぼん草丁幾（さぼん草の根を酒精に浸出させる者）を用ゐるがその泡起は人身に有害である、これを鑑定する方法はラムネを蒸して小容量とし、これに水を加へて振ると著しく泡が起ときはサポン草丁幾の存在する證據である、

夏の菓物

夏の果物で注意すべきは桃と李とである。何れも腐敗し易い果實であるが果實は氷水、清涼水の様に嚴重な取締法がないので往々未熟なものや、腐敗したものが市中に販賣されて居る、果實の腐敗したものはいろいろの黴菌が發生して、惡疫の誘因となるから、惡疫流行の時は勿論平素でも注意して喰べない様にせねばならぬ。

腐敗の原因　果物の主成分は水分、ペクチン質（芳香）糖類、及酸類の四ッから成り立つたもので果物の種類に由りてその分量が異つて居る、そして果物の熟するのはその中に含まれた有機酸が日光を受けて糖分に變化したもので、その期を過ぐると糖分はアルコール醱酵を起して腐敗するのである、故に果物は木に實ッてゐる時も亦店に列べられても早晩腐敗するものであるが、只だ採取、貯藏の方法如何によッて腐敗の期を延ばす事が出來るだけである、又果物の腐敗は溫度の關係により虫害及び外部の損傷等其誘因となるが、その外果物、其物の有する水分の多少も、亦た腐敗の遲速に關係を及ぼす様である、夏の果物の中で一番腐敗し易いのは李と杏、桃と云ふ順序であるが、その水分を調べて見ると李は百分の中、八四杏は八一、桃は同く八〇を有して居る、即ち水分を多く有して居るものが腐敗し易いのである。

熟した果實　完全に熟した果實は市では求めることが出來ない、近頃は交通の便利があるから關西地方で出來た水蜜桃が東京へ輸入せられる様になつた、その水蜜桃は完全に熟さない内にちぎつて荷造するから完全に熟したものとはいへない上等の水蜜桃の完熟したものは舌に上ると溶ける様に感ずるが、市中に賣つて居る水蜜桃はクリ〳〵と歯に耐へる様で、これは全く未熟のものを追熟さしたからである、勿論完熟の物は腐敗し易く輸送に耐へないから、市にあるものは勢ひ風味の悪い未熟のものを味はねばならぬ。

小兒と果物　市中に賣つて居る果實は多く戸板など

にならべ炎塵を浴びて不潔なものが多いが、殊に場末などにある一山百文のものは殆んど腐敗して居る、こんな品は多く下等社會の小供の口に這入るが元より衛生などに頓着せぬ親々であるから小供の爲めには非常に危險である新鮮な果實でも一旦之を洗つて皮を剝かないと消化を害するものである、又果實は酸類を含んで居るので胃液の分泌を催して消化を助ける効能があるが、多食をすると却て消化を害する、又た下等の果實は纖維(不消化物)が多いのでよろしくない、子供は果物がいけないと云ふのは全く此理由であるが、併し全然與へない譯にも行かないから李などはジャムに作つて與へるがよい、



果物貯藏法　日本では果物を貯藏する方法が備はつて居ないので、腐敗を招き易いが、桃の樣な腐敗し易い果物でも、貯藏の方法に依つては三十日位は大丈夫である、桃の完全な貯藏法は完熟前一週間位のものを採取して一個つゝ蠟引の紙に包んで簀を入れた箱に一列へ列べて置くので

あるが、こうすれば遠方に輸送しても途中で腐敗する憂はない支那から長崎邊へ輸入して來る水蜜桃は、皆此の方法を取つて居る、それから市中で買て來たものを自分の宅て貯へて置くには摺れ〳〵にならぬ様一々列べて、温度の低い所へ置くと腐敗を防ぐことが出來る、又た果實を新しく見せるため霧水などをかけるのは注意すべきことで、その分量が過ると腐敗を助けるそうでなくとも水臭くなりて風味が悪くなる、殊に街頭などにて塵を浴びた果實に霧水をかけて居るがその塵（恐るべき黴菌で）は濕のため果實に附着して悪疫傳播の媒介となることがある、若し出來得るならば八百屋などにて賣る果實はガラスの蓋のある箱の中に入れて置きたいものである。

夏の衛生

夏の衛生と云ふ事は、自分一個の爲にばかりでなく、廣く社會の爲に極めて必要な事である、凡て病氣は身體の弱みにつけ込むもので、日頃から身體さへ丈夫にして置けば、如何なる悪病でもそう容易く犯す事は出來ない。

夏は消化器が弱くなるから消化し易い淡白なものが適當である、油濃い揚物類、氷水などは無論悪い、二杯も續けて飲むと舌の先がしびれて、感覺が無くなる程になるものを、無暗に胃の中に入れては胃の働きの悪くなるのは云ふ迄もない事、胃の働きが悪くなり、消化液の分泌が充分でないと（此消化液と云ふのは鹽酸の混つて居る食物を消化する間の防腐藥である）食物が永い間胃の中に滯つて居るのと、消化液の少ない爲とで、終に腐りかける、從つて悪い黴菌なども發生して、下痢を起したり、吐いたりする樣になる、斯う云ふ事から得て恐ろしい病を引き起す。

併し又一方から云ふと、氷水の一杯や二杯飲んで、直に弱る樣な腸胃では何とも仕方がない、餘り要愼々々と云つて夏中冷水一杯も飲まない樣にして居ると、今度は腸胃が其方にばかり慣れてしまつて、自分から弱

つて來る、從つて偶々客に行つて氷水を飲まされると直に障ると云ふ樣な譯になる、で要愼は誠に必要だが適當の度を越さない内で、少しづゝ腸胃を慣らして置く樣にする事が亦必要で有る。

夫から寢冷しない事、之も赤痢や其他下痢病の間接の源因となる事が多いから、小供ばかりでなく、大人も寢る時には腹部だけは決して冷さない樣に、布團を踏ぬいでも安心な樣に、腹卷をして寢る事が肝要である、疊の上に直に寢ると疊は大變に身體を冷やすもので有る。

又暑い時にはよく便秘をする事が有勝だが世間の人は大抵下痢する方ばかりを恐れて、秘結する方は餘り氣に掛けないが、此便通の不順も亦消化器に病を起す源因となるもので、巳に便通が順當に行かないと云ふのは腸胃に異狀のあるからで、身體を大切とおもつたら醫者に藥を貰ふのが最安全で、藥屋の下劑や無暗な丸藥などを用ゐては却つて害になる。

今では市内の各地一面に水道が引かれ大に便利になつたが此水道の水とても決して悉く安全とは云はれない、水道から蛭が出たなどと云へば皆驚くけれども決して夫ばかりでない、此水道を導く大きな管は皆鐵で出來て居るから宜いが夫から家々に引く處は鉛の管を用ふるので最之は危險のない樣にしては有るが、全く鉛が水の中に溶解しないと云ふ事は出來ない、特に絶へず流れて居る時は宜いけれども一夜中水を出さないでつまり其間だけ鉛管の中に同じ水がたまつて居ると、其間は何しても鉛の溶解する分量が多い譯であるから朝初めて水道の水を使ふ時には手桶に一二杯は飲水にしない方が宜いと云ふ事を北里博士も云はれた。

鉛はたとへ少量でも一度體中に入つたら決して再び體外に出ないもので、之が次第に度重なるにつれて多くなり、終に鉛の中毒を起す樣になる、白粉を常に厚くつけた爲に白粉の中に鉛の中毒で白粉燒けになつたり、又は鉛が腹中にだん／＼溜ると、終には激烈な腹痛を起して之は只モルヒネの注射で一時を凌ぐより外に手段はなく、永久不治の病となるものである。

季節料理

治庭含本部教場主事　安西こま子

▲茄子鴫燒

大なる茄子を撰び、蒂を切り捨て、皮をむき、厚さ五六分の木口切となし、水の中へ放ち暫らくおきて取出し、水氣を拭ひ、一回煮たる胡麻油を十分に兩面へ塗り暫らくおき、金串を二本づゝ打ち、火に掛け、兩面を燒き、上りに刷毛又は羽根を以て味噌を兩面に塗り、一寸と炙り乾かして串をぬき、器に盛るべし

塗り味噌の製方　は、其味噌を擂りて之に砂糖を加へ能く擂り混ぜ、裏漉をなして又之に鰹節の煮出汁を加へドロ〳〵の濃さとなし、火に掛け、攪拌ながら火を通せしものなり

▲鯵　鹽やき
　茄子龜の甲燒

鯵鹽燒　は、鯵のぜんごを取り、鰓を出し、腹を開き、腸をとり出し、腹の中を金串を以て能くこそげ、水にて洗ひ、水氣を去り、全體に食鹽をあて、腹の中へは十分に食鹽をすり込むべし、鹽のきゝたる頃、水にて食鹽を洗ひ落し、水氣を拭ひ、横に金串三本を打ち、鐵架に懸けわたし、能く燒りたる炭火にて先づ上肉より燒き、魚の眼色が白くなるを度とし裏返して下肉の方を燒き、金串をぬきとり皿に盛るべし

備考　魚の頭を左りとなし腹を前へ向けて上になる方を上肉と云ひ下になる方を下肉と云ふ

茄子の龜の甲燒　は、大なる茄子を撰び、花落の方を少しく切り落し、柄を一寸程殘して切り捨て、柄と共に竪に二つ割り、水の中へ放ち暫らくおきし後ち取出し、水氣を去り、小刀又は鯵切庖刀の尖端を以て茄子の皮を切り傷らぬやうに注意して深く切りまわし、又あらき十文字形に深く切目を入れ、而して切目を入れたる肉の方一面に一回煮たる胡麻油を十分に塗り、横にして金串二本づゝを打ち、先づ切り口の方より燒きはじめ次に裏返して皮の方を燒き、粗ぼ燒き上りたるとき、鰹節の心の處を削り以てつくりたる花かつをを一撮づゝ切口の中央におき、其上より割り醤油を十分に注ぎかけ煮えたゝせ又割り醤油を注ぎかけて煮えたゝせ斯の如くすること三回程なして掛け汁が全く煮えこぼれぬやうになるを待ちて火よりおろし、串をぬき、皿に盛るべし、又割り醤油は、濃き鰹節の煮出汁と生醤油とを四分六分の割りに合せ以て一回煮立てたるものなり

▲茶筌茄子

小なる茄子を撰び、蒂の端を少しく切り落し、柄は一寸程つけおき、花落の處を少しくそぎおとし而して天地を少しく離して竪に深く切目を入れ、水の中へ暫らく放ちおき、鍋(可成は鐵鍋を用ゆるをよしとす)に生醤油と砂糖とを甘辛き加減に合せるたる汁を煮立て此中へ前の茄子

子を入れ、落蓋をなして柔らかになるまで煮込むべし

▲蒸し茄子
しめ鯵　酢みそ

蒸し茄子は、中位の茄子を撰び、花落と帯とを切り落し、皮をむき、竪に二つに割り、水の中へ暫らく放ちおきて灰汁をぬき、之を蒸籠の中に入れて蒸し、而して竪に刺肉の如く庖丁をなすべし

しめ鯵は、鯵のぜんごを取り、三枚におろし、薄肉へき、食塩をあて、小骨をぬき、水にて洗ひ、生酢の中へ暫らく漬けおきて、取出し、指を以て皮を剝ぎ、適宜に庖丁をなし而して皿に酢味噌を敷き、其上へ茄子と共に盛りて侑むべし

酢味噌は、並味噌を擂鉢に入れて擂り、之に少しく甘き加減に三盆砂糖を加へ、能く擂り混ぜて裏漉をなし、之に生酢を加へゆるめしものなり

▲おし茄子　胡麻あへ

おし茄子は、蒸し茄子の如く庖丁をなして水の中へ放ち暫らくおきて灰汁をぬき、沸騰湯の中へ投じ柔らかにゆで、爼板の上におき、其上に鍋蓋を載せ両手にて壓し以て程好く搾り、而して適宜に庖丁をなし胡麻醤油にてあへしものなり、又胡麻醤油は、黒胡麻を煎りて擂鉢に入れ、能くすりて、之に砂糖と生醤油とを加へて擂り混ぜ、裏漉をなせしものなり

▲骰子形茄子
山掛わさび

骰子形茄子は、茄子の皮を剝ぎ、骰子形に切り、水の中へ放ち暫らくおきて灰汁をぬき、鍋に入れ、之に茄子がつかる程の鰹節の煮出汁を加へ暫らく煮て生醤油を注し（餘り辛くならぬやうに注意をなして）猶ほ煮て、金杓子を以て椀へ掬ひ入れ、おろし芋をかけ、擦し山葵を添へて侑むべし

擦し薯汁は、自然薯、佛掌薯、長薯の中を撰び、皮を剝き擦し金にて擂鉢へ擦し入れ、ザット擂り、之に鰹節の煮出汁を加へてゆるめ、生醤油を注し味をつけしものなり

▲茄子の皮　でんぶ

茄子の皮を纖に打ち、水の中へ暫らく放ちおきて灰汁をぬき、之を鐵鍋に入れ、之に少量の生醤油と砂糖とを加へ、火に掛け、汁が煮詰るまで煮、其辛き加減に味をつけしものなり

▲茄子
南瓜
豆腐　胡麻あげ
付汁　割り醤油
薬味　蘿蔔おろし　擦し柚子

茄子は、中位の茄子を撰び、天地を切り落し、皮を剝き、厚さ三分程の木口切に庖丁をなして水の中へ放ちおきし後ち胡麻油にてあげしものなり

南瓜は、皮の處を棕櫚にて擦り、水にて能く洗ひ、蔕を落し、竪に四つ割に庖丁をなして、實子を除き、適宜に庖丁をなし、胡麻油にて揚げしものなり

豆腐は、布目を切り落し、横に六つに切り算木形となし、之を乾きたる布巾をのべたる上におき、其上へ輕き板を載せおきて水氣をとり而して胡麻油にてあげしものなり

付汁は、鰹節の煮出汁三杯と生醤油一杯とを合せしものなり

△衛生顧問▽

（肥ると／痩ると）（問）私幼きより身體肥え太つてゐて、歩行の時などは膀擦いたし、それかあらぬか動悸高ぶり易く、仕事は昏難く容貌は醜く、實に困難に堪へませぬ、何とか今少し痩る方法ありますまいか。（茨城の梅谷女）

（答）この問に對しては幾度も答へましたが、其後また數十百人の質問がありますから、更に繰返すやうなれど、聊か答へませう。抑々筋肉は肥え太つてゐて、其上堅く締つてをれば上等であるけれど、太つてゐても少し觸れば波動を起すやうな、所謂「でぶ太り」は病的である、そこで、其の療法は、ベンチング氏療法、エブスタイン氏療法、オエルテル氏療法など、色々あるが是等は何れも西洋人に適するので、食品を異にする我が國人には適せぬ、又古來我國人は酢を飲めば宜いとか、櫻の葉を食へば治るとか、或は毎朝梅干一個を白湯で飲めば必ず功あるなど言ふけれど、これも或は健康を害し或は禁厭的で恐らく功は無い、然らば何うして可いかといふに、先づ運動を少し度過る程になし、脂肪類の食物を禁じ、可成肉類糖分をも極めて少量に用ゐ、麥飯蔬菜類を主なる食料とし、飲料即ち牛乳、味噌汁、肉羹汁、湯水なども大いに减じ、出來得る限りは、凡ての食料を平日の三分の二に减らし、鹽辛き物を副食物とし、便通のあるやうにしてをれといふのである、要するに美食を避け、疏食をなし、運動をなして少食とし鹽辛き物を食つて飲料を减ずるのであるから、仲々忍耐せねば行はれぬ方法と謂はねばならぬ、藥用法もあれど、これは極めて健康を害するから素人方には教へがたし。

（問）妾は生來左程痩せてもゐず、左りとて太つても居らず、中肉中丈でありましたが、今より三年前即ち二十二歳の年に一男兒を生みましてから、何の病氣も御座いませぬが、自然と痩せて、以前よりは體量一貫五百目も减りました、この分で進めば遂に何うなるだらうかと思ふと、心配で尚々痩るかと存じられます、何卒肥る方法御教へ下さいまし。御參考までに申し上げますが、職業は學校教員、父母兄弟健全遺傳病は無し、自分も今まで差したる病に罹つたこと無く、現在とてもお醫者は何の病氣も無いから、心配するに及ばぬとのことであります。これを伺ひますこと、二度目なれば催促がましう御座いますが七

月の紙上に是非御答を乞ふ。（肥前の身輕女）

（答）見ずに診斷するのであるから、或は中らぬかも知らぬけれど、三年以前よりも現在に至るに從ひ、身心を勞せらるゝことの多いのではありますまいか。果して然らば極めて心身を平和にし、易化滋養の食品を漸次に增量するやう、即ち牛乳、鷄卵、肉羹汁、粥、味噌汁、牛肉魚肉及び芋類などを、今日よりも明日、よりも明後日とその量を殖し、夜は熟練な按摩をして一時間餘も全身を按摩せしめ、緩りと眠りに就かるゝが宜い、睡眠時間は少くも七時間になされんことを希望す、何うです、この答を讀んで成程と感ぜらるゝでせう。（十八才の夫恩女）も之を實驗して見玉へかし。

【逆上症の療法】（問）私は逆上性にて、常に顔赤く、細かき「デキ物」が出來、近頃は鼻まで赤くなり、さうして鼻の孔が痒いのであります、何か宜い御藥が御座いますまいか。（下長の閒度女）

（答）言ふまでも無く、血液が上部に充血する所から起るのであれば、これが原因となるべき事、例へば飮酒過度、精神過勞、便秘、日射、胃病、月經閉止及び強劇の咳嗽などを除かねばならぬ、されば直接に診察せねば分らぬけれど、兎に角「クヰーン」を月經のあるべき一週間前から月經のあるまで服用すること五六ヶ月續けて御覽なさい。

【子宮病の色々】（問）私は三年前より月經不順、惡寒、頭痛、腰足冷え且つ痛み、白血、年中風邪、食欲進まず、便通惡しくこれは何でありませうか、其の治療の御教授を乞ふ、但し町のお醫師は子宮病とのことであります。（長野縣飯山本町要沈女）

（答）矢張子宮病即ち子宮實質炎でありませう、併しこの治療法は複雜なれば御町のお醫者の御參考までに一寸申しますれば、精神を愉快にし、溫座浴を勵行し、強壯滋養の食物を取り、身體を安靜にし、可成は家族を放れて治療するが宜い。外用藥としては、沃度加里（一瓦）沃度（十瓦）偶利設林（二〇〇、〇）の三品中へ、五十匁位の綿を浸し、後又之を乾燥せしめさうしてこの綿を適宜に小さく切り、之を子宮に挿入するが宜い。內用藥としては、

沃度鐵舍利別（六、〇）苦丁（二、〇）水（一〇〇、〇）

右一日三回食後に分服

（問）私事當年廿五歳にて、廿二歳の時より子宮出血あり、當地病院にては子宮內膜炎とのこと。（中略）何卒療法等御教示願ひ上まする。（京都の度々尋女）

（答）前答療法の中溫座浴を除くの外、悉く應用して御覽遊ばせ。子宮內膜炎に就いての問は、數百ありますが、悉く大同小異なれば兎に角、右療法を行つて、その成蹟を試みられよ。

【歇私的里等の治療法】（問）私事二年前より精神常に鬱々として、食欲も少く、頭痛眩暈など時々有之、地方の御醫者は歇私的里病だと申され、色々治療も受けましたが、仲々治りませぬのみならず服藥しますと却つて食欲減じます、さうして御藥は何れの御醫者も臭素加里（味で分ります）を下さいます、何卒先生我儘ながら臭素

加里ならぬ名藥を教へ玉はりたし。(讃岐の島女)

(答)散歩、運動、滋養物多食を實行し、左の藥を試みられよ。

纈草丁幾 (四、〇) 阿魏丁幾 (三、〇) 白糖 (適宜)
水 (一〇〇、〇) 右一日三回分服

(問)私は子宮病、ヘステリ病、脊髓病、脚氣病の合併にて入院治療溫泉療法など色々盡しましたが功ありませぬ、何卒この不幸女をあはれみ治療法を御教へ給はりたし。(四十一歳の四病女)

右は二月廿六日出の一丈ばかりある手紙の主意の摘記したるのであるが、其後又同女より左の主意の手紙が來た。

「先生を善き人と尊び居つたれど、今は甚だ不公平な方であると思ひます、何となれば外の人の問は皆々答へながら私のは打捨てらるゝかとであります、もう女學世界見るも、いやになりました云々」

(答)四病とも容易に治し難い症なれば、之を顧問欄位で容易に答へらるゝもので無いから、其儘にしておいたので、何も不公平などいふ惡い心から打捨てたので無い、兎に角余の意見を略記すれば、其の中の重き病を第一に治療せねばなりませぬ、それに就ては脚氣もあることなれば、まづ轉地をいたし、心身を安靜にし、滋養の食物を取り、強壯藥を服するが宜しからん、醫師の參考までに一二の處方を左に。

(1) ペリペリン (〇、三) 枸櫞酸鐵 (一、五)
右丸となし一日三回食後に分服

(2) 亞砒酸加里水 (三滴) 林檎酸鐵丁幾 (一、五)
水 (一〇〇、〇) 右一日三回食後に分服

(3) 抱水コロラン (一、〇) 臭剝 (一、〇) 白糖 (適宜)
水 (三〇、〇) 右臨臥に頓服

(1)か(2)かの中何れか一つを連服し、(3)を時々試むるのである。

月經の草々

(問)十五歳になりますが、未だ月經なし何卒良法の御示教を乞ふ。(大分の心配女)

(答)十四歳では身體發育の如何に依つては、無き人の例幾らもありますから、今一年を經てからにしませう。

(問)每年修善寺へ湯治にまゐるまでは一ヶ月おきに月經有之候ふが、昨年大磯へ海水浴に行き候より未だ一回も月經これ無し。(中略)治療法御教示の程祈り候。)二十歳の音樂生)

(答)他に何か病氣のあるのかも知れぬけれど、
クヰーン(余の考案にかゝる)
を毎月二週間宛三四ヶ月內服して見玉へ。

(問)妾十五歳より月經ありましたが、兎角不順勝で、去年七方より遂々無いやうになりました、それで屢先生に伺ひましたが御答ありませぬ、何卒御慈悲を以て、このから女御救ひ下さいまし。(きら子)

(答)前答の如し。

昨日した接木を
ぬいて叱られる
英子

家庭科學

雨の話

天放生

▲「世界の大盡國」

亞細亞歐羅巴でも、亞弗利加でも、亞米利加でも、大陸の重なる西沿岸は、冬の雨の地方と言つて、雨(雪)の量は、冬多く、夏少いが、大陸の東沿岸は、夏の雨の地方と言つて、反對に、冬は少くて、夏は多い。これは地球上の陸と水の位置、太陽と地球の關係、其他の理由から、自然からなつて來るので、日本は亞細亞歐羅巴大陸の東岸に並行して、垣根のやうに連つて居る列嶋國であるから、無論夏の雨の國で、先づ夏の初めの梅雨から、夏殆ど毎日の夕立、夫から秋の村雨まで、土は斷えず自然肥料の恩澤に浴し、草木穀菜は靑々と繁茂し、成熟する。されば歐洲人が臺灣を指して「美の國」と呼び、日本を世界の「大盡國」と讃美するのも尤ものことで、此點に於て自然の恩惠に缺けて居る大陸西沿岸の諸國を見れば、些か氣の毒の感を禁じ得ない。

▲風位と風蔭

抑も雨の分量といふものは、其地方の價値を左右するものであつて、地面の肥瘠、氣候、人類の生活、一切之に支配されると言ふてもよい。あの幾千里廣漠々たる亞弗利加の大砂漠でも、隅の方の雨露を受ける地方は思つた程の瘠地では無く、昔埃及の盛な頃には、南方砂漠續きの地方へナイル河の水を引き、又は井を掘つて、幾百里の砂原を肥えた地面にし植民した跡が殘つて居る。現に今埃及にはナイル河灌漑復舊の大工事が將に成らんとしつゝあつて、歷史家人類學者などは、水の來て腐らぬ前に砂原の中から、太古の遺物を搜して盈かうといふので、夜を日についで堀起して居るといふ話である。土地の肥瘠や地方の氣候は一に水

に關係するもので、サハラ砂漠のみならず、アラビヤの砂漠でも、北支那ゴビの砂漠でも、何れも一に風の吹き廻し、二に山嶽の位置により、乾風ばかり吹いて來て、濕つた風が來ないからである。猶立入つて言はうならば、サハラ、アラビヤ、などの砂漠は風が亞細亞大陸の方から重に吹いて來て、南の太洋の方から來るのが少いからで、ゴビの砂漠は南にヒマラヤの大山脈、東に興安の峻嶺、北にアルタイの高峰、西に天山の連脈とかう、屛風を立て廻されて、濕氣は皆奪ひ取られ、乾いた風ばかり吹くからである。日本でも攝津・播磨・美作一帶が鹽の製造で名高いのは、矢張ゴビの砂漠の道理で、南に四國の高山が聳え立ち、北に中央山脈の屛風を繞らし、南の方太平洋から來る水分も、北の方日本海から來る水分も之に遮られて、空氣が外に比べて乾いて居るから水が早く蒸發して、鹽を造るに都合がよいのである。

▲回歸線地方

以上は地球上一般に通じての話で、例は外にいくらも擧げられるが、其外に雨の少いのは大陸の西岸の緯度廿三度半の地方である。此地方は年中定つた方角にばかり風が吹いて、其風が何れも北極南極の寒い方から來ることになるから、水分が少く雨が少い。地圖を開いて其地方を見れば、亞弗利加ではサハラに當り、亞米利加では北チリ南カリフオルニア、夫から濠洲でもプリユー山の西一帶は不毛の地である。

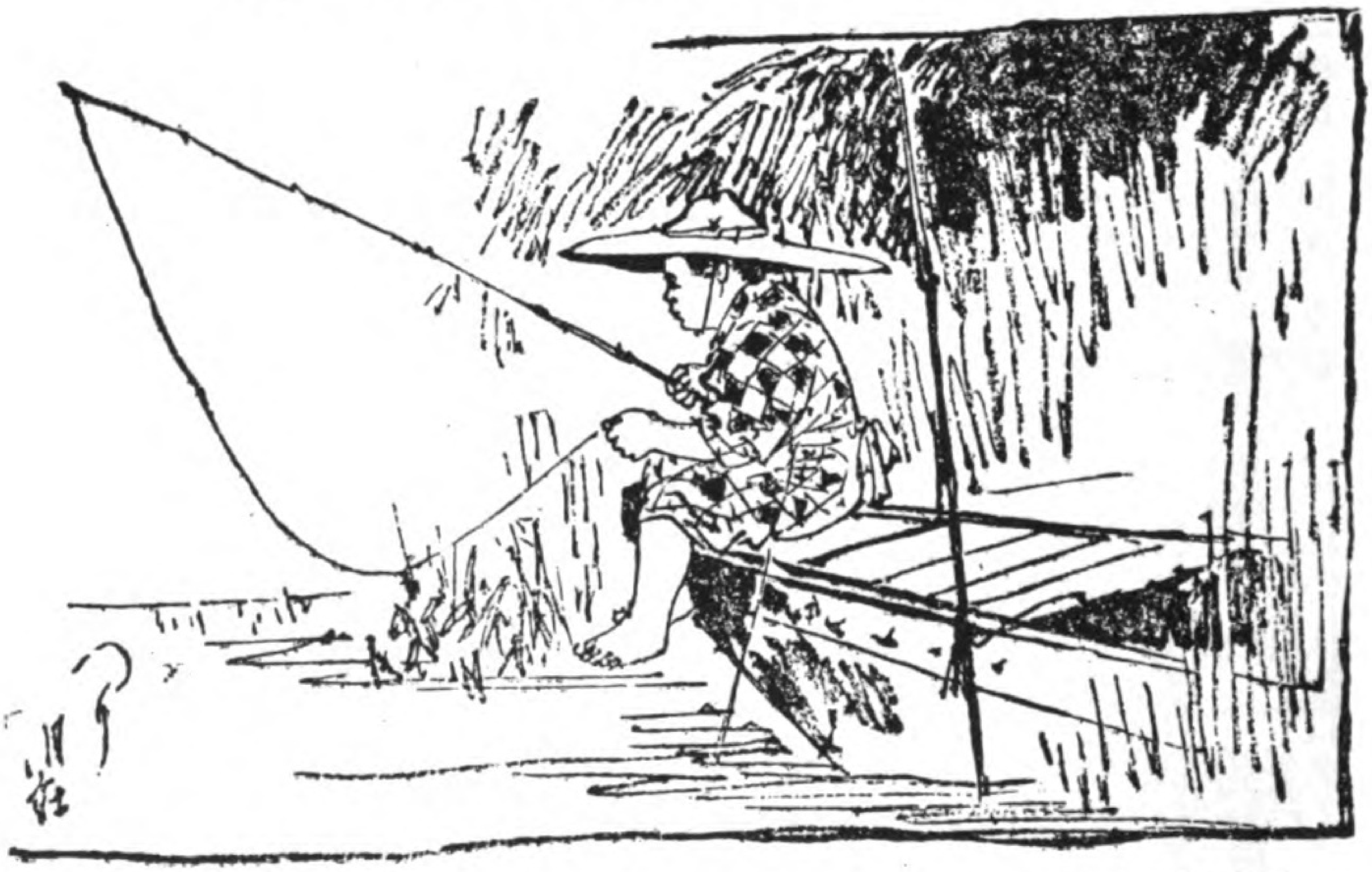
▲赤道直下地方

時季に因つて雨の量に著しい相違のある地方がある。赤道直下(赤道から南北へ百五十里許づゝ)の地方に於ては、毎日午後になれば恐ろしい雷鳴があり、大驟雨が來る。毎日定つて來る。尤も冬至と夏至、即ち太陽が南か北へ遠く移る時分は雨の量が割合に少い。夫から島や海岸は無論割合が多い。

次に赤道直下地方より離れた熱帶地方では様子が少し違ふ。太陽が高く來るにつれ、赤道直下と同じやう

な有様になり、雨が多い。水分が多く蒸發して降下するからである。太陽が低くなれば雨も減る。但し南半球と北半球は之が反對であるから、雨が南半球に最も多い時は、北半球には最も少い。此地方は年中非常に暑いのであるが、雨の多い季節丈は凌ぎよいから、之を冬と言つて居るので、太陽が高く來る時冬だから、日本などゝは反對になる。即ち印度、比律賓、暹羅、亞弗利加、其他の此地方では、今が冬で、雨の最多い時である。南半球は反對だから、夏冬の呼名が日本などゝ一致する。

▲「冬の雨」と「夏の雨」



大陸の西岸北緯及び南緯廿八度から四十度位迄の間の地方、即ち北米のカリフォルニア洲、南米のチリ、ペルーなどは、太陽が高く來れば、風が貿易風といふ定つた方向の風になり、これが何れも乾いた風で、雨が少くなる。即ち夏は雨が少いのであるが、之に反し、太陽が低くなるにつれ、雨が又段々多くなつて來る。だから大陸西岸の此地方は冬の雨の地方と言つて、草木も穀類も其恩澤に浴することは出來ず、地味は瘠せて、此地方に住む人民は、生活の爲、餘分の人智と勞力を要する譯になる。大陸の東岸にも同じ道理が行はれてよい筈であるが、幸

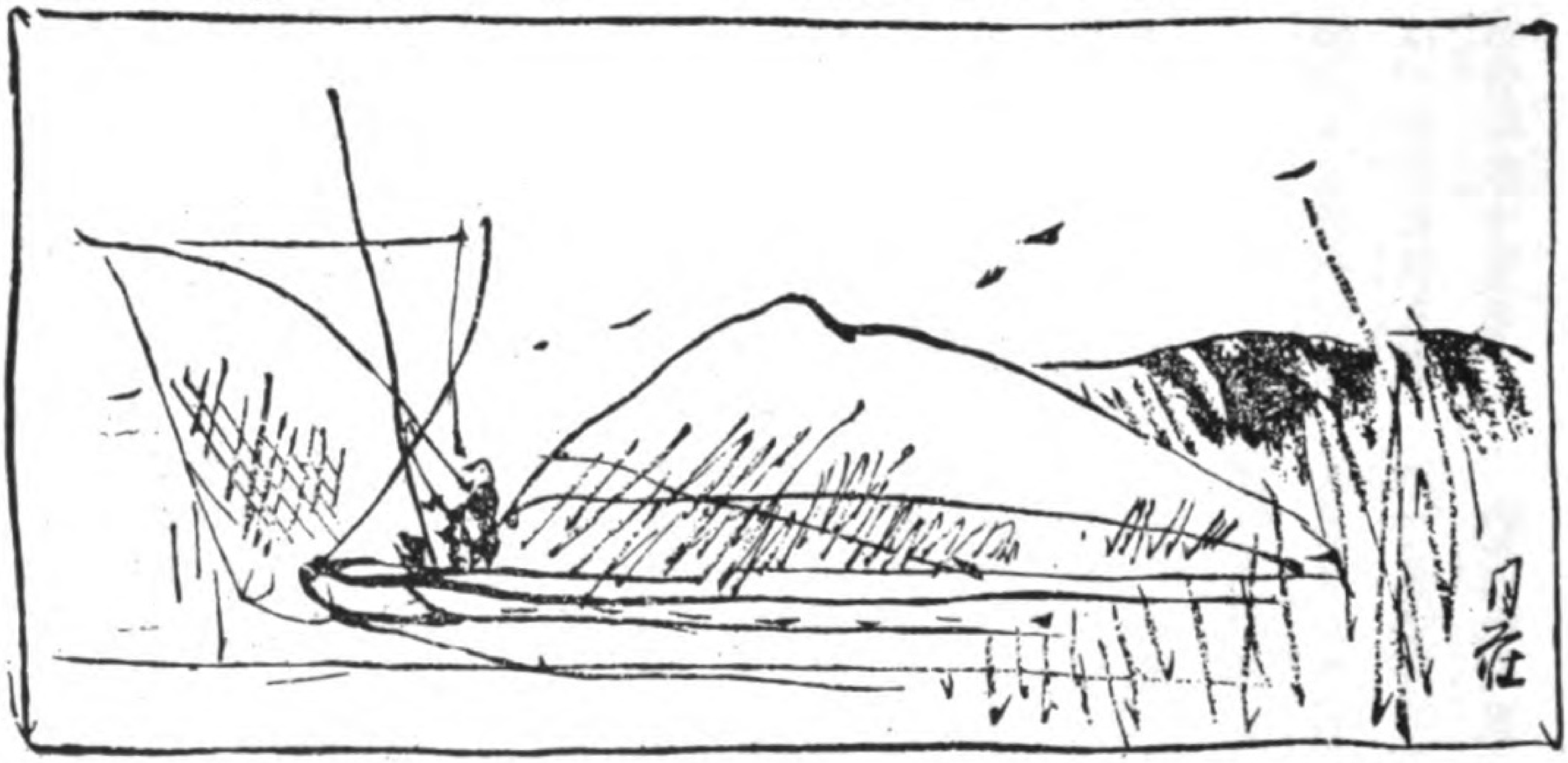
なことには、太洋と太陸の位置の關係から、夏は東岸の東の方の洋の上に空氣の薄い所が出來ることになり其處へ他の空氣が吹いて行かうとする爲めに、北半球で言へば、南風又は巽風が多く、此の南風や東南風は熱い方から洋上を渡つて來るのだから、雨が是非多いことになるので、西岸とは全く反對である。即ち夏の雨で、丁度草木の生育成熟する時期と合するので、此地方の住民は非常に厚い天福を享けて居ることになる。我日本や支那などは即ち其隨一である。

以上述べた各地方より極迄の間は、風の向が定つて、從つて雨雪の量も年中殆んど變化が無い。そして其量は一般に少い。

▲雨と文明

地球上雨量の比較大体は右の如きものであるが、さてこゝに面白い關係が自然の恩惠と歷史との上に見えて居る。世界文明の變移である。我々が萬國歷史を繙くと、先づ現はれるは太古の文明國埃及、印度、支那などで、夫から下つて希臘、羅馬となり、更に下つて歐洲諸國となり、近く日本も仲間に入つて來た。其順序を考へて見ると、世界最古の文明國は、地球上自然の恩惠の最も多い地方に位置して居る國で、先づ埃及には暖い太陽が照つて居て、有名なナイル川が小麥を殆ど天然に產して呉れる。ある人の調べで見れば、人間一生涯に二三十圓もあれば、衣食住には事を缺かぬとしてある程の樂園である。夫から印度、これも住居や着物の無くても濟む國で、人の少い昔には自生の芭蕉や椰子の實を食べて居ても生命は繫げたものである。さなくとも氣候は熱し、雨は前言ふたやうに非常に豐富であるし、(ヒマラヤ山の南麓地方は地球上雨量の一番多い地方である)ガンゼスやインダスの大河は充分に灌漑してくれ、肥土を運んで呉れるし、生活の苦は極少かつた。支那とても其通り、黄河の水、泥、夏の雨、矢張生活の苦は少くて、心を他の事に專らに出來た。然し　皇后陛下御製の通り、「金剛石も磨かずば」で、人間は久くこんな安氣樂の狀態でいつ迄も進

歩の止らぬ程の靈妙な心情は授かつて居ない。矢張大盡子に野良が多い道理で、折角の文明も遂に滯つて了つて、甚しきは半開未開と呼ばれる程度に迄零落し、代つて起つた國は比較的自然の恩惠の少い、額の汗で衣食を得、智慧を絞つて生活した人民である。希臘羅馬も生活が樂になつて亡び、今の歐洲文明は北方野蠻の貧民から起つた。今日でも變りなく自然の恩惠の最多い埃及、印度、東支那は未開國で、葡萄牙西班牙は零落し、最天福の少い大陸西岸の寒い北に偏した英佛獨に大文明が崛起して、其名譽を恣にして居るのは、餘程面白い現象であつて、其間に爭へぬ大眞理を認めずには居られぬので、翻つて我國今日の境遇を思ふ時、如何なる語を以て明治の日本國民籍に我が姓名を列ねて居る幸福を感謝して宜しいか、適當の語を字書の中に發見することは出來ぬのである。



西洋音樂の研究

（合唱と管絃合奏）

小松玉巖

西洋音樂と一概に云ふと、極めて廣い意味を有して居りますが、今此處では、合唱と管絃合奏につきて最も通俗な、即はち專門的でない方面に付いて、極くわかり易く說明して見樣と思ひます。勿論是等のことは委しく述べる時には、短かな紙上にては到底つくしきれないから、此處には只素人に必要と思ふことのみを、書いて見ませう。

○西洋音樂には合唱と云ふものがあ

る。現今では方々の女學校などでも敎えて居る樣ですが、此の種類、性質、組立方などに付きては余り委しく知てる人はありません、

○合唱は名の示す通り、大勢の人が合して唱歌することで、音樂會や、敎會堂などへ行た方は知つて居る。即はち合唱は此の大勢の人が一時に唱歌して、しかも各自が別々の曲節を歌て、其が極めて面白く調和する處に無上の興味が含まれて居ります。

○是れが抑も樂理上の調和の面白き所以で、調和の興味を研究せんとするには、先づ此の合唱から始めねばなりません。

○大勢の人が一所に歌ふと云ふと、讀者は或は日本の長唄や乃至は常盤津の如く、同じ樣な曲節を同じ樂器に合して、しかも大勢の人が歌ふのだらふと思ふかもしれぬが、邪うでない。

○前にも云た樣に合唱は違た聲の調和するのが面白いので、若しも同一曲節を歌ふならば、如何に其人數が多くとも合唱とは云へぬ其は唯の單音唱歌である。

○即はち合唱は、少なくとも違つた聲が二部以上より組立つもので、漸次に三部、四部等になるのである。稀れには五部、六部等もあれど、其れは極めて六つかしい專問的音樂になるのである。

○二部よりなるものは、是れをデユーエットと云ひ、主に女聲二部よりなるもので、最高音、高音、が是を歌ふのである。時に男聲二部があるが、これは、中音、低音が、唱ふのである。

○此の二部の特長とも云ふべき、又最も興味のある處は、最高音の歌ふ高き聲を、高音が扶けて、柔の內に剛を失せず、剛の內には柔を含み、相助けて調和の妙を現はすところにある。

○三部よりなるものは、是をトリオと云ひ、女聲の二部に、男聲の一部が入るもので、都合三部となるのである。時には女聲のみの三部、又は男聲のみの三部もあるが普通の三部とは最高音、高音、低音よりなるのである。

○其れで此の三部の特長は、弱き華麗なる女聲に、

更に莊重なる男聲の入るので益々和聲の工合が複雜となり。諧聲の進行が大に面白くなる、其れに是れまで合唱の土臺とも云ふべき低音が無かつたが、此處に始めて其の欠點が補はれるのである。

○四部よりなるものは、是れをクオルテットと云ひ、是れにて始めて合唱は完全の形となるのである、是れまでの二部も三部も、皆な此の四部の畧式にすぎんので、完備した合唱と云ふと、此の四部にきまつてるのである。

○四部合唱は以前の三部に尙一部の男聲を入れたもので、即ち其の組立は、最高音、高音、中音、低音、の四部分であります。

○是れは即ち合唱の完備した形式で、合唱のあらゆる特長は遺憾なく現はさるゝのである。今是れを譬へて、云てみると、先づかりに一本の草花とみて、低音は其の土臺、即ち根の如く、中音は其莖の如く、高音は其の葉の如く、最高音は花であります。是れにて完全なる植物とはなるのである。

○であるからして、若し讀者が音樂會に行かれた時は、前の譬を直接に其の合唱にあてはめて考へると非常によくわかる、低音の莊重なる、中音の確實なる高音の漂漾温雅なる、最高音の華麗絢爛なる、如斯種々の要素特長が集まりて此處に始めて完全なる合唱を見るのである。

○此の次に説明しようと思ふのは管絃合奏である。此の管絃合奏は西洋音樂の最も發達した、價値のある處で、其大なるものは三四百人の演奏者を要するのであります。少なくとも六十人は是非共入用である。普通完全なる人員は百八十人である。

○我國では未だ完全なる管絃合奏は出來ない。音樂學校などで時日演奏されるものは極めて簡畧なものに過ぎぬのである。

○去れど近頃は日を逐て進歩してゆくから、一兩年の内には完全なものが出來る樣になりましよう。先達演奏した、カイゼル、マーチの如きは稍其れに近きものである。

○管絃合奏に用ゐる樂器は實に澤山ある。弦の方にてはヸオリン、ヸオラ、セロ、ダブルバス。管の方ではフリユート、オーボー、クラリチット、コルチット、トランペット、トロンボン、フアゴット、バス、等である。

○是等の樂器は皆夫れ〴〵特別の任務があるので、今わかり易く類別して見ると、ヸオリン、フリユート、オーボー、は一番高き音を出し、ヸオラ、クラリチット、コルチットは次高音を奏するのであります。

○是に次いでセロ、トランペット、トロンボンは中音を出し、ダブルバス、フアゴット、バスは低音を奏することに成つて居ります。

○此のほか管絃合奏には、ドラム、シンバル、トライアングル、カスタチット、タムタム、等が入る、共に管絃學に欠くべからざるものであります。

○管絃合奏の面白味はどこにあるか、と云ふと、一言にして盡くすことは出來ぬが、先づ音樂と云ふものが、最も有機的に、且凡ての樂器の統一した、最も完全なる形式と成たことである。

○次いては種々雜多な音色を適當なる感情に配して演奏さるゝこと。是は他のピアノ等の樂器にては到底なし能はざる處である。

○管絃合奏は凡ての音樂の内で一番進歩したものである。故にあらゆる音樂の内で一番に六つかしい。始めの内は唯八かましいと思ふばかりで一向面白くないが、畢竟是は耳の脩養の不足から來るので、面白くないのではなくてわからぬ爲である。

○一體我國の人は耳の脩養を怠たつて居る。其結果として少しこみ入た音樂になるとわからぬ、そして其のことには一向氣がつかないで、一に西洋音樂は日本人にはわからぬもの、不適當なものとして仕舞ふ。大變な考へ違へではあるまいか。

○耳の脩養のたらぬ人は實に不幸である。人間の當然享くべき最大美術の一なる此の音樂の美的享樂は得られぬわけである。此の點に於て目今の日本人は耳より享くべき藝術は持たないと云つてもいゝでせう。

○兎に角、幼年の頃より耳の演奏は大なる敎育事業

の一として嚴重に成すべき義務があります。此の方法はほかにはない、なんでも度々音樂會に行き、又自ら演奏することであります。

▲音樂を聽くと小說詩歌を讀むとは、丸で同一である。小說の出來事が、頁をあけて千變萬化してゆくのを見ると同じく、音樂に表はれたる諸音も秩序亂れず、進行しゆき、或音は中途に消え、又は匿れ、恰かも小說に現はるゝ出來事等の變化と同じく、千變萬化してゆく。是が特によく管絃合奏に於て發表せらるゝのである。

▲故に管絃合奏を聽く人は常に小說に對するの態度を以て聽くとよいのである。音樂は常に一篇の物語りである。詞なしの物語りである、而して聽者にして若し此の聲のなき詞を讀むことが出來る樣になれば、此處に始めて音樂を聽く資格を供へたと云て宜しい。

▲今回は此の位にして後は又稿を更めて述べて見樣と思ひます。

女子高等師範學校附屬高等女學校

傷病兵士慰藉運動會(口繪解)

開會九時

順序

第一	體操	乙四年
第二	行進	五年
第三	バスケット、ボール	甲四年
第四	土嚢運び競爭	一年
第五	カレドニヤン	三、甲乙四、五年 / 専攻科一、二、三年
第六	徒歩競走	各級有志者
第七	赤十字遊戯	一、二年
第八	衞生隊	専攻科一年
第九	メニユエット	三、乙四年
第十	センター、ボール	二年
第十一	髮結ひ競走	三年
第十二	三立競走	甲四年
第十三	暗號遞進競走	専攻科二、三年
	休憩	正午十二時ヨリ午后一時マデ
	唱歌(傷病兵士慰藉の歌)	一同合唱
第十四	體操	甲四年
第十五	支度競走	一年
第十六	障碍物競走	乙四年
第十七	洗濯競走	専攻科二年
第十八	ポルカセーリース	甲四年
第十九	抽籤競走	一年
第二十	擬戰	三年
第廿一	コチロン	乙四、五年 / 専攻科一、二、三年
第廿二	架橋競走	乙四年
第廿三	行進	二年
第廿四	攻防球	五年
第廿五	徒歩競走	各級有志者
第廿六	綱引	五年 / 専攻科一年
	唱歌(たのしわれ)	一同合唱(二部合唱)

閉會四時

女子の旅行演習

子爵　加納久宜

△旅行の發端

女子は從來の習慣として常に家内に蟄居して容易に外出しなかつたので、其弊終に獨歩行きは出來ぬ樣な臆病者になつてしまつた。女子は敎育の母だと云ふのに、斯る意氣地なしの母の手許で育てられるのだから男子迄が意氣地なしになる。今や帝國は世界の一等國となり東洋平和の盟主を以て任ずる程の位置を占めた上からは、日本の女子も單身獨歩で歐米漫遊を試みる位な勇氣がなくてはならぬ。しかし高きに登るは低きよりするで、臺灣や北海道に行くには近縣から始め、近縣旅行の前には先づ市府内の獨り歩行きが苦にならぬ處より練習を進めねばならぬ、余が家の憲法は、子供の通學は單身に限り、汽車は三等の外には乘らしめず、雨天でなければ電車にも乘せぬこととしてある。今は華族女學校へ通學するのは庭内の散歩同樣に苦にせぬ樣になつたから、本年の試驗休みを時機として第一回近縣旅行演習をさせることにしたのである。余は此事を子供等に宣言したのは凡二ヶ月以前のことであつたが、苦勞どころのことではなく非常の悦びを以て毎日旅行の事を互に語り合ひては指を屈して出立の日を樂んで居た。

余は六人の子女を持て居る。第一第二は男子で第三乃至第六は女子である。長男の年齢は十八年で末女は十二年である。男女を同一方面に旅行させては、自然長男が總指揮官となつて餘は皆之に依頼する樣になるの傾きがあるから、男子と女子とを二た組に分ちて旅行の方面を異にすることと定め、出發の日より第四日を以て家に歸り來るべきの豫定となした。而して男子二人に對しては旅行の方面は其の選む處に任せた處が、三浦半島全部を踏破して歴史的地理的の調査を遂げて來たいとの望みを聲明した。又女子は十五年を頭にして四人一組は千葉縣下一の宮より大原方面東海岸の各地點を巡遊すべきことを豫定したのであつた。

△旅行の準備

扨旅行の準備としては男子は學習院の學生服であるし、女子も加納流の改良服で、是亦餘所行きや不斷着などの差別はない。只女子には柳行李の手提縦一尺二寸各一個を分ち與へ、其の中には一枚の寢衣、襦袢、足袋沓下、手拭、石鹸、ブラシ、郵便ハガキ三枚、洗面具等は一樣に準備せしめ、其他は各自の必要と感じたる物品をば納まり能ふ限りに於て勝手に之を持ち行かしめた

旅費は往復四日間を豫算して宿泊料、晝飯料、電車、汽車、茶代、雜費豫備金等を併せ一人前金六圓を男女六人へ別々に分與して、旅中の經費を不共通として歸宅後決算の報告を爲すべき旨を約束した。尤男子二人の一行に對しては旅中の携帶品、金錢の支拂、宿泊地、順路等一切本人の所爲と考案とに一任した。其の譯は比較的年長の組であるから之に關渉するの必要がないのである。又女子とても絶對的に經濟の

不共通は事に臨みて不便であるから、一回に五十錢か一圓宛を各自の金嚢中より出し合ひて之を共同金嚢の中に投じ、年長の女子が之を格護して共同上の經費は此の中より支拂ひ、在中の共有金盡くる時は前同樣補充出金の手段を繰返すの方法に定めしめた。

余は子女等が出發の前夜に左の要件を訓示した。

一旅行と散歩と取違へると勿れ。

二途中の事物に留意して各自の感を手帳に記るし歸宅後之を演説するの資料となせよ。

三四人ばら／＼になりて行く可らず旅中は殊に中能くして互に忘れ物抔せぬ樣に氣を付け合ふべし。

四汽車の停まる驛々に注意し且乘降の地點を誤ると勿れ。



五勝手に買物を爲すと勿れ。

六旅中の經費は各自手帳に書き留め計算に間違ひなき樣注意すべし

七宿屋に着きたる後外出する時は荷物を宿屋に託し四人一緒に出掛くべし又入浴の時は二人宛交代すべし。

八途中萬一道に迷ひ又は當惑するとが出來たならば巡査を尋ねて保護を乞ふべし若し見當らざる時は風俗の賤しからざる年寄に依頼すべし。

余は斯く訓示を爲して余の名刺の右側に左の文句を記し、各一枚を分與へた。

子女四人獨立旅行習修の爲め貴地方面へ差遣致し候に付萬一

途中に於て不意の出來事に遭遇候はゞ何卒相當の御保護被成下度候

男子と女子との二組は明治三十八年四月四日を以て同時異方に出發し、男子は六日女子は七日に歸つて來たから、先づ女子四人の手帳を見た處が各自旅行日誌を作つて來た。而して四人の日誌は記事の疎密、文の功拙こそあれ遭遇が同一だから大體は異つて居ないのである。幸ひ記事は四日に始まりて七日に終り、其の間四日に分つとが出來るから一日づゝの日誌を一人分と定め四日乃至七日迄を抽籤せしめたるに、日誌は左の順次に依りて謄寫することに定まつた。

明治卅八年四月四日旅行記　第四女夏子
同　五日　第一女國子
同　六日　第二女八重子
同　七日　第三女治子

四月四日

（夏子誌）

大森を七時三十五分發の滊車にて新橋に行き尾張町より電車に乘りたるに八時十分過ぎて兩國橋に着きたるが丁度八時半で停車場に着いてからまで一時間半あるので待で居ました

一時間半たつと滊車は十時十分に兩國を發しました兩國本所の間は高架鐵道になり「パノラマ」十二階が一と目に見ゆ

本所から龜井戸、龜井戸には天神があり此次に平井に着き進んで小岩に着く小岩は芝又帝釋天があり又行くと市川。市川には大なる鐵橋あり鴻の臺へ十八町市川の桃林の美しさ恰も三十町もあるかと斗りに思はれる

此の次は中山、中山には法華經寺次に船橋には大神宮三咲の櫻が名高い津田沼此處には俘虜が着いて居る此の次は馬加此處は長作の夫婦梅名高し稻毛を通り過ぎれば千葉こゝで乘り換へ千葉を發したのは十二時四分前で本千葉に着き又七分で曽我に到る我曽には小松林多し數十町の松林を經て野田に至る土氣と大網との間に長き「トンネル」あり大納を出で本納に着す本納より茂原岩沼を經て一の宮に着せり停車場より倶樂部（宿屋）に行き御飯を食し運動しないといけないから東屋（町内の豪家）に遊びに行き宿に歸りたのは九時過ぎで寢た處だ濱の音がごー〳〵云ふのであまりよー寢られなかつた

同五日

（國子誌）

朝目覺むれば五時過なり戸を明けて見れば空は曇り居れり齋藤ツル來る七時半なり淺野より迎ひ來りし故に四人にて行くキヨと共に一の宮川を船にて下り橋の際に止まり上りて海濱に到る連れ來りし船頭の曰へらく明日は舊三月三日なれば潮能くば蛤出づべしとて堀見しに大なる蛤出でぬ喜び堀見れば數多く出でぬ風呂敷に數多くなりて喜び居る中ちに雨は降り出しぬ海濱なる御園（漁業者の主なる者）の番屋にて雨の歇むを待つ程に船場の翁傘を持ちて迎ひに來りし故に其の家に到る

晝食を濟まして休み居る處へ御園孫七來りて多くの貝を貰ひ一時頃

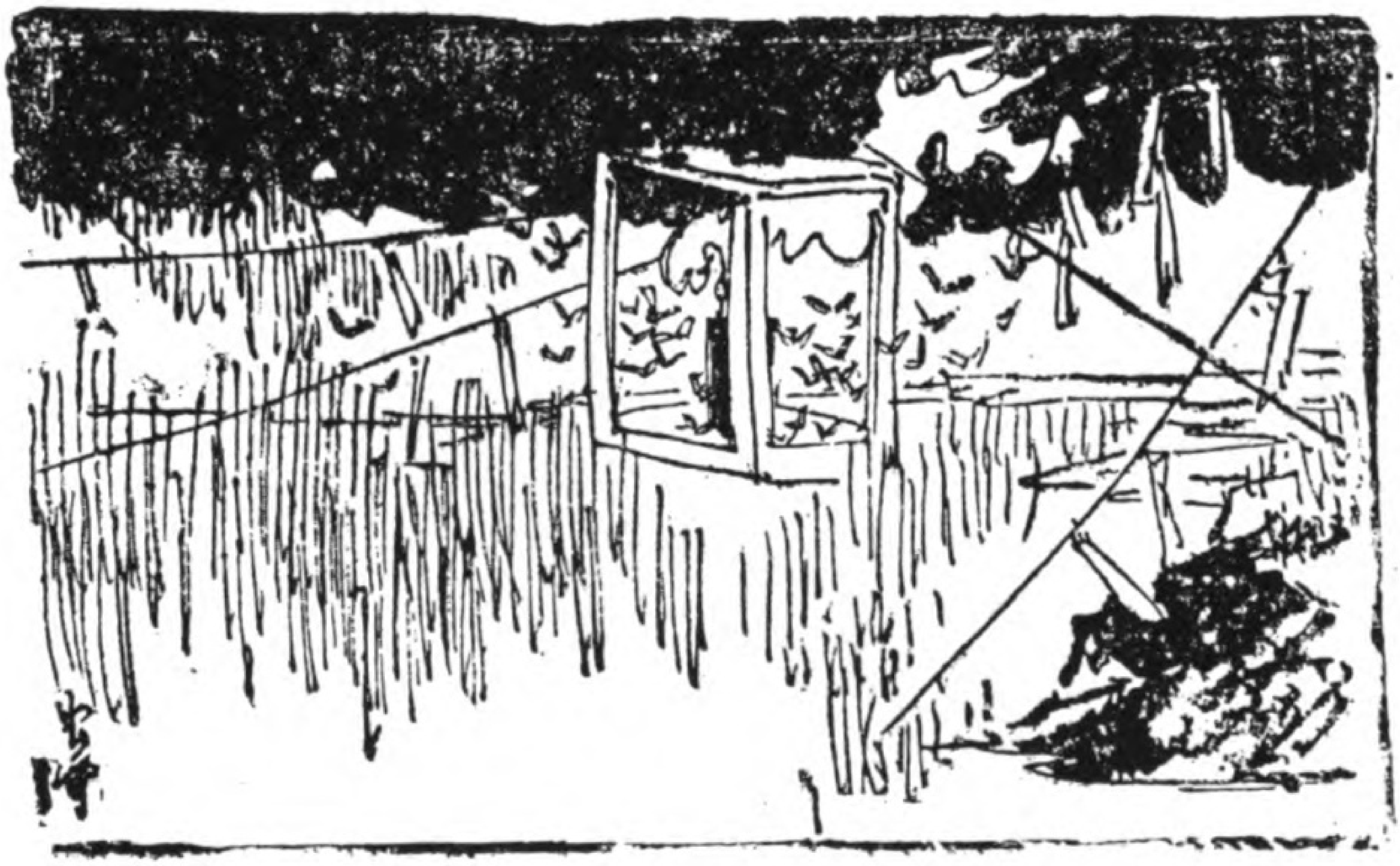
に再び船に乗りて一の宮川を溯りて歸る雨は益々烈しくなりぬ淺野方にて遊び着物を着更へて堀内氏の家に音づれぬ」夫より城跡を見に行く古き井戸のみ殘れり山を巡りて勧明寺に參る最と淋しき寺にして二個の大錨數多の貝を帶びてあり大綱の者献ぜし由夫より玉崎神社に詣づ、神武天皇の母君玉姫を祭る境内いと靜かにして此處にも同じく錨一個あり、勧明寺のより較々大なり「齋藤ツルの招きによりて遊びに行く淺野方より迎ひ來りし故に歸る母上よりお文來る」夕七時堀内の媼來る湯に入りて八時床に就く

同六日　（八重子）

朝五時半に目をさまし見れは皆樣はお天氣だ〳〵と大騷ぎ寢衣の儘にて戸を開き見れば旭の出にて赤く漸く水上を離れたる處にて甚美くしかりき夫よりあはただしく着物を着更へ朝飯をすます間もなく淺野より大原に行くとき迎ひ來りたれば服に着かへて下り滊車大原行九時四分と云ふので辨當を持ち出發せり十分にして大東驛に着す此處より名高き大東ケ岬は二里ありと云ふ駛ると七分にして長者町驛に着すこゝより名高き淸水の觀世音は一里ありと云ふ一分間停車して發す此邊松山多しこゝにて海邊少し見ゆ走ると十分にして三門驛に達す磨き砂の山多くして岩の如くになり居るを機械にて製造し叺に入れ東京に出すなりとて停車場には山の如くに積みありたり」此處にて一分間停車す見ゆる山は皆禿山なり走ると十三分にして大原驛に達す停車場より十五六町にして淺野の知人青柳多吉なる人の家に着きぬこゝなる老人夫婦我等を饗なし吳れたり家は田舍家には大なる家なり着きて少し休み夫より老人の案内にて海に參りたり途中甚だ面白く初めは田其の次は



畑次は山にして菫多く咲き居たり少し前きは土筆山にて、一寸置き位に生へ居れり又少し行きたるに岩の「トンチル」にて凡一町餘あり此處を通りたるは十一時頃なりき」此の時雨はポツ〳〵降り來りたり又少し先きに「トンチル」ありて前よりは少し短かかりき此處にて活様と迷子になり何處ともなく探し當てたりこゝからは海は早見へたりこゝ迄青柳方より二十町位もあり海を見れば早くも潮は干居りて岩がニョキ〳〵出て居り人が多し天氣なれば岩の内に蛸烏賊等居る由なれども天氣惡しく其の上寒むかりし爲め一疋も居らず左れども「アカメ」「ヒジキ」等多くあり海の質は近きも深き處あり遠きも淺き處等岩の爲めにてデコボコなり棒にて突きつゝ歩行き居り其の内國様が岩の間に陷ち給ひて半身ビシャ〳〵となり寒きため或漁師の家にて焚火にあたりたり」其の内潮の上りたるに或網好きの獵師投網を打たるに黒鯛四枚かゝりたれば夫を見て青柳の家に歸りたり夫より御辨當を濟ます内に御湯に入り出た時は早吹き降りとなりて夕餉を食し終列車六時四十四分大原發滊車にて宿屋（一ノ宮）に歸る一ノ宮に着せしときは七時二十二分なりき夫より淺野方に行き十時半迄遊び十一時に床に就きたり



同七日

（治　子）

朝目が醒めてウツ〳〵見れば日は戸よりさして明るくあれば四人は戸を開けて居る内一番滊車は出て行く處なりき夫より驚きて起き二番滊車八時三十分に一ノ宮を發車し雜誌を見つゝ岩沼に着きたり此の地は茂原寺名高し處々の松林を打過ぎて茶畑など長き間通りて茂原驛に着きたり大きな湖の如き田甫を過ぎて本納に著きしが此田甫は土筆多く生じ居れり大網に著きしに此の滊車は後と戻り爲して發車しピーと鳴りし滊笛は「トンチル」の知らせなりゴー〳〵と音しつゝ暗くなり

程なく出でゝ土氣に着きたり潰したる如き家處々にあり松林を通れば鳥歌ひ居る處を汽車馳りて本千葉に着きたり此の地は一體に遊覽に適すと云ふ四分間にて千葉に着きたれば乘り換へて乘車せんとせしに發車迄一時二十分間なり是れ故に散歩ながら或る寺に參りしが二ヶ月前に火災の爲めに燒けて大なる銀杏樹が黒く燒け居れり見て歸り汽車發して稻毛に着きしに此處には稻毛海氣館あり右は海になり景色殊に宜しく馬加に着き具作の夫婦棒名あり白き山の如く或は大井の堤の如くなり大山小山あちこちにあり習志野に着きしが此處より一里餘の所に俘虜居れり津田沼驛に着きたり我が住居に近き大井村に似たる處多し舟橋に着きたり三咲の櫻最有名なり中山に着き中山法華經寺最名あり平井は眞間山弘法寺あり平井の大なる鐵橋を渡る小岩に芝又帝釋天あり龜戸に着きたりしが古き燒場の跡あり本所より高架鐵道になり淺草五重の塔パノラマ館見え愉快なりき兩國に着きければ電車にて新橋に至り二時四十分に出て大森驛に着きしは三時なりき

旅費は左の如く決算報告をなした。

一金拾　　銭　旅行案内一冊
一金三拾貳銭　草履四足
一金貳　拾　銭　御園孫七へ
一金五拾八銭　一の宮迄返り汽車賃
一金壹　　圓　宿屋へ茶代
一金貳圓九十銭　兩國より一ノ宮迄乘車賃四人分
一金拾　　銭　寐[illegible]波船賃
一金五拾八銭　大原迄四人分乘車賃
一金三圓六十五銭　四人分宿屋拂
一金五　拾　銭　宿屋女中へ
一金貳圓九十銭　一の宮より兩國迄四人分乘車賃
一五　　銭　兩國驛赤帽
一金五　　銭　新橋驛赤帽
一金貳拾貳銭　兩國より人力代一人分荷物ありたる爲め
合計金拾參圓拾五銭（大森新橋間は四人共學生定期乘車劵あり兩國迄の電車は回數切符あれは往復共に費用なし）
四人分旅費豫算金廿四圓と差引金拾圓八拾五銭殘餘

女子四人ながら同一の服装で、而も洋服七分和服三分と云ふ間の子であるから、三等汽車の同乘者中で種々觀察的評語を下し中には質問を試みた者もあつたそうだ。四人で宿驛を散歩すると物珍らしげに男女老少ぞろぞろ前後を擁し來りて見物人多かりし由、是は無理ならぬ事と思ふ。東京の中心たる銀座通りでさへも、西洋人が商家の店頭にたゝずめば忽ち其の周圍を彌次馬連が取圍みて外目にて氣の毒に感ずるを常であるから、寧ろ地方は遠慮する人が割合に多いと云ふべきであらう。旅行演習は近きより遠きに及ぼすの主義を執り、殊に千葉縣一の宮町は舊藩廳の所在地であつたから、旅行日誌中にも記るしてある如く二三の知人にも厄介を受けたそうだが、兎に角我家とは山河迥けき旅寢して不見不知の人に接し、短日子とは云へ獨立の生活を爲して經濟上の趣味をも嘗め、又多少觀察力や注意力を自らに喚び起さゞる可からざるの境遇となつたのだから、是丈けは確かに効果を得たるを疑はぬのである。故に來三十九年第二回の旅行演習は今少し遠距離の地方例之は江の島鎌倉とか下野の日光とか絶對に他人の中に入りて一身を處するの修習を爲さしめんことを期して居るのである。

無名の女丈夫

十字架のお婆アさんとて基督教社會にて評判高き森田みと子刀自は逝けり。刀自は明治學院の出身にて足利町の傳道師たる森田金之助氏の祖母にして又濱花銀行の頭取山中隣之助氏の叔母なり。其基督教の信者となりしは明治五年の頃にして當時其の良人が病氣となりて築地病院のドクトルホールスの治療を受けし際病院の待合室に於て說教を聞きしに始まれりといふ。刀自の女、北原春子の夫は基督教研究の爲め築地にて聖書販賣所の賣手となり、次で十字屋書肆の番頭となりしかば刀自も之れと同居し、道行く人々を誘ひて教會に導き爲めに直接間接に信者を造ること多く爾來十字屋のお婆さん、又耶蘇のお婆アさんの渾名を博するに至れり、今の日本橋教會、芝教會、新榮教會、銀座教會、數寄屋橋教會の信者にして、刀自の誘導に依るもの頗る多かりしといふ、兎に角刀自が基督教草莽の際に於ける傳道の功勞は頗る大なるものありといふ、刀自今年六月十一日高年九十六歲を以て其愛孫森田氏の別所に安然として永眠に就けり。刀自人と爲り天資强健、忍耐人に過ぐ。壯年の頃幾多の困難に遭遇して備さに世路の辛酸を嘗む。然れども信仰堅實にして終始一貫斯道の爲めに盡瘁する處あり、爲めに基督教社會より先達として尊敬を博したり。

婦人界見聞録

一記者

▲歐米では盛んに女學士が出來る、之等の婦人は驚く可き勢を以て、男子の職業を蠶食しつゝ有る。女子大學の成瀬氏は勿論女子高等教育には大賛成で有るが歐米のそれとは大分違つて、日本の女子に適當な高等教育、即ちしかく極端ならぬ角の取れた物を良とす言ひ、又それを絕對的に非認はせぬが、高等教育を兎角馨はしからぬ物として居るのは、此の樋口勘二郎氏である、今この兩種の意見を比較して見ると、其所に越味有る研究問題が伏在してゐるのである。

▲樋口氏は『男女は相輔く可き物で、相爭ふ可き物で無い』と云つて、暗に米國の婦人が男子の職業を奪ふのを批難して居る。

▲氏は又男女の交際に就て『嚴しく隔離された物が、急に一緒に成ると間違が起り易い、そこで何時まで學校に置かれる生徒では無し、學校に居る間だけ間違が無かつたとて、夫で直に善と云ふ物では無い、社會と云ふ危險物の有る所へ出ても差支の無い樣にちやんと下地を造つて置く必要が有る、即ち漸を以て或監督の下に、社會の進步程度に從つて男女を交際させるので有る』且つ『其所まで行かねば眞に親切なる教育とは云はれぬ』と言つて居る。

▲本多(庸一氏)夫人が、日本の家庭に規律の無い事と衣服の不便とを今更のやうに云はれたのは、夫人の如きは最も痛切に之等の不便不利益を感じつゝ有る一人なので、寧ろ、依然として非活動的な衣服を用ゐて相變らず子弟に惡癖を養ひつゝ有るを痛罵された物かとも思はれる。惡い事は教はらずとも覺えるのに、善事は十度云はれても行ひ難いと同じ事で、一度風俗習慣と成りし物が容易に改められないので有らうか、さりとは困つたもの。

▲亞米利加シンシナッチの婦人團體は此程市街の餘りに不潔なのを市役所に注意したけれども、應じなかつ

たので書信の往復數回の後、、もどかしくなつて親ら綿服を着け大形勞働帽を被てセッセと街の掃除を始めた市役所も之には愧入て、遂に市で掃除する事と成つた歐米の市街掃除は水で洗ふて雜巾で拭くのだ相なが、日本の婦人もチト奮發してはなんどゝ某新聞は零して居たが、其等は未だ〳〵後の事で、前述の衣服や家庭の規律や、體育なんどが先づさきに改良されぬ間は日本婦人が外部を働らくなどいふ事は思ひも寄らぬ事であらう。

▲先達て婦風會の婦人部演説會が神田の新聲館で開かれた、場所の惡かつた爲めか來聽者極めて少く、各辯士に氣の毒であつた。

▲第一登壇者湯本武比古氏、曰く、女子に限らず一般學生風紀の爲め學校以外にこんな會の出來たのは贊成である、贊成者は多く敎育當局者であるがこれが敎育家として自己の力の足らないのを自白して居る物では有るまいか學校でも私塾でも其學生に風紀上の批難の無いやうにするは勿論、子に對する親と雖も到底不可能な事である、殊に學校に居る間は一日の四分一か五分一に過ぎないのに社會はそんな事に頓とおかまひ無しで有るそれのみならず、反て學生の風紀を亂す者は學校よりも社會で有るから、本會の如きは先に立て社會に忠告して貰ひたい、兎角學生の風紀は學校と社會と相待て行かねばならぬ、實際に於て社會が學生を誘惑せぬ樣にならねばいけない。

▲貧民窟の小學校で、盜みしてはいけないと敎へれば其父兄は翌日から其子を登校させせない。賭博の惡事といふ事を聞かしてやれば、歸宅して父兄の賭博最中を見て小供心に不思議と思つて、外へ出て公言したから其時恰も來合せた巡査が聞いて其父兄を捕縛して去つたで、小供を學校へやれば碌な事は無いといつて登校させない、で學校の方ではそれと直接に云はず、他の方面から敎へて追々分つて來る樣な方針を採てる相であるが學校の苦心を思ふにつれて社會の惡いのがよくわかる。

▲同氏又曰く獨乙では學生をビヤホールへ入れない。

若い婦人が來ても踊らせない（ピヤホールに舞踏室有り）煙草は法律で禁じたので無けれど學生と見れば社會が賣らない。

▲今は貴族院議員たる某氏が、先年北國で知事奉職中學生を登樓させた料理屋は毎度罰金を申附る事に成てゐて其が隨分多額に登つた相であるが、それからは段々と登樓者が減ッた。

▲地方では學生と學校との間に紛議が起ッた時、新聞記者や縣會議員が學生に加擔して教育者をいぢめると云ふ惡癖が有るけれども、西洋では學校騷動と云ふ物は殆んど全く無い。

▲氏は例の快辨で演じつゝ最後に學生ならぬ者が制服や制帽或は袴を穿いて、らしく裝ふのを一種のミミクリーだと罵倒された。

▲次の登壇者三輪田元道氏、その演題は「婦人問題」

▲第一婦人の動作に就て、洋行がへりなどは、兎角日本婦人は歐米婦人に比して人形の如く、エキスプレシヨン（内の心の働き）が足らぬアクチビチー（活動）が無いと云ふが、更に位置を換へて歐米婦人を見たらば、如何樣に怪しく見えやう宜しく速に彼の長所を採て日本化せねばならぬなとゝいふであらう。

▲元道氏曰く日本の家屋は元來禪味を帶びて居る――床は硝子張りにせず、チト薄暗いが窓の壁を塗つて、何の幅を懸けて何の花を挿して――其所に獨得の趣きが有るではないか香と云ひ茶の湯と云ひ、戸の開閉にまで、根本的歐米とは同じからずして其所に歐米と違つた動作の、靜肅

○○○金魚（甲賞）

赤阪田町　高瀬[illegible]子

朝早く起きて見ると昨日靜かにはうむつてやつた金魚の墓石に白露が光つて居た地下に眠る金魚は此露を含むで安らけく夢を結ぶ事が出來るであらうか

詩趣あり絶妙

○○○螢の光（乙賞）

播磨　三木くに子

七歳になる妹が螢を取つて來て何か入れ物を下さいと云ひますから紙袋をやりましたら「姉ちやん此の中へ入れると紙が燒けて出やあしないでしやうか」と云ふのですもの本當にふき出して仕舞いましたわ

な奥ゆかしい物が出來て來る。其代り歐風の建築に住み歐風の花圃を眺め歐米の衣食を仕て居たら、自然とエキスプレシヨンもアクチビチーも出來て來る事があると思ふ。歐米婦人と交際を始めた結果、動作を彼に眞似る婦人が往々にして有る樣だが、それは社會と伴はない（誠に然り）そんな精神的に欠けた物は少しも感服は出來ぬ。今日露國と戰つてかばかり見事な大勝利は誰も豫想し得なかつた樣に、案外愚昧に見えても日本婦人の長所を充分認めねばならぬ。みだりに皮相の文明ばかり學ぶ必要は無いが、唯だ日本婦人の身體は弱小で有る、大に體育の發展を希望する、同時に衞生思想も普及させねばならぬ。牛乳嫌ひの婦人多きも芳しからぬ現象で有る。或婦人がお産の時、茶づけが好きだからと云つて、茶づけばかり喰べて居ましたが後で腰が立たなくなつたと云ふ話が有る、之は即ち營養の不充分から來るのである。日本の上流社會では喜怒を色に表はさない風習が有る、所で心無くして笑ひ自ら僞り悲む佛國婦人の如きは、丁度日本の藝者の爲る所で有る、精神に有る物が溢れて表出したのこそ眞に尊いのであると說かれたのは甚だ敬服で有つた。で日本婦人にエキスプレシヨンを發達させやうと勉めるのは大に注意すべき事で、若し武士道的に日本の社會が發達して行つたら、やがて立派に表情の出來得る婦人が出來るだらうと說かれたのは吾人の意を得た物で有つた。氏は又婦人はチーヤフル（笑顔のにこ〳〵して居る）で無くてはならぬと云はれ、又毎日勤先から歸宅して見ると妻君の病床に居るのが一番悲しいと友の一人が嘆息したのも聞いたが、何も歐米婦人の如く役者に就てまで表情の方法を習ふには及ぶまいと思ふ、唯だ歐米婦人にも稀には有るそうだがヒステリーは日本婦人の欠點である次に

▲第二は男女の交際問題、氏曰く男女交際は人類自然の發達より起る當然の要求で有る之が不贊成者は失敗の經驗を有する人に多い、との斷定。

▲偖如何にして交際すべきかゞ最も大切な問題で有る此方法を講じた者は未だ一人も無い。芝居見物の如き

も男女交際の一種で有らうが、昔のは忠孝貞節や、勸善懲惡を說いたが、今の寫實的な芝居は如何も感服が出來ない、事の正邪を判斷する時必ず勸平の腹切りを思ひ出されると或人は云つたが、果して然らば昔の芝居は善かつたのである。昔は其他歌かるたや盆踊りなど相當に男女交際の道は有つたが、今日過度の時代には例の免れ難き現象、元より昔の眞似は出來る物で無いから、別に新しい方法を講じて徐々として理想に近づかねばならぬ。妹を連れて交際場裏へ出るも善からう、歐米とても絕對的の自由はなく母若しくは父兄が伴ふので有る、然るに遠く父母の膝下を放れ塵多き下宿屋に居る女學生等が、單獨で男子と交際するなどは危險千萬な事で有る。

▲己の娘の價値を充分、他に知らせる爲め、父母がそれだけの勢を取る可きは當然の事で有るから、客有る毎に成るたけ娘を其席へ出すが宜しい、娘の手料理も結構で有らうし、何かと質問應答の内に旅行中の見聞など話が出て双方共に益する事少かるまいと思ふ兎に角男女の交際は保護者が先に立たねばならぬ。

▲第三の問題は再婚論であつた氏曰く動物心理學から見れば情慾は自然である故に再婚は適當なりと云ふ者が有るけれども、動物心理から見て直に此斷案を下すは大なる誤りで有る。女の節操と共に男も之を守り又故福澤翁をして『男大學』をも書かせたかつたのである。福翁は女に敎へて出來

○○○美しきもの(丙賞)　府下田端　田中千賀子

若葉に殘る朝霞。遠山の紅葉。菜の花に蝶の舞。山の中腹に白百合。青葉の中にちら〲薔薇の花の見ゆる。池に赤鯉の見へつかくれつ。白き手に紅玉の指輪。下髮に紅のリボン。夕燒の海岸。晴の夜の星

眞に然り、文娟殿

○○大和心　播磨　三木くに子

春雨のしと〲と降る夜某隊が戰地に赴く途中或る小川の邊りの櫻花がひら〲と一兵の肩のあたりに散りかゝりましたすると彼は其を大事相にポツケツトの手帳の中に挾みました多分其は櫻に恥ない樣大和心を顯はす手本にするのだらうと思ひました

文につかまへ處あり

るだけ跳廻れと云はれたが、男の態度から女の態度を定めるのは甚だ善く無い事で、男が百圓の時計を買つたとて女も百圓の時計を買はねばならぬと云ふ譯は無い、要は他の如何に關せず己だけ己の分を守れば善い然し日本の風俗習慣から行けば將に斯く有るべき筈で由來封建制度の下には、孝行せよと子に敎ゆれど子を愛せよと親に敎へる事をしない、貞節なれよと妻に說いて妻を愛せよと夫に敎へない、上に忠なれよと說いて上其物は下を愛する事を忘れてるけれども、之が封建の世の當然で、人は子たると同時に又親で有るから親としての敎育も必要なので有つた。若し夫れ後々の事共を相談した上で死別れたものなら、夫が死だとて今更再婚の情が起らう筈は無い、其起るのは平生既に業に間違つて居るので、貞女二夫に見えずの古語は爰に到つて實に萬鈞の力が有る、見よ心の腐れたる者、理想無き者が、或は不自由、或は辛いと零すのである。

▲要するに三種共至極穩健な議論であつた。

▲次は井上哲次郎氏演題は「女學生に對する希望」大體育智育德育の三方面から說かれたが、近來就學女生の數が百分の五十から九十（一說八十）に激增したのだから少し位の惡風評は寧ろ當然で有らうと前置して、各國の婦人を體育の上から比較された、曰く

▲獨逸の女子は一般に若い頃は强壯で有る代り、年を取ると恐ろしく肥大に成る、それでもバターと馬鈴薯は避けて肥えない樣に充分注意は仕て居るが、馬車に乘る時入口が狹くて不自由な上、體が重いのだから後から押上げて貰ふ、從つて腰を懸れば二人分の場所を取る婆樣が澤山に居る。伯林邊では家屋は總て六階七階造りで、一階の梯が「く」字形に二つに成つて居る時などは十二乃至十四の梯を、何度でも中休みをしつつ上り下りして買物するなどは、他所の見る目も氣の毒で有る。

▲佛蘭西の女子は概して二十歲後までは、少し痩て居る。

▲英吉利の若い女はすらりと脊が高いが、年を取れば矢張肥えては行くが、けれども獨逸の女子程には非道

くない。

▲日本の女子は、四邊が四邊だから致方無いとは云ふものゝ、内輪またで不自由相に歩いてゐる、近年は靴袴故少しは運動不足を免れようが未だ座つて足部血液の循環を止めるなど子孫にまで惡影響を及ぼして居る。それに之迄は鶴の如く痩て首の長いのを美人の標準として來たから、虛榮心に富める今日の女子は之を眞似する等は甚だ宜しく無い、是非大國民に要するしつかりした體を持つ様にせねばならぬ。

▲女子は社會の花で有るから自然界に牡丹や海棠が有る如くで、女子の装飾は當然で有る、けれども、眉に墨を入れ鹽で頰を磨くが如きアーピクシャールな手段は西洋でも女優の如く品性高からぬ者に行はれるのだから增長してはいけない。

▲美しいリボンを羽織に附ける男、肩で風切つて行く女學生、共に言語同斷で有る。

▲英のヒュース氏は世界各國中で英獨日の三國は女子の風最も善いと云つて居るが、今後英獨婦人の長所を學ぶべきで有る。

▲伯林では女學生等が歩調を揃へて歩のを見て優美に感じた日本の女の不揃ひに肩と肩の行違ふなど見苦しいのに比べられない

▲次は智育に就て、氏曰く學問は品性を高めるのみか實に容貌に影響する、如何に目鼻が揃ふても學問無き者は愚昧に見え、インテルゼンが無い、學問有る人は目が大きく成り、面に輝きが出て不思議に風采が擧る。

▲全世界から見れば男千人に女千二十二人で有る、亞

○はがき文　　米澤　藤倉白露

男女同權の世だわれ――」と春ちやんと芳さんが夢中に話合つて居る。僕は癪に障つたから、「雨が降つてもお出額はぬれぬ、二尺五寸の庇髪」と書いた短册を春ちやんのリボンへそつと附けてやつた。

拍案々々

好きな物　　金澤　森井せき子

お友達のお手紙、お庭の白百合、女學世界の繪端書、白木目のリボン、孝女白菊の唱歌、森田茂登様の俳句、軍服召した兄様のお寫眞、十五夜のお月様

細亞は女千人に男千四十六人で、日本は明治卅四年に男二二九二八〇四三八人女二二四九八六四八人で即ち男が四十二萬九千三百九十四人多い。

▲獨逸の大學では婦人の聽講者が澤山有つた故近年入學を許して女學士が出來た、瑞西では始めから女子の大學生が有つた、日本では未だ曾て帝國大學に入學を志願した婦人が無い、有れば一問題で有る。

▲次は德育に就て、日本の婦人は一度信仰すれば厚いけれど一度恨めば長く解けないインゴーストリージヤパンと云ふ本に、我文政十二年、某大名の奥方が三年間病床に在つて今や死なんとする時恰も春で有つたから奥方は子孫の事と庭前の櫻花の事を考へた。その大名に妾が有る芳紀十九、櫻花よりも美しかつた。大名一日奥方の病床に來て曰く御身の病は手を盡せども快復せず、思ひ置く事有らば云ふべしと、奥方曰く唯一つ有り庭前の櫻滿開なり妾を呼で一緒に眺めたいと、大名は容易く承諾する、奥方は大層喜んだ、で妾が招きに應じ來ると奥方の云はるゝには、私が死だら汝が奥方と成るであらうと、妾曰くいゝえ如何致しまして私は身分賤しいものでございますからと、其時奥方は微笑乍ら汝に負はれて庭の櫻が見たいとあつたから、妾は怪しく思ひ乍らも肩におんぶして行くと、奥方は大層喜んで肩の上から双手を妾の袖下に差入れ兩の乳房を堅く捕へてにやりと笑ひ乍ら最愉快げな中に云ひ知らぬ厭味を含んだ儘息が絶えて仕舞た、で死體を下そうとすれば妾の胎肉にくつゝいて放れない、止む無く刀を以て切り取つたが、乳房をつかまへてゐる其手ばかりは如何しても取れなかつた、で夜臥床に這入て眠る時は此手が妾の胸を強く壓へて其苦しさは例樣が無い、前に奥方が見たいと言つた滿開の花とは此妾の事を云つたので。そこで此妾は直に尼に成つて下野國河内郡田中村の野口五左衛門方へ來たのは十一年前の事で有ると之を懺悔して亦行く所を知らなかつたと書いて有るが、嫉妬執念の深いのは日本婦人の特色で有る

▲氏は更に貞節も亦容貌に關係有りとし、由來美人には誘惑が多いから警戒を要すると同時に醜女が男の些

少な親切に我と我心を惑はす事が多い是は最も注意せねばならぬと云つて最後に二つの例を引いて東西女子の德性を比較された。

▲ゲーテのフアウスト第一篇に出て居るグレツチエンは西洋婦人の戀愛を最も上手に寫した物で有るが、此女は信仰は深かつたが、寺參りの時誘はれて遂に操を破つて懷姙となつた。或日井戸端へ行つた所が同じく水汲に來て居た二三の人が他所の娘の情夫を作へた事を攻擊的に風評して居つた、でクレツチエンは忽然として己の行爲を恥ぢ悔ひてマリヤの像の前に行き、身を投伏して懺悔して精神の滿足を求め遂に發狂する、之が第二篇に這入つて漸く救はれるが、是れ西洋婦人の貞操に對する觀念を描寫して千古不朽の傑作と呼ばれて居る物で有る。

▲更に日本婦人の貞操觀念に就ては山陽遺稿第三卷に節婦お政の傳と云ふのが有る、筑前赤間の宿に七平と云ふ酒屋を兼た小農が有つた、家督を甥に讓つて死する時二人の娘が有つたが長女を太右衛門に嫁せ、次女お政は生長後長次郎に妻せよと遺言した。太右衛門は善く無い男で放蕩の爲め家產を大方無くしたが長次郎は正直に勉强したけれども兎角其運は拙かつた、お政は生れて年十八美人と爲た。時に隣村勝浦の庄屋は悴の爲めにお政を妻に求む、太右衛門大に喜び頻にお政に說き勸めたけれどもお政は父の遺言を守つて諾ない、乃で太

○○蛙の子の一生　　橫濱　いちやく

今日蒲田眞蒲園に遊ぶ其家つとに幼子の乞ふ儘に側の水溜に孵化した計りの蝌蚪をすくふて罐詰の殼へ入れて汽車電車の内とも後生大事に持ち歸つた、暫し後來て見ると可愛想に彼等は熱き地上に乾いて無數の蟻に見舞はれて居つた、然し彼等は生れて初めての大旅行であつて又其最終の旅行であつた

觀察微細

雨の朝　　靜岡　上田寶子

絹糸の樣な細い雨は昨夕から降り續いて今朝は何となく鬱陶しい心持がする、緣側に出てふと見ると靑い小さな竹の葉に可愛らしいあまがへるが一疋、スルリと滑り落ちて庭の小笹に飛びついた。

畫趣あり

右衛門等は庄屋を此緣談の仲人に頼み、一同で更に一家の利益一族の譽なりと且つ怒り且つ說き勸めたけれどもお政は頑として應じなかつたで、太右衛門は義父なる事を笠に着て、勝手に先方と約を結び酒宴を張つた、そこでお政は翌日から身の飾りを取去つた、太右衛門は間違が有つては大變だと云ふのでお政に番人を附けた、それから二三日の後お政は少し身邊を淸くしたので、安心して番人を廢すると其夜裏の炭小屋に隱れ二通の遺書をして自殺した、一は義父に不孝の罪を謝し、一は許嫁たる長次郎に宛て、一度父の遺言に依りて定まりし緣なれば如何なる大家も美衣も榮耀も何かせんと認めて有つたので、赤間の庄屋は大に後悔して、此事公にならぬ樣にと世間前は發狂にして葬式を濟ました。斯て十八年の後筑前の學者武田氏之を長詩に造つたので遂に藩主黑田侯の耳に這入り御詮議と成つて、赤間の庄屋始め一同が處分を受け節婦お政には褒美を賜はり、山陽が之を書いたので一層廣く世に傳へられたのであるが、お政の行動は全く武士道のそれで有る女の一身を犧牲に供するは偉大なる事でクレツチエンの如きは遙に之に劣つた物で有ると隨分長い演說で有つたが少しも聽者を倦ませなかつたは流石である。

▲最後は尺秀三郎氏「婦人の勢力」と題するもの殘んの雪より白き姬御前の腕に何の力が有らうぞと他は云ふかも知らぬが、此細腕こそ城をも國をも傾けるので、東京市中何れの商店も婦人を得意とせぬ物殆んど無い、伯林のウンテルデーリンデンと云ふ

○菫　兵庫　柳田露子

お兄樣、此菫れ、あの懷しい母樣のお墓に咲いてたの、其れ母樣に、お斷りして貰つたのよ、毎これ見ると母樣にでもお逢ひ申した樣な氣がしてならないの、其で兄樣にも差上ますから、母樣と思つて大切にして頂戴。

課題外　備後　森　信子

理想の家庭趣味ある生活これ皆海老茶時代の空想に葬られぬ樣して五月今以て唯命惟從ふて働くのみそれもその嫁家は商家夫は會社員家族は舅姑に兄夫婦小姑三人決して理想外にあらず世間は皆かうしたもの

一番賑かな街も矢張三越白木の如き衣服店と、寶石屋と婦人の裝審に成る毛皮屋とか一番澤山で、之を買ふ者は皆婦人で有る、即ち東京も伯林も其繁昌は婦人に依つて保たれて居るのである。

▲然し今爰に說かうとするのは其樣な事では無い、第一に家庭の中心として及ぼす婦人の勢力、第二に母として童兒に及ぼす勢力、第三に靑年に及ぼす勢力、第四に社會に及ぼす勢力で有る、と一々之を說明されたが餘り長くなるから之は略する。

▲近頃井口あぐり女史を其寓居に訪ふた女史曰く、未だ男女交際などを云ふのは少し早い樣に思ひます、歐洲では多數の男女が寄つた時は充分にはね廻つても差向ひなどでは滅多に口を利きませんが、日本のは多人數の前では大人しく仕て居て獨りに成ると內性で何か爲て居ますが惡い習慣ですよ云々。

○ぬれ髮　米澤土橋榮子

夕暮湯上りのほか〳〵する頃に、打水の香心地よく受けて庭先の樹蔭に吊つたハンモツクにゆらりと身を橫へた時そよりと背傳れた若葉の風に、薫るはぬれ髮……

○好きなもの　能登加野こひ子

紅蜀の歌、散る花の風情、青柳、友の横顔、尺八の音、鐵花と業平、小式部の內侍、柴舟の歌、飛白の着物、月夜の萩、水彩畫、貞奴と俠な女學生、靜御前、夕顏棚、雲井龍雄の詩、奈良の里、懷中時計と繪葉書、露に霑る薔薇花、

▲三宅花圃女史は此頃故中島歌子女史の歌を作つて琴の譜を造らせ、令孃に稽古させて居られるが、聞けば尚ほ胡弓及び三弦にも合はして物故女史の忌日に三曲合奏させん計畫有る由。

▲早稻田邊に某博士を訪問した時、最愛の而も年頃の娘を保護も與へず遊學と云ふ名の下に東京の眞中へ投り出すは父兄が仰も誤つて居る、誘惑もされる筈です、墮落も仕ませうよ、記者曰く確にこれが方今女學生に墮落者の有る原因である。

▲博士又曰く、何故此樣に田舍の娘達が東京へ出たがるのかどうも分りません、京都や大阪や名古屋などでは隨分東京でする程の敎育が出來さうな物である。

史談

歴史上の日本婦人（三）

井上秋劍

人皇最初の國母

神武天皇、龍鳳の姿、天日の表、確如明達の天資を膺て、高千穗の宮居に在はせしが、我祖宗より賜はりて統治の責ある豊葦原、斯く邊陲に在りては心の儘に掟することも難し、如かず東征の師を起し、不享を剿し、群兇を夷げ、都を中原に奠めんにはと、雄々しくも思し立たせ玉ひ、盾鋒和連り、舳艫相接ぎ、吉備の行宮、浪速の奔潮、三年の鋭を蓄へて、一擧攻め入る紀和の國、猾賊畧あり能く禦ぐと雖も、神威人勇兼ね備はりたる天兵に、長く抵抗すべくもあらず、群兇頻りに降り、元惡誅に伏し、竟に黒賊を電掃して中原を定むるの功を全ふし玉ふ、君權玆に確立して、萬年不易の基成る、之より人皇の世と稱す、金甌缺けず三千年、こゝに強露を懲らして世界列强の首班に位し、覇を東洋に稱するに至りし者、其源をたづぬれば、人皇第一代天皇の先づ大業の基礎を建て玉ひしに由らずんばあらず、仰ぐもいと尊しや、こゝに縷々の言を重ぬるを須ひず、而して關雎は聖王の德、斯大皇帝の配と爲り玉ひし人皇最初の國母は如何なる婦人にておはせしや、天皇なほ日向に在せし時、吾田の吾平津媛を妃とし、手研耳命を生み玉ひしも、是れ正后にてはあらざりし、中原制定の日に迨び、事代主神の御娘にして國色優秀の聞こえある媛蹈韛五十鈴媛命を納れ、以て正后と爲し玉ふ、斯媛の御腹より神八井耳命、神渟名川耳尊二柱生れ玉ふ、神渟名川耳尊は即ち第二代綏靖天皇にてまします也、五十鈴媛皇后の御上に就いては史乘別に委しきを傳へし者あらざれど、天皇崩御の後、庶子手研耳命が天皇御在世の頃より朝政を執り、權力群臣の上に在るを恃み、諒闇の際を伺ひ、

正出の二弟を害はんと謀り、剰さへ嫡母に當らせ玉ふ五十鈴媛皇后に迫りて、無禮の行を加へんとす、大逆無道、天地の容れざる所なり、而かも皇后は嫡母として庶子に對するの義を忘れ玉はず、また婦人にして巾幗を排して玉座に倚り、垂簾以て誅奸の號令を下すが如き、後の世に善からぬ範を胎すことを敢てし玉はず、從容として國歌を詠じ、二皇子に諷告し玉ふ、

狹井川ゆ雲立ちわたり畝火山
木の葉さやげり風吹かんとす



之を優しき詩歌に寓すと雖も、其雄々しき御心操の程は、詞章の節々に含まれて、後世巾幗者流の歌詠の、多く力弱く根堅からざる比にあらず、されば二皇子も熟く母后の御心の存ずる所を了し玉ひ、山陵の事終るに至て、弓部稚彥をして弓を作り、倭鍛部天津眞浦をして眞麛の鏃を造り、矢部をして箭を作らしめ、手研耳命が片丘の大窨の大牀に臥せるを伺ひ、神渟名川耳尊手づから之を射殺し、玄武門の溧血唐祚の安きを致す、史に稱する所によれば神渟名川耳尊風姿岐嶷、少うして雄拔の氣あり、

壯に及で容貌魁偉、武藝人に過ぎ、志沈毅なりと、神武の大業、綏靖克く之を承繼したまはんずんば、いかでか皇祚の隆昌萬國無比の國體を作すを得んや、五十鈴媛皇后善く之を育成し玉ふの致す所なり、徒に表面のみを以て歷史を解釋する勿れ、我人皇の初に於て神武天子乾德の高かりしは申す迄も無き事なれど、五十鈴媛皇后坤德の同じく之に添はせ玉ひしこと、國民たる者また永く忘るべからず。



軍隊的婦人

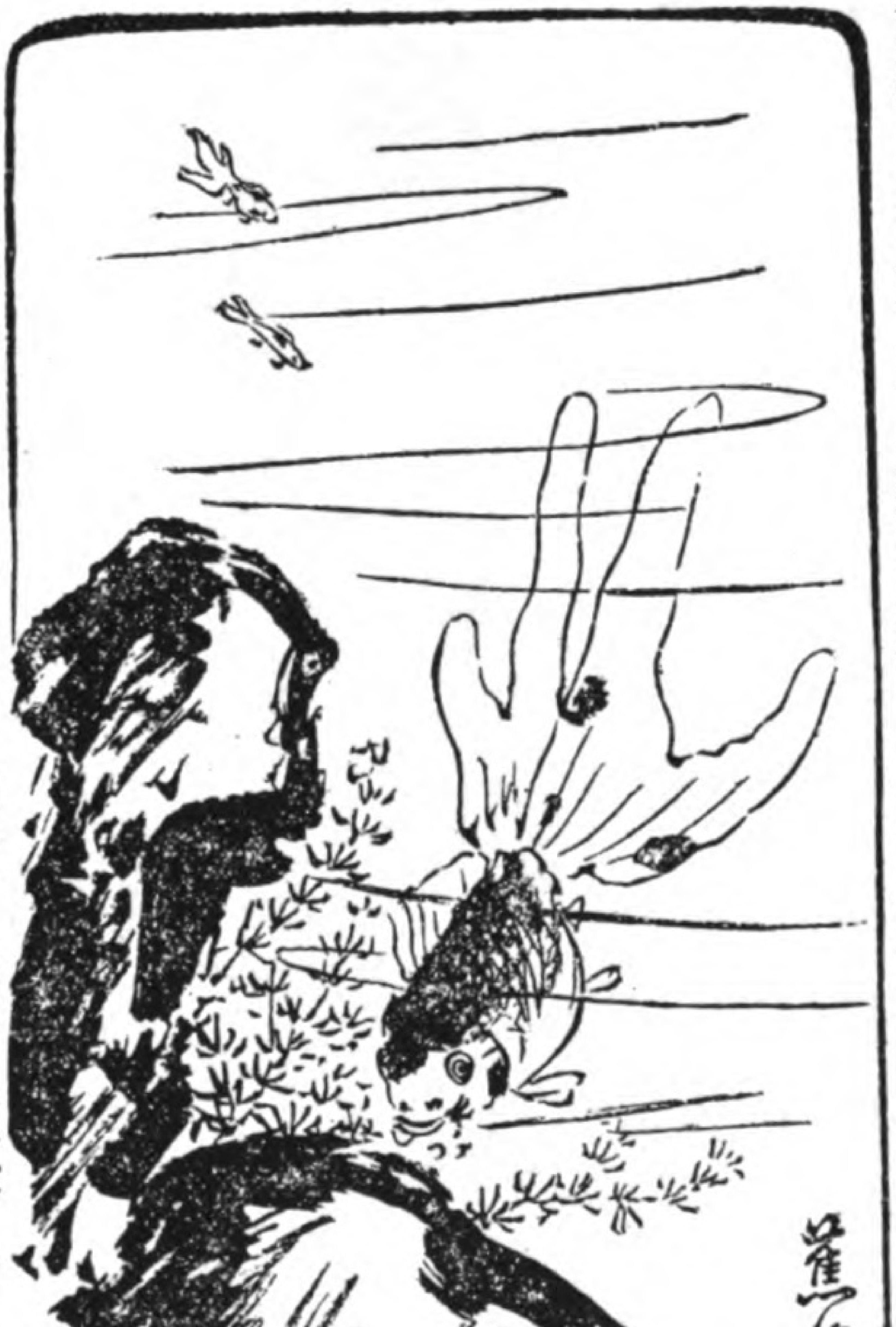
容貌婦人風骨仙、博浪一擊膽如天とは、詩人が張子房を形容せる言葉にして、一世を震盪する俊傑ほど、其外貌は優しき者たる事、世界いづれの國にも例多し、然れども眞に紅顏の婦女子にして、鎧甲を穿ち、鐵馬に跨り、旗を擎げ將を斬るに至りては、流石にお轉婆の本元たる西洋にても珍らしき事に數へらる、孫子の女兵、木蘭の從征が不思議の事に思はるるは、婦人を深閨に鎖す支那人一班の風習より見たるが故と思ふ勿れ、佛國の女丈夫ジャンダークすら、魔法遣ひと誣ひられて、竟に焚殺の慘刑を受けしにあらずや、ガリバルヂー夫人が夫と共に軍旅に從ひしは、其軍旅に從ふが目的にはあらずして夫と共に四方を奔走せし行

掛上、事のこゝに及びしなり、誰か知らん我日本の上古に於ては、婦人が鎧甲を着けて軍旅に從ふといふ事は、恰かも當然の事なるが如く、毫も不思議とされざりし者に似たり、前にも記せし如く其社會の組織、生活の狀態が、自づから婦人をして心ざま活潑になり行かしめ、終には夫と同じく征箭手挾み狩倉に打立つ男勝りと爲り、更に一歩を進めて鎧甲を被むり征戰に從事するに至らしめし者なる可し、神武天皇東征の時に當り、國見岳上に賊あり、八十梟帥と謂ふ、女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置き、以て皇師を防ぐと云ふ、



紅顏擐甲の娘子軍なりしは疑ふ可からず、崇神天皇の朝、武埴安彦と云ふ人あり、孝元天皇の皇子にして天皇の叔父たり、其妻を吾田媛と謂ふ、其夫の皇室の宗親にして大統を承くる能はざるを憾とし、夫に勸めて反を謀る、密に倭の香山の土を取、其着けたる領巾に裹み、是れ倭の國の物なり、吾今之を得たり、志成る可しと、是れ盖し當時、迷信盛なりし時代の一種の祝咒にして、恰かも彼平將門が比叡山上に登り、藤原純友と共に皇城を俯瞰して、盛なる哉大丈夫此に宅らざる可からず、我は皇胤なり天子と爲らん、卿は

藤原氏なり關白たるべしと放言せし其にも似たり、巾幗婦人の身を以て其行動の男兒的なる既に驚く可き者あるにあらずや、其兵を擧ぐるに當ては、安彥は山城より卒川の皇居（大和）を襲ひ、吾田媛は大阪より同じく大和を略せんとす、さなきだに男子の服裝と大差無かりし當時の婦人の習俗なるに『かわら』(甲)を穿ち『かぶと』(冑)を被、『つむがり』と名づけし大刀を佩ぎ、『ほこね』(鉾)押取り、馬に打ち乘り、(當時の日本婦人が馬に乘りし容子は、後世の如く男子と同じく其背に跨がりし者ならず、今日の西洋婦人の乘馬法の如く、馬背に腰打ち掛けて兩脚は一方に垂下せし者の如し、)三軍



を叱咤するありさま、全く女業とは思はれず、恰かも水滸傳中の一丈靑扈三娘が、雙劍打ち揮りて打つて出づるてふ架空譚を實現せし趣ありしならん、朝廷にては蕭牆の賊、由々敷大事、暫時も捨て置く可からずとし、五十狹芹彥、彥國葺の諸將を遣り之を討たしめ玉ふ、吾田媛は五十狹芹彥の兵の大坂を遮るに會し、一氣に蹴破りて通らんとし、縱橫奮戰力を盡すと雖、順逆の理、衆寡の數、吾田媛終に官兵の鋒鏑に斃れ、紅顏擐甲忽ち黃土、たゞ春の夜の夢と化りぬ、大將すでに討たれしかば全軍大に潰亂し、一軍悉く官兵の鏖殺する所と爲る、賊將安彥は其偕

老の友たり、參謀の將たる愛妻を失ひ、意氣大に沮喪し、尋いで彦國葺の射殺す所と爲り、亂則ち平げり、好女丈夫惜らくは順逆の理を誤り、千載祭らざるの鬼と爲る、日本上古の軍隊的婦人は、果して吾田媛を以て最後の殿將となし、竟に再び見る可からざるか、否々、日本國中の軍隊的婦人は各地方に於て倍々活動の範圍を廣めんとし、盛に男子を壓迫しつゝあり、景行天皇の朝に至り、周芳の娑麽（今日の周防の佐波）に神夏磯媛あり、豊前の碩田に速津媛あり、熊襲梟帥の女兒に市乾鹿文あり、市鹿文あり、皆脂粉にして鎧甲を着け、兵に將として戰ふ者なり、其他女酋の各處に割據する者少しとせず、日本武尊の妃弟橘媛の如き、獨り楚王帳中の虞美人たりしのみにはあらざりしが如し、而して仲哀天皇の皇后氣長足姫尊、神功皇后に至りては、我軍隊的婦人氣風の最高潮に達したる者にして、其偉大を極めたり、佛法渡來以後男子すら漸く哀れぽく軟弱の風に染むに至り、感情に鋭敏なる婦人の一層物の哀を觀ずるは當然にて、終に上古の軍隊的婦人氣風を銷磨し盡し、却て他の一面に於て男子を壓迫し、少なからざる弊害をさへ伴ひしこそ是非も無き、幸に王朝文弱の弊極まつて、こゝに武家淳朴の風起り、我國粹再び發揮し、所謂武士道なる者生じ無文の制裁を與ふるに及び、婦人亦た此間に立て日本固有の婦人氣象を現はし、假令鎧甲を被て馬に上らざるまでも、雄々しき決心を以て家庭に臨み、男子をして勇み進んで家を忘れ身を忘れしめ、更に子女の小さき腦裡へ武士的教育を注入するに怠らざりき、是れ千年以後の日本婦人の血管に、古代日本の軍隊的婦人の血の依然流動しつゝありしに因る、箇は是れ後の話なり、讀者願くは後章之を說くの時を待て、吾人の筆は更に當時に遡らざる可からず。

瓊子内親王

三島翠巖

一

瓊子内親王は　建武中興の英主後醍醐天皇の皇女、安養内法

親王と申す。御母は贈從三位藤原爲子の方權大納言爲世卿の女でありました。

御幼少の時より至つて聰明な姫宮で、書の道は申すまでもなく、管絃のわざにも堪能で、殊に至孝の御稟、御兄妹の間も睦まじくあらせられたゆゑ、帝も此上なくこの皇女を御寵愛なされました。斯やうにして御幼少の時は、いとも温き九重の裏に御成長なされたのであります。

然るを母君爲子の方は、病のために早く此の世を去られましたので、其の後は一層帝を慕はせられて、常に御傍に侍りて、ひたすら孝養を盡されました。

彌生は盛りの花の宴、秋は錦の紅葉狩につけても、皇女の秀でたまへる御歌は、一しほ帝の愛で給ふ種となりました。朧なる春の夜ごろ、或は澄みわたれる秋の月を眺めたまひて、叡感なゝめならざる折しも、皇女の奏でたまふ妙なる琴の音は、殊に御氣色うるはしく、かつは逝きにし人を思ひ出の種ともなりまして、いよゝ憐れの子よと思し召されました。

皇女もまた慕はしき母君は、はや此の世にましまされば、わらはが孝養をつくし奉るべきは帝、親しくすべきは兄妹よと、かた時も孝友の念をば忘れたまはず上は大内に仕ふる女房をはじめ、下は賤が伏屋の海人少女にいたるまでも、いと慈みたまはりました。

二

月に村雲、花に嵐、げに定めなきは浮世の習ひ。吹く風も枝をならさぬ大御代に、何に恐すことも無く、九重の奥ふかくおはします、宮様方の御身にさへも、たゞならぬ大事が起つてまゐりました。

夫れは彼の元弘の大亂で北條高時は、撰りにえりたる關東の荒武者數十萬をさし向け、範行、時綱を將として雲霞の如き大軍は、獅子奮迅の猛勢で都の中に亂入しました。

一百年來太平の夢あたゝかに、詩歌管絃にのみ耽つて居た大宮人の驚愕は更なり、宮様方の御歎きは如何ばかりでしたらう。

主上は今は是非もなく、九重の宮を出でさせ給ひ野末の露を踏み分けて、はる〴〵笠置の山に御幸あらせられ、あはれ、昨日までは、金殿玉樓の内に御座しましゝ玉體を、今日はいたましくも松の下蔭を隱家として、たより給ふさへ、梢の露の御袖をぬらし奉る。

さても木の下なる一夜の御假寢に見給ひし靈夢、流れも清き菊水の、勳たかき楠の忠義の心は堅けれど、逆徒の運ぞ強かりしと見え、何事も大御心のまゝならずして、畏くも一天萬乘の大君は、逆臣の計らひにて、隱岐の小島に遷幸あせらるゝと云ふ、あさましき世となりました。

三

世は[illegible]と亂れはてゝ、帝は遠く遷幸し給ふと聞し召された、皇女の驚きは如何ばかり。日頃孝心ふかき姫宮の御歎きは如何ばかり。姫宮は掻き亂るゝ胸をおし靜め、健氣にも思はれけむ「あはれ帝

は、荒磯浪の打つ島邊に遷幸し給ふを、われひとり、いかで花の都に止まり居て憂き月日を過し得らるべき。わらはも、ともぐ\に下り御傍に侍りて、朝夕慰め奉らむ。孝養つくし奉らむ」。と堅く御決心あらせたまひて、帝に此の度の道づれを御願あらせたまふ。

さて、帝には數多の御子あらせます其の中で、只ひとり斯やうの御願ひありしかば、御思案の後「朕が行く先は海山遠く、人も通はぬ千里の旅路。荒浪騒ぐ小島の磯邊なり。かつ汝は女性の身にしあれば、宮の裏に止まりて居ませよ。朕も疾く歸り來なむ。今しばし待ちて居ませ」と御諭し遊ばしたが、姫宮は如何して御聽き入れになりませうか。「いかに嶮はしき山坂越ゆる旅路なるとも、いかに磯邊の蜑の苫屋なるとも。孝養つくさん爲めには、などて露ほども厭ひ侍るべき。御父君の御教訓は深く忝しと思へども、わらはが赤心を憐みたまひて、なにとぞ此の道づれ許したまへ。彼の島邊へ伴ひ給へ。」



と時ならぬ時雨は御袖にそゝぎます。

此の詞を聞し召された帝、この樣を見たまふ御父君、何でう嬉しと思召されざらん。「斯くまで朕を慕ふ身を、ふりすて行かむもたよりなかるべし、然らば此の道づれ許さなむ。」と遂に御道づれを許したまふ。皇女の御喜びや知るべし。

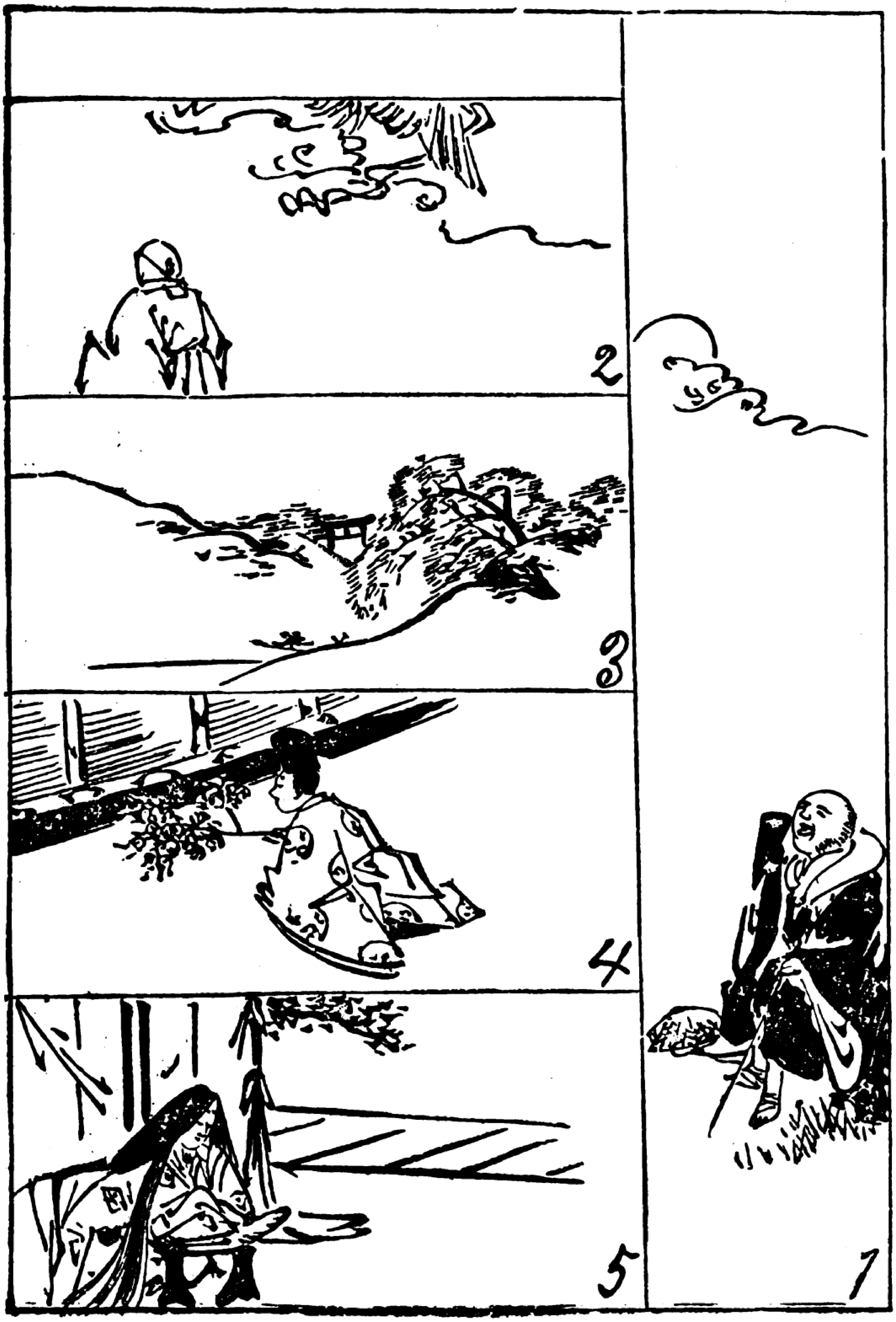
四

遷幸に供奉する人々は定まりぬ、一條頭中將房行、六條少將忠顯、御介添には三位の局廉子、大納言典侍のたゞ四人ばかり、

そもく\上をも惱ます逆臣が何んでう孝道をわきまへん、姫宮は御孝心のあまり、共に下らんと御決心遊ばし、帝も今は御許しありしものを、逆臣どもは如何にしても姫宮の御供を拒んで聽き入れざりし。

姫君の御落膽は如何ばかり。しかし斯ること一度かたく定め玉ひしことを如何しても孝養つくし奉らむ、共に下らんすべもがなと、細き

判じ繪



下の十圖は百人一首中の名歌の意を畫にしたものです殘らず判じた方には賞品一圖を呈す

解答は女學世界宛——用紙端書——〆切七月十五日



胸を千々に砕きたまひ、神佛かけて御祈りあらせられました。

さて姫宮は、彼の御介添たる三位局の女童に御姿をやつして、共に下らんと固く覺悟をなされました。

実に金枝玉葉の御身なも、孝養つくさん一念に、賤の少女に御姿をやつさるゝのである。かつて御出になる先は人も通はぬ千里の旅路。荒濤さわぐ北海の一孤島。思ひやるさへ身の毛もよだつその聞くだにも怖ろしき島邊に、帝に孝養を盡さんとて、いとも健氣なる一心ゆゑに、賤の女にやつして御下りになるのであります。まして姫宮は芳齢まさに十七御心のみか御姿も、いや芳はしき花の如くにてる げに厳寒の候たゞひとり、霜雪にあひて、いよ〳〵香ばしきは梅の花、秋の千種も枯れはてし、御園に匂ふ白菊の如く、薫も高くいとも尊し



五

さる程に帝は隠岐へ遷幸の途に、三月七日と云ふに都を御立あり、兼て期し給へることとは云ひながら、宮様方の御歎き、近侍の人々人のくれまどへる様を御覧遊ばしては、一しほ御歎きの催ほしとなり。かくても常ならぬ行幸故、御冠に世のつれの御直衣、指貫、白綾の御衣一重ねを奉りて、網代の御車に召させられました。げに變れば變る世の中。去年の今日は、北山に群臣を呼び集め花の宴を開かせ給ひしものを、天地再び回り來て花は去年の儘なれど今年の今日は思はぬ旅路に出で立ち給ふことの哀れに定めなき世の、如何ばかり心細く思召るれたらん。

路次の御警護には、千葉介貞胤、小山五郎左衛門、佐々木判官

高氏が五百餘騎にて、皆弓箭を帯せる荒武者どもが前後左右を打ち圍み、七條を西へ東洞院を下へと御車を進めば、京中の貴賤男女小路に充ち滿ちて、あだかも赤子が慈母を慕ふ如く衣の袖を絞らぬはなかりき。

彼の承久の昔、後鳥羽院の遷幸のことを思しやらるゝにも、再び都に還り給はむことの、いと難く思されたらん、帝は御簾を少しまき上げて、彼方此方を眺め給ひ、御所の梢の隠るゝまで、かへり見給ふ御有樣を見奉りては、警固の武士も、鎧の袖をしぼりける。況んや、姫宮の御有樣を見し方々の御歎きは如何ばかり。姫宮は華の衣をぬぎすてゝ、玉の宮居を後にして、やんごとなき御身をも賤しき女童に装ひて、汗衫、あこめに窶れの袴を召し玉ひて、三位局と一つ御車にて御供して居たまひけり。

これよりさきは人里遠き山坂越えて、荒浪さわぐ舟路を渡るゝ、げに千里の旅路にぞある。

小倉百首

岸上質軒

△歌がるた

「カルタ」と謂へば、百人一首の「歌がるた」の事として知られ、「百人一首」といへば、亦小倉百首の「かるた」と解せらる。何如なれば此遊戯の斯く廣く行はるるには至りけん、元來「カルタ」とは西班牙語にて、紙又は牌といふことなれば、その名稱は足利氏の末、西班牙葡萄牙などの人々の多く來りし頃より傳はりしなるべけれど、之に歌を書きて今日の如く玩ぞぶに至りたるは、猶其以後の事なるべし。

「歌がるた」にも、或は伊勢物語、源氏物語などの歌を用ひたるもあり、其他種々あれども、到底小倉百人一首の盛なるに及ぶものはあらず、今日都鄙一般に百人一首の名を知らざる者なきに至れるは、「歌がるた」の遍く行はるゝに由るか、抑も維新前に在ては、百人一首は家諷戸誦せざるなき有樣なりしより、「歌がるた」の盛んに行はるゝに至りたるか、そは兎に角、斯く迄行はるゝ小倉百人一首とは如何なるものぞ。

△小倉百首の傳説

小倉百首は京極中納言定家卿が、小倉山莊の襖の色紙にして、一人一首づゝ百人の歌を選び置かれしより、

世に百人一首とは云出でたり。抑も之を選び置かれし事は、當時新古今和歌集の編撰せられし時は、定家卿は父俊成卿の喪に籠り居られたれば、其編に與られざりしが、其選び方の意に叶はざりけるより、私に古今百人の歌を選びて、山莊に書置かれたり。又此百首の作者中、名家ならぬ人も入り、或は有名なる人々にして漏れたるもある如くなれど、毀譽褒貶は人々の心々なれば、異むに足らず、且此百首は定家卿在世中には、知る者少かりしは、作者の選擇に就て、世人に怨み思はるゝを厭ひて、廣くは人に示されざりし爲にて、作者の得意の歌の漏らされたる、或は不得意の作の入りたる、皆人の恨を招く元なればとて、卿存命の間は人の見ぬ所に祕し置かれたりしを、其子爲家卿の世となりて、世の人普く知る事とはなりぬ。以上は普通の傳說なれども、古來既に之を疑ふ者多し。

△傳說の誤謬

先づ新古今和歌集撰成るの際、定家卿が父の喪に籠り居られしといふも信ずべからず、抑も新古今集は建仁元年三月、後鳥羽上皇の院宣に依り、五人の撰者之を撰びて、同三年四月に上つりたる者なり。而して定家卿の父俊成卿の薨ぜられたるは、其翌年なる元久元年の十一月なれば、新古今集の成りたるは、俊成卿も知り居られたる筈にして、まして定家卿が毫も與り知られざりし理なし。

又定家卿の日記なる「明月記」の文曆二年の條に、「予文字を書く事を知らず、嵯峨中院の障子色紙形、故らに予書くべきの由、彼の入道懇切あり、愁ひに筆を染めて之を送る、古來の歌、天智天皇より以來、家隆雅經卿に至る、夜に入て金吾送り示す云々」とあり、文曆二年は嘉禎と改元ありたる年にて、新古今集の成りたる建仁三年よりは、三十三年の後に當れり。且定家卿が新勅撰集を撰ばれたるは、此の色紙書かれたる文曆二年よりは、四年の前なる貞永元年なれば、新古今集の歌が意に叶はざりしならんには、新勅撰集に於て、十分意に叶ひたるを選ばるべきに非ずや。

明月記にいへる入道は、當時歌道を以て名高かりし

宇都宮彌三郎頼綱入道蓮生にして、定家卿の男、爲家卿の夫人の父なり。又金吾は中納言の事にして、即ち爲家卿をいへり。明月記の趣は『予は字を書くことは下手であるが、嵯峨の中院の蓮生入道より、障子（即ち唐紙なり）の色紙に歌を書けと、懇ろに請はれしまま、止むことを得ず書きて送る云々』といへる迄にて、たゞ責塞に色紙に字を書きしと謂ふに過ぎず、まして新古今集と何等の關係ありとも思はれず。且夜に入り爲家卿をして送り示されし由なれば、僅か一日の間、咄嗟の染筆にして、敢て名歌を選ばれたるに非ざる事も明白なり。要するに前の傳説は、故さらに小倉百首を有難くせんとて、捏造したるものなるが、作者に怨まれんことを恐れて、在世中は人に示されざりしなんどは、頗る拙劣なる言といふべし。書家の書きたる古人の詩歌など、必ずしも名作のみに非ざるは、古今同一例なれば、小倉百首に不名家のあるも、亦異むには足らざるなり。

△小倉百首の異説

以上は傳説辨駁ともに、敢て新規の説に非ず、古人の考説を綜合したる者なるが、中井履軒の説に至ては、頗る破天荒の言にして、從來國學者等の所説以外、全然別逕を開ける者なり。

履軒は先づ百首の歌中、古き歌は多く作者を誤まり、後世のものは、作者は違はざれども、官位の書方多く例に違ひ、且歌の文字の違ひたるもありて、何れにしても定家卿の筆とは思はれずと謂ひ、又明月記には何首書きたりとも見えざれど、障子の料としては、百首は多きに過ぐといひ、さて或人の言を引きて、今の世に傳ふる「小倉色紙」といふものは、定家卿の筆蹟に非ずして、種々の人の手に成れる小兒の習字手本なりといへり。其故は所謂小倉色紙と稱して世に珍重する物を見るに、第一、其の書き方、假字を一字づゝ離して書きたる樣、習字手本の體裁に似たり。第二、彼此見合するに、書風區々にして一人の手に成りたりとは見えず。且語句の誤りもあるは、決して歌を知れる者の書きたるにはあらず。』といふに在り。但し世に流布す

る小倉百首の歌は、小倉色紙を寫したる由なるが、色紙には一も作者の名を署せざるに、流布の百首に名を書き入れたるは、更に後の事なるべしと謂へり。

さらば名も知れぬ人の書きたる色紙が、何故に小倉百首の名を冒して、廣く行はるゝに至りたるかと謂ふに、履軒は又或人の説を述べて曰く、元龜天正の頃、京都の兵亂稍鎭まり、天子(正親町天皇)は近江より還御し給へば、月卿雲客も諸國より歸洛したるが、上下何れも窮乏の折からなれば、家々に秘藏せる什寶などを賣代なして急需を充たしけるより、珍らしき書畫骨董の類多く世に出でたり。

當時京都に何某といへる富商あり、かゝる賣物を多く購ひて、其後色紙繪卷などの貴重なるは、高價に鬻ぎてます〳〵富を得たりけるが、其中小兒の習字手本にとて書きたる色紙のみは、書は善きもあれど、面白味なければ買ふ者更になかりけるを、此富商元來利に敏き者なりければ、多くの色紙の中より百枚を選び、之を一箱に納めて、是ぞかの定家卿が小倉の山莊にて書き給ひし者なりとて、伊勢の國司北畠家の許に携へ到り、實しやかに説立てけるより、國司は大に喜び、價惜まず買取りて、百枚の色紙を一双に屏風に押貼り、二なき寶とせられけるを、一日隣士牡丹花肖柏訪ひ來り、之を見て驚くこと大方ならず、あはれ一月が間も逗留して、飽くまで眺め暮さばやと羨みければ、國司さらば一ツを持歸りて、十分に見られよ、殘る半双は又取易えて進ずべしと謂はるゝまゝ、肖柏は涙を流して喜び勇み、先づ半双を持歸りて、明暮眺めつゝある中に、北畠家滅亡と共に、半双は燒失せ、半双は肖柏の許に殘りぬ。さて今の世にもてはやす小倉色紙は、即ちこの肖柏の許に殘りたるを、人々の一ツ二ツづゝ取去りたるが傳はれるなり。

履軒が或人の説とて記せる大要は右の如くなるが、單に此のみにては、確乎不動の説とは定め難し、要するに小倉百首は依然疑問の中に在るものなり。

明月記結論に據るも、定家卿が小倉の山莊に於て、宇都宮蓮生入道の爲に、色紙に歌を書きて送られたる

は確かなれど、何首なりしやは今知るべからず。咄嗟に書きて即夜送られたる所を見れば、百首よりは少かりしなるべし。而して其色紙は障子に貼りたる後如何なりしや、是亦之を知るに由なし。

小倉百首は普通の傳説の如く、歌集として選びたる者に非ざるは勿論、定家卿の選びたりといふ明證なし。履軒説の、小倉色紙は筆者の詳らかならざる習字手本の殘缺なりといふも、信僞何れとも定め難し、但し文字其他に誤まり多きを以て、定家卿の筆には非ざるべしと謂ふは强ち過言に非ず。其例證の一二を擧ぐれば左の如きものあり。

赤人の田子浦の歌は、萬葉集に依るに

　田子の浦ゆ打出て見れば眞白にぞ
　　富士の高嶺に雪はふりける

ならざるべからず。又左大臣融の歌は古今集に出づ、

　陸奥のしのぶもぢすり誰ゆゑに
　　みだれんと思ふ我ならなくに

なり。

又「秋の田の」の歌は後選集に詠人知らずとして出たれど、天智天皇の御製に非ざることは、賀茂眞淵詳らかに之を辨せり。

「奥山に」の歌は古今集に出てゝ亦詠人知らずとあり。猿丸太夫といふ人名は何の書にも見えずと謂へり。其他履軒が名稱に誤りありといへるは、「天津風」の歌は良岑宗貞と書すべきを、出家後の名を取りて僧正遍照と書し、菅原道眞を畧して菅家と書し、或は官位の高く陞りたる人を、猶低き折の官位を書せるなどの類を謂へるにや。

要するに小倉百首に就ては、多くの國學者どもの種種の說あれども、孰れも斷乎たる定說なきは、一も書史の徵すべきもののなきに依れり。

抑も近古以來、戶々人々の諷誦する者、詩に在ては「唐詩選」、歌に在てはこの「百人一首」なるに、何れも久しく疑問の書たるは奇緣といふべし。然るに唐詩選は近來森槐南の釋義出でゝ、雲霧一消初めて廬山の眞容を見るの觀あるに至りたるが、誰か小倉百首の爲に滔天の雲霧を排するものぞや。

武士道十八世紀

根岸隱士

其一

下ふさの佐倉の主たりし、堀田家のよゝの臣にて、莊田といへる家ありけり。堀田家の從祖より仕へ、由緒ある家柄にして、祿千石をたまはり、代々城代をつとめけり。この家の六代の子孫に孫太郎といふ者ありけり。父を孫兵衛といふ。主君のおぼえめでたく、城代をもて年寄役をつとめ、一藩の尊敬あつくして、用人、侍、婢、僕十數人めしつかひけり。孫太郎、父の權勢により、部屋ずみながら、祿十五人扶持をたまはり、側用人をつとめ、一家さかえに榮えたりしが、女の舌ながく、嫉妬ふかきは、家のみだれにて、忽ちこの家を滅ばしけり。

孫兵衛に妾あり、名をせいと呼ぶ。孫太郎はこの國の船橋驛の大宮司、富上總介の女をめとり、子をも設けゝり。心ばえ柔和にして、舅孫兵衛にやさしく、妾にもあはれを被けて、よく家をとゝのへけり。女の技は、何ひとつたしなまぬもなく、とり別け和歌をよく詠みたるが、舅、夫とも、さる風雅ごゝろのなければ、絶てものがたりにもせざりけり。よろづの事、うち扣へ、さしいて、怜悧だちてふるまふこと、なかりけり。

孫太郎に弟ありて、傳之助といふ。その性酒をこのみて、放蕩なりけり。あるとき、城下の酒樓に醉ひて、酌女をともなひ歸り、おのが部屋に宿らせけり。孫太郎の妻、これを知り、あるまじき事におもひ、明くるあした、傳之助をひそかに小座敷に招き、懇ろに異見して、もし御父上ゝの御耳にでも入りなば、如何にむづかしう御小言もいで給はんに、口さがなきは、末々はしたものゝ常なれば、それを又いかに密めき言ひはやして、おのづから他にきこえもせば、當家の家事の亂れけんやうにも聞え、よりてゆくりなき禍も出で來ることに坐せば、御內の御ためと思して、御身をつゝしませよ。女は、妾がともかくもして、けふ一日はかくまひて、夜に入り、人知れず送り歸さすべし。向後は、かまへてさる膽太き御事な爲たまひぞと、理せめて、情をこめ、おだしく異見せしに、傳之助は、いたく耻ぢらひて、身の非をわび、この事は、父にも、兄にも知れざらんやうにと賴みて、後は身をつゝしみ、人に嫂婦のことを語りけるに、佐倉の家中、廣しといへど、我が姉のごときは、憚りながら又となかるまじ、古の賢婦といふにてあらん。めし仕ひの者もみなこれを稱めて、上も下も、姉のためによく治まれると言ひけり。

ある年の師走の事なりけり。若黨の嘉平治と彦太郎の二人、きのふ殘りたる內玄關へなどの煤うち拂ひけるとき、主人の持槍をはじめ、數本の槍の懸けあるをとり下して、煤うち拂ひ、おし拭ひて、日向よきところに乾し置きけるが、彦太郎は、曾て孫太郎が槍術の稽古に行ける供をして、鏡智流の槍のつかひ方を粗わきまひ居ければ、戲れに一本の槍おつとりて、そがつかひ方を嘉平治に示しけるに、嘉平治もまた心

得居れりとて、こも戯れにおつとりて、彦太郎と立ち會ひにおよび、かく突きいださば、かく拂ひてなどゝ、兩人、興に乘じて、しばし挑み合ひしが、嘉平治のもちたる槍は、孫太郎の槍にして、いづれ法にもあらぬ遣ひ方をや爲たらん、鍵の際より、ほつきと折れたり。

あやと、嘉平治うち駭けば、彦太郎もひとしくうち愕きて、こは〳〵大變なること爲たり、いかにやせんと、兩人、面の色を變へて、折れたる穗先を拾ひ、これを付け合はせ見て、かうほつきと折れては、接がんやうもなし、この御槍は、若檀那樣のにてあれば、かくと聞かせ給はんには、日ごろ一徹の御心とて、御怒もはげしく。我等兩人を御庭にならべ、御手討にし給ふは、定の事なり。あゝ悲しや、困つた事をこそしたれ、この御槍の何とて脆くも折れたる乎、御槍こそ恨みなれ、敵なくほつきと折れずば、兩人の首も、白刃の下にばつたりと、うち落とさるゝ事もなからんを、口惜しや、悲しや、武家に仕へけるほど、危きはなし、兩人、當家を逃げ去らんにも、追ひ捕らはれん時は、罪重くなりて、一寸だめしに斬られんには、想ふても怖し。あゝ何と歟この大難をのがれん術はなき乎と、兩人、おのゝきふるへて、槍の折れたる穗先のうらめしく、互に接ぎ合はせ見ては、溜息をつくのみ、又分別も付かざりしが、嘉平治、ぢつと考へて、はたと手を打ち、これは、御新造さまにきこえ上げて、我々兩人の御すくひを御縋りまをすより外はなし。常々御慈悲ぶかく坐します御心には、何とか御助けくだされん御術の在らうも知れず。和ぬしと共とも御椽先へまゐりて、ひたすら御願ひまをして試ばやと、いふに、彦太郎、丁と膝をうちて、こは能きところへ考へ着かれたり、實に〳〵御新造さまなれは、我々が麁相をあはれませて、如何にもして御拯ひくださたん道の坐しますべし。首さへ接がれば、その餘の事は、いかになるとも能ければと、うち伴れて庭に回り、富氏のすまゐの椽ちかく至り、折れたる槍をさし出し、雨滴おちの石の上に平伏し、兩人の者、一生の大變を仕出かしまをし候ふそは是なる御槍にて候ふ。何とぞ御新造さまの御慈悲をもつて、兩人を御救ひくだされたく、御袖にすがり、御嘆願にまかり出で候ふと、かたりけり。

この時、富氏は、端ちかく出でゝありしが、兩人の者、入り來りて、槍の折れたるを出し、云々と請ふは、いかなる次第とも分かず、まづそが樣をとひ、この身におよばん事ならば、計らひもせんと、かたるに、兩人は、忝なく喜びて、實は、唯今しか〳〵に候ひてと、ありし始末を曲にきこえ、御槍は、若檀那樣のにて候へば、かならず御立腹はげしく、兩人とも御手打にせられ給はんと、恐怖仕り、愁傷やる方なく罷りありまをし候ふ。あはれ御新造さまの御慈悲の御はからひもて、何等己等兩人を御すくひ下されたく、御嘆願まをし上ぐる次第にて候ふと、また餘儀なくきこえけり。

其二

富氏は、つく〴〵と聽きて、麁相にて折りたらんは、爲ん方なけれど、

兩人戯れに御槍を遣ひたるよりとは、如何にしても申しがたし。程なく檀那様の御歸りに爲り給ふべければ、其處にありて、何ともまをさず、只恐れ入り候ふとばかり申して居られ候へ。妾、其方兩人に代り、御詫をなし試まをさん、とありて、今年六歳になりける稚女に、御父様の御歸りあらば、しか〳〵に、能う御父様に御詫して、嘉平治と彦太郎の不調法にてはなく、兩人の者に御許がれだりて、御槍を遣はせたる不調法のやうに言されやと、いひ含めけり。

若檀那様の御歸りに候ふと、下部の呼ぶに、婢どもは、玄關に駈けいで〻迎へけり。富氏も常のやうに稚女と共々いで迎へ、孫太郎の脱れる佩刀をうちとり、袖につゝみ、床の間の刀懸臺に懸け、さて恭しく兩手をつきて、今日は折り入つて御願ひまをし上ぐることの坐しまし候ふと。述ぶるとき、稚女は、母の後邊におそる〳〵坐して、小き兩手を着き、稚兒髷にゆひたる頭を垂れてゐけり。

孫太郎は、これを見て、常にもなく、改まりまをして、いかなる事のいで來しにて候ふぞやと、尋ねけり。妻は、すこし頭を擡げて、椽の前にうづくまり居ける若黨の兩人を呼び、良人に對ひ、つい唯今の事にて坐しませるが、これなる兩人の者、きのふ拂ひのこりの煤をはらひ、内玄關に懸けある御槍をとり卸し、日向よき所に立てならべて、干しまをしけるを、娘が、彦太郎に、御槍はいかにして遣ふものや、御父様の御稽古につかひ給ふ眞似をして見せられよと、彦太郎の、己めは一向心得まをさゝれと、辭むを、知らぬ事やある、嘉平治と立ち會ひして見せられよと、何も辨へなき幼ごゝろの、言ひ出しては、是非に〳〵と果は泣いてねだりまをすを、妾は、娘が見まほしと申すこと、さすがは稚かるも、武士の女とて、いかにも〳〵道理とぞんじ、兩人にまをし付けて、しばし立ち會ひて、娘に見せまをせよやと、言し付け、兩人御槍をもちて、立ち會ひに及びまをしけるに、いかなる機に侍りて乎、御秘藏の御槍の鍵の所より、ほつきと折れまをせり。兩人はまをさでも、妾も、娘もあなやと驚き、よしなき事せさせしと、悔むも效なくなまじひ妾が娘の心をくみて、兩人にまをし付けたる麁相に侍りて、もと〳〵兩人には落度なく、みな妾の麁相にて、御詫のまをし上げんやうなく、只顧おそれ入り侍りぬと、謝びければ、稚女は、涙をはらはらと墜として、御父様、わなみが我がまゝをまをしたるにて、御母さまにも御苦勞かけ、不調法を爲ました。眞平御免くだされませとわつと、わつと許に泣き伏したり。若黨兩人は、頭を擧げて、これは、御新造様、御娘さまの御落度にては御坐なく、全く兩人の不調法にて候へば、何卒己等を御成敗くだされますやうにも、請ひたり。

其三

孫太郎は、彼方此方のいふところを倩ときゝて、嘉平治に、折れたる槍を見せよと、あるにぞ、椽の端にさし置きたるを、恐る〳〵出しけるを、手にとり、打ちかへし〳〵觀て、先年、さる者が言ひたることあり、鏡智流の槍は、時に折るゝ事ありと、實に爾り、こや、嘉平治、

戰場にのぞみて敵と槍を合はせ、かう樣にもてる槍の折れたらましかば、忽ち不覺をとるのみ乎、他のもの笑ひとなりて、大なる耻辱ならまし。斯うやうの事あらんには、折り〳〵に違ひこゝろみずしては、實地に用ゐがたし。能くぞ折りて吳れたる、決して麁相にあらず。長よ、泣きぞ〳〵、怪しうない程に。おまへも心配し給ふなと、なか〳〵に機嫌よきさまに、孰も〳〵ほつと息つきて、安堵のおもひをなしけり。若黨のものは、この時の富氏が、慈愛をながく忘れず。嘉平治は、後に堀田家の家人となりしが、しば〳〵人にこのものがたりを爲たりき。

富氏の居りけるほどは、かく家のうち治まりて、春の海のおだしきごとく、召しつかひの男女も和らぎ合ひて、秋の山に百鳥のたのしく棲めるごとくなりしが、富氏、としいまだ若うして失せ、また愛女も失せて、孫太郎は、後妻をめとりけり。こは、おなじ家中にて、磯矢といへる、これも厚祿を賜ひける、大身の女にてありけり。

この磯矢氏、富氏とは、いたく性質を異にして、猜疑のこゝろ深く、氣隨にして、柔和の風なし。されど、よく良人のこゝろをとりたれば、孫太郎は、さばかりにも念はざりしかど、夜おそく醉ひて歸れることなどあるときは、あらぬ邪推をもて、かにかくと想ひを回して、かごとがましく言ひこすり、恨みもし、拗戾も爲けるから、孫太郎は、いつも是には困じたるとぞ。

猜疑のこゝろは嫉妬となり、氣隨は道理に暗みて、舅の妾と諧はず。富氏は、さながら姑のごとくに扱ひたりしが、磯矢氏は、さげすみて言ふところに任せぬのみか、折にふれては、角めだちて、かど〳〵しく言ひも罵りもして、夫にかやかくと讒訴しけるから、孫太郎も時に怒りて、孫兵衛にしか〳〵と言ひ告げることありけり。さるは、孫兵衛のよろこばぬのみ乎、妾も永く仕へゐければ、なか〳〵に肯かず、とあり、かゝりと、孫太郎夫婦の擧動を不孝のやうに言ひつけ、果は孫兵衛もこれを眞として怒りのゝしり、親子の間、ありしにもあらず、野分の風吹きすさびて、虫の音かごとがましく、孫太郎の後妻と妾のいさかひは父子のもの爭ひの種となりけり。

傳之丞のありける程は、かない此方をとり繕ひて、妾と嫂の間もおどけ言などいひて笑はしめ、放蕩なるほどに、よく人間を酌みわけて、事なく濟ませること多かりしが、他家に養子に行くことゝなりて、家に在らずなりしより、又とり成すものもなきより、召し仕ひの男女までも、おのが自然にふるまひて、上も下も麻のごとくに亂れけり。

其四

孫兵衛は、しかすがにこれを憂へ、この頃は、年寄役を罷めて致仕にあづからざれば、年寄役首坐の渡邊主計といへる者の家に至り、孫太郎夫婦のことを語り、この不孝なる息子と嫁をいかに平したし、和殿の思はんところは如何に候ふと、とひ計りたり。主計は、器量抜群にして、君の寵任おもく、この藩に於て、名大夫と稱せられし者なれば、莊田氏の家の事も、かれて聞き知り居り、孫太郎の不遜なるは、

孫兵衞が訓導の至らざるところとして、和君は、一藩の上に立ち、城代の職に居たまへば、宣ふごとき事は、末々までも聞かせがたき事にて、もし主公の御耳に入りもせば、由緒ふかき和君の家なりとも、一藩に對せられ、且は弊事をあらため給ふ時なれば、なか／＼に嚴かなる御沙汰のなからんとも申しがたし。無禮なれど、よく家事を治めたまひ、他からは決して批難する者もなき貴家のことなれば、内より破りて、ゆくりなき禍を起すことのなからんやうあらま欲しと、諫めしが、とかく治まり方つかずして、妾のせい、密にまた渡邊氏の家に至り、とあり、斯かりと、泣きて訴へ、その他の家にも至り、これを訴へけるほどに、果して藩侯のきかせ給ふところとなりけり。をりふし孫兵衞は病にふし、終でうせ果て、孫太郎家を繼ぐにおよびたれど、一藩を控たまふにさし響けば、由緒ある家とても用捨し給はず、嚴命をくだして、孫太郎夫婦事、亡父孫兵衞存生中、つかへ方よろしからず、亡後もつゝしみ方よろしからざる次第相きこえ、不届至極につき、席祿をめし上げ、孫太郎は、親類へ預け、妻は、里方へあづけ給ふとの事にて、莊田家ほろびけり。こは、天保十つちのとの亥どしの事なりけり。

其五

藩侯は、世にきこえたる明君にして、備中守と稱し、名を正睦とまをされたり。侯、後に征夷府の老中となり給ひ、米國の使節波理斯と應接して、鎖港の國法を毀し、蕃國と交通し、國をとまし、兵をつようし竟に蕃國を擧げて、わが國威に服けしめんとし、これを京都に奏聞し、敕許を仰ぐにおよび給ふことは、世のあまねく知るところにして、佐倉の家中は、公はやくより改革し、泰西の學術をとり、文を興し、武を練り、士氣をふるはし、風俗を厚からしむ。かゝれば、莊田氏のごとく、藩士の上にありながら、家政をさまらざる者は、太くこれを罰し給へり。されど、そのよく悔悟して、身をつゝしむに於ては、一旦斷絶せしめたる家も、再興して先祖のまつりを繼がしめ給へり。孫太郎夫婦、親族と里方にありて、いたく畏れ、身を愼むこと數年、こゝに於て公これを憐ませ、且その家柄をおぼされて、孫太郎祖父の子の、藩府の家人となり居ける者あるを召し歸し、家を繼がしめ更めて祿五十人扶持をたまひ、孫太郎には、先祖の墓參をゆるし、やがて親族にあづけ置かるゝを免させ給ひしは、こよなき仁恩にして磯矢氏も共に罪を免されたること明けし。このものがたりは、爾までに古きことならねば、彼の地にては、古老のともがら、當時の事をまのあたりに知りて、今にかたり合ふ者ありけり。賢婦によつて、家をさまり、妬婦によつて、家滅ぶ。女のいましむべき事なりかし。



雜錄

繪はがき草紙

紅蓮子

東京々都大阪は勿論、全國各地とも繪葉書の流行らぬ限無く、僅に一錢五厘の切手貼れば、北國の山里にも南海の漁村に、美しき花の眺めも窈窕たる姫御前の姿も、羽有る樣に飛んで行きぬ。

此頃の流行は元祿風と此なり、元祿は中流以上の社會にのみ弄ばれ、稍都會地に限られ、田子あまが子等には相應はねど、繪葉書は總て然らじ。

一時各國の郵便切手集むる事流行りぬ、面白き事なりき、さはれ繪葉書には此切手も附隨し來り、尙ほ其土地の名所古蹟をも、兼て友が筆蹟をも、更に其作歌作句及び言外に餘情有る、短文等集りて、來客が慰みには、寫眞帖にも勝れたり。

木版石版寫眞版の美人と名所のみかは、美術品として見るに足る可き、露の薔薇も浮藻隱れの金魚も、朝の海も入日の山も、田舍よりは夏祭に踊る姿の華麗模樣をかしきに瓜と虫とをあやなしたるなんど、俗は前髮にリボンの並越て美しきを誰に似たると思召すとのみ、許嫁の從妹より謎の樣なるも有るなるべし

既に繪の宜きに、文句の意味も可笑く配合も面白く珍しうて、發送の日が何の祭何の紀念日など有る上、發信地は白熊住む北海の涯、椰樹の實繁る南洋の島、發信者の人物に大なる特色有るなんどは、唯だ繪葉書にのみ具備し得べき所也



或は文士の書いたる繪、繪師の作りし歌、琴に名有る奥樣の俳句、理學士の君が「春日杖を曳て郊外に遊ぶ何となれば花を見んが爲めなり」と怪しき漢詩等も與あらじや。

在奉天の中尉より陣中徒然の繪に露兵の長所書いて來りし物皇太子結婚の日伯林より出したる花束美しき物、初孫安産の姉に無限の母が喜びを都の兄へ幼き妹より知らせの文字も有るべく、二度の收穫有る蠶が一度より出來ざる北海道の甥から一度の氷の二度迄出來る臺灣の伯父へ贈る物には熊が鮭捕る石狩川の日の上流を獨木舟して妹がり辿る愛奴の一人が笛吹いたる繪も有らん。

凡そ各種各樣雜然として變化多き所に津々として盡きざるの趣味有るは繪葉書なり。

昔より行はれし丹冊色紙の蒐集も此美しく小く可憐なる物にて兼ね得べし。

十日廿日の避暑又は蜜月旅行、三月五月に亘る外國の漫遊等にも各宿々各港々より、日記の代りに書いて家に送り置かば、父兄は見て如何に日毎を興がるらん、時々は旅館の仕切印も押せ、何時しか得たる道連の君と合作の歌なんども、歸りて後に取り出し見よ、そは如何に趣味深かるべきぞ。

何時の間にか交換されて、自然集りたるに繪葉書の趣味は有るべし、さるに早くも繪葉書帖を滿さん爲め、之が交換會等設けて淺墓なる哉深くも永くも交はり知らぬ人々のをさへ並べたり、更に愚なるは數澤山に買入て文字一つ無きを殘る隈無く挾みたり、特に美人のみを集めたるは遂に近づく可からず。

僅なる二句三句が中に、常は交り深くて此春より任官北京に在す君の、俤さへ境遇さへ忍ばれて、内に例の氣風の躍如たるにこそ眞に繪葉書の價値は有りけれ

支社の新設と共に、臺灣に赴きし若き紳士より、婚禮の夜の花嫁が鏡の前に立ち乍ら今や其美しき衣を脫がんとして稍少し亂れ肉附豐なる肩稍現はして、濃艶無比なるに『こんな所も濟みましたらう』と記せしぞ、受けし此方は、良緣成らんとして破れし秋とて、桐の

一葉を螺蛘の繪に、寂しさに泣き居り候ふとも書かす『どう致しまして』。

慶應大學の帽着乍ら愚なりしは數月前に田舍出でし弟なりき、日ねもす夜もすがら書齋に、餘り物靜なれば、何をかしつると窺ひしに、七十枚の美人三十枚の景色を、外しては嵌め嵌めては外して、其配合にアルバム抱きて苦心慘憺。

戰地にても非常の流行にて安東縣に展覽會開かれ、臺灣にては少くも月五圓多くは廿圓宛を之に費し居れる若紳士達も有りとかやこの道に熱心なる豈唯臺灣のみならんや。

美術品として高價と珍奇とを競はんとて穴勝に惡からねど、斯くて餘りに不經濟的に陷て少年少女の慰みには叶ひ難し、繪葉書は平民的にこそあらまほしけれ、髹漆螺鈿等入て一枚四五十錢六七十錢なるが郵便に出さば剝落すべく遂に用を爲さゞるは寧ろ滑稽に屬す、透影のもアルバムに挾めば特色は消えぬ、若夫さるべき書家畫家を勞する時んば一葉五圓十圓の品も有るべけれど繪葉書の妙味は、さる數寄贅澤なる際には有らで反つて五錢八錢の安物に尋常小學二年生の弟が危き文字と幼き口調にこそあれ。

名所古蹟の印刷されたるを實用的繪葉書と呼び、名家の書畫有るを美術的繪葉書と呼ばゝ、伯母姪の間、許嫁の間、寒地暖地の友が間を往復する前記二種以外



の物は、假に情趣的繪葉書と呼ばん。
八百善もよし紅葉館も惡からねど、田舍は裏畠の菜や茄子を煮、前の小川の川魚炙りて、其處の娘が手製料理の味はひ、趣き、嬉しさは自ら格を別にして、黄金の力も能く買ひ得んや將た賣る物ならんや、精巧なる極彩色珍無類の高價なる美術的繪葉書よりも、乞ふらくは情趣的なるを喜ばん。
假令は繪葉書はお刺身のツマの如しと他の云ひぬ、げに大袈裟ならで輕妙ならざる可からず、繪のいみじきをのみやは珍重しつべき、要は人の見て慰みなば足れりとせん、されば少々は拙くとも親ら其繪も畫くが善し、其拙き所にも可笑味は有るべし、學校へ行し程の者誰かは花の一輪草の一莖計寫さゞらん、へまむし入道の其も反つて妙なるべく。
繪の如何に從ひて書くべき文字の位置を程善く取らずは折角の繪を傷くる事多し、文句は餘り多からぬがみやすかるべし。
送るべき先の人の嗜好土地柄なんども考慮して出すを要す。

紐育の活人畫會 （米國人の義擧）

去る五月十二日、米國紐育市ペラスコ座に於て催されたる大演藝會は、實に我が帝國軍人援護會の事業を援護せん爲の義擧に出づるものにして、米人の我邦に寄する同情の如何に深厚なるかを知るに足る可し。
此の演藝會や、未曾有の人氣を以て迎へられ、當日ペラスコ座は午後三時といふに早くも滿員の札を掲げ座の外は馬車を以て途を塡め、殆ど通行遮斷の雜沓を極め、内は上流の紳士、令夫人、令孃等をもて立錐の地なきまでに埋められ、幕毎に起る喝采の響、拍手の聲は場内も破れん許の盛況を呈せりと、今少しく同會開演の顛末を記さんに。
是より先日本の勝利に同情する米人等は又た其の勝利の背後に必ずや慘憺たる幾多の犧牲あるべきを思ひ

是等に同情を表するの餘り、遺族救護の爲めに盡さばやとの議は端なく交際社會淑女等の間に起りぬ、此に於て先に英國公使として日本に在りしフレザー氏の未亡人ヒユー、フレザー女史首唱の下に、是も曾て日本に漫遊せし事ある監督ポッター博士の娘なるラッセル夫人、同じくダウイッジ夫人、日本贔屓の富豪ミンターン夫人、紐育市民同盟會長フルトンカチング氏の夫人を初め其他名望ある人士二百三十餘名の賛助を得て、活人畵會を市内屈指の劇場ベラスコ座に開き、其の收益を軍人遺族救護の資として帝國軍人援護會へ贈る事とはなりぬ。



活人畵はフレザー夫人の新作「盗まれし公子」を脚本として七段十四齣より成る、其筋は昔北條泰時執權職として無上の權威を擅れる頃、將軍元政なる奸謡暗愚の者あり、泰時元政をして任を辭し其子四條に讓らしめんとす、元政の奥方ジトウは泰時の心を解して元政に勇退を勸めて肯かれず、死を以て諫め漸く意を遂せり、玆に大名鹿島なるものあり、密かにジトウに心を寄するをもて陽に金幣を獻じて幼公子を將軍たらしむるに努む、然るに就職の大禮終れる其夜、鹿島は火を館に放ちて人心を騒がしめ、窃に大奥ジトウと公子及侍女等を盗出して佐賀村城に隱せり、是を一段とす、かくて佐賀村城内に優待せられたるも事實は囚はれ人同然たるをを覺るに至りぬ、鹿島の侍女ハルなるもの久しく鹿島を慕ひ獨り思を焦せり、鹿島は之を利用して幼公子を毒害し以てジトウを自己の意に從はしめんと計るハルは此の大それた命令を受けて心に懼れたるも、鹿島を慕ふの念には代ゆべからず、終に意を決して毒を幼君に勸むる事を諾す、其の婢女スヾは毒を加味せし飲料を呈すべく幼君に見えたり、此時眞心の光明は彼女の胸中に閃き來れり、今や毒盃幼君の脣に觸

れんとする一刹那、スヾは之を覆し終り、告ぐるに實を以てしぬ、茲に又た辰藏といふ忠實なる樵夫あり、鎌倉の近郊に住みけるが、物に佐賀村城に入りて警護の士中に紛れ居たり、スヾの自白によりて陰謀を覺れるジトウは辰を招きて仔細を告げ鎌倉に注進せしむ、かくて辰の去りし後ジトウは公子の安危を慮りスヾに托して城を抜出で隱れしむ、之を二段及三段とす、其より幼君は忠婢スヾの腕に抱かれて辰の茅屋に隱れたり、辰の妻ステマツ子なきを憂ひ居たる折とて、スヾの連來れる幼兒を見るや神の賜の如くに喜びて我子の如く愛撫せり、而もスヾは其幼君たるを知らしめざらん爲めにとて早く上衣を取去れるなもて、ステマツは何人の子たるかを解せず、之を第四段とす、スヾは幼君のステマツの保護の下に安全なるを見て、我家に歸る情人勘平に逢はんが爲なり、此時既にスヾの城を脫出せるとを發覺し、正しく幼君を携へ逃れしものと推察せられたれば、鹿島の腹臣茂太郎其士卒を率ゐて道に要して待てり、スヾは彼等の忍べるを知る由もなければ勘平と山間に密會して情交濃なりし時に突然鹿島の士卒現れ、勘平の手よりスヾを奪はんと爭ふ間、幼君の上衣はスヾの懐より落ちたり、茂太郎は之を證としてスヾが正しく幼君を寄せしならんと責む、スヾは斯く誤解せらるゝ事の却て幼君の御身の安なるを知るものから罪を其の身に負ひて慘死の最期を遂げたり、忠義の鮮血は迸りて幼君の白衣に紅の紋を點ぜり、之を第五段とす、是に於て茂太郎紅に染みし幼君の白衣を鹿島の許に持歸る、鹿島は素より其死を希ふもの走つて大奥ジトウの居室を伺ひ其衣を示す、ジトウ及び侍女は驚愕悲嘆遣る方なし、侍女キメ忽ち躍つて懐劍を拔く手も見せず鹿島を刺す、鹿島茂太郎の手に斃れて終に死せり、折柄辰藏の注進に接せし泰時は軍を率ゐて幼君を救はん爲めに佐賀村城に攻め來れり、茂太郎は到底勝たざるを知れば鹿島の殿を擁しつゝジトウを柱に縛し火を放つて城を燒かんとせり、忽ち泰時及高峯の軍城に入つてジトウを救ひ鹿島一族を亡す、幼君は無事に將軍の任に復して太平を唱ふる所是れ六段及七段なり、

扨て之を仕組たる活人畫の第一畫は、鎌倉時代の奥御殿を後景とし、鹿島幕下を率ゐ來りて泰時及高峯に面し恭しく金幣を献上するの圖、第二畫はジトウ其夫將軍元政に辭職を勸むるの圖、第三畫は元政の頑然たる拒絕に會してジトウ自殺せんとして元政漸く其勸告に從ふの圖、第四畫は公子四條將軍職に就くの大禮を擧げ鹿島及其幕下敬意を表するの圖等にて、第二段以下の畫景は煩を避けて之を略く、而して活人畫に扮せし人々を擧ぐれば

大奥ジトウ(リソダル、フ井ールド夫人)侍女シホ(内田總領事夫人)同キタ(今西正金銀行支店夫人)鹿島を慕ひしハル(三井物產支店長岩原氏夫人)侍女コマ(ヴエール孃)同ヨ子(エマソン、セット夫人)同ナエ(ガーランド夫人)同ツユ(ナユー孃)鹿島家侍女トキ(マクレー夫人)同チヨ(バルトン、エメット夫人)同三侍女(ギルダー氏の三孃)侍女マツ(エリオット孃)同カズエ(タルボット孃)同カツ(マツグラス夫人)辰藏妻ステマツ、(パツトリツジ夫人)忠

婦スー(エミーリチヤード孃)元政(岡田氏)春時(武所賞之助氏)岡白高峰(浦谷氏)鹿島(高田四郎氏)茂太郎(矢津理學士)辰藏(伊庭關十氏)切平(小野寺氏)春時の從者(樋口及眞氏等)鹿島の從者(石村及横田氏等)

即ち日本の人々は內田、今西、岩原の三令夫人とコロンビヤ大學生とにして米人側よりは交際場裡の夫人令孃等助力せられしものなり而も是等の人々は二三週間許稽古したるのみなれど、驚くばかり巧妙にて態度といひ、裝束といひ、光線といひ、背景といひ一點の非難すべきなく、觀客の感服する所なりしと云ふ。

斯くて當日の實收金は四千四百弗(八千八百圓)の多額に上りたる由なるが、是は全く慈善家の贊成を博したると、入場料を普通芝居よりも遙に高くしたるが上觀客互に同情を競走して高價の場代を拂ひたると、演藝に出席せずして百弗二百弗の小切手を送附し來りたるものあると、開演中に五十弗の寄附金を投ぜしものあるなど、我邦に對する同情の結果によるものなり而もなほロバートエス、ミントオン氏の、之を一萬圓に充たさんとて殘額一千二百圓を自己の親族中より募集したるが如き其の情誼の親切なる感謝に言葉なきなり、壹萬圓の金額、敢て多しとにはあらざるも、米人の友邦に寄する敬愛の情や實に高度の感謝に値するものと云ふべし。



獨逸の御慶事

（皇太子とセシル姫の結婚）

六月六日は我が友邦獨逸國の皇太子がメクレンブルヒのセシル姫と芽出度御結婚あらせられた當日である、我が皇室に於てはこの大典を祝させらるゝ御誠意を以て有栖川宮殿下御夫婦が既に御渡海になりましたほどであるから、定めし御盛典の事であつたらうと遙察する。

一體この獨逸國は至極の武强國であつて、皇室で子供を仕立つるに專ら武的教育をしたものであるが、皇太子殿下の御幼少の折は頗る活潑で當時宮庭の保姆であつた現島津家の家庭教師ハーフオルド孃の話にも殿下の惡戯のはげしかつた事を記憶して、度々驚かされたとの事で、食堂にお這入りの時は多くの弟王子達と一列に並んで兄君だけに殿下が眞つ先にお在になり兵隊の進軍するやうに勇ましくお這入りになつたといふ事である、

現獨逸皇帝は非常な子福者で御一と腹に七人の皇子女を產ませられたが、皇太子は母君と嗜好を同ふせられて寫眞道樂といふ方であつたから、ポーツダム宮の御居間には不斷所々で御撮影になつたいろ〳〵の寫眞を以て飾られてある、曾て其の愛人セシル姫が其兩親と共に殿下の御居間を訪はれた時、殿下が種々の場合に於て面會されて其都度自ら御撮影なされた米國女優の仰山なる寫眞を見て非常に驚ろかれたそうである、併しこれが爲めに姫の殿下に對する愛情に變化を來すやうな事はなかつた。

セシル姫は殿下の爲めに戀人であつた、殿下は常に其の保姆に向つて、予は決して義理の爲めには結婚しない、必らず愛の爲めに結婚すると申されて居た。今回の盛典は即ちこの希望が達せられたのであるからお芽出度い次第である。

獨逸皇帝は殿下が姫と約婚が濟むまでは皇太子を遇する事小供の如く扱はれたものと見へ此約婚が濟んだ時父君に「これから私も大人になつたのでありませう」

と申さるゝと父君は「イヤそうでない、併しいよ〳〵結婚が濟んだら大人になるのだ」と答られた。

獨逸皇帝はこの約婚の際における双方の關係を正しくする事は頗る嚴重で一緒に馬を驅つたり連立て散歩したりすることは許すが室内に他の人が居ない場合には二人きり居ることは許さぬので、皇太子殿下は此制規に對し非常に反對せられたが皇帝は頑として許されなかつたセシル姫の皇太子殿下に對する愛は極めて濃厚で毎日手紙を交換せられぬことはないよし御面會になつた日でも必らず手紙を往復せらるゝ慣例となつて居る、そして此書信は郵便でなく必らず旅人である、嘗て殿下が狩獵に出懸け給ひし折、數百哩の間必らず毎日特使を送つて其返事を持ち返らしめたそうで、此使の丈高くて其擧止の軍隊的であるのが伯林の各停車場に於て「戀の使」として有名であつた、セシル姫は英國風の教育を受けられた方で英語を流暢に話され英文も達者に書かるゝ、英國遊戯の中ではクロケットの遊が好きでロンテニスは運動の方法としては過激であると云つて大嫌ひである、姫は又繪葉書を蒐集するのが好きで寫眞はまた其婿君よりも上手、折々殿下の居間で製作品の優劣に就て盛んに論議を鬪はせらるるそうである、又印紙を集めることも好きである、氷滑



も上手であるが、併し姫は水泳が一番名人であつて、十歳の時荒浪の裡に飛入つて其の伎の自在なのに見物人を驚かしめたそうで毎夏北方ゼルマンの海水浴場に於て有名な水練家の一人である

姫は又寶玉を頗る愛せられ殊に眞珠を愛せらるゝ、而して此眞珠こそ女王と母君皇后陛下の間を結びつける唯一の鎖であつたので皇后陛下は姫の誕生以來クリスマス毎に高價の眞珠を一箇宛贈物とせらるるのが例であつたが今では此眞珠がつもりつもりて奇麗な首輪となつて花嫁の結婚の儀式を飾る寶となつたのである此眞珠選擇の際には必らず皇太子殿下が其任に當たられて母后及姫を喜ばしたのであつた、

伯林では皇帝よりも皇太子の方が人望がある、御性質は温厚と云ふ評判で目から鼻へ拔るやうな父君の氣質は受ついで居られぬ、其食欲は非常なもので嘗て近衛の士官と一品料理を食ふ事に就て賭を試みた事があつたが此時皇太子は豫定の額より半ポンド以上も食ひ盡くして遂に賭に勝つたさうである、

獨逸人は皇太子の結婚を喜び滿腔の誠心を以て其日を祝ひつゝある彼の約婚の成立した日を以てポツタム附近の某新村を直に新婦の名を採つてセシリエンホーへと命名した位である。

惣菜料理の掟

(一)食物の材料は米麥いものやうな澱粉質、肉乳卵のやうな蛋白質、及び脂油類、以上三種の取合せを程よくすることが最大切で、米の飯にも、幾分の蛋白質や脂油質はあるが、身體の營養に必要だけ取るには、七八椀も十椀もやられればならす、それで飯の多分は無益に排泄されて了ふから、胃腸に無駄骨を折らせて病氣を惹起すの外、何の効も無い、豆味噌類は蛋白質に富んで居るから、肉卵の代りに食べられる(二)材料を取替へて、少しづゝでも、品數を多くするがよい、(三)材料は其の時々の物(四)分けても子供には、一切薬味類を與ふべからず、必らず脳神經を害する、(五)丈夫の胃腸を持つて居る者は材料にあまり消化不消化を言ふべからずとは、先日も讀んだことである(六)食物の第一目的は營養であるが、第二目的は樂みであるから、成るべく器も盛り方も小奇麗にしたい、味は口許りでなく、鼻にも目にも影響する、(七)是はと思ふ材料は、惜まず棄てるが宜しい「勿體無いから食つて了へ」程、愚かな話はあるまいと思ふ、(八)材料の買出しには、妻君自身出掛けて選ぶが宜しい。

婦人就業案内

従來の慣例によると、女子は家庭にあつて裁縫料理や子供の世話ばかりしてゐたので、社會の事業を分擔して男と同じやうな職務を執ることは出來なかつたが、近來、女子、職業の範圍が追々に廣くなつて、東京で小學教員の半數乃至三分の一は女子を以て滿たされてゐる。又、病院でも看護の役目はすべてが婦人の手に委せられ、鐵道の改札掛、郵便局の事務員や爲替貯金の事務員にまで女子採用の道が開かれ、中にも、電話交換手などいふ職務は、全く女子の手に占領されてしまつたのである。

▲勸業銀行の計算員

○勸業銀行で女子の取扱ふ仕事は、勸業債券の抽籤球や、當籤番號の調査や、各地代理店から送つて來る債券の取調や、仕拂濟の利札の整理記錄等で、中にも最忙しいのは番號の取調である。

○給料　は日給二十錢から二十五六錢位まで、尚勉强の向は追々増給して三十五錢位となり、進んで取締の地位に上ると四十錢位取れる。賞與は盆暮の二期、勉方にもよるが、まア大抵二三圓は貰はれます。

○執務時間　午前九時から午後四時まで。しかし暑中は出勤も早く、それにつれて退けも早い。

○女員の成績　こゝでは男子より女子の方が仕事が綿密で、しかもはかどるといつて、喜ばれる。それはその筈。債券の番號の調査などいふやうな、機敏と精確を要する仕事は、とても大まかな性質のものには適せんから、追々に男子の手から離れて女子の領分になるであらう。

○入行の資格　同行に志願するには別にむづかしい試驗はない、たゞ高等小學校卒業位の力があればいゝけれど、その外に、純眞無垢といふ大事な資格が必要なので、一たび外の銀行や會社にゐたことのある女子は、採用しない規定です。勸業銀行の女子事務員の成績のよいのも、かういふ無垢な、きずのない少女を採用した結果ださうである。

○誓約　入行の時は、少くも三ケ年は勤める、辭職せぬといふ誓約を立て、又その約束を履行し得る見込のあるものでなければ採らない、さてこそ、同行の女子事務員が外々にすぐれて、よい成績を擧げてゆくのであらう。

▲保險會社の計算員

○帝國生命や、有隣生命や、日宗生命や、共濟生命などでは、カードの記入と整理に、女子の計手を用ひることになりました。これは東京ばかりでなく、大阪などでも左樣で、中でも、共濟保險では明治三十四年頃から、他に率先して女子を使用した。

○女子計手の要務　計手の要務は、會社備附のカードに、保險金額など記入して、整理するのが重な仕事で、この外代理店出張所から來る解約や、移動の引合せや、金額の相違なども見なければならず。是等は、とても疎雜な頭腦をもつてゐる男子に適當でない、隨つて又女子が歡迎せられるのです。

○カードの記入　一口に言へば、何のわけもなさそうだが、カードの記入などいふことは隨分面倒である。先、そのカードの表面に書くべきことは、證券の番號、保險の金額、被保人の氏名、契約人の氏名住所、契約の年月日、契約滿期の年月日、拂込滿期の年月日、一ケ年半ケ年三ケ月一ケ月の保險料、平均月額などいふことで、カードの裏面には一月から十二月までの保險金受領月日、それを初年二年三年四年と、各年度別にして書入れる。

○勤務の時間　午前九時出頭、午後四時退出、二月の決算期などはどこの保險會社でも、皆夜業をしなければ間に合はぬ位。

○給料　日給で二十錢乃至三十錢、最高額は五十錢以上にもなる。

○慰勞金　いそがしい時、又は成績のよい時には、二三圓づゝ臨時に慰勞金が出る。

○入社　東京市内で公民權を有する二人の保證人が入用。試驗は高等小學の卒業位の學力が程度、中には高等女學校を卒業したのもある。

▲日本銀行の事務員

○操業の狀況　先、階上の一室には、二十歲前後の女子事務員が、身には眞ッ白な布を纏ひ、幾十人となく一隊となつて、古い紙幣を調べて居る。それは、壹圓、五圓、拾圓なんどの兌換券をえり分けて、破損したのには亞剌比亞護模をつけて繕つたり、すでに廢棄に屬すべきものには圓形の孔をあけて、使用のできぬやうにしたりするので、その操業の手迹いことは、殆、目の廻る位です、それから、階下の一室に入ると、五六十疊敷の大廣間に百名に近い女子事務員が、幾列にもなつて、卓子にかゝつて、廢棄紙幣の消印をしてゐる。それは、紙幣の燒却前に、紙幣發行の番號帳に引合せて、一々帳消しをするので、すこし離れて之を見ると、室内にある幾十冊の帳簿のページは、女子事務員の手につれて、さながら風にでも煽られる如くに翩翻とひるがへり、その作業の速いことは、なかなか無骨な男子の及ぶべからざる有樣ですかういふことは、女子獨占の事業ですから、日本銀行では夙くからこれに眼をつけて、女子事務員を採用し、多いときには百名以上百四五十名位も使ふことがある。尙、將來は、簿記方にも計算方にも女子を使用する方針ださうで、かういふ仕事が日を追ふて、女子の勢力範圍に入るのは喜ばしいことである。

○給料、賞與　採用の初は、給料も日給十七錢二十錢位ださうで、それから二十五錢となり、三十錢となり、三十五錢となるのださうです。

もつとも、高給のものになると、四十七錢といふのもあるといふが、ここで一番樂みになるのは賞與である、賞與の額は人により、成績によつて違ひますが、月給三ヶ月分位のものもあるから、勉強次第であろ、賞與は毎半期、即、二月と八月の決算期にもくれる、又、盆暮にもくれるから、年四回といふことになる。

○執務時間　出勤は午前八時、ひけが四時頃。

○採用の資格　割のよい丈に、志望者は非常に多い、その資格は高等小學校の卒業か、もしくは、それと同等の學力あるもの、又、年齢は十四歳以上、兎に角、紙幣を扱はせる大事な職務であるから、その保證人は都合二名しかも東京府下の公民か土地家屋を所有するもの、さうして、親元の身分がたしかならざれば容易に採用せず。

○募集期と學力試驗　募集は欠員のあつた時、試驗は體格と學力とで、作文(尺牘)算術(加減乘除)讀書(銀行會社に關する法規)くらゐのもの。

△電話交換手

電話交換手も、最初は晝の間だけ女子を用ひてゐた、取締上の都合があつてはといふ懸念から、夜は男子の交換手に交替させたのであつたが、男子は自然事務の取扱が横柄になり、不親切になりするのは有勝で、事によると電話加入者と喧嘩をするやうなこともある、第一、男子に通有の胴間聲では、よく通じない場合もあるので、兎角、男子の交換手は女子に較べて不成績を免れないのであつた。それで、三十四年の五月、時の交換局長の五十嵐氏が、群議を排して、夜勤にも女子を採用することになり、さて實際に遣つて見ると、別に不都合もないので、今は、京都でも、大阪でも、又名古屋でも、女子を採用してゐる。

○世間では交換手を女工と同じやうに見てゐるものがあるが、決して左様ではない。資格は、逓信省の立派な吏員で、それ〳〵待遇の道があるから、地位あり、教育ある婦人が從事して恥かしからぬ職業である。

○給料手當　初めて採用された頃には、十八錢位のものであるが、勉強次第、技倆次第で、三ヶ月目、六ヶ月目と昇級して、五十錢の日給位までには昇る、勿論、中には特例もあつて、數年勤續の熟練者には六十錢位のものもある。手當は一年三回で、四月、八月、十二月にあつて一時に十圓位の手當をもらふものもある。

○貯金　手當をもらつたものは、その十分の二を貯金して置くべき内規で、中には毎回四五圓づゝの貯金をするものもある、是等は皆嫁入支度金一方には婚資をつくらせ、一方には無駄遣をふせぐ、なか〳〵注意してある。

○交換手の總數　交換手も只今では益々數が殖える、東京市には七百九十二名、内二百四名が本局、百八十九名が浪花、二百四名が新橋、七十八名が番町、百十七名が下谷といふやうに分けてある。猶

此外に、大阪や、京都や、名古屋や、すべての市街地にあるものをかぞへて見たら、随分少なくない。

○勤務の時間　三日晝勤をして、一日夜勤をする、その翌日が休暇。休暇も矢張り一日の勘定に入れるさうですから、つまり五日目〳〵に、もとの晝勤にかへるのです。晝勤は午前七時から午後七時まで、又は午前八時から午後四時までゞすが、夜勤は午後四時から翌日午前七時までで、執務時間は毎日八時間。

○取締　取締や保護は、行屆いたもので。四方八方から掛つて來る電話呼出しの音は絶間がないので、交換手は長方形の交換機を前にして、椅子に腰を掛けたまゝ、ずらりと並んで、すこしの油斷もありません。その交換手の間には、各組に伍長があつて、執務の指導に當つてゐるが、その背後の中央には監督技師が直立して、すべてに向つて眼を離さずに交換手を取締つてゐる、それから夜勤の間の保護は隨分親切に行はれるので、交換室にも休憩室にも、男子は入れないから、すこしも懸念はない。衞生上の注意も至極行屆いてゐるので、寢具の如きは、各自にシーツと枕掛を渡しておき、人のものなどは使はせないやうにしてあるから、すべてが清潔になつてゐる。それで寢室を取締が始終見廻つてゐる、風紀の亂れる筈はない。

○交換手の志望　監督と保護が嚴密に行はれてるから、若い婦人も安心して務めることができ、又、その交換手の中には、餘暇を以て、刺繡、裁縫、編物などを習つてゐるものもある、中には相當の教師に就いて給繪を學んでゐるものもあれば。學校教員や、會社員や、銀行員や、技手、書記などに縁づいてゐるものもある、又は、故參の交換手の中には伍長や取締になり、月々十七八圓の給料が得られるので全く獨立して、兩親を養つてゐるものもある。交換手は募集のときには未婚者でなければいけないのであるけれど、永く勤續させるにはやはり夫を持つことを許さなければならないので、これは默許してある。

▲募集資格

一、夫なきもの夫のあるものは休みが込んだり、出勤が遲かつたりするもの故なるべく未婚者を採る。

二、年齡滿十三年以上、二十三年以下のもの。

三、身體強健、殊に視聽二官とも善良にして言語明晰、動作敏捷、諸事叮嚀なるもの。

四、品行方正。

▲試驗科目程度

一、讀書　電話電信に關する規則が讀めるもの

二、作文　書簡文　三、筆跡　楷書、行書

四、算術　加減乘除

○交換手見習　試驗に及第すれば、必要に應じ、見習として二三ヶ月は古參の交換手について、交換の實習をするその中、愈々稽古がつんで、電話交換手採用の沙汰に接するのである、其間は一日拾錢の手當である（藤井信手記）

巾幅寸評

近藤たほ子

觀世かつ子刀自

現時能樂界の立物たる觀世淸廉氏の母堂で元德川家の旗下三井某氏の長女なるが刀自一代の閱歷を聽くものは慥に一個の女丈夫たる事が知らるゝであらう、然しながら今は之を叙するの煩を避けて單にその性行の一班を記述せむ、刀自は若して紀伊侯の大奥に二代の君に仕へ、殿中の儀禮故實に精通して君寵頗る厚かりしが、侯の媒に仍りて故淸孝氏に嫁したので、當時は幕府漸く政を失して維新の更革將にその萠芽を露さむとするの際であつたから能樂の如きは既に世の顧る所とならざるの秋で、從つて觀世氏の家運も亦頗る面白からぬ有樣であつた慶喜公の退隱と共に一時は靜岡へ參つて歸農の身と成つた樣なものゝ、淸孝と云ふ人極めて恬淡な氣風で少しも家事を顧るなどの事は無い、加之世襲の俸祿には離れる、小兒は多い、實をいへば當時觀世家の家計は眞に悲慘の極であつたが刀自はこの艱難に處して堪ゆべからざるに堪へ、堅靱と操持と彼の男勝りの氣象で以てこの難關を切り拔けて立派に今の淸廉氏を始め片山九郎三郎などの子息に能樂を仕込むで將に絕むとしたる藝術の命脈を繫ぎ留めたのは全く刀自の堪忍と非凡なる精力の力である、今日觀世氏の家運の隆昌を極めつゝあるものは一は能樂勃興の氣運に際會したる爲とは云ひながら、この老婦人が無かつたなれば或は現今の觀世家の隆運を見ることは出來なかつたかも知れぬ（刀自が跡見女學校の舍監となり生徒の世話をして居たのは此時分の事で）刀自は手跡が頗る見事で彼の御家流と云ふ書體に於ては現時の書家の中で男子と雖もその右に出るものは無い位である、兎も角も名に負ふ大諸侯の大奥を勤めたと云ふのであるから交際の巧みなることなどは、殆んど天才かと思はるゝ位で又從來本邦に行はれ來れる遊技の如きも大概は心得て居らるゝが、今日では只モー慰半分に好きな盃石と茶の湯などを若い娘達に敎へて氣樂

に餘生を送つて居らるゝが蓋しこれは刀自が半生の辛苦を以て償ひ得たる報酬と云ふてよい。

きみが手につなぎし糸はさやかにも
ふたゝびゝくよとぞなりぬる

高木男爵夫人

醫學博士で男爵と云ふ名譽ある高木兼寛先生の令夫人で世間では先生御夫婦をハイカラの急先鋒の樣に思爲して居るのは大變な誤解である、成程同家の家庭は一寸ハイカラ式に出來て居るが然れど普通の西洋かぶれの家庭とは雲泥の相違である、先生御夫婦は、今日の日本流の家庭には改良せざるべからざる點が多くて困る、歐洲風の善い所はドシ／＼輸入してホームの改善進歩を計らねば成らぬと云ふが持論であるので、先づ率先して之を實踐躬行して居らるゝのであつて、一も二も無く歐風に心醉して居ると云ふ樣な氣配は少しも無い、それで日本固有の習慣や、儀式などでも保存すべきものは飽くまでも之を保存して、國粹を外國人にまで誇らるゝ事も隨分多い樣に見受る、兎に角先生の清高健全なる家庭は、慥に家庭改良に意を用ふるものゝ一見すべき價値があるであらう、而してこの光輝ある家庭の主宰者が男爵夫人であると云ふに至ては轉た景慕の念を禁ずることが出來ぬ、夫人名は富子、瀨脇醫學士の令姉である。

ほとゝぎすさやかになくをよの人の
きゝもらせるかくやしかりける

岩佐ちか子

岩佐純先生の令孃で故侍醫登彌太君の未亡人

登彌太君が獨乙留學の事了りて歸朝さるゝや間も無く夫人と華燭の典を擧げられて琴瑟極めて和樂なる家庭を作られたのであるが、人生不如意の事多くして程なく登彌太君は白玉樓中の人となられたので、夫人の悲嘆譬ふるにもの無く茲に端なくも無常迅速の感念を發起して一向佛道に歸向せられた後は、慈善事業にのみ身を委ねて世間の薄命者に同情を寄せてこれを慰籍するのを唯一の慰安とせらるゝので、苟も慈善事業と云ふ事柄には如何なる事でも熱心に奔走されて、少しも

嫌な顔色をされぬ、現今は專ら愛國婦人會の事業に斡旋されてその評議員として降ても照ても怠ることなく牛ヶ淵の事務所へ通勤して居らるゝが、動もすればハイカラの夫人達が軍人遺族の慰問に出懸るに、少しその家が陋穢とか生活の度の賤い家族に對してはハンカチーフで鼻や口を掩ふて義理一遍の口上を述べて逃る樣にして歸らるゝと云ふのに夫人に至ては決して然樣な事は無い、眞に衷情を以て之を慰藉し又私財を擲つてそれを救恤さるゝので、夫人の慰問を受けた遺族の人達は何時も夫人の辭し歸らるゝのを涙で送ると云ふことであるが、一體岩佐家の美風は救恤にも慈善にも可成人知ず送ると云ふ風で現に純先生の令閨なども往々無名を以て救恤の事をさるゝと云ふ事であるが、それで存外人の目には立たぬ、然しドーモこれが眞の慈善の主旨で奥床い家風である、夫人は風流の道にもその嗜み疎からずして挿花盆石などは時々夫人が憂愁の慰藉となる所で殊に挿花は古遠州流の奥儀を極めてその妙技自然を凌ぐ程である。



速縫ひの名譽

廣田星橋

西暦千八百十一年の頃、英國バクーシャーの一邑新ベリーにジョン、コクシターといふ製絨家あり、この人、グリーンハムに大工場を構へ、頗る斯業に熱心で、且有力家であつた、氏一日同地にあるジョン、スロックモートン從男爵と會談の節、近頃、自分工場に据付けある新案の改良製絨器械を用ゆれば、僅に二十四時間以内の短時間を以て、貴君の召されたる上衣を取つて、羊の毛に化し、更に、上衣に仕立上ぐるは容易なる業なりと笑談半分に物語つたので、男爵は何うして日の出より、日の沒までに、左樣な仕事が出來得るもの歟と疑がひ、細心に、其の製造時間を計算して詰問した所ろ、斷乎たる確信を以て逐一、其の能く出來得る理由を答辯した、その氣焔には男爵も一驚を喫したが、「笑談から出た眞事」といふ諺の如く、即夜、晩餐會を催ほし、多くの賓客を招待して、男爵はコ氏が能く其の製造に好成蹟を示したならば、一千ギニー（一ギニー、我約五圓）を賭ける旨を約し、前以て同金額を渡したが、來賓は、誰一人コ氏の成効を信ずるものはなかつた、これが丁度、六月二十五日の夜で、愈々日を期して、この擧は實行さるゝことゝ極つたのである。

さて、擧行の當日は、グリーンハム大工場の廣場に天幕を張り、招待されて集つた近隣の紳士、學校生徒等の來賓は五千名に及び、まるで、大祭日の如き賑ひであつた、この爲め新聞社は號外を發するといふ騷ぎで近郷近在に其の噂は廣まつた、

斯て定刻午前八時といふに、二頭の綿羊を場内に曳き出し、其より脊の毛を刈り、撰分け、洗ひ、漂白し、紡ぎ、織るといふ順序を經て、羅紗となし、扨て次に地質を摩擦して光澤を出し、織目を緻密に締め、張り伸して全面を扛げ、毛並を平に剪み、染め上げて、裁縫に取かゝつたが、其時は午後四時、そも第一着手より、これまで、正に十一時間を費したるのみ。

是にて第一作業は出來上つた、すると瞬間の猶豫もなく、裁縫工は裂地を裁ち、壓搾して、扣鈕を縫付けるまでが二時間四分の一最初より玆に至るまで僅に十

三時十分を用ひた、でこの特別製の上衣が約定時間より一時間四十五分を除して、首尾克く出來上つたので、試驗は見事コ氏の勝利となつた。

そこでコ氏は其の晩六時二十分、來賓の列席したる面前に於て、この精力を籠めた上衣を男爵に贈つた、染色は薄墨を帶びた李色、裁縫の式は寛濶なる獵服、仲々立派のもので在つた。

同夜八時、男爵はコ氏の成功を祝する爲、來賓四十名と共に盛宴を開いたが、滿堂の者皆な氏の功績を稱贊して、喝采の聲々四方に溢たとのこと、倫子バークシャアの農業協會は、氏の功勞を稱し、紀念の勳章を寄贈したとの事である、よつて氏は之等の厚志に酬ふる爲め、彼の二頭の綿羊を屠つて、炙肉となし、強精麥酒百五十ガロンを添へて、公衆に贈つた由。



この上衣は、男爵の嗣子に傳へられて、丁重に保存され、千八百五十一年には英國の内地博覽會に陳列し其の後千八百八十四年、新ベリー[illegible][illegible]獎勵展覽會にも出品の榮與を擔ひ氏の名譽は永く新ベリーに耀いて、今に芳し、此事に關し當日發行の新聞紙は左の如く書いてゐる。

工場に於ける準備は諸事整頓し、掛員は夫々場内に席を設け、諸工はみな擔當の仕事を正確に勤め、

各々伎倆を顯はし、コ氏は一方に立つて、是等一同を指揮して、餘す所なく、來客は重に裁縫科教授、女學生、裁縫工、家庭教育家等なりし、彼の特製上衣は裁縫界を鼓吹するものなれば之が爲めに、大に婦人社會の注目を惹いて裁縫術に一新を來さんことを必せり、親しく上衣のモデルを視るに、全體燕尾服の如く、丈長く、裾の端は輕風に飜るの趣ありて最も雅味を帶びたり、兎に角、其のモデルの奇異なると、其の名聲を博したるは近頃珍らしき事なれば、趣味ある語草として後世に傳へらるべきものなりかし云々。

夏の園藝

東京の中心で最も家の込だ日本橋や京橋などの家を見ると如何な家でも大抵青葉の露したゝる植木の置いてない處はありません、之から考へて見ると人間は天然を愛する心のある事が解ります、して見ると園藝は誠に必要な事で、少しでも庭のある人は其處に草花や木を植えて之を觀察し、育てゝ樂しむのは宜い事です

私が夏園藝に依つて得た處は極く僅で彼の朝顔なんかも本統にすれば手のかゝるものですが、これは種子を蒔てから肥料を施すよりは苗を植える前に充分の肥料を土にませて置かなければ不可ないそうです、大抵油糟が一番宜いと云ふ事で併し之は後から聞いた事ですから土などの事は一向頓着なく其邊の赤土を取つて來て植えたので、木ばかり細長くなり葉と葉の間が二寸も有つて一向に蕾が付かない、繊弱ひものが出來てしまいました而して日光に餘りあてると葉がだん／＼しなびて來るので大急ぎて日陰に入れましたので所謂深窓に育つた御姫様然となつてしまつて、荒い風にも耐へられないと云ふ有様、到底こんな事では見事な花は咲きません、寧こんな小細工な事はしないで、樹根にのびるまゝに延ばして置いた方が花も大きく澤山咲いて却つて眼を悦ばせる樣に出來ます。

朝顔では去年失敗しましたが來年からは一廓氣を付

けて育て様と思つて居ます、待ちに待ちたる一輪が漸く開いて清められた床の上に置かれた時の樂しさは實に何とも云はれません夫から根から幾株も殖えて芽の出るものは株わけをしてやらなければ翌年大きな花が咲かないと云ふ事で丁度庭に在つたヴアイオレットの株を何の考へもなく夏の暑い盛りに移し植えました處が水も程よくやり餘り日光のあたらない處に置いたにも係らず次第に枯れてしまいました夫から不思議に思つて人に聞きました處何でも植えかへるものは春か秋の冷しい時にするもので夏はいけないといふ事でした。



弟達にも草花の種子を分けてやつて二鉢三鉢づゝ育てさましたが今迄は庭に這入つてもいたづらばかりして仕方がありませんでしたが、自分の貰つた鉢に可愛らしい芽が出て來て夫が次第に大きくなるのを見て少なからぬ感動を起し樂しみになつたと見えて、朝も早く起きて水をやるとか、鉢一其植物に付て微細な點迄注意する様になりました、花が咲いた朝の嬉しそうな顔は如何に、之に付て興味を起さしたでしようか、私は斯かる事に依つて子供達に誠に高尚な快樂を増させ、猶其上に次第に事物に注意する様になり、物を研究する事も起り、精神上にも少なからぬ感化を與へる事を知りました。（ふじ子）

時報

△名譽の拜命

曩に皇孫兩殿下の御保姆を拜命せし足立孝子の事を報道せしが此に又女子高等師範學校卒業生にて現に京都府立第一高等女學校教諭の渥美千代子が同樣御養育係を拜命して上京したる由なるが、同人は明治廿五年四月女子高等師範學校卒業同時に和歌山高等女學校助教諭となり卅三年六月一日今の京都高等女學校に和歌山より轉任したるものにて同女史は明治四年七月和歌山市屋形町四丁目に生れ故渥美健治氏の未亡人にて去る卅四年五月生れの長男樟雄、實母秀子（天保十三年生）妹いはほ（明治六年生）との四人家族なり學校生活時代より學蹟操行とも優等の婦人なりといふ。

△婦人祝捷會

去月廿一日午後二時より華族會館に於て開會せられたり、此日を晴と盛裝せる各貴婦人の參會者多く會場は四面國旗海軍旗其他を以て美しく飾られ正面には縮緬、緞子、羽二重等を以て造れる三笠艦の模型、後方には大理石を以て造られし平和の女神を飾り一見眩ゆき程なりきやがて時至るや陸軍々樂隊の奏樂止むと共に毛利男爵は開會の旨を告げ次で會長鍋島侯爵夫人の開會の辭朗讀あり君が代の曲吹奏の後兩陛下に捧呈すべき賀表を朗讀し夫れより大隈伯爵は起ちて戰爭は男性的にして文學は女性的なり今回無前の大捷は文學者の手に俟つもの多しと云ふを始めとし我海軍戰捷の原因は精神的物質的の調和より來れるものなるを述べ且つ軍人の謙讓を讃し終に風敎、科學等の改進興起は將來必ず此名譽に伴はざるべからざるを述べて婦人に警告し次に東郷司令長官に呈する祝電の披露あり尋で伊東大將の海軍を代表せる謝辭ありて全く式を了り別室に於て軍樂及蓄音器の演奏中に茶菓の饗應あり三時半散會せり當日の來會者は鍋島侯、大隈伯、青木子、千家、小早川、毛利男、尾崎市長、伊東大將、肝付、村田の兩少將を始め五百有餘名なりき。

△癈兵院設置の計畫

愛國婦人會にては其附屬事業として現戰役の爲め不具癈疾となれる陸海軍の下士卒を收容し相當の業務を授け終身衣食に不自由無からしめんとて愈々癈兵院を起すことに決定したるが其資金は同會よりの支出年額三萬圓と陸海軍兩省よりの保護金年額六萬圓とを以て之に充つる筈備は會員より醵出する會費と別途の寄附金とを以て之を補ひ漸次擴張の計畫なりと。

教育學事

△東京音樂學校

に於て本科豫科及び乙種師範科生徒若干人を募集す志願者は八月一日より十日までに願書差出すべし入學者の資格は、豫科男女共滿十四年以上にして讀書（國語讀本）作文、算術、日本地理大要、日本歷史大要、英語（ナショナル第三讀本）唱歌、體格等の試驗に合格せる者又乙種師範科は男女共滿十七年以上にして讀書、作文、算術、地理、歷史、唱歌、體格等の試驗に合格せるものとす。

△音樂遊戯協會

神田區錦町の同會は昔く音樂科遊戯科敎員志望者の爲め來る七月二十五日より向ふ三週間第三回夏期講習會を開設す講習料は一科目一圓五十錢三科目以上三圓五十錢。

△體育倶樂部

にては此度舞踏講習會を開く事となり部長に加納子爵夫人を監督に栗塚夫人を推し米國人カーデナー孃と云ふを敎師に聘して每土曜日の午後二時より開演すべしと月謝は五十錢。

△女子鐵道學校

北越鐵道會社にては出札掛電信掛に悉皆女子を採用する目的にて新潟縣長岡町同會社構内に女子鐵道學校を設け

此程第一期生として二十名を入學させたり。

△中等教員檢定試驗の成績　本年度施行の文部省第十八回中等教員檢定試驗の出願者は、男四千十六人、女五百廿八人にして內合格者は男三百五十一人、女六十一人なり。

講習會

△夏季女子講習會　神田橋外東京府教育會にて來る七月廿八日より女教員たらんとするもの、爲に講習會を開く毎日午前七時より正午までの分と午後一時より同五時までとの二組に別ち講習科一科一圓五十錢二科二圓二十錢三科二圓八十錢四科三圓五十錢にて一ケ月間の會期講師は、教育（波多野高師教授）國語（佐方鎭子）音樂（鈴木米次郎）遊戲體操（井口あぐり）家庭應用實驗化學（石川弘藏）家事（塚本はま子）裁縫（瀬下てつ子、須藤さだ子）なほ下田次郎、井上圓了、林晋一、澤柳政太郎、棚橋絢子諸氏の特別なる科外講話ありと。

△帝國教育會　にては高等女學校其他同程度學校教員志望者并に學科研究志望者の爲め來八月一日より凡一ケ月間晝夜兩回開會學科は教育學、教育行政、國語、地理、歷史等にして會費は一學科壹圓五拾錢二學科二圓五拾錢三學科三圓五拾錢の割なりと。

△フレーベル會　女子高等師範學校附屬幼稚園內の同會にては來る七月二十一日より向ふ十日間神田橋外東京府教育會內に於て開會學科は保育原論、幼兒の育方、兒童學大意、兒童個性の研究及其取扱法、幼稚園の唱歌及幼兒に唱歌を授くる方法に就て、幼兒の活動性及童話に就て等にして會費は壹圓なりと。

△實用支那語講習會　創立主は嘉悅孝子校主は前直隸省農科大學校の助教授橘原一郞氏講師は前直隸省師範學校の補習大揖末彥氏淸國人張志蕗氏、科を分ちて入門科、普通科研究科の三となし六ケ月の修業にして會は神田西小川町二ノ二にあり。

△上野女學校夏期講習會　八月一日より一ケ月間開催、學科及び講師は國文（古今和歌集）小西氏、英語（ナシヨナル第一讀本）藤堂氏なりと。

△女子技藝講習會　は裁縫を主とし造花編物、刺繡等の課目にて會期は來る八月一日より二十日まで申込所は神田西小川町二丁目女子技藝講習所なり。

婦人會

△愛國婦人會の戰地慰問使　愛國婦人會にては奥村五百子以下婦人役員二名に全會員を代表せしめ出征各軍隊に就て親しく其勞苦を慰問せしむる爲め派遣の事に決したりといふ。

△赤堀割烹教場　にては傷病兵慰問の目的を以て東兩國東京體育倶樂部に於て共進會を催せり今其概况を記さんに午前十一時開會義太夫、落語、操人形、音曲、手品等の餘興あり尋て花道教授星野市仙氏の河骨水揚法の實驗あり樓階下の舞踏室には赤堀峯吉以下數名のむきものを陳列して縱覽せしめたるが其總ては全く野菜を以て細工せるものにて中にも赤堀教授の芍藥（大根）綠川某の竹に雀（芋）丸山某の木賊に兎の如きは其技妙を極めたり又樓上には賣店を開きて和洋菓子水菓子其他を鬻き又た數十鉢の盆栽を陳列して來會者に購求せしめ其人の名を以て澁谷病院へ寄附する筈。

△女學生の料理店開業　割烹學校卒業の日本橋區元大阪町十三番地伊藤トヨは同番地に「なには」と暖簾を掲げ去る十五日よりハイカラ料理店を開業せしと言ふが器具は西洋のにも日本のにも新らしきを用ゐ各室とも大なる飯臺の長きに白布をかけ中央に造花を飾り和洋とも客の好みに應ず可く女中には海老茶の袴を着せ客を歡待せん筈なりと。

詞藻

塚越停春撰

（天）梅雨

東京京橋區南傳馬町三ノ八須貝方　高宮安子

とま船をもるゝともし火影暗く
　　室のとまりに五月雨の降る

さなきだにわびしきものを、五月雨に降りこめられし旅の宿りをや。況して燈火影暗き苫船の舟がゝりしつゝあるものに於てをや。一首わびしきを日はずして、わびしき意、言外に餘りあり。能く旅の五月雨を歌ひて、情景至るもの歟。

（地）梅雨

和歌山市南汀町三番地　楠瀬とみ子

同じ人の寄せたる歌に、倚面白きものあり。梅雨を詠みて、
　三つ二つかりのつらなる鰆の島や海人の苫屋の晴の空
かはる空かはる景色もなにとなく皐月は袖のぬるゝころかな
さなきだにわびしきことのとりくに身に降りつもる五月雨の空
いかにして進み行くらんみいくさは此の五月雨の降りつゞく日を
漁村を、

雲とぢてそこととも知らぬ唐崎や
　　大津の宿の五月雨のころ

是亦旅の五月雨を歌ひて、同く餘情窮りなきもの。只前者は客觀して之を歌ひ、此は主觀して之を歌へり。評者亦嘗て大津の客舍に雨宿りしたることあり。今此の歌を讀て、懷舊の情に堪へず。

（人）梅雨

石見國邇摩郡靜間村　宮内登美子

五月雨に遊びわびつゝ母君を
　　せめくらしたる時もありしを

同く是れ五月雨ながら、遊びわびて母君をせめ暮したる無邪氣の身も、何時しか人生の春過ぐるに春怨の袖をしぼる身となり、當年の母を憶へども復見るべからず、無意義なる五月雨も、今の我身には何ぞ其れ思出多きやとは、實に此歌の心なるべし。善く婦人の深情を歌ひたるものなるを見る。

秀逸

〇〇〇梅雨

東京下谷五條町五　瀬川銀子

かきならす琴をとゞめてあやめふく
　　茅が簷端の雨を聽くかな

「あやめ葺く」の一語ありて、よく其雨の五月雨なることを明す、のみならず兼て雨を聴くの意の郷邊に在るかを察せしむ。

○○梅雨　岩代國伊達郡小島村　菅野和子

人行かず車も見えずたそがれて
　都大路に五月雨の降る

都大路の五月雨は却て物淋しきを覺ゆ。

○○梅雨　伊豆田方郡上狩野村市山百合の家　くさぎり女

鳴きすてゝ山子規渡りけり
　梅雨白き蘆の湖

蘆の湖の五月雨に、子規一聲雲を掠めて去る。何等の好詩景ぞ。

○○夏草　大和宇智郡北宇智村近内　藤岡さゆり子

つはものが夢の芭蕉か歌の跡の
　夏草の原日はたゞ白き

造句嶄新。用字奇峭。
此人亦梅雨の歌あり、「羅僧の法華經うつす奥の院や青葉に今日も五月雨の降る。」亦佳作也。

○○夏草　神戸元町三丁目竹馬呉服店　竹馬ゐく子

山賤も心ありてや道の邊に
　刈り殘したるさゆりなでしこ

着想妙。

○○夏草　米澤市七軒町　土橋榮子

長者すみし昔は夢か水かれし
　古井のほとり夏草茂る

赤人の「いにしへのふるき隄は年深み池のなぎさに水草生ひにけり」と其意を同うす。

○○梅雨　名古屋市南鍛冶屋町八五　玉村仲子

池の面に見ゆるあやめの葉末さへ
　はつかになりぬ五月雨の空

○○梅雨　信濃　栁澤はまち

軒暗く木々の雫のをやみなく
　日數ふるやの五月雨のころ

以上二首、共に五月雨を詠じて聲調好きもの。
玉村孃には、又（漁村）
ふじの根のながめもよそにこゆるぎの浦なつかしき海士のよび聲
の詠あり、栁澤孃には、又左の作あり。
小止みなく降る五月雨に早苗とる賤が衣も濡れまさるらむ（梅雨）
なれノ\し野中の道もはゝき木のあるかなきかにしける夏草。

○○漁村　周防國德山二番町　いづみ

このまゝにたゞこのまゝに寫さなん
　漁村の夏の雨の夕暮

○○漁村　周防國熊毛郡呼坂町　櫻木芳枝

磯馴松まばらに立てる江南の
　五戸の藁屋に四手あみ干す

以上二首、漁村を歌ひて、共に好詩たるを失はず。

○○夏草　播磨明石　大山恒子

庭草をかりも盡さでこゝかしこ
秋待つ蟲の宿としもかな

○○夏草　長野縣更級郡力石村八五　芳園子

夏草のしげり行くまゝまかせおき
秋鳴く蟲の宿にかさばや

以上二首、共に同じ意を歌ひて同く巧なるもの
大山孃、亦梅雨の作あり
ひさかたの月影ならでもり來るは目敷ふる家の軒の五月雨

○○梅雨　伊勢三重郡楠村　岸田恭子

背の君はいくさのにはにいでましぬ
稚子と二人の五月雨のやど

○○梅雨　石狩國空知郡歌志内村ルークシ松井方　佐々木まさ子

たゞされし涙を母はあかしかねて
病む子かいだく五月雨の夜半

○○梅雨　越後巻校　しげ子

いつとてもしめりがちなる我袖の
ぬれこそまされ五月雨の空

以上三首、灑ぐべき涙は同じからざれども、共に涙を灑げるは同じ。

○○梅雨　東京赤坂區田町六丁目十一　高瀨嶺子

讀經の聲もかすかになり行きて
奈良の寺々五月雨の降る

○○梅雨　岐阜市下竹町加藤方　片田美濃子

にごる瀬に鮎とる灯影見えもせず
長柄の川の五月雨の頃

○○梅雨　京都寺の内通大宮西　三の宮つゆ子

いく年を早苗もとらで下野や
荒れ行く野邊に五月雨の降る

以上三首、第一は奈良の五月雨を詠じ、第二は長柄川の五月雨を詠じ、第三は渡良瀨鑛毒地の五月雨を詠ず。共に好詩。

○○夏草　信濃國小縣郡東内村　竹與はる子

置く露の月にきらめく仇し野に
草をしとねの人をしぞ思ふ

草に對して征夫を憶ふもの。

○○梅雨　札幌南二西四ノ一海野六文堂方　杉山ふみ子

麥黄ばみそら豆實る畑つゞき
人影見えず梅雨の降る

田舎實状。

○○梅雨　山口縣熊毛郡勝間村一五　粟村露子

五月雨に里の渡津の中たえて

京のおとづれ待ちわぶるかな

○○梅雨

さなきだにさびしきものをやみなく
降る五月雨に訪ふ人もなし　備後福山笑島　和田磯子

○梅雨

傘のゆくへをとほく見守りて
友なつかしむ五月雨の窓　摂津富田村　大野滋子

○梅雨

つれづれに裂きし文反古又さらに
あはしても見つ五月雨のころ　大阪　やす子

○梅雨

ふるき文ふるきうつし繪出し見つ
今日いくかなる五月雨の窓　兵庫山陽社宅　柳田のぶ子

以上二首。ほゞ同じ意を歌へり。

○○梅雨

妻琴の低う聞ゆる高樓や
銀燭暗し五月雨の宵　下野小山町神鳥谷　新井てい子

檜頭、人方に蛾眉を顰むるや知るべきのみ。

○○夏草

八重むぐらしげれる宿に一ひらの

ひる顔の花笑みうつくしき　越後北魚沼郡小出村　吉田梅子

着想面白し。

○梅雨

ゆぶけたく烟も今日は打しめり
いぶせき宿に五月雨の降る　札幌北十三條西一丁目　小幡文江

○梅雨

ひとゝせの雨を盡してこの日頃
降るかとぞ思ふ五月雨の空　横濱根岸町三一五六武田方　きく子

○梅雨

軒端まで雲かさなりて梅雨の
いつ晴るべくも見えぬころかな

以上三首。
第二は五月雨を分量より歌ひ、第三は時間より歌ふ。

佳　調

●
をやみなく降る五月雨に友も來ず昨日も今日も文に暮しぬ　仙臺　渡部光子

●
地引あみひく手も細しわかうとは國のみたてにことしめされて　津市　戸倉信子

●
梅雨は霽れて三笠の爾茶屋蚊遣の楼に集の月見る　名古屋　祖父江きん

● 大阪　中川ゑい子

刈り入れし藁屋が軒のおくて穗ほすまもあらぬさみだれの頃

● 石見　秋田りつ子

うたもつき琴にもあきぬ五月雨のわびしき今日はなにゝくらさむ

● 攝津　大野滋子

松原のところ／＼に家見えてあさ風涼し汽笛の聲

● 奈良　賤之女

何時までかふりつゝくらむ五月雨の軒端を傳ふ音のさびしき

● 新潟　逢坂榮子

雨を呼ぶ蛙の聲に人心しめりがちなり五月雨のころ

● 長門　藤村信子

夕立はいましも雨に晴れ行きてあまの家毎に蚊やりたつなり

● 山口　藤村紫鶴

神々のめぐみの雫うるほひてたふれんばかり茂る梅雨草

● 伊賀　井上つれ子

夏深く庭もみどりになりにけりしげるまゝなる軒の下草

● 埼玉　安孫子梅子

玉水の音を聽つゝ今日もまたふみ見て暮すさみだれの頃

● 京都　佐久間律

旅にいでゝ雨はいかにと思ひしに五月雨晴れて富士の山見ゆ

● 遠州　富城百合枝

病む母にくすりすゝめて蚊やりたきてぬひ針取れば梅雨しきりふる

● 越中　奥田あや子

苫が屋の前に佇む賤の女は沖へに漁る夫待つらんか

● 牛込　白百合

いかつりのよべの手柄も語りあきて苫やに眠るあまの子二人

● 赤坂　村田露子

ふりそゝぐ軒端に立ちて今日もまた歸路遲き我子まつかな

● 赤坂　服部澄代

さと河のきしの夏草しげりあひて水見えぬまでなりにけるかな

● 京都　林戸多美子

行く人の影は見えれど夏草の葉末に動く三島菅笠

● 常陸　鳥居塚なみ子

那須の原露の八千草茂りけりせこが通ひ路見えわかぬまで

● 大阪　村田しほ

賤が家の軒端につるゝぬれ衣の重げに見ゆる五月雨のころ

● 伊勢　金子いと子

せこは征き手業ひまなき賤が家は窓くらき迄草におほひぬ

● 靜岡　丸尾道子

もしほ燒く煙もそひて見ゆるなりあまがとまやの夕ぐれの空

● 仙臺　村田作子

砂白く松原續き霧立つ靄のとまやの夏の夕暮

● 札幌　鈴木花子

いさり舟三つ四つ沖に見えそめて船歌きこゆ濱の夕風

● 札幌　小國とく子

小やみなく降る五月雨のつれ／＼にまたくりかへす故郷の文

● 越前　井上とく

かなでつる琴の手やめてさみだれの庭の石うつ音をきくかな

● 岡山　香川春子

益良雄も太刀を收めて物がたりに興そゝろなりさみだれの頃

古里の宿は昔のまゝながら見えわかぬまで茂る夏草　大分　山中千年

五月雨のいさゝかやみてうなゐらがさゝふれ流すにはたづみかな　出雲　加藤百合子

海蒲かへりつくして夕ぐれを漁村さびしう雨に暮れ行く　大阪　押鴨たゝ子

螢が戸の燈火遠く見え初めて松原細う五月雨のふる　能登　杉下寅美男子

引きあげし鯨のたより傳はりて海の七村よろこびの聲　大阪　田中松嘉

たやむ間もたえず軒端にしたゝりて心はれせぬさみだれの宿　加賀　佃小雪子

海人が屋の藻鹽の烟たちこめて磯村遠く日は暮れにけり　美濃　山田愛子

ふまるべき路さへ草にうづもれて迷ふもうれし夏くさの野べ　高崎　池野たけ子

この梅雨を父はいかにと語りつゝ孫を相手に藁繩なふ　香川　横井伊與子

濱の上に夕日はおちて三つ五つ數まさりゆく漁火のかげ　小樽　船津恒子

地引ひく濱邊はいつかたそがれてえものを祝ふ聲ゆたかなり　千葉　みさを

葉櫻にむかしの春の夢ありなさみだれけぶるみ吉野の里　大分　元重時子

淺草　鹽田こう

思ひきや日々にいとひし梅雨の若葉に添ふる緑なりとは

一むれのあまのしづか家けぶり立ちて沖のいさり火影うすれゆく　香川　前田君子

御軍に向ひし人はいづこにて夏草しげき野邊にふすらむ　備後　小林鈴香

下くゝる野中の清水人影も見えわかぬまでしげる夏草　橫濱　藤尾久子

梅雨のそぼふる野面に賤の女はわびしともせで早苗とるなり　信州　田島ぜん子

昨日まで霞こめしと見しものを緑くまなき野邊となりけり　茨城　なか子

さみだれの雲のはれ間ぞまたれける今宵葉ごしの月をおもへば　神戸　富士野みゆき

かげ膳に代る香花のけふりさへうちしめりつゝさみだれのふる　米澤　つぶき

亡き母のみ靈まつりの今宵もや淋しさそふるかきの雨かな　福井　石井染野子

わがせ子の悲しき報知ありし今日絶間も見えずさみだれのふる　大阪　松田みう子

雨晴れし夕の野路のそゞろあるき露を花なる夏草ゆるゝ　本郷　西岡古代子

すなどりに出でし舟のかげ見えず千里が濱に日は落ちむとす　熊本　佐武織子

ひれもすの雨に梅の實四つゝいつゝ池のみきはにならびて落ちぬ　福井　とし代

● 下野　川連幸子
誓ひてし友の音づれ梅雨の日をふるまゝに絶えにけるかな
● 名古屋　大橋鵠
なつかしき青空見えて虹見えて二十日あまりの梅雨はれにけり
● 群馬　佐藤誠
いそしみてぬふ針の手もたゆきまでつら〳〵と降るさみだれの空
● 小石川　原田ふみ子
ふりつゞく雨の絶え間にもれくるはいづこの君のしらべなるらん
● 靜岡　上田新子
降りつゞく雨につけても忍ばるゝ虎伏す野邊の君や如何にと
● 名古屋　中丈
しげりあふ野寺の庭の夏草にうもれて低き五輪塔かな
● 京都　ゆふ月
夏草はそこともわかず繁りけり蟲のふしとや露けかるらむ
● 名古屋　見田重子
彈琴のしらべもれくるまどつ邊のしろきさゆりに五月雨のふる
● 伊勢　藤堂しげ子
秋をまつ蟲のよすがに夏草をこゝろのまゝにしげらせて見ん
● 群馬　小池たま子
網引く浦わの海士の聲たえて荒波狂ふ磯の夕ぐれ
● 長崎　月宮はる子
御佛の燈消えて本堂の夜やふけぬらしさみだれのおと
● 常陸　柴田たよ
こひしとふ君あらなくに我が袂しめりがちなるさみだれのころ
◎ 名古屋　まつ子

夕まぐれ磯邊にいでゝ見わたせば海人すむ村より燈火のもる
● 伊勢　佐々木らく
世をよそに山にはすめどなか〳〵に友なつかしきさみだれのそら
● 長野　小出春江
馬方も馬もかくれて夏草の茂みに菅の笠のみぞ見ゆ
● 讃岐　松田かつ子
やはらぎの聲に滿ちにし戶々の灯も消えて漁村は月になりゆく
● 愛知　藤村藤枝
たま〳〵に洗ひさらせしときゝぬのかわくまもなしさみだれの頃
● 伊豆　向井ひで子
すなどりに辛き浮世やわたるらむ海草ほせる磯はまのむら
● 靜岡　たか子
老松に白波消えてとあみほす漁村のまひるあはれさびしも
● 常陸　菊池みね子
月をり〳〵波にひらめく魚見せて燈火あはし須磨の浦里
● 備中　武邊靜枝
藻鹽やく烟いつしかたそがれて濱邊にきほふ螢のいさりび
● 肥前　さみだれ女
ふみ洗ふいとまなきとて早乙女のかこつさへある五月雨の空
● 大阪　松井たき子
文机にいねむる人の美はしき伽羅の香かをる五月雨の窓
● 駿河　喜代子
岩の間の清きながれの其姿うつして香る白百合の花
● 筑後　安武楽香
若竹の節をすべりて露落ちぬ有明細き深院の庭

● 神田　いれ子

つゝ井筒井つゝの影も見えぬまで生ひてけらしな野路の夏草

● 麻布　永坂渡子

谷川のみかさまさりてまろ木橋うきてながるゝさみだれの頃

● 赤坂　葉山しげ子

柴がきの卯花月夜影きえていよ〳〵暗し梅雨の頃

● 本郷　齋藤千代子

八重むぐらしげる葉末に露おきておもひ〳〵に月やどすなり

● 丹波　田村はる子

今日も又身のこし方や行末を忍ぶにあまる五月雨の空

● 熊本　平井しき子

軒おれて板戸破れしあばら家の奥庭寂う梅雨の降る

● 姫路　船戸雪子

常なればかち渡るべき古川に小舟浮ぶるさみだれの比

● 南多摩　大野ふさ子

うたゝ寝の夢野をたどり分けゆけばあとさき分かずしげる夏草

● 名古屋　国島すゞ子

雨はれて露をやどせる夏草に夕風みゆる庭のおもかな

● 静岡　鈴木玉子

波清き磯馴れ松原あけそめて蜑が朝餉の煙立ちのぼる

● 三河　山本その子

さみだれに水まさるらし谷川の岩うつ波の音聞ゆなり

● 姫路　加代子

日数ふるふるやの軒の板ひさしふるさみだれに朽ちやはてなむ

● 牛込　寺本與志夫子

見わたせばちゞの夏草しげりあひてふみわけがたき野べの道かな

● 伊勢　廣瀬鶴子

蛙が住む十戸の漁村日はくれて沖には白き漁火の影

● 名古屋　富代子

五月雨に君を訪ひよる柴の戸のうちに床しき琴の音のする

● 長門　加藤みち子

菖蒲賣りてかへる少女の家や何地やれし小傘に雨なゝめなり

● 紀伊　坪井都子

勇ましく松魚釣りえてかへる朝松風すゞし海ぞひの村

● 伊勢　ぼたん

わたつ海を見ては泣つゝなきやみつ海士の歸りをまてるをさな子

● 伊豫　加藤しづ子

世の中をのがれ住む身も五月雨は梅のみならでうみ果てにけり

● 越後　小原みさを

さみだれに小川の水やまさるらしあしの下葉の見えずなれゝば

● 羽後　菊池隆子

餌におきし牛の一むれ此處彼處緑の床に横にねむれる

● 大阪　中尾豊

ものゝふのとはにねむれるもろこしの野邊の千草も今しげるらん

● 秋田　須田たけよ

もしほやくあまの衣のしほたれてかわくひまなしさみだれのやど

● 兵庫　柳田春枝

夕日うするあを海原に暮色こめて漁村涼しく月ほのいづる

● 京都　渡邊きく子

さみだれの夕べさびしき軒にたちものやおもへるますらをのつま

● 横濱 石渡主計

此頃ははれまも見えぬ梅雨に籠る心もうちしめりつゝ
● 神戸 竹馬利子

啼きわぶる鳩の聲さへかきくれてさみだれくらし森の下道
● 田端 田中千賀子

年ごとのならひとしれどさみだるゝさ月の雨に思出多き
● 能登 花子

梅雨に閉ぢ籠められて繰り返す春の日記に思出多き
● 越後 坪井わか

せの在す方やいつくと地圖披きおもひにふける五月雨のまど
● 長野 小岩井なみ子

武夫の夢のあとなる古塚や訪ふ人稀に草たゞ繁き
● 大阪 いし子

夏草のしげるにつけて思ふかな召されし駒の今やいづこと
● 上總 峯賀うめ子

我よりと思ひし君にとはれてはふる梅雨もうれしかりけり
● 備後 金原倹子

人は皆すなどりすべく出でゆきて十月の漁村靈靜かなり
● 牛込 深堀かく子

風の琴波のつゞみに海士の歌は神代ながらの浦のなりはひ
● 岐阜 堅田露子

秋さかん花の千草のあらましを露にうつせる野邊の夏草
● 長門 飯田ふじ

やれ垣にからの卯の花しほれける物思ふ夕梅雨のしげき
● 肥前 藤松りか

ながれゆく音はしながら川とし見えわかぬまで茂るくさかな
● 東京 柴まき子

なつ草は繁りにけりなのべやまべすゞみする身をなほおほふまで
● 神奈川 よし川常子

遠近の早苗の小田に菅かさのかずかず見ゆる梅雨の頃
● 横濱 今井絹子

鬱くさき夏のなが雨のつれづれに縷も苧玉卷うみはてにけり
● 志摩 丸屋さと

にぎはしき網引去て新月の淡き光りに松風の聲
● 神奈川 田邊きさ子

浦の家に夕餉の烟立つ頃を沖より歸る眞帆片帆見ゆ
● 牛込 瀬藤ちよ子

晴れやらぬ雨に心もさみだれてしらぶる琴のしめりがちなる
● 岐阜 佐木久子

おひしげる草に小道の見え分かて野守が家は夏ふかき哉
● 牛込 瀬藤ちよ子

夏草のしげりあひてはなかなかに馴れにし道も踏みやまどはむ
● 下總 山本元子

そのかみは家居なりけん夏草の茂れる中に殘る礎

次號の課題

蟬、海、寫眞、

川柳（家庭文藝）

井上剣花坊撰

題『叱られる』『蟻』『氷』

天

信州上田海野町
柚本新助方　小川秀子

御寫眞に涙落して叱られる

評云、叱られると云ふ題を川柳に課すれば、多く可笑味専門の句となり、自然の滑稽を失ひ、たゞ騒がしく呵々大笑するに値するが多し。而して此句に至りては然らず、滑稽の最も廣義に解釋したる者にて、まだうら若き新未亡人が夫の戦死と聞き、天晴れ御手柄遊ばしたと寫眞に向つて言ひは言ひしものゝ、まざ〳〵と生けるが如き面影の目に入りては強く見えても女の情、胸一ぱいに閉がりて、覺えずこぼす紅涙一滴、舅君の見玉ひて、道理と萬々察しながら、涙迸へられぬ武士の父、こら婦も軍人の妻ではないか、と叱られて、健氣にも涙押しかくして實にも不覺でござりましたとホヽ笑へば、舅君も姑君も一座之に和して寂しく笑ふ、笑々の裏に萬斛の涙を藏す、彼蕉門の俳傑が「引張りて籬に寒き笑かな」といへりし趣ありて餘韻限無し、所謂人情の極微を穿ちし滑稽の上乘なる者なり。御寫眞の御の字に其篇中の人物がうら若き婦人なるをほのめかすなど、手腕の非凡、驚くに堪へたり。

地

牛込新小川町
二ノ四　東條町子

八百屋さん梨に蟻がと頑是なさ

評云、また子供が頑是なさも古いもんだと貶したまふ人もあらんされど、八百屋の荷車引いて來りし時、ちよこ〳〵と四ツ五ツばかり女の兒が駈け出で、青物のいろ〳〵はあれど他へは目も移らず、日比このめる大梨の幾個となく重なりあへるを見て　欲しきことかぎりなけれど、さすがそれとはいひかねて、たゞうち見やりたる折しも、其梨の一ツに小さき蟻の遊び居れるが目に入り、覺えず發せし天籟人語、一句の上に含まれたり、作者果してこの小さき兒の母なるか、然らず子の無き人にして此消息を解したりとあれば、其人必らず身は大人にて四ツ五ツの頑是なき心もてる美しき人なるべし。

人

芝區兼房町
十二森方　西山さかえ

氷囊が溶ける頃には寐言なり

評云、今回は一人一句の結果にや、投吟大に偏より、叱られるの投吟最も多くして、佳句強て少なからず、他の二題甚だ振はず、蓋し撰擇を作者に任せ以て、一題に專心ならしむ、また此の如くならざるべからざるか、此句こゝに解釋するに及ばず、讀で字の如し、作者は看護婦などにや、實驗しなくては穿てぬ句なり、氷囊が溶ける頃と働かし、寐言の二字にて之を滑稽化するなど、詞才恐る可し、歌人は居ながら名所を知るといへば、更に其道に關係なき人とても、其境を想像してかゝる穿ちは出るものなり、看護婦などの作ならんより、たゞ普通の子女の作なる方、この句の價値多し。

秀逸之部

祭壇の勳章かけて叱られる　福島　吉野　さち
五月雨に給日傘出して叱られる　越後　かつ子
ちよとお待ちかうしなくては叱られる　下關　倭　すみれ
泣く口へ指しやぶらせて叱られる　北多摩　服部　須惠
留守の間に何して居たと叱られる　須津　粉川一枝子
白壁にへの〳〵書いて叱られる　姫路　その子
綻を見つけ出されて叱られる　名古屋　川井　美哉
人形をおぶうに入れて叱られる　盛岡　稻垣ひろ子
此鯉はと竿でつゝいて叱られる　下谷　安田きく子
何といふ針の運びと叱られる　大阪　服部　みな
くしやみして箔屋の小僧叱られる　横濱　吉田うさ子
床の間で活人畫して叱られる　米澤　藤倉　雪
お隣の背蟲をまねて叱られる　神戸　岩倉　一枝
ロ提督偽がなほると叱られる　麻布　村井　せい
香水のきゝ目が有つて叱られる　石川　小島　豐

佳句之部

人形にお白粉つけて叱られる　秋田　大里　なみ
叱られて泣出して又叱られる　丹波　稻荷　增枝
御秘藏の紅葉を折て叱られる　上總　石崎　もみ
姉さんが坊を叱つて叱られる　下關　今田　きよ
お暑う御座いますと氷屋世辭を云ひ　鳥取　野村　ふじ
坊の留守砂糖は蟻とかはつて居　伊豫　天野八重子
廂髪またお結ひかと叱られる　仙臺　田口　せん
給葉書に涎落して叱られる　河内　西村　多福
糠味噌へ午蒡を漬けて叱られる　下谷　石渡　しげ
一匹の蟻大に女學生室が閙がす　駒込　大伴　良子
父さまの軍刀拔いて叱られる　仙臺　保野百合子
樂あれば苦ありと蟻で異見され　新宿　佐藤八重子
生マ梅をかじつてえらく叱られる　横須賀　萬　壽子
長ばなし見れば氷が水となり　馬關　谷間　蘭子
君僕をいふのか蟻が立とまり　尾道　增田　孝子
紋日雨あても氷も水に成り　河内　辻　幾美子
ザーの侍從敗報が來ると叱られる　德島　久米　哲子
たまに早起唱歌をうたひ叱られる　下谷　賤の女
寢てる子に頰擦りをして叱られる　横須賀　岩岡　公子
氷水を飲むと赤痢になるのねえ　德島　諸岡　春江
そんな髷いふでねえだと叱られる　堺市　綿谷　まさ
妹を泣かして姉が叱られる　沼津　蛭海はま子

姉さんの白粉つけて叱られる　大和　堀内たへ
留守の間に聾瘂して居て叱られる　奈良　永田信
裸體で居お廻りさんに叱られる　下關　吉野さくら
御寵愛のたまに跪き叱られる　松山　越智信子
水晶のやうだと氷透かして見る　米澤　土橋榮子
母さんの寢顔を書いて叱られる　神戸　間名部駒女
奥樣の化粧をのぞき叱られる　神戸　ふみ子
背の兒に氷を食はせ叱られる　名古屋　篠田浪子
ぬすみ食ひ口を證據に叱られる　飛騨　池端ゆた子
產の間をそつと覗いて叱られる　濱松　宮城百合枝
蟻の塔土龍の穴古蹟なり　京橋　太田秀子
御座敷で口笛吹いて叱られる　博多　磯野いち子
蟹狩着物濡らして叱られる　讃岐　北原たか子
おつむりの氷を坊は邪魔にする　下野　新井琴子
蟻の艦隊池に木の葉が浮かんで居　浦和　岸花子
人形に口髯かいて叱られる　栃木　久保あつ子
蟻の塔立身談の例に引き　常陸　香取幸子
御手紙の先など聞いて叱られる　大阪　三雲信子
凸坊おもへらく氷屋が出たな　埼玉　東おとく
ちよん髷のほこりを取て叱られる　山形　長谷川とら
神棚に線香置いて叱られる　會津　鈴木竹子

あらあなた夜の氷は毒ですよ　神奈川　松井歌子
から返事ハイと許りで叱られる　芝區　みすゞ女
ねんねえではないよお前と叱られる　仙臺　佐藤日吉子
きり〴〵す蟻のお宿で叱られる　群馬　北澤みよ子
この氷冷くつてよとつきかへし　濱田　篠田微子
赤ン坊だねえと大男叱られる　仙臺　及川玉枝
人形にゆあみをさせて叱られる　佐賀　梅村花子
姫樣のお迎が後くれ叱られる　羽後　菊地隆子
氷水七はい飲んで叱られる　鎌倉　苅谷靜子
さア事だ砂糖の壺が蟻になり　千葉　壽多光子
鐵瓶を磨いて下女は叱られる　大阪　稻生つや
頑是ない弟をどやし叱られる　滋賀　谷口達子
云はずともいゝ事云つて叱られる　仙臺　高橋正代
遠慮してる内に氷が水になり　大阪　三宅恭子
長時間の井戸端會議叱られる　秋田　大里せつ
母さんの下駄で轉んで叱られる　福井　榎並保子
白壁に樂書をして叱られる　石見　秋田りつ子
姉御の經濟論に蟻が出る　武藏　新井峰子
呑む頃は氷あらまし水になり　八王子　安西みつ
人形を叱つた母が叱られる　山形　菅野隆子
生意氣な女の癖にと叱られる　陸中　浦井松子

こんな所へ置くが悪いと叱られる　阿波　飯田つゆ子
氣狂に刄物をかして叱られる　仙臺　荒　つる子
奥様のこわいろつかひ叱られる　麹町區　吉川なか子
理屈ほど縫へぬ癖にと叱られる　備後　髙橋　芳野

撰者吟

氷宮に居たいは夏の驕りなり
熱帯地ポストのやうな蟻の塔
お化粧を二時間もして叱られる

次回の川柳課題

「暑い事」（冠沓兩用）〆切七月十五日

例は「何々が何々で暑い事」或は「暑い事何が何して何々々」といふ様に作句す、「叱られる」と差ある點は、其冠に置くの自由を許すの事のみ。

謎々

『奈良の大佛』『ハンモック』
『京釜鐵道』『海水浴』とかけて

第一等

▲奈　山梨縣東八代郡一宮村　岩間よしの
春雨」と解く
心は「はな（花、鼻）の中を傘で通る

評云、すこし古いのに難があるが、謎としては先づ上乘の方である大佛の鼻の中を傘で往來が出來るといふ滑稽な事實を花時蛇目傘で行く風雅に合したのが滑稽だ。

▲奈　東京府北多摩郡立川村　服部須惠
水師提督としての東郷大將」と解く
心は「肩を並べるものがない

評云、時局を應用して、無難々々。

▲海　甲府市二十人町二十九　淸水梅子
安洋服」と解く
心は「ちきに日にやける

評云、ちよいと可笑しい、ちがつたものをウマク合した。

以下秀逸

▲奈…東郷大將」と解く　奈良　永田信
心は…「名將（名所）として世間に知れて居る

▲ハ…「電車」と解く
心は…「子供がのりたがる
横濱　寺田　光子

▲海…入學試驗の受驗者」と解く
心は…「はいるのが目的
宇都宮　手塚　りか

▲ハ…魚釣り」と解く
心は…「釣り工合がある
河內　西村　洪子

▲京…佛事の香料」と解く
心は…「熨斗の無い進物
讃岐　後藤くめ子

▲ハ…運動の綱引き」と解く
心は…「鯛（體）が横にねて居る
京都　渡邊きくえ

▲奈…露亞西帝國」と解く
心は…「大きいばかり
靜岡　渡邊　久子

▲ハ…親心」と解く
心は…「子供の身が氣（木）にかゝる
下野　石井　蝶子

▲ハ…夏の夜汽車」と解く
心は…「涼しくつてつい眠る
兵庫　三浦　久子

次回の課題

『媾和』とかけて　『朝鮮人』とかけて

『リボン』とかけて　（〆切七月十五日）

新刊紹介

▲水彩畫練習ハガキ（一條成美畫）　神田錦町修文館發行

婦人風俗及び田園風景の水彩畫を精巧なる石版摺にしたるもの六枚、加ふるに彩色用水彩畫手本として同じ物の輪廓を墨書にしたるもの六枚を以てしたり、尙は他に交換用往復はがきを添へありて、其の往信の方に彩色を施して送附すれば成美畫伯は其の返信に肉筆を揮ひて發信人に返付するといふ面白き趣向なり、畫風瀟洒、筆致鮮麗なれば啻に机上の練習に適するのみならず、座右の珍として愛玩に値す、十四枚一組價五十錢、郵稅金六錢

▲獨唱廣瀨中佐　神田錦町修文館發行

歌は大阪府師範學校敎諭峰谷鐘吉氏の作にして、中佐の偉功を謳ふに悲壯の詞を以てし、曲は同校敎諭目賀田萬世吉氏の作になりて、中佐の壯烈を傳するに淸婉の調を以てし、一高低の內の怒濤澎湃迅雷急雨の概あるは、吟誦以て中佐の英魂を追懷するに足る、此種軍國唱歌の秀なるものなるべし、菊版二倍形の美本にして體裁亦た佳麗なり、定價二十五錢

▲明治の家庭（第一卷第一號）

明治の家庭てふ月刊雜誌、婦人の友達たるを目的として生れたり、子供の敎育、同家政の事を主とし其他婦人に必要なる智識の說明に努めたる篤實温雅の小雜誌なり、每月一回一日發行、一部六錢、東京牛込納戶町明治の家庭社發行。

▲明治俳句一萬選　星見柏浦著　博文館發行

明治俳人の秀吟一萬句を集め驅して明治俳句一萬選と云ふ、世の俳諧を研究する者及び愛好する者は一本を坐右に備ふべきなり。

避暑風景

▲戸隱山

善光寺の市街を距る北方五里、信州と越後の境に戸隱の里あり、此地海拔五千三百尺、登臨して四方を顧望すれば北の方十數里に方つて日本海の蒼溟を見る、南方は信甲の諸山壘々として萬頃の波を織るがごとき間に芙蓉峯頭千秋の雪を見、御嶽、淺間、乘鞍、白根の諸山近く東西に雄峙して眼界頗る雄偉を極め、山の絕頂を劍ケ峯といふ獅子窟、金剛窟、仙人窟等の名稱あり、巉岩尖石天を摩して亂立し、一帶の山容風丰儁異、時に山風淅瀝として秀靈の氣骨に徹す、山上に縣社戸隱神社あり、夏は登山者多し、中腹に旅亭二十餘棟あり、皆舊社家の業を轉せしものにて屋宇宏壯、名物に信濃蕎麥あり、山菜又喫ふべし。

▲盤梯山

盤梯山は若松市の東方數里に在り、猪苗代の湖畔より磨上ヶ原を經て東北に進むこと少許にして山麓に到る、岩角を攀ぢ葛蘿を援きて上ること數十丁漸くにして山頂に達す、只看る一道の白氣蓬渤として天を衝き其聲百雷の震ふがごとし、安積の湖水、明瑩鏡の如く近く眼下に落ち、岩瀨の川、逶迤帶のごとく遠く荒村破驛の間を過ぎて湖に入る、形勝の雄偉、風物の豪爽、歎賞時の移るを忘る、山下に溫泉あり、綠陰幽邃、浴舍亦閑雅なり。

▲諏訪湖

信の地元四圍山、諏訪は山河襟帶の地、一泓の水を湛へて周回四里の湖水を作る、遠山の水に反映する處ろ、漁舟波に泛びて瀲灔たる景趣快いふべからず、輕舟に掉して湖心の勝景を探らば高島の古城墟、諏訪の市街、遠山近郊、碧綠の間に點綴して歷々數ふべし。

▲御嶽山

信州は山國、七千尺以上の高峰峻嶺數ふるに遑あらす、就中御嶽を以て最とす、海拔一萬尺、高峻富嶽に亞げり、登臨して脚下を見れば千山萬嶽一に其の子孫のごとし、岳頂の祭神を國常立尊とす、故に夏季登

山參拜するもの頗る多し、登山の路二つあり、其王瀧よりするものを南道とし、其黑澤よりするものを北道とす、共に其の山鄉より頂上に至るまで五里、山は一面花崗石より成る、其八合目以上は峻峭屹峙し、岩石磊塊、又一草一木を見ず、其以下は樹木天を掩ひ徑路草茂り岩峙ち、水激して行程夏を知らざるの處ろ殊に溪涯岩高く、水急なるの處ろ、架するに危橋を以てする其の奇景、山洞の窈然たる處ろ、谷究り、徑竭き、而して絕壁削立、樹は倒懸して空を掠め、影は冷にして氣幽なるの地、飛泉落下して全溪爲めに震ふの奇勝あり、況んや又嶽頂の遠望、洞谷の危嶮、眞に俗膽を驚異せしむるものあり。

▲鷹巢山

上毛の地名山勝概枚擧に遑あらず、中に鷹巢山を稱す、地は高崎の北二里にあり、山高からずと雖も風景に富むこと近郊に冠たり、直立數百丈、半腹にして上毛の平野を脚下に俯瞰すべし、前橋の市街は近く眼前に在り、後ろは名に負ふ伊香保にして連山綿々として榛名に接す、頂上に琴平神社あり、朱樓紫殿の裝ひ莊嚴端麗なり、山麓に碓氷川あり屈曲逶迤として長蛇のごとく、水淸くして多く鮎を產す、旅亭に片本陣、朝日樓あり、料理淸鮮にしてよく京客の口に適ふ。

▲山淸峽

松本より舟に掉して犀川を下るもの必ず山淸峽の奇勝を稱せざるなし、峽は信州の東筑摩郡生阪と、安曇鄉との山間にして犀川の水是に至りて逼迫し、澱みて淵となり、流れて湍となり、忽ちにして千曲渦をなし忽ちにして、萬涯流下す、而して兩岸の山嶽、絕壁削立して巨岩疊々、欝林叢樹ありて之を掩翳し、翠松綠竹ありて之を點綴し、以て峽の全景を作る。舟の此峽間を下る石紫、水明、山骨稜々として淸嵐溪に滿ち風色幽靜行人をして轉た吟賞に堪へざらしむ。

毛布の奇遇

出征第五師團第九補助輸卒隊砲兵特務曹長渡邊新三郎氏は雅名を千船と號し縱園主人榊正臣先生の高弟なり和歌に長じ書に巧なり。おのれも年久しき知己なりしが去年出征せられてより久しく其の音信に接せざりしに此度珍らしく書を寄せられて去年國民後援會の事を贊成しておのれが寄贈せし毛布の不思議とや云はん奇遇とやいはむ。ゆかりなくも同氏の手に入りし由報じ越され且その動靜を詳に記されたれば女學世界讀者の御目にかけ候かしこ

國分みさ子

かへりみ候へば去年五月めされて第九師團に編入せられ候ひしよりはや一年に近うなり申候をいまだ一度も御通信申上げず今更申わけも無之候一月要塞攻略の後は軍作戰の發展にともなひ小生等も北進の命を蒙り二月五日程を起し候て十六日の嚴寒を馬上に重燒麪麭をかぢりながら寧日もなき北風に逆らひて行軍を續けおなじき二十一日遼陽の西に集中を終り候ひしが二三日の給養すらえせで直に戰鬪の序列に入り奉天の大會戰には最左翼軍として參加し今なほ餘命を保ちをり申候三月十五日鐵嶺會戰の最中現所屬附拜命いたし候ひしがその後やう／＼前進いたし候てきのふ當陳家窩棚へ至りつき申候この村落は鐵嶺の正西九十清里奉天西北約百二十清里のところに位する一小村落に候てもとより地圖上にも無之候昨日の行軍は非常の困難にて候ひき小生等は今まで藥家棧と申すところに駐まりをり候ひしが二十八日出發當地に前進の命下り當地までは五十清里とのよし申し聞けられ萬事その豫定にて計畫石佛寺より遼河の軍橋石佛寺橋をわたりて前進いたし候ひしがまことは八十清里ばかり有之候ひし爲計畫全然齟齬と相成り徒歩兵のみは日沒ごろ辛く目的地まで到達いたし候ひしかど行李は徒歩車のこととて大部分續行すること能はずとかういたし居り候ほどに日はすでに沒し候こととて二十四日の月はいまだ出で申さず遂に後方の村落に宿營いたし先着の小生等をはじめ大部分は糧食もなきさまとて大に困難いたし候ひしかど全地(紫牛堡)に開設中の患者療養所にて給養をうけ辛く食事にありつき同夜はその定病室に綿の如くなり候ひし身を横へ寄贈毛布につゝまれてひと夜をあかし候ひきそのつとめてにて候ひき奇遇とも申すべき事おこり候ひしは。日高うなり候ひし七時ごろにて候ひけむか顔などあらひ候てかへり候ひしとき何心なく從卒のたゝみをり候例の寄贈毛布を見やり候ところ一隅の片布にしるされたる

　　天地の神も……

と縱嚴の師大人のにいとよく似かよへる水埿のあとの見え候ふになつかしうてよく見定め候へばこはいかに

　　天地の神も守らむ國の爲

　　　よのためつくすますらをのとも

とありて御許様の御名までこれあり候ひしことゝて萬里の征途に靈姿を拜するのおもひをなし御なつかしさにたへず切に乞ひて紀念の爲該毛布をもらひうけ申候ひき數ある毛布の中に御許さまの御寄贈にかかれるものにつゝまれて一夜をあかし候こと奇遇と申外は無之候

　　あたゝけき君がなさけにつゝまれて

　　　れしよのゆめよやすけかりける

　　遠き〳〵千里の海の外にして

　　　きみにあひたるこゝちせしかな

御わらひ下され度候その後は如何おはし候かます〳〵御壯健にて軍國教育界の爲御盡瘁の御事と邦家の爲慶賀に堪へず候御いとまもおはしまさば御吟什ども御示し下され度御ねがひ申上候いまゝでの宿營地は首山堡遼陽をすぎ候てより遙かに西に出で候ひし爲廣濶なる平原にてこゝちよく候ひしかど只今の宿營地は四方山をもてかこまれ候ひしため谷底に追ひおとされ候ふやうにおもはれこゝろぼそく感ぜられ申候

　　ちしほなほ乾かぬ野へも春されば

　　　いろつきにけり柳わかくさ

丈子君よりすみれまきこめてふみしたまひければ

　　ひとくきのすみれなつかしなつかしき

　　　君のつまれし花よとおもへば

八木千弘ぬしにつかひやりたりしとき日本茶を贈られければ

　　春の夜をきみが情のこのめ煮て

　　　うたおもひなれば雁たきかへる

奉天會戰ののち人へふみやるとて

　　死もあへずいさをもたてすかへり見て

　　　ひとのなさけになくわがみかな

蜂腰いづれも歌になりはべらず御叱正を仰ぎたく候あなかしこ

　　　　　　　　　　　　　陳家高棚にて

四月三十日　　　　　　　　　　千　船

國　分　操　子様

　　みまへに

新案繪さがし披露

前號の繪さがしは分り切てる樣に見えて其の實仲々分り難い所が趣向です、夫でも能くお當に成りました、特に子供方の解答が多かつたのは喜ばしい事で、皆さん方が御兩親の膝下で或は御兄弟と御一緒に目を猿眼にして御搜しに成つた狀態が目に見る樣です、記者は之が爲め皆さんの家庭に多少の慰を捧げ得た事を嬉しく思ひます、解答の中には大人の方のも隨分澤山有りましたけれど、恁う云ふ事にかけては何うしても子供の方が眼が敏いと見えて、大人よりも小供衆の方が餘計に當つて居ります、〆切迄に受付た解答端書の數は二千三百枚からありましたが、當らないのを撰り出して見ると御氣の毒の樣に少しに成て了ひました、其は中央に頑張てるのを猫と判じたり、獅子や駱駝を見損つたり、鹿と駱駝の間に頭を出してる熊を見落したり、又は居もせぬ虎だの狼だの狐狸を引張出した爲です、扨て此の繪搜し中に出席してゐる動物を正確に名差して見ますと

犬　羊　牛　駱駝　鹿　兎　鼠

豕　獅子　馬　熊　猿　象　計十三種。

そこで此の通りに正しく御當なされた方は左の五十名で御在ます、

京都　福井千代子
米澤　土橋榮子
大阪　橋花子
千葉　齋多光子
京都　竹市たま
橫濱　村上さと
山梨　飯田龍
岡山　味岡美榮
京都　戶田シヅ
東京　池田ひで
靜岡　三田わか
仙臺　佐藤日吉子
富山　阿羅井園子
京都　小森幸子
備中　米川秋香
東京　太田榮子
長野　瀧澤いそ
福島　小林よし
仙臺　中川あや
東京　塚原よし
長野　丸山惣子
東京　松下ツユ
伊賀　井上房次郎
岡山　宮原國子
東京　渡邊愛子
出雲　大村幸子
東京　小野秀子
群馬　佐々木まさ
岩代　高橋よし子
備後　後藤岩子
橫濱　內山つる
仙臺　荒つろ子
東京　池田濱子
弘前　平山清子
札幌　樋口甲子
岩代　吉川うめ
福島　太田せつ子
埼玉　田頭みつ子
本鄉　山田せい子
東京　鈴木梅子
越中　高橋ツ子
弘前　西村まさ
長野　八幡靜
長野　德武ふさ
東京　神田大太郎
東京　小室れつ子
札幌　今井ひろせ
近江　藤澤菊子
東京　小島靜子
愛知　伊藤定子

細君低語

巖谷小波

其の十一　大のハイカラ

一も西洋、二も西洋、と何でも西洋ばかり褒めますのが、あのハイカラとやらで御座いますなら、手前共のなどは、それこそ大のハイカラなんで御座いませうねエ。

その癖西洋へまゐりましたのは、昨年の五月から、ツイ先月までの事で御座いますから、やつと一年に成るか成らず、……それも一つ所に居たのでは無く、歐米視察と云ふ御用で、大臣の御供をして、ほんの素通りをして來た斗りなのですが、此頃歸りましてからの様子を見ますと、氣風までガラリと變りまして、まるで西洋で生まれた者かなんぞの樣に、日本風をけなすんで御座いますよ。

人樣でも居らしつて、西洋では如何で御座いますなど〻、一寸水を向けやうもんなら、それこそ樽の栓を拔いた樣に、止度無しにハイカラ論が出て、その果が乾度日本婦人の惡口。

やれ圓髷は不健康だの、長い袖は不活潑だの、起居が因循だ事の、應接が下手だ事の、ヤレ世間を知らないの、敎育が足り無いのト、側に居られない位棚卸しが始まるんぢやありませんか。

それを聞いてお客は、又そんなハイカラ論は、十年前から存じて居ります、ト云ひ度さうな顏をしながら、人が惡いぢやありませんか、わざとさも感心した樣に、上面で口を合はせますから、此方はまた調子に乘つて、女學世界で毎度目にタコの出來てる樣な、家政論や、男女交際論や、果は黴の生へさうな演劇改良論を、得意に成つて辨じるんで御座いますよ。私はもうたまらなく成つて、好い加減に其所を退いて來れば、又しても呼び付けるんで御座います。

而もその呼ぶ時に――これも西洋風なのか知りませんが――私の名にさんまで付けて！ホヽヽ、私やア顏

から火が出る樣です。

其の十二

ホヽヽ、さんまでお付けに成る位なら、屹度奥さんを御大切に成さるんですから、貴女は御幸福で居らつしやいますが、同じ洋行は致しましても、私の夫の樣なのは、何の役にも立ちは致しません。却つて大のパンカラに成つてしまつたんですもの。

尤も一年か二年なら、さうアヲも見えなかつたんで御座いませうが、足掛八年も參つて居りまして、隨分裏の裏まで知り拔いて居るもんで御座いますから、折角歸つて參りましても、一向西洋風な事は無いんで御座いますよ。

そりやア永い間の癖で御座いますから、蒲團が痛くて寢られないとか、下駄が危くて穿けないとか、異人臭い事は申しましたら、食物なんぞは案の外で、澤庵やら胡爪揉なんぞ、嬉しがつて戴くぢや御座いませんか。

そんな風で御座いますから、丁度歸つて參りました時分、私が束髪に致して居りましたら、『何だこの態は、日本ぢやア此頃こんな頭が流行るのか。そりやア巴里の淫賣が結ふ髪で、それも五六年前にもう棄たつた』とか『そりやア看護婦か下女の頭で、帽子無しに外へ出られた髪ぢやない』などゝ、散々に申されてしまひ、また娘の改良服も、『何だつて玉乘の太夫見度いな眞似をさせるんだ。もうちつと人間並の風をさせてくれ。』と、それは〳〵評判が惡く、大失策を致してしまひましたよ。

で、私が、家庭の事や交際の事に付きまして、利益に成る樣な話は無いかと存じて、西國の事を尋ねますと、『西洋は畫と寫眞で見て置きやアいゝんだ、委しい事を聞くにやア及ばない』つて、少しも申してくれませんの。

その位で御座いますから、八年も留守番致して居りました者に、碌な土産も買つて來てくれませんから、『せめて指輪でも願つておけばよかつた。』と申しまし

たら、夫の言艸がよいぢや御座いませんか、『乃公もさう思はないぢや無かつたが、西洋の物は細工ばかりで、金性は矢張り日本に及ばんからねエ』ッて……理屈は何うにでも付きますことね！

其の十三　堅いより働き

『容貌は何うでも氣質さへ好ければ……』とは、嫁を求める者の言艸、『人物さへ堅ければ貧乏は覺悟の前』とは、よく夫を定める女の云ふ事です。

ですがねエ皆さん！人間の淺猿ましさと申す者は、その初めの覺悟と云ふ者が、なか〳〵末まで續かないのでしてねエ、

私なんぞも、お恥かしい事で御座いますが、矢張りその覺悟で參つたもので、よし貧乏であらうとも、堅い人間であつたなら、一生苦勞も無からうと存じて、只今の所へ參つたんで御座いますが、成る程夫は堅い男子なので御座います。

それはもうその堅さと申しましたら、先程御話のありました、何方かの御主人にも、決して負けない位なんで御座いますが、お金の有ると無いとが大違ひなので、……私共のは、只堅いと申す斗りで、世間に出まして働きが、まことに鈍いもので御座いますから、有體の所を申しますと、私が參りましてから彼是七八年に成りますのに、月々の收入ります物が、一向殖えて居りません、

それに世間は進みまして、物價は騰りますのに、子供は出來ますので、世帶はます〳〵苦しく成ります斗り、何時に成つたら差配の催促を受けないで、家中が氣樂に年を越す事が出來やうかと思ふと、何だか心細い氣が致すんで御座います。

こんな事なら最初から、堅い人ならばと云ふ代りに、働きのある人ならばとしておけばようございました。ほんとに働きのある人ならいつまで貧乏もしては居ますまい、なんぼ堅いがよいからつて、貧乏まで堅いのは驚きますからねエ。

其の十四　罪な事

覺悟の前と云へば、私もとんだ覺悟の仕損ひをして、今更後悔致して居るんで御坐いますよ。御存じの通り私の夫は、少しは名の賣れた小説家なので御坐います。

小説家なぞと申す者は、あまりお金の無いと云ふ事は、元より覺悟致して居つたので御坐います。然しその代りには、氣がさばけて、同情があつて、世間が廣くて、

家庭にも趣味があれば、社會にも多少尊敬されるだらうと、かう想像して居たもんですから、おなじ夫に持つならば、なまじつかの學者や官吏より、かう云ふ文學者の方が乾度好いだらうと思つて、實は私から望んで參つたんで御坐います。

所が、結婚前の想像と云ふものは、大方みんな外れてしまつて、當つたのは貧乏と云ふ事ばかり……書いた物で見ましたのと、正の當人とは大反對で、氣のさばけたと思つた人が妙に廻り氣が強く、同情は成る程無くもありませんが、いやにひつッこく、世間が廣い樣で居て、その割に知らない事が多く、家庭も思つた程面白く無いんですよ。

それで局外から見て居ると、同じ文學者仲間ですから、あの方ともこの先生とも、始終御交際があつて、行つたり來たりして居るのかと思ひますが、かうして其家の者に成つて、もう一年にも成りますのに、○○先生も△△さんも、遂に一度お顏をお見せに成らず、御披露の日に御紹介され、××さんも◎◎先生も、たつた一度か二度入らしつた限り……、お目に掛り度いと思ふ方はちつとも入らつしやらないで、その代り始終出入にするものは、名も聞いた事の無い書生上りの三文々士や、獨り好がりの青年作家ばかりで、愚にも付かない事を云つて、お互ひに煽てたり、自慢し合つたりして居るんですが、只それ斗りならいゝんですけどもその若い氣取屋連が、良人に向つて、憎らしいぢやありませんか、「君は細君を貰つてから、作物に熱

が無く成つていかん』なんて、まるで人を氷嚢か何ぞの樣に思つてるんですもの、ほんとに人を馬鹿にしてるぢやありませんか。

尤もそりやア、ちつとは作物も下がりませうさ。私が參つてからと申すものは、作物に對する苦勞の他に、世帶の心配と云ふものが一つ殖ゑたんですもの……考へて見りやア、罪な事を致しました。

其の十五　幸福者

先程から皆さんの御話を承つて居りますのに、何方も〳〵、御良人さまの棚卸し斗りで、一人も御滿足な方は無い樣で御座いますが、よくあの歌に申します、『口でけなして心で褒めて……』とやら、皆人前ばかりにさう仰有るので、心では何方も御滿足で居らつしやるんでせう。いゝえ、そりやアもうそれに極まつていますよ。

ですが私は、そんな罪な事は致しません。只何事も在りの儘、ざツくばらんに申しますから、どうか皆さんもそのおつもりで、お笑ひ遊ばさずに聞いて下さいまし。で、私は、全くの所を白狀致しますと、自分の夫を以て滿足致して居りますので、イヤ、滿足も滿足も、世界に二度とかう云ふ好い夫はあるまいと、大滿足を致して居るので御座います。

その癖あの夫を定めますのは、何も私が選みましたのでは無く、と云つて見立てられた譯でも無く、只仲人から申込まれて、兩親から云ひ聞かされて、それで又私は、別に深く考へた譯でも無く、只何が何だか無我夢中で來てしまひましたので、參つてから二月三月と云ふものは、矢張り夢中で過ごしてしまひましたが、その中何だか正氣付いた樣に、初めて心付いて見ますと、この夫と申しますものが、まことに物の解つた男で御座いまして、世間交際もよく致せば、家庭の事にも始終氣を配り、自分の權利も主張致しますが、私の言分もよく聞いてくれ、小言を申します代りには、よく物事を云ひ聞かしてくれますので、その故か私は、あの夫を持ちましてから、年月の經てば經つ

ほど、つれ添へばつれ添ふほど、自分も人間らしく成つた樣に思へば、此の世中が段々面白く成つて來て、偶々苦勞な事が出來ても、それを夫と二人で甜めれば、却つて苦勞が樂みにも成る樣で、始終心が勇む樣で、ほんとに私程幸福な者は、又とあるまいかと思ふ位で御坐います。

それは成る程、人間の慾には際限の無いもので、また自分の勝手を申せば、隨分不滿足の所も御坐いませうが、私の樣なもので、少しも不滿な顏を見せないで、あの通りに致して居る夫に對しましては、義理にも不平は申されないぢや御坐いませんか。――いゝえ、全く申す氣に成れないんで御坐います。

然し私の夫でも、若し皆さんの樣な方と御一所だつたら、私張り棚卸しに合ふお仲間で御坐いませうが、私の樣な者を妻に致しましたのは、彼れの幸福、彼れの幸福は取りも直さず、私の幸福なので御坐います。

小波曰　聞けば聞くほど十人十色の細君低語、是には盡き兼ねますが、あまり奥樣に斗り喋らせて置くと、旦那樣のお小言が大分多い樣ですから、一寸此邊で代り合つて、次號からは

郎　君　放　語

を、御披露する事に致しませう

仙波少將の手柬

近年蕃興の清國に於ては教育に意を用ふるの結果、多數の青年士女を我邦に留學せしめ、或は家庭教師として我邦の婦人を招聘するが如きは、東洋文明の爲めに賀すべきの事なり、此程在清國天津の仙波少將が肅親王の御手に成れるものなりとて、毛糸細工花瓶敷二枚に左記の手柬を添へて、小石川なる日本女子大學に寄せられたるが、手柬の一節は、確かに同國婦人界の一端を知るに足るべし。曰く、

別封は昨日肅親王より王の長女(二十)次女(十八)の手に成りしものなりとて、特に小生に賜はりし者に有之候、同親王は今より三ヶ月以前家庭教師として、我内地より木村某女を聘し、子女の教育を委任し、普通小學程度の諸科目の外に手工をも加へ親王自ら朝夕奬勵を加へられ爲に教授開始以來日尚淺きも成蹟頗る觀る可きものあり今の分にて押し行かば將來必ず良好の結果これある可く別封編物の如きも決して精緻のものにはなくも是れまで教育の素養なき王族の習得せし手藝としては十分の出來と被考候抑も清國の皇族にして日本の家庭教師を有するは肅親王が始めにて而て木村女史は實に日本より北京に來りし婦人教師の魁に候又一昨年日本に來遊せし喀喇沁王は右肅親王の妹婿にして同王は一昨年の冬より既に河原女史を聘して家庭教師として王族幷に其の子弟數十人を托し居られ候。



家庭科學

石油の應用

河西璞

▲石油の鑑別

どこの家でも夕飯の仕度にかゝる前に、燈火の用意が要る。燈火には、電燈、ガス燈、石油燈、行燈、蠟燭、アセチリン燈など色々ある。

石油燈に用ひる石油は、原油といふ、濁つて、粘氣のある、綠色の液體から分け取るもので、此原油を釜に入れ、温度を定めて熱すれば、始め低い温度（攝氏廿度から百五六十度位迄）で出て來る蒸氣は、冷えて揮發油といふ油になり、夫以上三百度位迄で出て來る蒸氣は、普通の石油となり、夫から上三百六十度位で出て來るのは、重油といふものになる。重油を取つた殘滓はチャン又はピッチといふものである。

揮發油といふ油は、名の通り揮發ち易い油で、之を攝氏九十度から百五十度位迄に熱して、出て來る蒸氣を冷した油は、普通に脂垢を洗ひ、汚染を拔くに用ふ拔汚染油で、燃え易い蒸氣が、始終盛に出て居るから火を持つて行けば、直ぐに之を引いて、燃え付く、危險のものである。

重油は又色々の温度にて蒸溜し、樣々の油を作へる始めに出て來るのは器械油で、次に出て來るのは、膏藥に使ふワセリンといふ粘々したもの、一番高い温度で出るのが白蠟である。白蠟は冷えれば白い固塊で、西洋蠟燭の製造に多く使ふ。

央から、普通の燈用石油これは、純粹のものは透して見れば色の無い、日を當てゝ見れば青い色の液で、燐寸を燃して挿し入れても、火は點かず、ヂューッと消えて了ふが、若し之を皿へ取り、下から温めて置いて燐寸の火を持つて行けば、忽ちパッと燃え付く。此が石油の鑑別には極大切のことで、此燃え付く温度を石油の引火點といふ。一體原油から色々の温度で分け製した油は、何れも燃えるものではあるが、其燃え方は揮發油、石油、重油、白蠟、チャンと、段々むづかしくなるので、揮發油なら、いつでも火さへ持つて行けば直ぐ燃え移るが、重油は温めても一寸燃え移り難い。白蠟は一層然り。

それから油の粘り方も、此順になつて居るので、揮發油は一番サラッとして居て、次が石油、重油となれば粘り強く、燈心にかければ、揮發油は勢よく浸み上つて、ドン／＼揮發つて行くが、重油は中々上つて來ない、石油は此中間である。されば夜の燈火用として石油の最適當といふことは、言ふに及ばぬことで、引火點の低い揮發油は危險で、燈心へ上つて來惡い重油は特別の仕懸でもなければ使用に堪へぬのである。

米國では法律で石油の引火點を、攝氏四十四度以上と定めて置く、箱にこの引火點が記してある。我國產の石油は、多く越後からで、よいのは中々結構に使へる。然るに世間には狡猾な商人があつて、石油へ安價い揮發油を混ぜたり、重油を混ぜたりして賣るのがある。(勿論よく混ざる) 揮發油の混つて居るのは、皿へ取つて燐寸の火を入れゝば、直ぐパッと燃え付く、洋燈に使へば油煙が立つ、重油の混つて居るのは、粘り強く、心の吸ひが惡い。心は早く汚れる。特に冬は揮發が惡いから、明りが暗くて仕方が無い。

▲洋燈石油の種々

石油は燃えて炭酸ガスと水になつて了ふもので、燃えるには是非空氣が要る。空氣が勢よく入つて、石油の蒸氣と混れば、よく燃える、燃えて出來たものは立つて行くのであるが、空氣の入りが惡いと、燃えは不充分で、油煙が立つ。油煙は細い炭粒と、燃えるべ

きガスや蒸氣であるから、油煙を立てるのは、損である。洋燈の火屋は、之が爲めのもので、道理は煙突と同じこと、口金の孔は空氣の入り口であるから、其部を塞げば火は消えて了ふ。洋燈の笠は光の反射器、心は油を吸ひ上げる道具であるから、緩過ぎず、堅過ぎず、程よくあつて、汚れて居ぬやうに注意する、汚れたら出して乾して、酢で洗へば奇麗になる。心の通つて居る部に滓が溜れば暗くなるから、此部は特に注意して掃除すべきである。

燃えて出る熱いガスは上へ〳〵と發つて行くから、油壺の油へ火が入るやうな心配は少いが、しかし萬一の爲め、油壺には油をいつも九分目注いで置くが宜しい。油の無い部分には、石油の蒸氣が滿ちて居る筈だから、火が移り易い。



細川流盆景（かみの山藏里川）

洋燈の下へ火鉢を置くのは危險である。夫から油煙が立つ、熱の爲め石油が多く揮發して、蒸氣が燃え切れぬ程澤山發つからである。

洋燈を落して火が油に巨くやうな大變が起つたら、手早く布團を被せて、空氣を遮るが一番よい。狼狽へてはならぬ。疊衣服などの油を拔くには、紙を重ねて敷いて、其上へ温灰を載せて置けば、油は紙に吸ひ取られる、紙は古新聞で宜しい。

石油は毛生の効能があるといふことで、洋燈番の禿頭に、いつか知らぬ中に毛が生へた話がある。眞僞は未詳。

石油の手は充分に淸めて、匂を拔かぬと食物に移り香がしてならぬ。石油の匂を拔くには、先づ火の上で紙を熱くして、それで手を拭き、夫から茶殼、番茶、又は煙草の煙で、燻すが一番簡單で早い。

洋燈に火を點けたまゝで、油の注ぎ足をする位危険なことは無い。火が移つて大火傷をした試しは甚だ多い、石油の性質と燃焼の理を心得て居る者は、いくら無性でも、こんな亂暴はせまい。原則として、洋燈と石油の置場は、火に遠く撰び、夫から、點火は必ず石油を離れたところでせねばならぬ。

▲石油の効能

石油は石灰と水と練つて用ふれば、菓樹などに付いた毛虫、其外の虫を殺す。石油を泥溝や池に撒けば孑孑を殺して蚊が防ける。從つて瘧も防げる。火傷には石油は妙薬である。松脂、ペンキ、脂垢、膏薬のこびり付きなど、何れも石油で落ちる。溶し取るのである。玻璃窓や火屋の曇りや汚れは、石油で拭けば奇麗になる。又戸障子の澁いのは石油で滑つこくなる。鐵物は石油で銹が止まる。刄物の銹止めには、白蠟の粉を布に包んだので拭ふに限る。これは秘傳である。刀劍などには、椿油などより、いくらよか知れぬい。

蛇の生活

清水如水

女小供の厭がる蛇と云ふ虫は爬虫類に屬する動物で其種類は隨分少なくないが、大概縄を引摺つた樣な形をなし、全體は角質の鱗で蔽はれて、何處を匍ひ歩いても負傷せぬ樣に出來て居る、而してその鱗の、背面には銀杏葉形の物が瓦を葺いた樣に配列されあり、腹部の鱗は半環狀の物が一列に並び尾端に至つて二列をなして居る、脊椎や肋骨の數は中々澤山あつて、脊椎の如きは四百以上もある相だが、他の動物と違つて胸骨がない、是が蛇の蛇たる特色である。

▲蛇の運動

蛇には足が無い、其だのに何うして歩行するのであらう、蛇の運動は不思議に巧妙ではないか。昔から蛇を白壁に這はせて見ると鱗の間から足の出るのが見ると云ひ傳へて居るが、果してそんな事があらう乎、勿論以前四肢のあつたとは、同じ爬虫類で體の短い動物

即ちキモリやトカゲなどが、尤も體を支えるには何の用もしないが、身體を動かす爲に四肢を有し、蛇とトカゲの間にあるカナヘビにも四肢があり、又ウハバミやボアの類に後肢の痕跡が殘つて居るのに依つても知ることが出來る、けれ共身體が次第に長くなるに從つて、足の必要を感せぬ樣になつたのだから、遂に消失つて了つたのである、そんなら蛇は何で運動するかといふに、彼は實に足の代りに肋骨と鱗の働きて歩行するのである、即ち肋骨の下端はムカデの足の如き機能を以て居つて、之が恰も提灯の胴骨の樣に伸縮して腹鱗を働かすのが、體を左右にうねらして體を前に押し出すのと、此の二つの働によつて、自由な運動が出來るのである、蛇の肋骨に胸骨を持たんのも全く之が爲である。



細川流食景（赤間ヶ關）

▲蛇の食事

世に蛇根性と云ふことを申すが、恐らく此の動物位獰惡なものはあるまい、蛇から是奴と睨まれやうものなら、それこそ決して脫がれつこはない、そして彼は手も足も持たぬ癖に自分の體に數倍した動物を捕獲して丸呑にするが、成程蛇の口は其構造が他の動物に較ぶると中々巧妙なもので面白い具合に出來て居る、我々が物を食べるには上顎も十分に動かず、下顎も耳の孔の下方に關節があつて口の廣さを制限されてゐるが、蛇の口になると、上顎も左右に動き、下顎も左は左、右は右と、各々一本づゝ全く離れ〳〵に出來て居つて、其間をゴムの如き靭帶で繫いてあるのだから、幾何でも大口が開けられる、けれ共まだ是れ丈では大な物を其儘鵜呑にするには都合がわるいそこで蛇の口には上下共に、先端の後方に

向つた齒が澤山生へて居つて、口の奥の方には滑らかに滑り込み、外部には齒に引つかゝつて出られぬと云ふ様な仕掛に成てゐる、又下顎はと云ふと、右と左が恰も我々の兩手の如く別々に前後に働ひて、一進一退交る交るに引摺込むと云ふ様な具合に仕組まれて居る、造化の妙は何と驚いたものではないか。

▲毒蛇の口

マムシやハブの様な毒蛇になると、又一段と仕掛が進んで居つて、頭部の兩側には極めて劇烈の毒嚢を有つて居る、之で以て己の食餌とすべき動物を毒殺して了ふのである、即ち蛇の上顎の前端には、中は管狀をなし、先端に小孔を有する一對の牙が生へて居つて其基礎部は毒嚢に連らなつて居る、此牙は平時は内方に向つて横臥て居るが、口を開くと共にピンと彈ね擧り、他物にガツと嚙付くと其力で毒嚢を壓迫して毒液を射出するので、鼠位の小動物は一寸齒が觸れたかと思ふ間もなく全身が痲痺して動けなくなると云ふ位恐ろしいものである、マムシの如きは猶數個の副牙が皮下にかくれて居つて、次々に成長して其毒牙欠損の補充をするのだ相だ、毒蛇は皆な其毒嚢の爲に、頭部が平扁に且つ膨大して居るから、之を以て容易に他の無毒の物と見分ることが出來る。



細川流盆景　(霞ヶ浦)

▲蛇の毒

蛇毒の化學的研究に付ては、余の寡聞未だ實驗談を聞かぬが何でも毒液の中よりは黄色の結晶體が得らるゝ相で、之を若し身體の創傷部に着けると、矢張嚙まれたと同じ毒に中てられると云ふとである、ハブの毒にはハブサウの葉を揉んで其汁を着けると効能があると云ふが是は經驗上實効がある様だ、ハブサウは民

間藥として腹痛などに用ひて居る決明科の植物で、宮川藥學士の說に依ると、大黃、決明等に多分含まれて居る所のエモジンが有効成分をなすのではあるまいかとのことである。

△毒蛇

毒蛇の種類に屬するマムシは我邦至る處に產するが、之は母指大一尺有餘の躰軀を有し、背面に環狀の斑紋を畫いてゐる者である、ハブは琉球に產し大なる者は全長六尺にも餘る相であるが、野猪が若し之を見付けると、直ぐに餌食として了ふ所から流石のハブも野猪には辟易して逃げ出すと云ふが、上には上のあつた者だ、エラブヘビと云ふは堺の水族館にも來て居つたが、琉球の近海に棲息する者で、水中を游泳する爲に體形は他の蛇頭と異なり、尾も鰻の如く縦扁になつて鱗も左のみ大きくない、肉は人の食用に供せられると云ふ事だ、此他にまだチヘビ、メガチヘビ、ベンガルヘビ、カヲ〳〵ヘビ等の種類があるが、カラ〳〵ヘビと云ふのは、一に響尾蛇と稱して北米に產する長さ四尺程の毒蛇である、尾端には表皮の變形した環形の物が、多いのは十七八個もあつて、尖端には之を脫せざらしむる爲の止めが着いてゐる、之は尾を振動させる緩急によつて、種々の音響を發するので、鳥獸が此音響を聞くと非常に恐怖して、一散に逃出す相だ、響尾蛇の毒は癩病の治藥として効ありと云ふ事だ、北米では土人が爭鬪を始める塲合此蓋皮を剝いで送るのを以て宣戰の印として居る、蛇は概して熱帶地に多く產し、印度地方では毒蛇の爲に死ぬる者が年々二萬から三萬にも及ぶと云ふが何と怖るべき魔物ではあるまいか。



池の坊生花展覽會出品　細川流盆景　（松ヶ崎汐干）

▲大蛇

併かし蛇の怖るべき者は決して毒蛇に限らぬので、無毒な者でも話を聞いてさへゾツトする樣な者が澤山ある、即ち通俗ウハヾミと稱する者や、ヤマカヾシや熱帶亞米利加に產するボアの如き者は其である、殊にボアの類は鳶色で脊背に暗色の線條を有し、長さ二丈から三丈にも達する程の大蛇であつて、蔚々たる深林中に靜に潜むで居つて、諸動物の近かづき來るを見ると、直に草を分け木を倒して、飛び掛るが早いか其軀に卷き付いて、漸次に之を締め細めて丸呑にして了ふ時には馬と共に馬上の人を食ふこともあると云ふが之に卷き締められると馬の樣な骨でもメキ〳〵と碎けて了ふ相である、何にしても蛇は厭らしい動物である。

端書文

花菖蒲を見て　　伊勢　海野すみ子

私の最も愛する小池之菖蒲はもう盛になつた堀切のもきつと見頃だらう皮相的に多くの人にめでらるゝのと眞から妾一人に賞せらるゝのと花はどちらが幸福かしら。

自轉車　　兵庫　柳田のぶ子

自然の音樂奏でつる老松の根がたに腰かけて、淸き流に宿る夕月の影、無心に見入ッて居るとチリン……優しき鈴の音、と見る自轉車上氣品高き花の令孃急ち隱れて又現る、堤五丁の並木松!!　夕鳥數羽跡を逐ふて。

妾が人生觀　　沼津　石本みどり

月下靜に過去を思へば夢、花前得意に未來を想へば是れ又夢、夢、夢。人生とはこれ濁れる雄浪雌浪逆卷く社會てふ海に架けたる、果敢なき五十年の夢の浮橋を渡る鼠の如きものか噫。但鼠とは現在を意味す。

少尉に昇級せし弟へ　　能登　久保しづ子

お寫眞只今つきました少尉の御制服の御立派さ、母上がお在でならどんなにお喜びだらうと淚が出ました、みよ子は去年のお寫眞とくらべて不思儀さうに見てゐます三郎は、此胸に勳章のあるのを早く見度いと申して居ります、右一寸お案內まで、御機嫌ようお奉公お大事に、サヨナラ。

嫁せし姉上へ　　東京　服部須惠

姉さま、武ちやんは、まー、どんなに大きくおなりでしやうれー、妾此度の日曜には、屹度、行きますから、あの可愛い武ちやんを、だつこさせて頂載な……屹度よ……御土產にはれー、……そら……武ちやんも、姉さまも、大好な……オホ……妾、今、言はなくつてよ、

夏の夕　　秋田　栗田春子

雲の峰は涼しい夕の風に吹き崩されて御嶽の頂に薄黑く殘つて居る、と見ると、今まで氣が付かなかつた十三日の月は淡い光を庭一面に投げ掛けて居る、突然油蟬が梧桐の茂みで一聲ばかり、葉がさわ〳〵と動いて、ひら〳〵と散つた、……星に非ず、打水の雫であつた。

寫眞を送られし友に　　滋賀　穗園

神の化身かと見ゆる御姿、限りなき慰安を得て、嬉しとも嬉し。今にも、玉の御聲の洩んかと、瞳をすえて、耳そばだつれば、かすかに囁きあり、「幸ある身よ」と、あゝ、悟りしよ、かゝる友と交れる、我身の幸福を。

花の露　　牛込　下山京子

細い脊竹の四ツ目垣、通りかゝりに目についた瑠璃色の朝顏一輪、こぼれさうに白露の玉がフツクリ、ソツト手にうけて結立ての島田にかけたの、うつくしい花の色がうつるかと思つて。

月夜の畔路　　長野　小岩井なみ子

夜の靄淡く田の面を罩めて、苗代にうつる月きら〳〵、遠近の灯火次第に消えて、螢追ふ子の聲また絕えぬ。畔の細路ふむ人なくて、遠くまた近き河鹿の聲おもしろく、風は涼しく月は淸く、離川のせらぎ音低う、夜は靜に水のひゞきと更けてゆく。



小說

希望

草村北星

お淺は格子戸に手を掛けたが、心おくれて佇立んだ。二歩三歩退いて、われと我が身を顧みたが、何の樂みにか、この曠がましい扮裝はと、そゞろ氣耻かしくも思はれて、力無げに俯向いたのである。

まだ早いではないかと引止められるのを、姑御の御機嫌を損じてはと、勿體ない、あの心優しい緣先の母上迄むづかしいものに云ひなして、無理に實母の家を辭した時、門口に見送つて涙を湛えながら、その心掛がなうては嫁の身はつとまりませぬ、それでは達者で、又近い中に來ておくれよと、身に浸みる肉親のお言葉、懷かしい實母の姿を、今一度仰ぎたいとも思つたが、濟まぬ氣に心咎めて、それも出來ず、顏を押へて小走りに走り寄つて轅を跨いだが、車の上に何處を何う辿つたか。全然夢中であつた。辻に車を乘捨てゝ、春ながら日影淋しい此裏町の庇蔭を、人目を忍ぶやう歩いて、さて格子戸を入らうとして、又はつと胸が騷いたのである。お淺は此瞬間に悲愁の胸に込上ぐるが如く感じた。

訪ねたい、一度訪ねて見たいとは、朝夕何かにつけて、靜馬さんのこと、小母樣のこと思出す度毎に、獨りで胸を痛むる所であつたが、昔と違つて今は儘ならぬ其

身の上を考へては、此一年越碌々手紙だも差上げなかつた無沙汰に加へて、先方の思惑はどんなだらうと、もう堪え兼ねるばかりであつた。あの頃靜馬さんさへも少し心中を打明けてゐて下さつたら、小母樣さへ云々とのことちらとでも私の耳に入れて下さつたら、私はあれ程迄に――娘の身に羞かしい、あれ程迄に切なく思ひを運んでゐたのに――それも今更及びもつかぬことではあるが、思出して口惜くないことではない。我ながら淺猿しくも思はれるのである、吁それにしても、此頃小母樣はどんなにお暮しなさつたであらう、靜馬さんは息災でか。山の手と下町の半里と隔てぬ處に住まひながら、人に訊ねることだにも出來ぬ今の我が身の境涯の苦しさはと、茫然として立盡すお淺の眼には、何時かうるみを持つてゐた。

「何方ですかい。」と人の氣勢に廣からぬ家の中の、茶の間に徒空然としてゐた靜馬の母は、立出でながら老の眼を瞪つて聲を掛けた。

「ま、小母樣！と」見るから胸を轟したお淺は、轉び込むやうに内に入つたが、情が迫つて、頓には繼ぐべき言葉もなかつたのである。

「まア淺ちやんではないか。」と驚きと喜びとに轉倒した靜馬の母は、さう叫ぶと手を取つて、凝然とお淺の顏を瞶めた。

「何うしてまア淺ちやん、まア能く來ておくれだことねえ。」

「小母樣、御無沙汰ばかし致しまして、お變りは御座いませんの。」とお淺は辛うじて語調を繕つたが、心から欣々として、

「是非ね、何日かにお訪ねしたいと思つてはゐたんですけれども、毎日のことにかまけまして――小母樣、本當に濟みませんかつたことねえ。」

「まアね淺ちやんつては、あんなことを云つて、何ですかね、他人行儀な、そんな濟むの濟まないのつてことが如處にあります。」

「いゝえ、濟まないんですわ。」と半ばは口の中で繰返すやう。

「ま、何でも可いとにして、今日はね、寛緩遊んでゐて下さいよ。さ、お上りよ。」と靜馬の母は曳き上げるやうにして、茶の間に伴ひながら、

「小母樣も淺ちやんのことばかしは忘れることは出來ませんよ、朝晩も氣に掛るんですよ。靜馬とも噂をしては、淺ちやんが毎日遊びに來ておいでの頃を思出してね、――淺ちやん、年齢の所爲か、小母樣も飛んだ愚痴になつたんだよ、おほゝゝ。」と造りつけたやうの笑ひを漏し、火鉢を隔てゝ座を設けつ、「ま、それをお敷きよ、其處へお座りなさいよ。」と押据えるやうお淺を座らせて、初めて氣が着いたか、そのけば〱しい晴やかな扮裝を見下げ見下した。

「淺ちやんの立派におなりだこと。ま、何うしてそんなに能く丸髷のお似合ひだらう！」靜馬の母はうつとりとして暫し見惚れてゐた。

「あら、小母樣たら何を仰有るのね。」とお淺は反抗ふやうに聲を放つたが、懷しげに見遣る其眼に愁ひを籠めて、何となし顏の色が沈んで見えた。

「でも本當に立派なんだもの。」と言譯らしく云つて、惚々とする。

「私厭だわねえ。」と眉を寄せたが、頰を赧らめて、差俯向いた。言葉を繼いで、

「靜馬さんもお變りはありませんのと。」心淋しく物靜かに問ふた。

「あア お蔭樣でね、これぞと云つて病氣はしませんよ。でもね、淺ちやん、此頃は一向元氣のない顏附をして、何をするにも氣乘のしない、何でも餘程氣短になつたやうですよ。若い者があんなでもと思つて、叱言は斷えず云ひますけれども、私の云つたことばかしでは呑込めないと見えてね……。」と物語らうとはしたが、聞く人の氣を兼ねて、流石に云淀んだ。引取つてお淺は熱心に、

「何うなさつたのでせうねえ。靜馬さん、あんな活潑だつたのに。」と語氣を強めたが、吁と心中で溜息吐いた。若しやこの身のことでと考へては、云ひ知らぬ傷ましさをも感ずるのである。

「そんなにして御病氣にでもおなりなさらねば可いけれども……。」

「全くねえ、それはかしが氣に掛るんですよ。それやこれやを思つては、私はもう心細くなつて仕舞つて、泣きたくなつて來るんですよ。こんな便りない思ひをすることはありません。そんな時分に淺ちやんでも實家においでだと、乾度遊びに來てお呉れに違ひないと、詮ないことを思つては……。」

「小母樣！」と鋭く通つた聲で遮つた。お淺は顔容を上げて、熟々と靜馬の母を瞶めたが、双の眼に一杯の涙を湛へてゐた。

「小母樣がそんなに私を思つてゐて下さると、私は、私は何を申上げて可いんだか……。」

お淺は咽び上げたのである。

「私もね、何日迄も實家にゐて、小母樣にも靜馬さんにも毎日お目に掛つてることが出來たのですと、どんなに樂しくつてよござんしたでせうにと、それを思つては泣きたくなりますわ。見ず知らずの他家に來て、私はね、小母樣、どんなにか辛いでせう。他の家に較べれば、姑御を始めあれでもまだ親切になさつて下さる方だと云ひますけれども、それでも慣れない家と云ひますれば、並大抵の氣苦勞では御座いませんの。小母樣、私はね、お嫁に行つてから、彼是もう一年近くにもなりますけれども、一晩だつておち〳〵睡つたことはありません。」

「そんなですかね。」と靜馬の母も同情に堪えないものゝやうに、深く溜息吐いて云つた。

「知らない家になぞ、お嫁に行くものぢやないと、今では後の祭だけれども、つく〴〵とさう思ひますの。私見たいな足らはないものを、嫁ぢやと云つて親切になさつて下さるのは勿體なうござんすけれども、そのかしじやない、先方でも乾度困り者でせうと思ひますよ。小母樣、私は靜馬さんのお嫁には、もう決して知らない方はお呼びにならないことだと思ひますの。」

「それはもうね、小母樣も出來ることならば、さうし

たいと思ひますけれども、知つた方と云つても、家なぞに來て下さらうといふ方は今のところありませんもの。』

『小母様。』と再び聲を掛けた。お淺は稍羞含みながら、故意とらしく淋しげの笑まひを見せて、

『あの、若し私がまだ實家にをりましたら、そんな時、小母様は私を呼んで下さらないの。』

『お淺ちやんを。』と靜馬の母は慌てたやうに口早にさう云つて、

『お淺ちやんにそんな氣があつてお呉れだと、それはもうね、こんな嬉しいことはありませんよ。靜馬もどんなに喜ぶでせう。お淺ちやんさへ來ておくれだと、どんなに幸福だか知れません。小母様はそれこそ、こんな氣細い思ひなんかしませんし、靜馬にしても此頃のやうなぶら〳〵してゐるやうなことは、乾度ありません。』と零々と老の涙を流して、

『天にも地にも、母子只二人きりの、互ひに便りにし合つてゐながら、此頃のやうに悲しいことばかり思つてゐては、何が便りになりませうか。何一つ慰め合ふといふこともなしに、日に三度膳を向合つて御飯は戴いてゐても、美味いと思つたことはありません。其處へお淺ちやんがゐておくれだと……小母様はね、私はね、ぞればかしを考へるんですよ。』と襦袢の袖をぬらして、

『それはもうね、今更何を云つても追附く話ではないんだけれども、それが出來さへしたんだと……。』

『小母様。』とばかり、お淺は聽くに堪へないで、顔を蔽ふと、啜上げて忍び泣いた。

何故それならば、自分の身の決らうとした其時、一言それと云つては下さらなかつたのか。不束の自分を何とか思つてゐて下さつたら、靜馬さんとて、あの時白々しく祝儀をのみ述べて、他所事のやうになさつたのか。有様を云へば、此一途の思ひが通らないのを、自分こそ怨み怨んで、自からの望み愜はずば、それも定まれる運、假令如何なる家にでも、他家に入るを女子の務めと諦めて嫁かうと辛くも決心をしたのである

に、嫁して幾干ならず、靜馬の心底を圖らずも聞知つた時の、悲しさ口惜さは如何ばかりであつたらうぞ。今それを思つたとて女の愚痴に過ぎないけれども、お淺は何うしても潔く思切るといふ事は出來なかつた。靜馬と自分とは他人でこそあれ、幼な友達の昔ては軒を連ねてゐたこともあつて、互みに往來しあつた、それが家と家との關係ともなつて、兩家は親戚縁者も唯ならぬ親密、先方で一人息子なら、自分とて一人娘の親々の寵愛の並々ならぬだけ、兩家の交際も亦一層の親しさであつた。自分が靜馬を忘れることの出來ぬだけ、靜馬とて自分を思つてゐてくれたらうのに、斯くも果敢なき人の世の命運に泣かうとは、其頃の自分に其が何うして推測ることの出來やうか、夢にだも知ることの出來たらうか。お淺は身を悶えて、あはや叫ばうとしたのである。

靜馬の母は連りに洟を去んで悲しさうにしてゐたのであるが、不圖思出したやう、振向いて、茶戸棚の上に、置時斗と並べて置かれた縁厚き寫眞立に手を伸すと、顧みて、

『お淺ちやん、せめてもの思ひに、これを斯うして此室に飾つて置くんですよ。』とそれをお淺に手渡しながら、

『淋しい時悲しい時に、それが小母樣を慰めてくれるんです。』

『何？』とお淺は夢から呼覺されもしたかのやうに面を上げて、何氣なし、渡された寫眞を一目見ると、もう胸が一杯になつた。

それは可愛らしき少年少女の笑ひながら手を取合つた寫眞である。

『まあねえ。』とやがてお淺は熱心に見入つた寫眞から視線を靜馬の母に轉じながら、

『小母樣、も一度ちいさかつた此時分に歸つて見度うござんすわ。』と無量の感慨に涙含んで、

『小母樣がこんなものを大切になさるつて、私、勿體ないわ。』と云ひつゝ袖に蔽うて犇とはかり其胸に抱き締めた。

靜馬の母も顏を反けて泣いた。

もう暮れに近いのである。仄暗い茶の間にお淺は何時迄も〳〵歸るのも忘れてゐたが、何となく肌寒く覺えて我に返ると、恁うして何時迄もゐられる體ではないと、はツとして身が縮まるやうに覺えた。お淺は心急ぎつ遽しく身繕ひをしたのであるが、心弱くもまた立兼ねた。で、漸く、

『小母樣、それでは今日はこれでお暇致します、又此頃に參りますよ。靜馬さん今日はお出掛なんですか。』

と殘惜しげに云つて、

『靜馬さんとも一度お目に掛つて、お話を承りたいと思ひますわ。もうこんな體になつて仕舞つては、私には何の望みもありませんけれども、靜馬さんだけにはね、小母樣、立派な奥樣をお迎へ申したいんですわ、そして小母樣も御安心なさるやうに……。』と連瞬いたが、そツと手巾で涙を抑へた。

『御壯健でさへあれば、小母樣のお氣の安まるやうには、乾度靜馬さんが御孝行なさるでせうし、私だつて、體は他家へ行つてゐましても、小母樣のことは決して忘れは致しません。お淋しい時分には、鳥渡さうお事託なさつて下されば、何時でも參ります。いえ、これからはもう、私からちよい〳〵お邪魔に出やうと思つてますけれども。

お淺は纔に立上つたが、足許も覺束なげに送出した靜馬の母の、少許の月日に斯くも老に窶れてかと驚かるゝばかりなのに、新に云ひ知らぬ暗愁の湧くが如くに覺えて、土間に下立つて、さらばよと下駄を踏揃へた時、また逢ふことの出來ないが如き心地に、乾と振返り見たのである。ト進み兼ねた。お淺は駈戻つて、框に膝を突き緊乎と其手に縋つて、あどけなき小女のやうな顏容に、振仰いで、

『私もう歸りたくないわ。』と眞情から云つた。

『おゝ、お淺ちやん。』と上からは少し前に屈んで、一方の手に其肩を抱き、呼吸も互に通はんかと思はれる迄顏を寄せて、星の如く輝く美しいお淺の眼を一心に目戍つた。靜馬の母はおよそ堪まらなく可愛く思つた

のである。
夕暮を急ぐ騷がしい巷の聲。空に雲低く迷うて、風の遽しう。闇は漸く天地を裹んだ。
斯る時、夫れ世界の何處にか、靜けき永久の姿ある！

（完）

特志看護婦

（一）

月眉庵

『あら、ちよいと、木村さん、又號外が出てよ。』と、今まで伸上つて、竹垣の間から向ふの往來を眺めてゐた、花月卷の鰕茶袴は、突然に顧盼つた。
が、木村と呼ばれたそのS卷は、垣に靠れて俯向いたまゝ、編物の手も止めずに、『然う？』と氣の無さ相な聲。
『だつて、御覽なさいな、ね、向の通路を、彼樣に新聞屋が駈けて行くぢや有りませんか、屹と號外だわ。』
漸く面を擡げて、S卷は慵げに鳥渡視遣つたが、『然うね。』と言つたぎり、又俯向いて編物にかゝるのを、もどかしさうに、『ね、號外でせう、屹と又大勝利よ、妾、號外が出ると、何だか嬉くつて嬉くつて、靜座してゐられないやうよ、今度は何處で勝つたんでせう、ねえ、木村さん。』
『何處でせうね。』
『ひよつとすると、何よ、浦鹽の攻擊でも始つたのかも知れなくつてよ。』
『然うね。』
『それとも、何かしら、豆滿江を陷落して、敵を哈賓へ追詰めでもしたのかしら。』
『何うですかね。』
『何方にしても、何よ、露西亞は最う滅亡よ、本當に日本萬々歲だわねえ、今夜あたりは又市民の提灯行列が有るかも知れなくつてよ。此校でも生徒一同で、旗行列でも爲ると可いのねえ、……それにしても、何樣號外なのか知ら、あゝ、早く視たいこと！』
躍り上らんばかり、喜び勇んで獨り上調子に喋り立てるのであつた。
神戶中山手通に、石門嚴しい關西女學院の構內、二階建の音樂教場の直ぐ後に、最う日除の準備の整ふた運動場では、いづれも今が島田の年頃を、あたら束髮

に鰕茶袴、中には前髪縮らせて靴まで穿いてゐるのも立交つて、其處に三人、此處に五人、打連れて行きつ戻りつ今この晝餐後の放課時間を、笑ひ戯れ、語り興じ、或者は可笑しく、或者は面白く、樂み遊ぶのであるが、その運動場の西境、一本茂る松の木蔭の竹垣際に、佇み語る二人の中の、絹糸の編物に餘念も無いらしい一人は、S卷にしてゐるその頭髪、棕櫚の如くに赤くはあるが、面色は透るほどに白く、身幹も秀削として、年の頃は十八九、まだ箸の倒れたのにも止度なく笑ひたい、今が心浮立つ盛であるのに、語敵の花月卷が快活なのにも似もやらず、言寡なに首垂れて、凝乎と物を打案ずるらしく、悄然と沈んでゐる躰度は、小い胸に餘る憂愁の、遣る瀬なさに惱むと覺しく、これがこの人の性分とは見えぬのである。

その狀に、漸く心付いたらしく、花月卷は遽に擦寄つて『貴女、何だか鬱いでゐるやうね、何うしたの？』と、密とその顏を覗き込んだが『あ、然うだつけ！と、忽ち頓狂な聲に叫ぶと倶しく、一歩を退つて『然う、然う、貴女は妾達とは違つて、號外が出ると、何うしても鬱がずにはゐられないんでせう？』

打目戍る目元に冷やかな笑を含んで、『そりや貴女の身になりや無理はないわ、有理よ、妾察しるわ、嘸ぞ面白くないでせうね、此樣に日本ばかり勝ち續けて、露西亞が負けてばかりゐちや。始めの中は大層强さうだつたけれど、卒ざとなつたら、全然意久地は無いんですもの、嘸ぞね、口惜しいでせう、貴女。號外の出る度に氣が氣ぢや無いでせうね。貴女の身になりや、號外なんぞ出ない方が、そりや可いに違ひないわ。』

見る見る中に、面の色は蒼褪めて、編物の針持つ手先を打顫はせ、齒を喰縛つて、S卷のは俯向いたまゝ一言も返さぬその顏を、花月卷は愉むやうに又覗込んで、『ねえ、然うでせう？日本が負けて、露西亞の勝つ方が、貴女、嬉いでせう、木村さん！』

『まあ、其樣事が……………。』

『あら、然うぢや無いの？ぢや、矢張貴女も、日本が勝つ方が可いの？』と、さも意外らしく、大業に眼を睜つたが『然うぢや無いんだわね、日本が勝つても不可いわ、貴女には。日本も勝たず、露西亞も負けないで、兩方五分五分が可いんでせう？勝つのも負けるのも半半が、ねえ、露西亞と日本と半分づゝが、オホゝゝゝゝゝ。』

何が可笑しくてか、故らに聲を擧げて、高らかに打

笑ふ、其處へ來懸つた兩人連の、その一人の、頭髪を牡丹巻にしたのが、立停ると微笑んで、「あら、井口さん、何が其樣に面白いの？」
「だつてね、木村さんはね、オホヽヽヽ。」
「あら、木村さんが何うしたのよ。」
「あのね、木村さんは、戰爭で日本も勝たず露西亞も勝たずに、兩方五分五分だと可いつて。露西亞と日本と半半だと可いんだつて、オホヽヽヽ。」
「ま、妾や、其樣事を…………—。」と、蒼褪めた面を振上げて、打消さうとしたその聲よりも、牡丹巻の聲は高く、「あら、然う、オホヽヽヽヽヽ。」
「オホヽヽヽヽ。」
最う堪へ切れぬらしく、編物の針の一本落たのにも管はず、切れよとばかりに唇を嚙締めて、愈よ首垂れつゝ、S巻のは自分を嘲り笑ふ三人に背後を向けた。
三人はその狀を憐れとも見ず、倘ほ笑ひ續けるのであつたが、花月巻のは軈て又、「だけどね、倘且露西亞の勝つ方が可いに違ひないわね、露西亞の種なんですもの。それが負けるんだから、お氣の毒だわ、オホホホヽヽヽヽ。」
「然うね、オホヽヽヽヽヽヽ。」
「オホヽヽヽヽヽヽヽヽ。」
聲を揃へて打笑ひながら、花月巻のが先に立つて、手を引合うて軈て三人は、此處を立去るのであつたが、未だ十歩も行かぬに、又誰が何を言つてか、遽に手を拍つて、妙齢の處女にも似氣なき大聲に、慎しげなく三人は、哄とばかりに打笑ふ。
取殘された一人、木村と呼ばれたS巻のは、密と面を擡げて、恨めしげに三人の迹を目送るのであつたが、その眼には涙溢れて頰を傳ふのに、自分ながら狼狽て、編物を袂にをさめたその手に直ぐ半巾を取出して、瞼へ當るとそのまゝ、忍音に泣入るのであつた。
木村といふのは母の姓で、その名は靜江、彼は私生兒として戶籍簿に登錄された、露西亞人の胤なのである。

（二）

「あゝ、妾は何うして、此樣不幸な身に產れたのだらう。」
愚痴とは知りながら、靜江は吐息と共につい斯う呟いて、嘆き悲まずにはゐられぬのである。
外見には、隨分幸福な身の上とも見えるであらう。

父なる人が十年前にその本國の露西亞へ歸る時、自分へ遺して行つて呉れた動産不動産でもつて、母と二人が其日を送るに何不自由も無いばかりか、自分は望のまゝに琴も習ひ、ピアノの稽古もして、務といふのは日每腕車での學校通ひ、十九になる今年まで何一ッ不足といふ事覺えずに育つたのだものを、幸福と言へば幸福であるに相違はない。

が、悲いことに自分は雜種兒、あひの子なのである。それも雜種兒の多いこの神戶では、雜種兒である爲めに、後指さして侮り蔑む者も無いので、然ほど悲いことゝも思はなかつたのだが、日露の間に交渉開始せられて、風雲漸次に急を告げ來つた頃から、暴露討つ可し、獰猛懲す可しと、寄ると觸ると勇み立つて語合ふ人の談を聴くにつけても身がひけて、何うぞ何事もなく、時局平和に治まれかしと、心密に祈つたのも徒勞、到頭日露の外交は斷絕して、一度動員令が下つてからといふものは、籍こそ、名こそ、日本人では有るが、實は露西亞人の胤なる事を知る者は誰一人として、自分を蔑み遠けぬ者もないその悲さ……………。

未だ肩揚の取れぬ頃から、就中親くしてゐた友にも疎まれて、碌に言も交して呉れぬそればかりか、學校での放課時間には、何時も獨り退け者にされて、偶々言をかけて呉れる者があれば、それは自分を好い慰み物にして、嘲り笑ふて弄ばうとの情知らず、其樣目に遇ふのが可厭さに、自分でも成る可く遠かつて、人の中へは立交らぬやうにしてゐれば、惡口自慢の饒舌連が、遠くから指しながら、袖引き合うて有る事無い事囃した上に、聞えよがしに故と聲を擧げて打笑ふぐらゐは常の事、我軍勝利の戰報が來る度に、御愁傷樣の、お氣の毒樣のと、聽く身になつたら身を切られるよりも辛い諷刺を言つて、それを面白がつてゐる憎さ、腹立しさ、何を言つても默つてゐるのを好い事にして、聽くにも堪へぬ綽號までつけて、日每辱められる今日此頃の自分の身は、幸福どころか外には又ない不幸の極、何の因果で此樣身に、自分は產れて來たのであらう。

寧そ最う、學校は退て了はうかとも思つたのであるが、それも餘りに意久地が無さ過ぎると、思ひ直して自分を勵しながら、奈何な侮辱も堪へ堪へて、通つてゐるその辛さを、憐れと思つて呉れる友もないとは、世間の人には情と言ふもの丶無いのであらうか、此樣悲愁が世にあらうとは、生れて今まで知らなかつた。

『あゝ、戰爭さへ無けりや、此樣事は有りやしないのに、戰爭なんぞが始まつたばかりに、妾や最う本當に………。』と、教育ある身でも婦女はつい愚痴に落ち易く、友を恨み、人を恨んだ果が、戰爭を恨めしくも思ふのであるが、然し靜江は、奈何に堪へ難い友の侮辱に遇うても、尙ほ心強く思ふ唯一つの依憑があるのである。

それは、自分が關西女學院卒業の日を待つて、結婚する事に約束の成立つてゐるその人の心で、元居留地のフレーザー商會へ勤務してゐる小野瀨周二、彼の方ばかりは屹と自分の今日此頃の切ない心の中も知つて居て呉れやうし、遇へば隨分慰めても呉れるであらうと、それを思へば小い胸に餘る辛さ悲さも薄らいで、誰が何と言はうと、彼の方にさへ悚まれねば、と毎も心強く思はれるのであつた。

その小野瀨周二が、何うしたのか此頃は、以前のやうに繁々訪れて呉れぬので、戀ではなく、唯斯ういふ時には優しい言の一つもかけて貰ひたさから、遇ひたく思つてゐる矢先へ、今日しもフレーザー商會の主公フレーザー氏の山手の住宅に、その總領息子の誕生祝があるとの事で、靜江もそれへ招かれたのを、始めは人中へ出て又辛い思ひをするやうな事でもあつてはと、躊躇ふたのであるが、屹とその席へは彼の方もお來でゝあらうと思へば、唯最う直にもその人に遇ひたくなつて、今まで自分の部屋と定められた一室の內に獨り垂籠めて、悲い思ひに沈んでゐた靜江とは思へぬほど快活に、勢よく其處を出て、身刷も匆々に手早く支度を整へ、最うその時刻でもあるので、買ひに遣つた祝物の來たのを受取ると直ぐ、腕車を飛ばせて、招待の席へと赴いた。

來て視れば、安の定、思ふその人は最う其處に在つて、今日は客として主人夫婦の如才ない款待を受けてゐるので、何となく心嬉しく、此頃の靜江とは全然の別人になつて、擧止活々しく、祝ひの席に心から喜ばし氣なその躰度を、主人夫婦にも喜ばれて、聽て定めの時刻に、立食の饗應を受けて後、靜江は客の誰彼と共に、新に手入をした其處の庭園へと導かれた。

靜江は今その庭園の小丘の上の四阿へ入ると、圖らず其處へ來かゝつた二人連のその一人は、未だ默禮したまゝ言は交せなかつた、小野瀨周二であつた。

見るから懷しく、擦寄つてその手を握り度くも思ふのであるが、連立つ人の手前それもならず、控目にし

て、『ま、周二さん、久濶でしたのね。』と、嫣然と笑ひかければ、小野瀬は瞥然と靜江を視た目を直に逸して、其處へ立停りはしたが、唯一言『はあ。』と言つたぎり。

靜江は連の男に會釈しながら進寄つて。『此頃は些とも來らつしやいませんのね、何うなすつたのかと、母と折々お噂してをりましたのよ。』

『はあ、然うですか、店の方が忙しいものですからな。』と小野瀬はいとゞ無愛想。

それに靜江は心付かぬらしく、『あら、ぢやア、お忙しいんで、それでお來でなさらないんですか、妾、また、何日でしたか、最う餘程前で御座いましたわね、あの、學校に音樂會が御座いました日、歸りに妾と一緒にお來でなすつた、あの時に、妾、餘り下らない愚痴ばかり申しましたから、それにお懲りなすつて、それで鳥渡も來らつしやらないのかと、そりやア心配してゐましたのよ。』

『いや、其樣事は有りません。』

『ぢやア、あの、今晩にでも來らしつて下さいましな。』

『はあ、有難う。』

『妾、少 お咄致したい事も有るんですから……………。』

『何か御用ですか。』

『いえ、別に用ぢや無いんですけど、若し今晩不可ませんけりや、明晩にでも、ねえ貴郎。』

『いや、今晩も明晩も、脱れられん用事が有りますから。』と魚膠ない挨拶。

『でせうけれど、妾、此頃は本當に悲い事ばつかりで貴郎でも來て下さらなけりや、心細くつて、心細くつて……………。』

『いや、いづれ其中、閑暇でも有つたら伺ひませう、阿母樣に宜しく。……………さあ君、行かう。』

連立つ人を顧みて、周二は共に、素氣無くも早や立去るのである。

斯うあらうとは思ひも寄らず、深くも依憑にしてゐたその人の、餘りの素氣無さ、同情無さ、靜江は案に相違して、袖引止めんにも人の手前、詮術も知らず茫然として、唯その後を目送れば、連の男は突然周二の肩を打つて、『君、大に妬けたぜ。』

『串談言つちや不可い、彼りや君、露西亞人の胤だぜ、僕の如き敵愾心に富んでゐる日本男兒は、今日彼樣者に言をかけられたのも、實は穢はしく思ふね。』

『何だか知れるものか。』

『いや本當だ、僕は何だつて彼樣露西亞人の子なぞと、結婚の約束をしたのかと思つて、今更後悔してゐるよ。』

『ぢやア、外に出來でもしたのか。』

『そりや君、憚りながら小野瀬周二、女の子が只は置いて呉れません！』

『然うして、彼女は何うする意向だ。』

『彼女かね、何に遠かる者は日に疎しで、案じる事は無からうと、多寡を括つてゐるのさ。日露のあひの子なぞは、最う、最う、眞平御免だ。』

『薄情なもんだね。』

『ところが、貴郎は本當に情が深いつて、誰かゞ言つたせ。』

『あれだ、漫然油をかけると、手が付けられない。』

『何處か奢らうか。』

『それには及びません、後が可怖いから。』

麥酒の醉の未だ醒めぬ二人が、小丘を降りて、木瓜や木蓮の花の間を、語り戯れつゝ行くその背後には、又折あらば染々言を交せやうと、靜江は從ひ行くのであつた。

が、斯くと聽いては最う怺らず、立停つて、靜江は暫時周二の後姿を凝乎と打目戍つたまゝ、世間の人は悉く敵同樣のその中に、唯一人の味方と依憑にしてゐたその人までが、然うした情ない心になつて、悲しいこの身を忌み嫌ふのかと、初めて知つた思ふその人の薄情さに、唯最う胸迫つて、制へやうにも制へ切れぬ悲さに、彼は危く其處へ泣き倒れやうとした。

けれども、庭には未だ、客の多くが逍遙してゐる、それに氣が付くとハッとして、靜江は口惜しさ悲さに、迚も泣かずにはゐられぬのを、怺へ怺へて齒を噛締りながら、半ば夢中に主人夫婦の居所を捜して、漸くその前へ立つと、餘りに面色の蒼褪めてゐるのに眼を睜つて、何うしたのかと愕き問はれたのを幸ひ、少し氣分が惡いからと、無禮を詫びて挨拶を匆々に、此頃の靜江には似氣なく喜び勇んで入つたフレーザーの住宅を、眼に持つ涙隱しながら萎れ返つて、客の誰よりも先へ立出でた。

門際まで來て、其處に待つてゐた腕車へ乘ると、車夫は讀んでゐた新聞の號外を、忙はしく腹懸へ押込んで、

『お孃樣、好い氣味ですな、又露西亞が負けましたせ、

ェへゝゝゝゝゝゝゝゝ。』と意味ありさうなせゝら笑。

靜江は迚も最う怺り切れず、狼狽て桃色の半巾に、その顏を蔽ふたのである。

（三）

夜一夜交睫ともせず、口惜しさ、悲さ、情なさに、何うして可いのか判らぬ身を、右へ左へ寢返して、悶へ悶へて泣明した靜江は、その翌日學校へも行かなかつた。

今までに感冒や頭痛ぐらゐでは、休めと言はれても滅多に休んだ事の無いのに、唯氣分が惡いとばかりで、休んだその一日を、彼は一室に閉籠つたまゝ、母と下婢とが心配さうに、食事をしては、藥を服では、と幾度となく勸めるのを、蒼蠅さうに斥けて、讀書する氣の素より起らう筈はないが、英書を繙いて、机に靠れながら、唯未來の夫と思込んでゐる周二の心を、如彼か如斯かと疑ひ惑うてゐるのである。

如彼まで親切で、如彼まで自分の心を知つてゐて、如彼まで同情があつた彼の方が、遽に變つた昨日の無情さ、成程自分は露西亞人の胤ではあるが、それは今更始つた事ではなく、彼れが彼の方の本心であらうとは、何う思ひ廻しても信じられぬので、多分は人に強られるが可厭さに、態と無情くあしらうて、そして心にも無い事、口まかせに言つて退けたのであらう、然うであらう、それに相違は有るまいと、樣々に疑つて悲み嘆いて見ては、又斯う思ひ直して、强いて我と我が心を慰めながらも、然うと信じて、それで安心してゐられもせず、つい同一事を繰返し繰返し思ひ煩うて、身の不幸を悲み、人の無情を恨み、味氣ない浮世を儚んで、胸擾亂さるゝ堪へ難さに、身も疲れ弱るほど泣きもし悶へもして、さて又思ひ直して、自ら慰めもするのであつた。

そして若し、周二の心に變りが無く、昨日の彼の無情さは、唯嬲れまいとの心から、人前つくろふ虛僞であつたのならば、彼れほどに賴みもしたのであるから、假し長くは居られぬにしても、今夜は訪ねて來て、昨日の無情さを詫びもし、又悲しいこの身の不幸を慰め劬つて異れもしやうと、實はそれを依憑にして、暮るを待ち、夜に入つては今か今かと、人の跫音にも聞耳立てゝ、待ちに待つたがその効なく、夜は十二時一時と闌けて、周二は終に來らぬので、これほど思ふ心が通せぬのかと、靜江は更に又望を失うて、最うこの身

は何うでもなれと自暴自棄するほどまでに落膽した。

その夜は心の疲勞に昏々と眠つたが、翌朝に至つて不圖思ひ起したのは、この日の外人歡迎、日露戰爭に於る我が病傷兵救護の爲めに來朝する事になつた、英國西ボールマウスのアール、グリフス孃以下三名の女丈夫が、今日は神戸に來着する筈で、關西女學院の生徒一同はそれを海岸に出迎へる事に定まつてゐるので、若し今日も亦欠席して、その歡迎に加はらなかつたなら、意地の惡い友の多くは、更に一層自分を侮り蔑んで、奈何な惡評を立てやうも知れず、と斯う心付くと、靜江は突然起立つて、支度も匆々、食事も碌に進まぬ躰軀でと危み氣遣ふ母の言を打消して、進まぬながらも、彼は學校へと赴いた。

今までよりも、今日は一層心沈んで、何事も唯懶く、鬱々として友とは言一ツ交へずに、我から遠ざかつて、放課時間には獨り又絹糸の編物、それも周二へ贈らうとの肱突、最う編上りに間も無いのであるが、精を出して編上て了はうとの心はなく、つい針を止めては物案じ、一向捗は行かぬのであつた。けれどもこの日、靜江が少からず心を休め得たのは、校内で最も意地の惡い、毎も花月卷にしてゐる彼の井口と言ふのが、何うしてか今日は欠席して、その音頭取の居ぬ爲めに、他の多くの友は當付て彼を侮辱するが如き事のないそれで、靜江は安堵の胸を撫でつゝ、その欠席は病氣ゆゑであらうと、小氣味好くも思ひ、又その欠席の、十日も二十日も續けよかしと、心窃に祈るのであつた。

正午に至つて、グリフス孃等便乘の汽船ウキンサン號は、明日の未明でなければ神戸に入港せぬとの事が知れたので、關西女學院ではその歡迎を中止する事になり、常の如くに授業があつて、生徒等一同は例の時間に校を退いた。

靜江はいかにも大儀な躰軀を、迎の腕車に乘せて、歸途に就いたが、その途上、中山手を下山手へ下りて、縣廳の後を生田の森手前の四ツ角へ來掛つた時、圖らずも愕くべき意外の事に遭うて、彼は車上に殆ど失神しやうとしたのである。

一聲かけて、車夫はその四ツ角を驅拔けやうとする時しも、坂下から眞直に山手へと上つて行く男女の二人連、その一人はこの日頃憂慮の種の小野瀬周二であつて、そして連立つ女を誰かと視れば、それは鰕茶の袴を着けて、靴を穿いて、雙手に洋傘を突いて、頭髮は花月卷にしてゐる彼の井口、親し氣に寄添ふて、兩

人は打微笑みつゝ語らひ行くでは無いか。

僅に瞥然と視たばかりである。先方の兩人も亦瞥然と此方を視たらしかつた。そして女は視られじと、逸早く男の蔭に身を隠したその暇に、腕車は最うその四ツ角を駈抜けて、兩人の姿は視られぬのであつたが、然し恨めしいと思ふ小野瀬、憎いと思ふ井口、その兩人を靜江が視違へやう筈は無い。

意外も意外、此様事の有らうとは、靜江は夢にも思ひかけなかつた。周二の住宅の隣家に、關西女學院へ通つてゐる娘の有る事は、豫て周二が女學生の惡口を並べ立てた時に、聞いた事も有り、その娘が何うやら自分と同級生の井口に似てゐると思つた事も無いではないが、自分を訪れて呉れる暇もないほど忙しいと言ふその周二と、今日休んだのを幸福に思つたその意地惡の井口とが、手を携へて睦じさうに寄添ひ行くのを視やうとは、餘りの思ひがけなさに愕き呆れて、靜江は暫時茫然たらざるを得なかつた。

が、昨夜彼れ程待つたに、終に訪ねて來ては呉れぬ上に、今日の思ひがけなき彼の爲體では、一昨日フレーザー邸の庭園で、連立つ男に嬲られるのを打消した彼の言は、さてはその本心からであつたのか、自分は未來の夫と心に許してゐるその小野瀬周二に、さては愈よ嫌はれたのか、自分には思ふその人に嫌はれる程の過失は無い筈であるが、悲い事には、嗚呼自分は露西亞人の胤！

軈て瀧道の己が住宅へ歸ると、血の氣はないのかと思へるほど、その貌の色の蒼いのに、彼は母と下婢とを愕かしたのである。

（四）

『ま、靜さん、お前、何うしたんですえ。』と、今此室へ入つて來たばかりの母は、机の前に泣伏して、聲こそ立てね、咽入り咽入る靜江を視ると、眼を瞬つて、慌忙しく斯う言ひながら、その前へ座を占めた。

靜江はそれに答へやうともせず、唯身悶して、泣入るばかり。

『ね、靜さん、何うしたの、え、何うしたんですえ。』と、氣遣はしさうに母は擦寄つて、『何だか此頃、始中終鬱いでばつかりお居でだつたが、お前、何處か餘程惡くでも有るのですかえ、それとも、何か心配な事でも……、え、靜さん、阿母様になら言つても可いだらう、何を其様に泣いてお居でなの？』

言優しく劬り問はれるほど、靜江は尚更口惜しく悲くいよゝ、涙を禁めかねつゝ、女の身で端ないとは知りながら、制へ切れなくなつて、つい泣聲が高くなる。

『靜さん、其樣に泣いては、身體に障りますよ、獨りで泣いてゐたつて、仕樣が有りはしません、阿母樣には、話せない事なんですか。』と、果しなく見えるその狀に、母は態と強く言へば、靜江は手巾に面を蔽ふたまゝ、漸く頭を擡げて、歔欷りながら、『阿、阿母樣、妾、口惜しい！』とばかり。

『え、口惜しいつて？何が、え、靜さん、何が其樣に口惜しいんですえ。』と母は膝押進める。

靜江は尚ほ堰きかねる涙の面を反向けて、『阿母樣、此、此新聞を御覽なさい。』と、今まで自分がその上に泣伏してゐた『神戸日報』を取つて、母の前へ押遣りながら、『その、葉書集の中を……、妾や、泣、泣かずには、居られません！』と、今度は机の上へ、彼は面を伏せたのである。

『この新聞が、何うしたの？え、この新聞に、何が出てゐるんですえ。』と母は狼狽てその『神戸日報』を取上げ、言はるゝまゝに葉書集を讀下せば、その中の一項に曰く、

▲中山手の關西女學院に、日露のあひの子が一人ゐる、その父は露國人でも、彼は日本に籍のある日本人であるのに、日本の戰勝を悦ばずして露軍の敗退を悲み、日々窃に露國の勝利、日本の敗北を神に祈つてゐる、怪しからぬ女ではないか、露國には婦人の國事探偵が頗る多く、各國の都府へ入込んでゐるさうで、彼の父は既に露國へ歸つてゐるのであるから、その父の命を受けて、彼も或はその國事探偵の一人なる所謂露探になつてゐるのだらうとの噂が有る、貴社で一つ精探して、この外面如菩薩內心如夜叉の、憎むべき惡魔の頭上に鐵槌を加へて貰ひたいものだ（憤慨生）

とは何者の投書であらう、餘りの事に母は唯呆れて、霎時は言ふべき詞も知らず、『まあ。』とばかり、その記事を凝視めてゐれば、

『露探ですつて、惡魔ですつて、妾や、妾や、口惜しい！』と、靜江は身を悶へて『屹と、屹と、學校の彼の意地惡の爲た事に、違ひない！』悔し泣に泣咽ぶ。

『え、お友達が？まあ、お友達が、此樣事を……』。と未だ言ひ終らぬ其處へ、下婢は襖を押開けて、靜江へ宛た書翰を差出したのであるが、靜江は今この場合、

泣顔隠さうと狼狽て背後を向けたまゝ、下婢の言は耳にも入らず、素よりそれを覗やうともせぬので、母が受取つて、上婢を退けて、そして裏打返してその差出人を視ると、

「まあ珍しい、周さんからだよ、靜さん、周さんからお前へ書翰が。」

「え、周二さんから？」と、宛然弾機に弾ねられたが如く、突然に面を擡げて、靜江は母の手から奪ふやうに、書翰を受取つて、覗れば正しく周二から自分へ宛た郵書なので、何を思ふ間もなく、唯取急いで、早くもその封を切つたのである。

默讀すれば、

拜啓、先日は失禮致し候、偖て小生儀今回召集致され、明早朝入營致す事に相成り候に付ては、何れ征途に上り申す可く、一應戰地に向ひ候上は、決して生きては還らぬ覺悟に候間、今日までの御約束等は、總て一夜の夢と御諦めの上、最早小生は亡きものと思され、相當の御縁邊も御座候はゞ、小生の生死に拘らず、御心おきなく御結婚相成るやう願ひ度く、右御母堂樣へも御傳へ相成り度く候、參上の暇これ無く、書面を以て此段申し進じ候也不一

……月……日

靜江殿　　　　小野瀬周二

披き持つ手は打顫ふのであつたが、靜江は一字を餘さず徐に讀み了つて、然程愕ける氣色も無く、又一度讀み直して、さてそれを巻き收めて疊の上へ投棄てたまゝ、最う涙涸れてか、泣きもせず、半巾の片端糸切齒に屹と嚙みながら、いとゞ蒼いその面を漸々に俯向けるのであつた。

「無沙汰の詫でも、言つて來たのですかへ。」とその書翰拾ひ取つて、何の氣も無く讀んだ母の方が、却つて打愕いて、

「こりやア、まあ、何と云ふ事なんだらう、近頃些とも來もしないで、然うしてまあ此樣、みすみす嘘と知れ切つた嘘を……。」と唯呆れるばかり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「阿母樣」と座り直して、母の方へ膝押向けた靜江は、今まで默然として俯向いてゐたその間に、何ぞか固く心に決する處あつたらしく、屹となつて、母の面を瞶めながら、「何うぞ最う、心配なさらないで下さいまし、周二さんの事も、最う何とも思はないで下さいまし、

而うして阿母様、何うぞ妾のお願を肯いて下さいまし。』と、開き直つて改まつた。

『お願ひつて、そりや又何ですえ。』

『妾、決して阿母様に御不自由もかけませんし、お嘆きをかけるやうな、無分別な事は屹と致しませんから、阿母様、彼の、銀行に預けてあるお金だけ、何うぞ妾に、下さいまし。』

『大層改まつて、何かと思つたら……、そりやアね、元來此家の財産は、悉皆阿父様が、お前に遺してお行でなすつたんだから、それをお前が使ふのは差支へないやうなものだけれどね………。』

『然うして阿母様、決して阿母様にお嘆きをかけるやうな事は致しませんから、この戰爭の終局になるまで、何うぞ妾の身體を、妾に貸して下さいまし。』

『其様事を言つて、お前まあ、何をする意向なんだえ。』と母は膝押進める。

靜江はいとゞしく落付拂つて『それは何うぞ、阿母様、聽かないで下さいまし、決して惡い事は爲ませんから、何をしますか、それは聽かないで、何うぞ今のお願ひを肯いて下さいまし、若し阿母様が肯いて下さらなければ、妾は寧そ死んで了ひます！』と、よく〱思ひ詰めたらしい體度。

思ひがけなきその言に、母は又愕き惑うて、雲時は茫然たらざるを得なかつた。が、尚ほ繰返し繰返し、切に乞ふ靜江の願を斥けたなら、奈何な事にならうも知れずと、餘儀なくも假に承知の旨を答へたのである。

それ聽くと、靜江は遽に喜び勇んで、直に腕車を命じて、忙はしげに何處へか出て行つた。

(五)

その友の多くに、日露のあひの子と嘲り蔑まるゝ木村靜江は、母が月々の生活に不自由なからしむる爲め、所有財産の中の不動産だけを殘して、動産の悉皆——金三千五百餘圓を、突然恤兵部に献納した。そして尚ほそれを以て足れりとせず、彼は又關西女學院の校長を以て、新來の英國特志の婦人アール、グリフス孃を說き、孃からも赤十字社へ言込んで貰つて、一面に於ては自ら赤十字社兵庫縣支部へ出頭して、豫てから赤十字社員でもあるので、支部長に面會した上、熱心に賴み入つて、終にその願意の通り、靜江はグリフス孃の通譯を兼ねて、孃の一行に加はり、日本赤十字社の特志看護婦となつたのである。

京阪神の諸新聞紙は、筆を揃へてこの擧を稱贊し、愛の權化と言ふあれば、婦人の龜鑑と賞するあり、飽食暖衣の貴婦人等は、宜しく慚死すべしなど、一齊に書立て、中にはその肖像を挿み、その筆跡を載せたのもあつて、靜江は奈何な男子も及ばぬ、又なき女丈夫として傳へられた。

が、この名譽ある婦人が、この名譽を得るに至つた心の底を知る者は、廣い世間に唯の一人もなく、母は唯一本の書翰の爲めに然うまで早まるにも及ばなからうに、これも年齒の若さからと呟し、小野瀨周二も、花月卷の井口も、唯意外に思つて、恐くは唯名擧心に驅られてであらうと、その決斷の何故なるかぞ、知らぬのである。

（完）

新刊紹介

▲母と主婦　松山儉著　警醒社發行

著者松山儉氏は本誌の寄稿家として讀者の知らるゝ白井儉一氏と同人也、本書は實家叢書の第一編として著述せられたるものにて、主として母たる主婦の心得べき條項に就て說明せらる、即ち育兒と敎育より嬰兒の取扱方、母親及主婦の心得を自家の實驗研究に基きて、叮嚀親切に說き示されたれば、世の家庭に益する莫大なるを信ず。（拾八錢）

▲女學生　本鄕福山町東洋女學生會發行

女學生間の風紀を刷新し、女子敎育を奬め、日本女性の眞光輝を發揮せんとの目的を以て、東洋女學生會なるもの起り、其の機關として雜誌女學生なるもの出づ、載する所大家の論說あり、文藝あり、史傳あり、婦人問題あり、家庭の讀物ありて仲々に賑はし、編輯者は曾て大阪每日新聞に記者たりし岸本辰子女史也。（一部金十二錢每月一同廿八日發行）

▲園藝之友（第一號）　本鄕爾門町日本園藝研究會發行

本誌は果樹、蔬菜、花卉等園藝全般に關する智識の供給を目的として生れたるものにて、內容豐富なれば獨り園藝愛好家に便益なるのみならず、また一般家庭の人にとりても甚だ興味ある讀物ならんか。（定價十一錢每月二十日發行）

▲新編裁縫科敎授法　東京裁縫女學校同窓會發行

本書は名古屋裁縫女學校々長椙山正式氏の著す所にして、至難なる裁縫敎授を敎育及び實地の兩方面より觀察を下して、具さに敎授細目、敎案敎授方法、設備等の事を記述したれば、敎育者必携の良書なり、（定價金三十錢）

▲家庭小說人の兄　堀內新泉著　成功社發行

滔々たる厭紛小說以外に立ち屹然として其の主張を述ぶ、方今稀れに見るの好小說なり。（定價四十錢）

▲情育觀　誠之堂發行

本書は男女に關する衞生を生理的と精神的の兩方面より解說し、男女の心得、夫婦の義務、妊娠、分娩、育兒等の眞智識を採錄したるもの、青年男女の熟讀して攝生の資とすべき實益の亦なるを保證す。（定價金四十五錢）

▲中形浴衣地

三越吳服店にては六月一日より中形浴衣地新柄陳列會を開きたり圖案は昨年九月中の募集にかゝり總數六百四十八種の内一等より五等まで數十種當選したるを今回特に其内より三十種許を選みて染上げ之に本年流行の元祿模樣中形數十種を加へて陳列したるものにて募集の内の一等當選東京石塚市太郎氏の圖案は月見草の花を一體に配置よく並べ隙間々々に葉をあしらひたるもの二等當選は京都矢代庄兵衛氏の養老、同水上晋村氏の水仙、三等は京都矢代庄兵衛氏の籬の上に蔦の花を出したるもの其他京都小川鹿造氏の石榴の實、京都馬島晋春氏の池底の美、同武田春仙氏の世界の譽等何れも新奇の圖案なり番外にては竪横の内に自轉車又は魚形雷水を唐草模樣に繋ぎて之を水雷草と名づけたる、或は太平洋とて錨其他の船具を海藻にて繋ぎ合せたる等亦た何れも目新らし元祿模樣の中形にては蘆葉に蛇籠を配ひ之に千鳥を飛ばし斷々へ地質の藍鼠もて水の如く飛白に織出したるが最も面白く西田入の大波、蘆に捨小舟西田に藤の花等總て大型にて派出やかなり代價は大體一圓以上二圓までにて割合に安し



才媛文藝投書規程

▲和歌　一人一首の事

▲川柳　一人二句の事

▲端書文　はがき一枚四行限り

▲謎々　一人二題限り

以上投稿はすべて端書に限る
宛名は博文館編輯局女學世界

賞品　天位壹圓、地位七拾錢、人位五拾錢（圖書切符）

締切　六月十八日限

右の外特種の觀察に成りたる文章は隨意投稿ありたし
掲載の上は相當の謝儀を呈す

來月の新課題

我家の消夏法（十行以内の短文）、

女學世界定期增刊

世界各國の家庭

七月十五日發行

戰勝の國、旭日登天の勢を以て世界に優勢の地歩を占むるに至るや、世界各國の人々は驚嘆の目を以て我を仰視し、其の眞相を知らんことに努めつゝあるや必せり、此時に當り我等强を恃み徒らに國粹を主張するのみにて可ならんや、我亦た大に世界民衆の事情を窮めて貢する所無かる可からざる也、今、坤圓球上に家庭をなすものゝ風俗習慣を蒐めて一卷となす、聊か隆々の國運に貢獻せんと欲するの微意に外ならざる也。

目次概要

次號記事豫告

八月五日發行

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内 定刊數……十二册
増刊四回……一、四、七、十月價格同一

郵税 一册 二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	五十四錢	四十四錢	三十七錢
半頁（卅二行）	……	十七圓二十八錢	十四圓〇八錢	十一圓八十四錢
一頁（六十四行）	四十圓割引	三十三圓割引	二十七圓割引	二十三圓割引

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅八年七月五日發行　第五卷第九號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三千百三番
三千十八番
二千六百二十番
三千二百二十九番

醫學博士　瀨川昌耆君序文
醫學博士　遠山椿吉君題辭
千葉勝景君
鹿島櫻巷君　共編

家庭衛生訓

全一冊

洋裝並製菊半截
紙數三百七拾頁
正價參拾五錢
郵稅六錢

健兒は健全なる家庭より造り出さるゝなり、我が日本が有史以來未曾有の大捷を博したるも、その健全なる家庭に出でたる健兒が力に歸せざるべからず而して健兒の養成は戰捷國の急務なり、本書は著者が多年家庭に於て經驗したる衛生上の注意を記述したるものにして節々句々悉く健全なる家庭を造るべき要素を指示し其文頗る平明にして一讀誰人にも能く了解し得べきなり之を家庭簡易の醫術書とするもよろしく又た衛生の敎訓書とするも可なり且つ卷末には弘田博士の皇孫殿下日常の御撫樣を談話せし要項あり請ふ左の要目を見られよ

（後付の二）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

受驗問答叢書

第參拾壹編

法學士 辻宏吉君編

新撰 憲法行政法問答

全一冊洋裝袖珍金文字入美本

正價金貳拾錢 ‖ 郵稅四錢

憲法行政法が高等文官試驗に於て又判檢事、辯護士等の試驗に於て重きを置かるゝに拘らず受驗者が、此二法の攻究調査に困難を感ずるの勢は容易ならずと聽く、此書は、則ち此等人士の爲に其受驗用の顧問たらんとするに在り。問題極めて豐富解答又簡潔明瞭なり。世人購ふて一本を座右に置かば、勞する所は從來の半にして而も之が爲めに落第の悲境に陷ることなからん也。乃ち之を大方諸彥の坐右に薦む

第參拾貳編

法學士 太田資時君編

新撰 商法問答

全一冊洋裝袖珍金文字入美本

正價金貳拾錢 ‖ 郵稅四錢

此書は判檢事、辨護士の試驗に應ぜんとする者の爲めに帝國商法に就きて解釋を爲せるものなり。問題を撰むこと精且つ緻、答解を附すること簡且つ明、受驗の爲めには洵に闇を照すの燈台なりと謂ふべし今や試驗期漸く近く青雲の志望を懷けるの士は速かに之を購ふて讀み以て悔を後日に貽す勿れ

第參拾參編

法學士 土谷彥太郎君編（近刊）

新撰 國際公法私法問答

全一冊洋裝袖珍金文字入美本

正價金貳拾錢 ‖ 郵稅四錢

本書は高等文官、外交官、判檢事等各種の重要なる試驗に應ずる者の爲に著はせるものにして問題を設くること廣く且つ多くあらゆる方面に亘りて漏すことなく、解說を下すこと簡潔明瞭、能く綱を擧げ要を提げて些個の遺憾あるなし實に是れ受驗者の好師友たり、良顧問たり。青雲の志あるの士は必ず精讀を怠るべからざるなり

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の二）

愛媛縣宇摩農學校教諭　千葉敬止君
同縣同　校教諭　川井甚平君　合著

農家の副業

（新刊發賣）

全一册

洋裝菊判並綴
紙數三百五拾頁
正價金貳拾五錢
郵稅六錢

農業は我邦立國の大本である然るに我農界を見るに學問の普及交通の發達と共に生活の高上は頗る急進してその收入は、種々の改善の行はれたものあれども、生活の高上に伴はれない爲めに、地方は年と共に疲弊し土地は次第に都人に兼併せらるゝ有樣になつた、若し此まゝで進んだなら、戰後は一般に奢侈に流れ多數の農民は遂に地主の奴隸たるやうな境遇に陷るかも知れぬ、されば今日に於て國の生產を增加し民力を確實にすること最も急務である、故に作物の栽培土地の改良法等も素より重要なれども、農家の副業を奬勵して農家の現狀を挽回し、他日の膨脹に備ること又た焦眉の急務たるものである、本書此の必要に應じ、言文一致體を以て精密懇篤に編述せり、請ふ左の要目に就て本書の大體を了せられよ

◎農家の副業とは何ぞ◎副業の奬勵は今日の急務◎副業は何故に發達せざるか◎副業は如何にして發達せしむべきか◎副業の選拔

本書之內容

●藁細工●竹細工●柳行李●麥稈眞田●經木眞田●藺蓆●麻苧製造

●木綿織物●蔬菜乾燥●果實乾燥●茶の製造●澱粉製造●晒餡製造●納豆製造

●味噌製造●豆腐類製造●氷蒟蒻製造●バター製造●輸出用作物●造林

●木醋製造●椎茸製造●漆製造●蠟製造●樟腦製造●養蠶

●養蜂●養魚●養雞●養豚●養鶩●畜羊

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の三）

臺灣民政局長官後藤新平君序文
波蘭シダコツフ氏原著

田原禎次郎君譯述

洋裝大判美本
紙數約貳百頁

製本既成發賣

光榮の日本。

全一册
正價廿五錢
郵稅六錢

本書は、『露國の闇黑面』、『露國皇室の内幕』等を著して、露國通の名、歐洲に喧しき、波蘭の志士シダコツフ最近の著述に係り、記載事項は更に幾層の興趣を添うるものなり。先づ筆を『日本の宮廷』に起して、我國室の尊嚴に在すと、及び國民の愛國心に富めるとを說くと一番、轉じて『日本の眞相』に入るや、其風俗慣習の微よりして、陸海軍情に迄說き及ぼし、秋山露探事件の如き、又其逸するを敢てせざりし所なり。次ては淸韓宮廷の秘密を發きて犀利の筆を揮ひ、『日本と露西亞』の項に於ては、日露戰爭の源委を極めて餘蘊なく、終りに黃禍說の露國の政策に因るとを喝破し、黃禍は亞細亞にあらずして露西亞に在りと爲し、露國の全敗は歐洲の希望する所なりと結論せるが如き、確に巨眼を具するの記者たるを知る、加ふるに譯文暢達、些個晦澁の點なし。蓋し近來の珍書、戰時の國民は必ず一讀を怠るべからざるなり

（後付の四）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

子爵 榎本武揚君題辭
男爵 石黑忠悳君題辭
文學博士 三島中洲君序文



高頭式君編纂

理學博士 巨智部忠承君序文
文學博士 建部遯吾君序文
依田學海君跋文

本書は日本全國に亘れる山嶽案内の權輿なり吾日本帝國は山嶽蜿蜒到る處に崎嶇巖嵐光の明媚なる世界に冠絶す、然るに世間未だ我邦山嶽に關して秩序ある記述を爲せし著書あらざるは遺憾の事なりとす、著者茲に見るあり即ち其所在、標高、登路、即ち達頂里程、山中の形容、攀路の險夷、動植物其他之に關する一切の事項を記述し、副ふるに詩歌俳句を挿入して其間に趣味を添へたるものは實に本書を以て嚆矢とす本書は全部七篇より成る、曰く索引、登山術、山嶽諸説、日本地質構造概論、山嶽各解、山嶽噴火年表標高參考圖書及び豫察地質表等に大別せり、索引は之を國分、稱呼分、字畫分に三別して自由に讀者に資す、特に山嶽諸説に於ては志賀農學士、小川理學士、石川理學士其他專門諸大家の新説を掲載せり、且つ本書は諸説を巧妙に綜合して其の出處根元を嚴明にせしを以て讀者が引用書名を見て最も確實に研究するの便あり彼の猥りに揣摩の臆説を雜へたる杜選の地誌と同一視すべからず眞に是れ新編登山の栞にして愛山家必備の要書といふべし

洋裝菊判 特製（總クロース上製）
◎色刷詳密地圖數葉挿入
全一冊紙數六百頁（七月上旬發行）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の五）

文學博士重野安繹先生序　石崎篁園先生編述

祝賀弔祭記事論說國民作文軌範

（新刊發賣）

洋裝三六判金字入
紙數五百六十頁
正價金四拾錢
郵稅八錢

緒言◎文は道を以て主眼とすること◎作文の三法◎何の書を讀むべきか◎文章は鍛錬を要す◎主意◎作文の五材◎文章結搆法◎篇章句字の法◎比喩法◎諷諭寓言◎層語法、漸層法、反層法◎誇張法◎對語法◎對比法◎寫聲、寫容、換義◎敬語、警語、枕詞、序詞、兼詞、引用法◎敍事文、記事文、解釋文、議論文◎文章の諸体◎文章沿革（伊勢物語、源氏物語、紫式部日記、和泉式部日記、枕草紙、方丈記、四季物語、著聞集、徒然草、太平記、林道春、貝原益軒、新井白石、室直清、伊藤東涯、太宰春臺、柳澤淇園、加茂眞淵、本居宣長、淸水濱臣、伴資芳、藤井高尙、瀧澤解、松平樂翁、堀内新泉、著者）◎結論……

△祝文、其作り法、朗讀法、（賀表、祝辭、式辭、告辭、祝捷文、感謝狀、表彰狀、）古今作例（凡百頁）△祭文其作法、朗讀法（祭文、吊詞、哀辭、誄詞、告文、）古今作例（凡八十頁）△傳及び記、其作法（人物傳、記事、事物の記、遊記、日記、學校堂齋の記等）△古今作例（凡六十頁）△論說序跋、其作法（宴序、贈序、送迎序、書序、論說、解、原議書類）古今作例（凡六十頁）△墓誌銘其作法（墓表、墓誌、墓碑銘、碑神、道碑、碑陰記、贊戒等）古今作例（凡五十頁）△公私用文其作法（上書、與ふる文、檄文、書簡文）古今作例（凡五十頁）……

岸上操君著 ●作文自在（第十一版）
全一冊洋裝大判 二百七十餘頁
正價貳拾五錢 郵稅六錢

上村左川君著 ●記事論說文範（第九版）
全一冊洋裝大判 二百五十餘頁
正價貳拾五錢 郵稅六錢

井上敏夫君著 ●國語漢語類語 作文錦囊（第七版）
全一冊袖珍上製 四百三十餘頁
正價參拾五錢 郵稅六錢

（後付の六）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の七）

紅葉山人 尾崎徳太郎君遺著

紅葉全集

全部六册總紙數五千六百頁全部完成

洋裝大判 總クロース 上製 金文字入金模様表紙

正價一册壹圓八拾錢 小包送料一册拾五錢宛

全部六册 正價金拾圓 全部小包料金八拾錢

麗、春日の如く、淸、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し、奇思縱横字々爽快を極めざるなし。嘗て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、俊群英を養ふて藻社の名一世を壓す。山人が明治文學に寄與するの勢天下の齊しく知る所にして、仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文壇頓に寂々たり。山人の逝くや命也、而も山人の精神は萬古常に新也。蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし、則ち親朋同人相謀りて十千萬堂を營み凡そ山人が述作に係るものは、其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寶の散りて點數せるは聯れて一環と爲すの美に若かず、全集分ちて六、其作年の順を追ふて之を收め、謹みて江湖の文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む

第壹卷 三版

●色懺悔 ●巴波川 ●戀の蛻 ●關東五郎 ●猿枕 ●二人むく助

●風雅娘 ●南無阿彌陀佛 ●此ぬし ●新色懺悔 ●わかれ蚊帳 ●二人女

●新桃花扇 ●拈華微笑 ●夏痩 ●文ながし ●七十二文命の安賣

第貳卷 三版

●伽羅枕 ●紙きぬた ●むき玉子

●おぼろ舟 ●夏小袖 ●戀の病

第三卷 再版

●三人妻 ●心の闇 ●男ごゝろ

●俠黑兒 ●袖時雨 ●むらさき

第四卷 再版

●隣の女 ●三箇條 ●青葡萄 ●鷹料理

●不言不語 ●冷熱 ●八重襷 ●浮木丸

第五卷 再版

●多情多恨 ●手箱の玉章

●安知歇貎林 ●寒牡丹

第六卷 三版

●金色夜叉前編 ●續金色夜叉 ●新續金色夜叉 ●紅葉山人傳

●同中編、同後編 ●續々金色夜叉 ●煙霞療養 ●同著作年表

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(後付の八)

女學世界

明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可

第五卷第九號

明治卅八年七月五日發行 毎月一回五日發行



(定價金貳拾錢)

Vol. V. (東京市小石川區久堅町百八番 博文館印刷所印行) No. 9.